眠狂四郎無頼控（二）

柴田錬三郎



新潮文庫

眠狂四郎無頼控（二）

柴田錬三郎



カバー　中尾進

新潮文庫

眠狂四郎無頼控（二）　柴田錬三郎

し 5 7

新潮文庫

560

9784101150079

1910193005609

定価560円（本体544円）

江戸を出て、京・大阪に旅する狂四郎に絶え間なくふりかかってくる剣難と女難――。脂粉の香りに包まれた柔肌を欲情に燃やす将軍家斉の娘高姫。柳生流剣法を使い、執拗に狂四郎を襲う公儀直参の御庭番たち。死地に立った時の虚無感の中で鋭く冴えわたる円月殺法……。狂四郎をめぐる事件は、いよいよ凄絶と妖艶を加えるが、奇想天外の活躍で次々と解決してゆく。

ISBN4-10-115007-9

C0193 P560E

新潮文庫

柴田錬三郎の本

- 剣は知っていた（上・下）
- 江戸群盗伝（正・続）
- 美男城
- 眠狂四郎無頼控（一〜六）
- 眠狂四郎独歩行（上・下）
- 眠狂四郎殺法帖（上・下）
- 孤剣は折れず
- 赤い影法師
- 運命峠（前・後）
- 剣鬼
- 眠狂四郎孤剣五十三次
- 眠狂四郎虚無日誌
- 眠狂四郎無情控
- 眠狂四郎異端状
- 徳川浪人伝（上・下）
- 御家人斬九郎
- 邪法剣
- 人間勝負（上・下）
- 一の太刀
- 孤独な剣客
- 浪人列伝
- 最後の勝利者（上・下）
- 無念半平太
- 眠狂四郎京洛勝負帖
- 決闘者 宮本武蔵（上・中・下）
- 隠密利兵衛
- 剣魔稲妻刀

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

眠狂四郎無頼控

（二）

柴田錬三郎著

新潮社

新潮文庫

眠狂四郎無頼控

(二)

柴田錬三郎著

新潮社版

1422

目次

海の亡霊……七
贋囚人……二七
美女崩れ……四八
笑う狂女……六九
刺青往生……九一
運命図絵……一一〇
切支丹坂……一三三
賭場女房……一五三
狂四郎哄笑……一七四
槍と驕姫……一九六

京の雨……二一六
地獄の夜……二三七
阿弥陀ヶ峰……二五七
金髪船……二七八
皇后悪夢像……二九八
白刃湯……三一八
贋金六千両……三四〇
女心抒情……三六〇
海賊村……三八一
暴風雨……四〇三

眠狂四郎無頼控

（二）

海の亡霊

一

片瀬から腰越を過ぎて、稲村ヶ崎を右に見て極楽寺切通を越え……眠狂四郎は、由比ヶ浜の砂地を、ゆっくりと歩いていた。

狂四郎は、鎌倉のとある古寺で、坐禅を組むことを考えて、ふらりとこの地へ入って来たのであった。

数年前、この古寺に半年あまり滞在して、坐禅を組み、書道を習ったことがある。狂四郎のこれまでの生涯にあって、最も落着いた心境の期間であった。建長寺とか円覚寺とか瑞泉寺とかいう五山十刹とはくらべものにならぬ、山中に見すてられた古寺であったが、七十を越えた住職が一風変ったところがあり、用向き以外は十日も二十日も口をきかぬくせに、狂四郎とは、妙にウマが合い、狂四郎が立去る際には、めずらしく、

「おぬしがいなくなると淋しくなるのう。またござれ」

と、云ってくれたものだった。

その言葉を、ふっと思い出したのであった。

小田原で、敵の首と妻の遺髪を持った臆病（おくびょう）な美貌（びぼう）の若侍を逃がしてやり、追いかけて来たやくざ者を二人ばかり斬（き）りすててから、三日過ぎのことである。

陽（ひ）はあかるく、見渡すかぎり遠くゆるやかな弧を描く渚（なぎさ）の波や砂を、しらじらとけむらせていた。汐風（しおかぜ）は、かなりの強さで吹きわたって来て、左手の砂丘をすぎがてに、色づいた弘（こう）法麦（ぼうむぎ）を、そよがせていた。

時おり、大きな雲の影で、海面や砂地を一瞬暗くさえぎられるほかは、この眩（まぶ）しい光は、からんとした静かな海景色を、途方もなくひろびろとしたものに浮きあがらせていた。

鏡のように平らかな水平線上に、伊豆の大島が、手にとるように、くっきりと抜け出ていた。

ふしぎな海の変化で、空も晴れ風がさほどでもなくても、島かげがかすんで見えぬ日もある。そして、空の模様とは無関係に、怒濤（どとう）がすさまじい音たてて渚を打ったかとおもえば、すぐにしずまりかえって、舟をゆする力もうせて、小波をたわむれさせるといったあんばいに……動いてやまぬ景色を、曾（かつ）て、狂四郎は、毎日のように眺（なが）めくらしたものだった。

そして――。

この由比ヶ浜の渚に出る毎（ごと）に、狂四郎の胸中には、過ぎ去ったかずかずの歴史の上の出来事が思い泛（うか）ぶのを常としたが、ゆくりなくも、たずねて来て、曾てそうであったように、またも、往時を偲（しの）ぼうとする自分を見出（みいだ）したのであった。

左様、この海辺で行われた幾多のたたかいや催しや悲劇は、あとかたもなく、波にうち消

されてはいるけれども――。

この波打際で、三浦義澄らが、平家の被官畠山重忠とたたかったのである。そこの砂丘で、源頼朝が、壮士らをして弓馬の試合や牛追物を行わしめたのである。このうってはかえす波の中へ、源義経の妾静が生みおとした小児が、安達三郎の手で、すてられたのだ。和田義盛の屍骸が、北条義時のかざした松明で照らされた地点は、ついその辺ではなかろうか。源実朝が、宋の仏工陳和卿の乞いを容れて、唐船を造り、宋へ渡るべく、数百の人夫を召して、海へ浮上させようとしたのは、どうやら、この滑川の出口あたりとおぼしい。

そして、今日は――。

『鎌倉を生きていでけん初鰹魚』を、江戸へ提供すべき漁船が二、三艘、ひっそりと、砂地へひきあげられ、網を干しているばかりで、人影といえば、狂四郎が踏む唯ひとつだけである。

と――。

狂四郎の往昔回顧の孤思を断ちきったのは、後方にあがった、鋭い絶叫であった。

一町あまり後方の砂丘で、数個の影が、烈しく陽光を撥ねてもつれ合ったかと思うや、そのひとつが、大きくのけぞって、草の中へ伏した。

ほかの者は、何か大きな黒い櫃のような物をとりかこんで、いっさんに、渚へむかって駆け下った。いずれも、顔をつつんだ武士たちであった。

倒れていた者が、起きあがった時、すでに、彼らは、浅瀬へ足を入れていた。船が、用意

してあったのである。

悲鳴をあげ乍ら、砂丘を、まろぶように走り降りたのは、あきらかに女であった。

狂四郎は、すぐに、その争いにむかって、自分のからだを働かせる意志は、起きなかった。

ひとつには、武士たちは、船へ乗りかけていたし、追って無駄な、犬の遠吠えじみた真似はまっぴらだった。

急に、狂四郎をして、ぱっと走り出させたのは、武士の一人が、浅瀬をひきかえして、きらっと白刃をかざして、追いかけて来た女にむかったからであった。

女は、武士たちの足跡を洗い消して引いた浪を追って、たたっと白い水沫ぎわまで走り出したが、一瞬、くるっと踵をかえして、せわしく目をあたりに移して、そこに打ちあげられた木片をひろいとるや、

「さあ、こい！」

とばかり、身がまえた。

抜刀の武士は、それにむかって、飛沫を蹴たてて、迫った。

この時、船上から、風のような迅さで走ってくる狂四郎の存在を報せる大声がかかった。

ちら、とそちらへ視線をはなった刹那、武士は、あきらかな動揺をみせた。そして、船を振りかえって、

「彼奴は、眠狂四郎だぞっ！」

と、叫んだ。

それは、助勢を乞う叫びだったのだが、船の武士たちは、次の瞬間、あわてふためいて、手に手に棹をつかんで、水中へ突き入れていた。

抜刀の武士は、その冷酷な仕打に対して何か喚きつつ、やむなく、陸地をのがれようと、身をひるがえした。

浪打ち際をひたばしる狂四郎は、敵の速い逃足が修練されたものであるのを見てとるや、咄嗟に、小柄を抜きとっていた。狂四郎の右手をはなれた小柄は、浪を掠める海燕に似て、ぴゅっと宙を切るや、武士の背中へ、吸い込まれるように、ぐさと突き立った。

狂四郎は、しずかな歩行にもどると、冴えた眸子を、船へ、送り乍ら、仆した武士へ近寄って行った。

舳を沖へまわした船の艫に、一人が立って、短銃をかまえていた。

狂四郎は、ねらわれ乍ら平然として歩いたのである。

かえって、女の方が、

「あ、あぶないよっ！」

と、声を裂いた。

轟然たる銃声が、海面を走り、青空へひろがった。

しかし、狂四郎の歩行の姿勢に変化はなく、ただ、反応といえば、冷笑を口もとに刻んだにすぎなかった。

二

砂へ顔をうずめて動かなくなった武士のそばへ寄って、身を跼めた狂四郎は、それが全く見知らぬ人相であるのをたしかめると、憮然たる面持で、立ちあがった。

――殺さずに、捕えるつもりだったが……。

意志を裏切って、小柄を背から心臓へつらぬかせたおのれの手練に、悔いがあった。

こちらの名前を知っている彼らは、本丸老中側の隠密か、然らざれば、備前屋に飼われている連中と看做してまちがいないことだったし、そうなれば、いったん船をとり逃がしたとしても、たたかいを江戸に移すのを聊かも億劫に思うものではなかった。

狂四郎は、女をふりかえった。

男柄の木綿を、裾短かにつけた漁師の娘である。まだ、二十歳前の、まんまるな愛嬌のある顔だちであったが、大きな眸子が、野性の光をきらきらとはなっていた。狂四郎に劣らぬくらいの上背があり、肩も胸もはちきれんばかりの豊満な肉体を持っていた。海女であることに疑いはなかった。

「あの男たちが持って行ったのは、なんだ？」

そう訊ねる狂四郎を、まばたきもせず、食い入るように瞶めた娘は、

「わたし、あんたを知っているよ」

「そんなことはどうでもよい。あれは、なんだったのだ？」

「鎧櫃(よろいびつ)だよ」
「そう見えたが、中に何が入っていたのだ？」
「鎧じゃないか。あたりまえじゃないか」
「どこから持ち出したんだ？」
「あんたがいたお寺だよ」
「智念寺(ちねんじ)にあったというのか！」
　狂四郎は、あまりの偶然に眉宇(びう)をひそめた。
　四年前、狂四郎が滞在したその寺は、仮粧坂(けはいざか)の下にある梅ヶ谷——俗にいう綴喜里(つづきのさと)にあった。
　この時、狂四郎の脳裡(のうり)には、この娘についての記憶も甦(よみがえ)った。生臭いものを平然として口にする和尚(おしよう)のために、時おり、蛸(たこ)やら黒鯛(くろだい)やら鮪(まぐろ)やら鰤(ぶり)などを携(さ)げて、庫裡(くり)に出入していた小娘があったが、それの成長した姿が、これなのだ。
「わたしがいた時には、具足などなかったが——」
「そりゃそうさ。わたしが、昨年の夏に、稲村ヶ崎の尽頭(はな)で、海底からひろいあげたんだもの——」
「そうか——」
　合点したとたん、狂四郎は、はっと掠(かす)める不吉な予感で、
「おい、和尚はどうしたのだ？　あの男たちが持出すのを黙って許したのか？」

と、訊ねた。娘は、あっと顔色をかえた。

「わたし、し、しらないよ。わたしが、境内へ入ろうとしたら、奴らが、鎧を持出そうとしているので、それはわたしのものだ、と怒鳴ってやったら、いきなり、一人が、斬りかかったんだ。わたしは、逃げたり、かくれたりし乍ら、追いかけて——」

みなまできかず、狂四郎は、走り出していた。娘もあわてて、あとを追いかけた。

やがて——。

草ぶかい山門を、なつかしむ余裕もなく駆けくぐった狂四郎は、まっすぐに庫裡へとび込んだ。

がらんとした内部へ、くまなく、すばやく、鋭い視線を走らせて狂四郎は、すぐに、畳へしたたった黒い血汐をみとめた。

その汚染は、渡殿(ほそどの)をつたわって、本堂へつづいていた。

狂四郎は、本堂へふみ込もうとして、思わず、瞠目(どうもく)した。

拭(ふ)き清められた黒光りのする大床に、点々と血汐をしたたらせた和尚は、意外にも、須弥壇(しゅみだん)の前に、粛然として端坐しているではないか。

「和尚！」

ひと声呼びかけてみたが、その不動像は、ぴくりともしなかった。

狂四郎は、つかつかと寄って、横から、覗(のぞ)き込んだ刹那、

「う！」

と息をのんだ。瞑目したその顔は、すでに事切れたものであった。

枯淡の境地に入った善智識らしい、三嘆すべき見事な最後であった。

狂四郎が、そっと片手を、その肩にふれさせると、遺骸は、音もなく、横へ倒れた。

「和、和尚さまっ！」

立ちすくんでいた娘が、むしゃぶりつくようにとりすがって、慟哭するのを眺め乍ら、狂四郎は、ひさしぶりに——本当にひさしぶりに、肚の底から憤怒がこみあげるのをおぼえたのであった。

娘に手つだわせて、遺骸を庫裡に安置してから、狂四郎は、和尚が、日誌をつける習慣があったのを思い出し、経几や書箱をさがして、昨年の一冊をさがし出した。

「お前が、海の中から鎧櫃をひろい出したのは、昨年のいつ頃だ？」

と訊き、六月のはじめだったというこたえに、その頁をひらいた。

『六月二日、晴れて風強し。午後、海女おちか、稲村ヶ崎沖あい水底よりひろい上げしと申して、牡蠣の夥しく付着したる鎧櫃を、大八車に乗せて来たる。蓋を開けば、海水の浸入したる跡なく、見事なる具足一式あらわれ出でぬ。しかみの竜かしらつけたる兜、金小実にして、くちなし染の糸を以てなせる山吹縅胴丸の鎧、獅子に牡丹紋の栴檀板、脇楯、弦走、障子板、逆板、それぞれ巧緻なる造りなり。その紋によりて、これはいかにも源平の頃の品とおぼしく見ゆれど、兜の形状鉢低くからくり細く、前にも後にも張りたるは、天正年間、小田原住、明珍十九代久太夫宗家の作に相違なかるべし。けだし、

その昔、北条相模守高時禅門が一族八百七十余人とともに葛西谷の東勝寺にて、ことごとく自滅したる惨状を偲びて、後世、その一門の末裔なにがしが、この鎧を作らせて、海中に投じて供養せしものなるべし。さるにても、二百五十年を、海中に在りて、いささかも腐蝕せざるは、神護の奇跡というべし』

読み了って、狂四郎は、海女おちかを見やって、

「お前が鎧をひきあげたことは、近郷で評判になったか？」

「いいや。わたしも和尚さんも黙って、知らん顔をしていたもの――」

「ほかに知っていたのは、誰だ？」

「わたしの兄貴ぐらいのものだよ」

「兄貴は、お前と一緒にくらしているのか？」

「ううん――。江戸へ出て……どこか、大きな廻米問屋で働いているらしいよ」

これをきくや、狂四郎は、にやりとした。

――そうか、備前屋のしわざか。この海女の兄から、その話をきいて、備前屋め、何かたくらんだな。

狂四郎は、おちかに、葬式費用を渡して、立ちあがったが、ふと思いついて、

「おちか――といったな。お前に、もしかして、ひと働きしてもらう時がくるかも知れぬが、たのまれてくれるか？」

「うん！　なんでもするよ！」

おちかは、いきいきと大きな眸子をかがやかせた。

三

それから幾日かの後――。

両国広小路の垢離場の高座で、立川談亭は、新田義貞鎌倉討入の一席を読んでいた。眠狂四郎からたのまれたのである。

「えっへん――時はいつなんめり、元弘三年五月なる、十と八日寅の刻、新田義貞公におかせられましては、古今無双の弓勢を率いてここに二万余騎、片瀬・腰越うちまわり、さしかかったる極楽寺の、ごうんと鳴ったる入相の鐘を合図に、馬上凜然ぶるぶるぶんと武者ぶるい――敵が鰯の大軍じゃとて、こっちは一寸の鯛にも昆布の魂、めで鯛三方の飾り海老、赤は親父の譲り面。つらつら辛いが、いくさのかけひき、いざ鎌倉の軍容はどうじゃろと、小手をかざして見てあれば、いるわ、いました、章魚に蟹、爪ふりかざして、横這うて、口説の悋気も宵の床、着物を買うてよ、かんざし欲しいわ、――甘えかかられ、目尻をさげて、そうかい、青海、四海波、あだし仇波桜貝、ひろいとられて、寝乱れて、枕はずかし、そっと起き出しくの字に坐り、おどろ乱れの投げ島田、つげ櫛片手に、由比ヶ浜――」

「へへ……ゆいなおしても、所詮はむださ、びんのほつれは枕のとがよ、顔のやつれはぬしのとが、とくらあ」

一人が、大声で、半畳入れると、また一人が、

「重いからだを身に引受けて、か――」
談亭が、それをひきとって、
「抜くに抜かれぬ腕枕――には、これあらず、抜くに抜けない敵の陣、浪打際には逆茂木（さかもぎ）ひっかけ、海上にひしめく大船には、櫓（やぐら）をかけて、横矢射かけんかまえなり。……折しもあれや、東天を、さっと染めたる朝日かげ、義貞公はこれを仰いで、ハッタとばかりに膝（ひざ）を打ち、そもっ、朝（あした）に辞す白帝彩雲の間、朝題目に夕念仏、朝飯前の一仕事、すこしも早う、おおそうじゃ――ひらりと、馬より降り立つや、甲（かぶと）を脱いで、海上、はあーるか伏拝み、日本開闢（かいびゃく）の元祖家元総本山、天照大神（あまてらすおおみかみ）におかせられては、本地（ほんち）を大日の尊像に蔵し、垂迹（すいじゃく）を蒼海の竜に顕（あらわ）し給（たま）えるとかや。わがおん君その苗裔（びょうえい）として、逆臣の為（ため）に西海の浪に漂い給う。義貞いま臣たるの道を尽さんために、斧鉞（ふえつ）を執って敵陣に臨めども、汐の満ちたが、やる瀬なや――こいねがわくば、内海外海の竜神八部（べ）、臣が忠義を監（み）て、汐を万里の外に退け、道を三軍の陣に開かしたまえ、と祈りをこめて、えいやっ、ぽーんと投げ込んだるは黄金（こがね）造りの降魔（ごうま）の利剣――やれもったいなや、と供ばらがざわめきたつを、コレサせくな、さわぐな、あわてるな、まてば海路の日和（ひより）じゃわい、とかたずをのんで見まもるほどに、ああら不思議摩訶（まか）不思議、奇っ怪奇天烈（きてれつ）、変幻奇妙、新田か見たか、聞いたかや――アレヨアレヨと思う間に、ざわざわわっと大波小波さかまき立って、引き潮しおしお海水が、干あがったるは二十と八町。平沙渺々（へいさびょうびょう）、北条ぶうぶう、横矢射かけんとする兵船数千は、たちまちのうちに、落行く汐に誘われて、はあるか沖に漂えり。義貞公は、これを見て、やれ有難や、しめこの兎（うさぎ）、

いでや者共、われにつづけと下知高らかに、打つや冥土の修羅太鼓——とうとうとうと鳴りひびく中に、稲村ヶ崎の遠き干潟を、真一文字にぞ駆りける」

　談亭は、拍手がしずまるのを待ってから、くそまじめな顔つきで、

「ところで、皆の衆、あれから五百年を閲したる今日、なんと、稲村ヶ崎の海底より、新田義貞公が投げ込んだる黄金造りの陣太刀をひろいあげて、ひそかに猫ばばきめている者がいるから、おどろき——一見をおのぞみの方は、楽屋へござれば、この立川談亭が御案内つかまつるでな」

　と云いのこして、さっさと立って、入ってしまった。

　目つきのよくないやくざ風の男が、談亭を楽屋にたずねたのは、それからすぐのことだった。とってくっつけたような追従笑いをし乍ら、

「師匠、新田義貞の刀を海からひろった男がいるって、本当でござんすかい？」

「なに、拙がたしかめたわけじゃない。その話なら、そちらの先生にきかっし——」

　顎をしゃくられて、男は、ひょいとふり向いて、あっとなった。眠狂四郎が、うっそりと、そこに立っていたのである。

「雑魚は、餌によく食いつくものだな」

　と冷やかに微笑して、

「おい、話は穏かにつけようぜ。ききたいのはこちらの方なのだ。備前屋が、わざわざ人と手間をかけて、どうして鎌倉から鎧を運んで来たか、だ」

四

その夜かなり更けてから、狂四郎がふらりとたずねて行ったのは、水野忠邦の上屋敷内側頭役武部仙十郎の家だった。

書院に出て来た仙十郎は、

「旅は性に合わんとみえるの」

と、にやにやした。

「わたしは、どこへ出かけてもすぐ江戸へ引返さねばならぬ星の下に生れて居るようです」

「何が出来いたしたな？」

何が起ろうと——たとえ幕閣がひっくりかえっても、一向に驚かぬくせに、興味ありげに小首をかしげてみせた。狂四郎は、手短かに、このたびの事件を語って、

「ご老人は、備前屋が、鎧を何に使うか、想像がおつきか？」

「賄賂品じゃな」

こともなげに、仙十郎はこたえた。

「多分そうであろうと推測しているが、しかし、何故わざわざ——」

「それはの、賄賂は賄賂でも、どうやら、受取る方との相談ずくじゃな。羽州（本丸老中・水野忠成）が、このたび、浜町入堀北側に、中屋敷を新築した。それとこれと、関係があるな。来月朔日、新築祝いをやるそうな。当家へも招待が参って居る。その節、羽州め、さる

町人より珍奇なる品物の寄贈があった、と披露する肚じゃ。新田義貞が、北条高時を滅した御礼に、竜神に捧げた鎧こそこれである――と申してな」

「ふむ。……つまり、町人づれさえ、この様な珍奇のものを寄贈するのだから、諸侯旗本どもは、もっと智慧をしぼって、これはと驚く品を寄越せ、と謎をかけるわけですか」

「左様左様――。御鬚の塵の払いかたが、まだちと足りぬというわけじゃな。土方縫殿助あたりの思いつきそうな、たわけた遊びじゃわい。田沼当時の比ではなくなったて。どうやら、こうなっては、幕府という存在は、もはや百害あって一益なし。天下の実権は、大阪の商賈どもに握られてしまったわい。いっそ、鴻の池や加島屋や辰巳屋を老中若年寄にしたらどうであろうの」

「ご老人――」

急に、狂四郎は、あらたまった態度で、

「新築祝いの席に、わたしの場所をつくって頂きたいが、いかがだろう？　どうせ、ご老人が当日は代理として出向かれるのであろうから――」

「ふむ……おぬし、派手な振舞いを見せようとの存念かな？」

「勿論、せいぜい、めでたい席にふさわしい祝いぶりを羽州侯に御覧に入れたい」

「むつかしいの。が、まあ、よかろうて――」

「では、てまえは、これから、一人助手をつれに、鎌倉へ参るから、馬をお借りしたい」

「何者じゃな、助手とは？」

「海女です」

「ほう……海女かそれは、好都合じゃの」

云わず語らずのうちに、二人の肚裡(とり)にくわだてられたはかりごとは、どうやら一致している模様であった。

五

曇り空であったが、ここ——浜町入堀北側の本丸老中水野忠成の中屋敷の庭苑(ていえん)には、けんらん目をうばう饗筵(きょうえん)がしきのべられていた。

千坪以上もあろう心字池を中心に、渓谷(けいこく)、丘陵、緑樹の間、橋梁(きょうりょう)——いたるところに、今日の祝宴のための工夫がほどこされてあった。すなわち、全国著名な神社仏閣、諸勝地の縮写がこころみられていたのである。

池縁には、河原崎座そっくりの舞台が設けられ、いま、花道で、鎌倉権五郎景政の扮装(ふんそう)で、泰平の御世(みよ)をたたえる「暫(しばらく)」のツラネをやっているのは、七代目団十郎であった。

舞台の前の大芝生には、一面に緋毛氈(ひもうせん)がしきつめられ、諸侯旗本の座が設けられてあった。但(ただ)し、詰めている大半は、代参者であり、中に、武部仙十郎の飄逸(ひょういつ)な相貌(そうぼう)も交っていた。その各座の脇の台には、一羽十両以上もする鶉(うずら)の番(つが)いが、銀箔(ぎんぱく)の鳥籠(とりかご)の中で、その美声をさえずって居り、そして、そのまわりには、いずれ巣鴨(すがも)染井辺の名花師の丹精になったとおぼしい黄菊白菊が咲きほこっていた。

舞台とむかいあった広敷には、忠成が、林肥後守、水野美濃守、美濃部筑前守（ちくぜんのかみ）、土方縫殿助らの股肱（ここう）を左右にして、着坐していた。いわば、本丸老中は、あたかも将軍のような上座で、諸侯を見下しているわけであった。時代が前ならば、この屈辱に堪えず、席を蹴って去る大名が幾人かあったに相違ない。飽食暖衣に狎（な）れて、槍刀（そうとう）の鏽（さび）を拭（ぬぐ）うことを忘れた権門の輩（やから）に、その気骨のあろう筈（はず）がなかった。

やがて――。

団十郎の姿が舞台から消えると、築山（つきやま）に張られたまん幕のかげから、檳榔毛（びんろうげ）の車が一輛（りょう）、牛にひかれて、しずしずとあらわれ出た。たづなをとっている者も、それにふさわしく水干に烏帽子（えぼし）をいただいていた。勿論、車の中は、青簾（あおすだれ）が垂れて、何が入っているか見当もつかぬ。

車は、花道に押しあげられ、舞台の中央に引据（ひきす）えられた。

この時、土方縫殿助が、おもむろに立って、芝生に降りると、舞台の前に歩み出て、左様、武部仙十郎が看破した通りの口上を述べたのである。

すなわち――。

備前屋与兵衛なる廻米問屋の廻船が、過日稲村ヶ崎沖合を過ぎる際、海底に煌（かがや）くものを発見して、苦心して引上げたところ、意外にもそれは鎧櫃（よろいびつ）であった。中に、聊（いささ）かもそこなわれていない具足がおさめてあり、おどろくべし、新田義貞が、われに勝利を与えし竜神に捧げる感謝の祈禱（きとう）文が封じてあった。

と披露し、ついで、縫殿助は、うやうやしく、その祈禱文なるものを捧げて、朗読してみせたのであった。

水をうったようにひそまりかえって固唾をのむ筵席にあって、ひとり、武部仙十郎だけが、いっそ愉しげなにこにこ顔をしていた。

——ふん、なかなかうまい文章をでっちあげ居ったわい。

ところで——。

縫殿助の下知によって、四人の武士が、おそろしく重そうな鎧櫃を、車の中からひき出して、さて蓋をひらこうとしたとたん、

「あいや、しばらくお待ち下されい」

と、仙十郎が、その小軀のどこから出るのかと思われるような大声をあげた。

「率爾乍ら——むかしより伝えききおよびまするに、竜神に捧げたてまつりし品を、人為によって左右するは、その祟りの程はかり知れずとされて居りまする。おん鎧櫃の蓋を開くにあたり、これが祟りを未然に防ぐ方策をたてるが肝要かと存じまする」

仙十郎は、いやしくも西丸老中忠邦の代理である。その提案を無下にしりぞけるわけにはいかなかった。

「その方策が、お手前にあると申されるのか？」

縫殿助が、にくにくしげに問うと仙十郎は、けろりとした表情で、

「まことに、偶然と申しましょうや、拙者が下に就く者で、稲村ヶ崎に漁舟を浮かべたる際、

海底に煌くものを発見いたし、すくいあげましたるところ、黄金造りの陣太刀――これぞまさしく、新田義貞公が竜神に祈って投じられたる品に相違なかるべし、と話合うた次第で――。拙者考えまするに、犯神疾走の禍を防ぐには、この陣太刀をかざして、具足より発する竜神の怒りを断つにしかず、と。あるいは、杖を挙げて狗を呼ぶのそしりはまぬかれずと雖も、これもひとえに、この祝賀の宴の御趣向をまったからしめん微意に御座りまする」

と、しゃあしゃあと云ってのけた。

仙十郎の提案は容れられた。忠成が、面白いではないか、と頷いたのである。

仙十郎は、中仕切門へむかって、片手をあげた。そちらへ険しい視線を送った土方縫殿助の面相が、さっと一変した。広敷にあっても、林肥後守が、思わず、驚愕の呻きを洩らした。

黄金造りの陣太刀を携げて、ゆっくりと築地塀に沿うて、舞台へむかって歩み出したのは、眠狂四郎にまぎれもなかったからである。この豪華な祝宴に、非礼を承知の黒の着流しであった。

狂四郎は、花道の端に上るや、膝を折り踵を立てて、粛然と身を正した。

二人の武士が櫃の蓋をはずした。瞬間、仙十郎が、息づまる静寂を破って、

「亡霊じゃ！　討ちとれい！」

と絶叫した。

狂四郎が、すっくと立つのと、櫃の中から、具足が動いて、ぬっと出現するのが同時であった。

縫殿助ら一味の驚愕は名状しがたいものがあった。三日前、備前屋より届けられた櫃は、邸内奥ふかく安置されて、何人をも近寄らせなかった筈である。いつの間に、斯様なカラクリがしくまれたのか？

狂四郎が、陣太刀をすらりと抜きはなって、ツツツ……と花道を走って、舞台中央に達するや、亡霊は具足を鳴らして、櫃を出ていた。

つぎに――。

敵味方たることを一瞬忘れさせ、すべての人々をして茫然たらしめる眠狂四郎のおどろくべき早業が、そこに演じられたのであった。

白刃が胡蝶のように躍るにつれて、兜が、頬が、射向袖が、胴丸が、釬が、臑当が、燦爛として、宙に飛び、そして、ことごとく、池中へ、飛沫をあげて落ちたのである。

最後に、狂四郎が、下から上へさあっと刎ねあげるや、まとうた直垂は、ふたつに切りはなたれて、中から、白いゆたかな女の肉体が、むき出されたのであった。わずかに白い布を腰にまとうただけの裸女は、黒髪を舞いたたせるや、波紋のまだ消えやらぬ水面へむかって、身を躍らせて、沈んで行った。そして、それきり、再び浮きあがっては来なかった。水門をくぐって、入堀へのがれたに相違なかった。まさに素晴らしい大芝居であった。

水野忠成は、土方縫殿助から立役者の名を眠狂四郎ときいたが、ただ笑って、云ったことだった。

「そちの負けじゃな」

贋(にせ)囚人

一

「餌(えさ)みみず茶がらに浮かれ唄(うた)い出し」
太公望(たいこうぼう)が、海に、川に、堀(ほり)に、釣糸(つりいと)を垂れる季節であった。当時、大川端は、両国から小(こ)日向(びなた)まで千人、同五つ目橋までさらに千人、ずらりとならぶ、といわれたものである。
ここ——深川洲崎(すさき)の木場(きば)にも、材木の上に、蒲団(ふとん)を敷いて、数十人の暇人が、のんびりと、海面へ竿(さお)をさしのべて、地蔵のように動かないでいる。
この群の中に、眠狂四郎と巾着切(きんちゃくきり)の金八(きんぱち)が交っていた。
釣れるのは、沙魚(はぜ)である。狂四郎は、すでに、半刻(とき)ばかりのうちに四尾釣りあげていたが、金八は、餌ばかり食い逃げされて、まだ一尾も、ものにしていなかった。
今朝、金八が、武部仙十郎の家をひさしぶりにたずねると、行方不明だった狂四郎が寝そべっていて、釣りに行くからついて来い、とさそわれたのである。
「釣どころじゃねえや。先生、美保代さまや文字若が、どんなに先生のからだを心配したか、ちったあ察しておくんなさい」

目くじらたててみたものの、なんの反応もしめさぬ対手をどうするすべもないのは、いつものことで、不承不承、仙十郎から借りた斑竹の竿をかつぎ、魚籠をぶらさげて、跟いて来たのであった。

だいたい、釣などというのんびりした遊びは、金八の性に合わないのである。くそ面白くもねえ、という顔つきで、あたりの太公望連の無心な姿を眺めわたし、ついで、狂四郎の、青白く冴えた横顔をちらと偸み見て、金八は、意味もなく首を振った。

それから、立てた膝へ顎杖ついて、はやり唄を口ずさみはじめた。

　ここは吉原、見返り柳
　まねく禿が合図の手管
　忍ぶ格子のそのささめごと
　男たて縞、尺八竹の
　揚羽の小蝶と名をよびかわす
　恋の合図はこれなんめり
　さっさ、よいよい

よい殿御——とくらあ、こん畜生！

首をふり乍ら、やけみたいに叫んだとたんであった。

「おや？」

金八のさとい目は、三十三間堂の方から急ぎ足に来た一組の男女が、つと汐見橋を渡るの

をとらえた。

「あれっ！　――姿かたちは、変れども、へっ、こいつは、おどろき――ありゃ、仲の町芸者の小登美にちげえねえ」

と呟いた金八は、のびあがって、さらに鋭く視線を追わせるや、

「おっおっおっ！　こいつは、びっくり仰天ところてんだ、てんてんてん鞠飛んでった、海のむこうの島流し――あん畜生！　むじな政じゃねえか。いつ島を破りゃがったんだ。よおし――」

ひとり、べらべらっと口走るや、金八は竿を抛り出して、敏捷な身ごなしで、材木の上を、ぴょんぴょんと走って行った。

狂四郎は、いっさい、金八の挙動には無関心に、また、一尾、ぱっと宙へはねあげた。

このおり、

「眠ではないか」

と、声をかけられて、何気なくふりかえった狂四郎は、

「これは――」と、微笑した。

紬の紋服に京桟留の袴をつけ、木綿の打さき羽織という質素な身なりの、四十年配の武士が立っていた。どことといって目立つ風貌ではないが、大きな目に、強い煌きがあった。大阪天満与力・大塩平八郎であった。

五年あまり前、ふらっと大阪へあらわれた狂四郎は、偶然のきっかけから、豊国大明神と

称する祈禱所を設けて、かげで切支丹布教を行っていた水野軍記という人物と知り合い、その使う妖術が善良な町人たちを誑惑しているのを看破して、一日、祈禱所へ乗り込んで行き、床の間にかかげた天帝の画像なる軸を一刀に切り裂いたことがあった。それが端緒になって、大塩平八郎が、妖教の党首を京阪摂の間に捕索して、一網打尽にしたのである。この事件で、狂四郎は、平八郎と親しくなり、半年あまり、大塩家へ身を寄せたのであった。

狂四郎がこれまで出会った人物のうちで、最も好意を抱く文武ともに秀れた剛鋭果敢の士であった。

「いつ出府されたのです？」

「昨日だ。お救い米を、大阪から船で運んで来たのだが……焼石に水だな」

平八郎は、憮然たる面持ちで、吐き出すように云った。

一昨年、昨年とひきつづく饑饉で、坂東、北国、東国、奥羽の各所に、一揆が起っていたのである。米の騰貴は甚だしく、市価は、三倍以上になっていた。三年前は、一両で六斗五升買えたのが、今年は二斗買えるかどうかであった。公儀では、払米一万石を出して、この秋より、筋違橋外、和泉橋外に、お救小屋を設けて、流れ込んで来た饑民に粥を施していた。

平八郎は、大阪城代松平宗発と東町奉行高井山城守に進言して、大阪の豪商鴻池屋、辰巳屋、加島屋、平野屋、天王寺屋、近江屋、千草屋などから、お救い米を寄進させて、江戸表へ運んで来たのである。

「眠——、徳川幕府の命数は尽きたようだぞ！」
海へ遠く、光る眼眸を投げて平八郎は、ずばりと云ってのけた。
「…………」
狂四郎は、黙って、じっとこの正義感の旺盛な幕吏の横顔を瞶めた。
「公儀は、不作による窮民の救済も、来年の豊作によってつぐない得ると考えて居る。烏滸の沙汰だ。人民が安んじてその生計をいとなみ得る世たらしめるには、まず幕府の政道が根本において改革されなければならん。人民が苦しむのは、汚吏と奸商が結託して米の価をつりあげて居るからだが、それをゆるして居る施政者の無能もさることながら、ゆるさねばならぬ程、幕府の財政そのものが逼迫しているからなのだ。お救い米など、枝葉末節の弥縫策にすぎぬ。……時は来て居る。この乱れた政道に鉄槌をくわえ、天下を震撼せしめる者があらわれるべき時が来て居る。上謀る能わず、士死する能わずんば、何を以て民を治めんや——これだ。一人の志士がまず蹶起して、天下に殉じた時、はじめて、幾多の志士が後を継ぎ、根太の腐れた大廈を顛すことが可能なのだ。陰でぶつぶつの愚痴も、千万人が呟けば、幕閣の中にひびくなどと思うのは、大たわけだ。それよりも、たった一人だけでも、蹶起して獅子吼した方が、どれだけ、天下大改革の強力な推進力たり得るか——わしは、今、そのことのみを考えて居る」
　五年ぶりにめぐり会って、いきなり、この慷慨激越であった。
　狂四郎は、もとより、幕政の矛盾に漠然とした嫌悪を抱いてはいるが、すべてそうした趨

勢に対しては背を向けている虚無の徒である。いわば、宿命というものに抗しがたいとする無常感に陥った者のむなしさを、その日その日の風にゆだねてまぎらわしている素浪人である。

唐突の慷慨激越をあびせられても、狂四郎の表情は、動かなかった。

平八郎は、その冷たさに、ようやく気がつくと、

「いや——おぬしにこんなことをきかせても無駄であったな。おぬしは、あの当時から生きているのが面倒くさいといった顔をして居ったからな」

「今も、ごらんの通りです」

「惜しい男だ、おぬしは——。しかし、おぬしは、もしひとたび決意すれば、天下の為に、一死もって事に処することの出来る勇気の持主だと、わしは、信じて居る」

「…………」

「万が一だ、窮民が、苛政に抗して、蹶起暴動を起したら、おぬし、死生を知らず、決然立って天功を亮くる肚がなくはなかろう」

「…………」

「ははは、一諾千金だ。滅多に返辞は出来難かろう。べつにきかんでもよい。……それより、わしは、大阪へ帰ったら、致仕するつもりだ」

「その若さで、隠居なさる？」

「うむ、令長の指揮にしたがって右往左往する小吏の任にあきたのだ。もともと驕慢放肆の

性格に生れついて居る……小吏となって、まわりを眺めて居ると、笞杖(ちじょう)の下にある囚人の方に、罪を責める側の徒輩よりも、はるかに人間が出来て居る奴(やつ)がいるのを発見したりして、煩悶(はんもん)も多かった。ひとつには、近年、王陽明(おうようめい)を学んでな、多少悟るところもあった。……ともかく、致仕したら、塾を開く計画だ。いま、わしが欲しいのは、金だ。まことに、のどから手が出る程、金が欲しい。わしは塾を開いて、軽輩や市井(しせい)の中に埋れている俊才を集め、わしの志を思うままに授けてやりたい」

それから、平八郎は、自分の宿舎を告げて、帰阪の出航は三日後になる予定だから、是非一度訪ねて来てもらいたい、と云いのこして、狂四郎の傍(そば)を離れると、朗々と謡曲・籠祇王(ろうぎおう)を口にしつつ、遠ざかって行った。

終(つい)に行く道とはかねて知り乍ら、昨日今日とは白雲の、朝(あした)にたち、夕(ゆうべ)に消ゆるいなずま朝露、石の火の、光の内外に遊ぶなる……

見送りつつ、狂四郎は、心中で、

――あの仁なら、かならず、やるだろう。

と思った。

二

大塩平八郎の出現のおかげで、釣糸を垂れる虚心をみだされた狂四郎は、帰るべく、腰をあげたところへ、金八が、かけ戻って来た。

「どうも、こんなちんぷんかんぷんはねえや。先生、仲の町一の流行(はやり)っ妓(こ)が、伊豆の島へ送られている筈の悪と、扮(なり)をかえて、忍びの道行とは、どういうわけでござんすかねえ――」

狂四郎は、黙って、釣道具を金八に渡して、歩き出した。

「まったくわからねえ。小登美って云えば、そんじょそこらの小金持なんざ、一年かよっても、座敷へ呼べねえ女なんですぜ。そいつが、相手もあろうに、吉田町の婆(ばば)あ夜鷹(よたか)だって鼻をつまんで横を向くような小悪党のむじな政と肩をこすりあわせやがって――何処(どこ)へ消えようとしやがるんだか、夢中で急いで行きゃがるたあ、ても、さっても、この道ばかりは、お天道(てんと)さまの照らしかたがちがってらあ」

　金八が、しきりに小首をかしげるのも無理もなかった。

　当時、正式に芸者と呼ばれるのは、吉原と櫓下(やぐらした)（芝居町）の女だけに限られていて、なかんずく仲の町芸者の権勢は大変なものであった。横町や余所土地の芸者と座敷が一緒になっても、さっさと上座に坐(すわ)って、自分以外の者には、三味線を弾かせなかった。身なりにしても、襟(えり)は白、着物は裾(すそ)模様という特権を保っていた。柳橋や深川の芸者は、この風をすることもゆるされていなかったのである。したがって、仲の町芸者の情人になろうとする身分のある武士や分限者(ぶげんしゃ)は、すくなくとも三年以上四季の衣裳(いしょう)を貢(みつ)いでやらなければならなかった。その衣裳も特に粋中の粋を撰(えら)ばなければ、軽蔑(けいべつ)された。そうして心意気をしめして、さて確実にわがものになるとは限らなかったのである。

　小登美は、まして、仲の町で屈指の嬌名(きょうめい)をほしいままにしている芸者である。それが、手(て)

拭を頬冠りにして、垢のついた木綿布子に古半纏を羽織ったいでたちになっていたのだから、金八が唖然としたのもむりはない。見まちがえる筈はなかった。金八は、商売柄、顔と身なりに対しては、異常なまでの的確な記憶力を蔵していたのである。

重ねての奇怪は、本所深川一円のならず者の中でも、最も嫌われていたむじな政が、二年前に伊豆に遠島になって、いまだ赦免になった話はきかなかった。政が帰って来れば、すぐに金八の耳には入った筈である。

――どうしても、わからねえ。

金八が、幾十度めかの小首をかしげた時、狂四郎の方は、ぽつりと、

「ふん。天功を亮く、か――」

自嘲的な一語を口にのぼせていた。

「え？　何か仰言いましたかい」

「お前は、芸者の化けた謎でも解いて居れ」

「へえ――まったく、謎でさあ」

だが、その謎を、狂四郎自身が解かねばならぬ出来事が、その行手に待っていたのである。

新大橋を渡ったおりであった。

多勢の人が、浜町河岸の一角へむかって、夢中で走っていた。

後の者が、前の者へ、

「土左衛門は、どっちだい？　男か女か？」

と、叫び、

「女でなけりゃ、こんなに息せき切って走るもんけえ。仲の町芸者だぞっ——」

振りかえって叫びかえすのを、金八がききとがめて、顔色を変えた。

「先生、ちょっと——」

手をあげておいて、裾をたくって、そちらへ走り出した。

浜町河岸の百本杭(ぐい)は、汐がさして来ると、よく土左衛門がひっかかる場所であった。

金八がその場所へかけつけて、夥(おびただ)しい群衆を遮二無二(しゃにむに)押しのけ突きのけて前に出てみると、ちょうど、役人や岡っ引や下っ引が、石段の波際(なみぎわ)に、俯伏(うつぶ)しの屍体(したい)を引き寄せたところであった。

——ちげえねえ、仲の町芸者だ！

金八は——そして、ほかの見物客も、一瞬、固唾(かたず)をのんだ。

べっとりと肢体(したい)にまつわりついた衣裳は、紫苑(しおん)を盛った花籠車の裾模様であり、がっくりと高髷(たかまげ)の崩れた島田には、平打の笄(こうがい)が抜け落ちずにささっていた。辰巳芸者は、裾模様、変り裏を禁じられていたし、平打の笄をさすならわしもなかったのである。

裾がめくれて、赤しった鹿(か)の子(こ)の燃えるような長襦袢(ながじゅばん)がからんだ脛(はぎ)が、へんになま白く、すべすべしていて、不気味であった。

「よいしょっ——」

掛声とともに屍体が石段で、ごろりと仰向けにされるや、注がれたすべての視線が、非常

な衝撃をうけて、一斉に唸り声を呼んだ。

酸鼻——その顔は、滅茶滅茶に、無花果宛然に、たたきつぶされていたのである。

「ひでえことをしやがる」

「怨恨だな」

役人と岡っ引は、顔見合わせて、頷き合った。見物人たちは、屍体に菰がかぶせられると、ようやくわれにかえって、ざわめいた。

「ありゃ、よっぽどこっぴどく振られやがった佐野次郎左衛門のしわざにちげえねえぜ。おめえみてえに、夜鷹に惚れていた方が無難だの」

「おらあ、芸者にあきて、夜鷹に鞍がえしたんだぞ。その土左衛門は、可哀そうに、おれが振った芸者なんだ。あいつがくれた懸想文の文句をまだおぼえてら。おんちらちらと、白雪の、ふりよき君と、ききわたり候いしより、つもりこし恋しさの、山となるまでにて、玉あられ、うちつけには、えもいわまの紐鏡、春にうつれど、みずから心とけがてに、くるしゅう候を——あらあらかしく、下腹しくしく、いっぺん撫でに来てたもれ、ってな」

「なにを、ぬかしゃがる。てめえなんざ、河豚の立泳ぎみてえな品川の馬糞女郎にさえ振られやがったくせに——」

「てやんでえ、どたぐそ野郎っ」

「ああこれさ、お互い争いはやめての、あのむざんのつらを、つらつら眺めて、諸子一考するところなきや。孔雀は羽ゆえに人に獲られ、麝香は臍によりて身を亡し、紅裙は股堅うし

て貌をたたきつぶされる。朝開暮落、槿花の夢、皮一重剝げば美人もされこうべ――なまくさまんだばさらだ、せんだまからしゃなそわたやそわか……」

このおり――。

地廻り態の男が、石段を降りて、役人に近づくと、

「失礼でござんすが、この死びとは、仲の町の巴家の小登美っていう芸者に相違ござんせん。実は、一昨日から、行方をくらまして居りやして、あっしも、たのまれて、心あたりを捜していたところでござんすので、へい――」

これをきいて、金八が、思わず、

「そ、そんな――」

と大声たてたが、「筈はねえ」とまで云わせず、背後で、どんと小突く者があった。

やくざ者が、巴家へ知らせて来る、と云って、石段をかけあがり、人々をかきわけて、一散に走り出そうとしたとたん、一本の手がのびて、その肩を、ぽんとたたいていた。

男は、首をまわし、眠狂四郎の冷然たる風貌を見出すや、びくんと居竦んだ。

「ひどくおびえているではないか。なぜ、わたしと知って、おびえる？」

狂四郎は、男の手首を摑むや、外目には仲よく肩をならべたていをよそおい乍ら、歩き出した。

「貴様、あれを、巴家の小登美と、どうしてすぐわかった？」

「き、きもので――」

「紫苑の花籠車の裾模様は、吉原に一枚しかないのか、わたしは、正月に、引手茶屋で、十人揃いで、踊ったのを見たことがあるぞ。貴様は、あの土左衛門が百本杭にひっかかったら、これは小登美だ、と役人に告げようと待ちかまえていた。ということは、むじな政と共謀だ、という証拠になる」

　これをきいて、うしろで、金八が、ぽんと手を鳴らした。

　狂四郎は、木場における金八のおしゃべりを、ちゃんと、耳にとどめていたのである。

　男の顔は、みるみる血の色を引いた。

　狂四郎は、まっすぐに前方を見やったまま、

「金八、小登美は、むじな政と一緒に、何処かへ消えてしまったのだな」

「そいつがね、先生、あっしが、追いかけて声をかけようとした時、入舟町から島田町へ渡る小橋の袂に待たせていやがった四枚駕籠に小登美を乗せて、つッ走らせやがると、てめえは、横っ飛びに逆の方角へ消えちまやがったんでさ」

「すると、むじな政は、自分の隠れ家へ戻ったことになるな。おい、あにい、むじな政のところへ案内しろ」

　こう命じた瞬間、狂四郎は、鋭い神経につたわる気配に、じろりと右方の路地角へ視線を送った。

　反射的に――そこに立っていたやくざ風の若い男が、身をひるがえして走り出した。

「あにい、急ぐ必要が生じたぞ。それが、貴様の身のためでもある」

一足おそかった。

本所北割下水に面した石原新町の裏店の隠れ家へふみ込んだ時、むじな政は、庖丁ひとつない空家のような台所に、上半身なま血に塗れて、俯伏していたのであった。

狂四郎は、すばやく、仰臥させてみて、右肩から肋を、幾枚か、袈裟斬った一刀が、かなりの腕前であるのをみとめた。

懐中をさぐると、胴巻にふれた。それをずるずるっとひき出して、振ってみると、十枚ばかりの小判とともに、一枚の書状が、畳に落ちた。

右者、貢租の運搬上特に内密の要員として、船手組下に置かる。囚獄を経しも、流人に
　　下総印旛郡登美郷　　政吉
　あらざることを証明す。
　　　　　　　　　　勘定奉行　押印

——こりゃあ、何かあるな？

狂四郎は、にやりとした。

むじな政は、罪状によって島流しになったのではなかったのである。

この時、格子のところで、

「野郎っ！　逃げやがるか！」

と、金八の怒声と、烈しくもみ合う音がした。

死にもの狂いの力に、金八がたじろいでいるのを、狂四郎は、気にもせず、書状へ目を落して、この文句の蔭にかくされた大きな秘密へ、脳裡を急しく働かせていたが、ふと、気がついたのは、

「登美郷――小登美」

この類似であった。

「せ、先生っ！　野郎が――」

金八が絶叫した。

狂四郎は、動かず、

「金八、そんな雑魚は、はなしてやれ。それより、馬だ。脚の強そうなのを、すぐひっぱって来い」

三

狂四郎が、牛込無量寺門前にある儒者古賀洞庵邸に、大塩平八郎をたずねたのは、翌日の黄昏どきであった。

「早速乍ら――お手前様は昨日、金が欲しいと云われましたな」

「うむ、欲しい。勧学院の雀も、餌を撒かなければ、蒙求が囀れまい。俗に申す、黒焼にせねど小判は惚薬――だな。欲しいぞ」

「その金を、てまえがおつくりいたしましょう。五千両あまり――」

狂四郎は、無表情のままで云ってのけた。
「なに——五千両?!」
平八郎は、瞠目した。
「おぬし、何処からそんな大金を持って来る心算だ?」
「盗むのです」
「盗む?」
啞然となる平八郎へ、微笑を送って、
「但し、その金は、もともと勘定吟味役が、貢租のうちよりかすめ取ったものであります故、正しくは、盗むというより、人民のために、とりかえすことになりましょう」
「ふむ!」
「備前屋与兵衛なる廻米問屋が居ります。これが、勘定吟味役の一人と結託して、豊後、豊前、筑前の代官所に付属せる掛屋(金銭を取扱う御用商人)を籠絡し、領収の券証をごまかして、船で江戸湾に運び、金銀座に持込む前に、これを某処にかくして居るのです。それがつもって、五千両に達して居ります。すなわち、金質の検査を受けて封印される以前の小判が、です。したがって、これを横あいから頂戴して、市井でいくら使っても、露見のおそれはありませぬ」
「どこから、おぬし、その不正をつきとめたのだ?」
狂四郎は、それには、すぐにこたえずに、

「てまえは、確実にその金を奪い取ってみせる自信がありますが、ついては、さしあげるにあたりひとつ条件をつけさせて頂きたい」
「なんなりときこう」
狂四郎は、女中を呼んでもらい、玄関に待たせている者をここへつれて来て頂きたいとたのんだ。
やがて、みちびかれたのは、洗い髪で、粗末な盲縞（めくらじま）の木綿ものをまとってはいるが、眩（まぶ）しいばかりの美貌の女であった。
「この女を、大阪へおつれ下さるようお願いいたしたいのです。吉原仲の町の芸者小登美と申しますが、実は——、五千両の隠匿（いんとく）場所を教えてくれたのがこの女なのです。引手茶屋の一室で、備前屋が勘定吟味役と密談を交しているところを、この女が、偶然、ぬすみぎきました。それとさとった備前屋が、密航船の人夫の一人に、この女を海上へつれ出して殺すように命じました。ところが、その人夫むじな政と申す男が、この女の実の兄であったのは皮肉なめぐりあわせでした。破落戸（ごろつき）にも肉親の情はあります。いや、むじな政にとって、妹のこの女こそ、ひそかな誇りでありましたろう。……そこで、むじな政は、仲間の一人をかたらって、妹に姿形の似た夜鷹を犠牲にしてその衣裳をまとわせて、大川へ流し、この本人を、生れ在所へおとしてやったという次第でした。……たまたま、てまえがこれに関（かかわ）ったために、むじな政は、備前屋配下の者の手にかかって果てましたが、それは因果の決着としても、この女に罪はありませぬ。いや、備前屋に対する意気地からも、生かしてやりとう存じます」

明快な口調で述べる狂四郎と、ふかく俯向いた小登美を、見くらべていた平八郎は、大きく頷いた。

「よし、預ってやろう」

「では、今夜五ツすぎ、永代橋際の姫松という舟宿まで、この女をつれて、お出むき下さいますよう――。屋形舟を、てまえの使う男にしたてさせておきます」

云いのこして、狂四郎が立ちあがるや、小登美は、はっと顔を擡(もた)げて、せつなげなまなざしをすがりつかせた。

昨日、馬をとばして、登美郷の村へやって来て、否(いな)やを云わせずに、じぶんのからだを馬上へひきさらうようにして乗せるや、夜を通して、江戸へ駆け戻ったこの浪人が、小登美にとって、こん後、長く忘れられない存在となるようであった。

狂四郎は、ちらと小登美と目を合わせたが、未練げもなく、足早やに去って行った。

四

時刻は、夜二更をまわっていたろう。

月かげは冴えていたが、それを海面にとどめぬくらい烈しく波立たせる汐風が吹いていた。

江戸湾の孤島佃島(つくだじま)は、その鋭い唸りの空の下に、ひっそりとねむっていた。

すべての漁船は、囚人人足寄場と漁師町の間にある掘割へ、引き入れられていた。波は、ここへは寄せて来ないのであった。

この掘割に沿うた住吉神社の境内から、出入口の岸へ着けられた舟へむかって、七、八名の黒影が、重そうな箱をかついで、黙々と忍び歩くのが見られた。

遠く、深川の灯かげと、くろぐろと大川に弧線を描いた永代橋が望まれる。勿論、水上に舟は一艘も見当らない。

「よおし――艫の方へ置け」

指揮者らしいのが命じ、あきらかに千両箱とおぼしい五つの箱が、そこに積まれた時であった。

すぐ隣りの砂地に転がしてあるひとかかえもある大魚籠の陰から、のっそりとあらわれた者があった。

「ご苦労だった。お前さんがたは、ひとつ、今夜は、この漁師町で、ゆっくり寝て行ってもらおう」

不敵なせりふをあびせられた一同は、驚愕の唸り声を発して、さっと円陣に散った。

「この眠狂四郎にかぎつけられないうちに、五千両を余所へ移そうと周章てた備前屋に、生き残った者が、帰って伝えてもらおう。小登美は、むじな政に殺されずに、立派に生きている。その小登美に会わなければ、こうも早く、おれが、ここへあらわれる筈があるまい。ところで、小登美は、金が佃島に隠匿されているということは盗み聴いていたが、さて、どのあたりかは知らなかった。住吉神社の中に――などとは夢にも存じあげないことだった。だから、こうやって、お前さんがたが、かつぎ出してくれなければ、こっちは捜すのに一骨折

ったところだ。あるいは捜しあてられなかったかも知れぬ。つまり、備前屋は、ゆっくりかまえていればよかったのだな。こっちは根気のいい方ではないから、いい加減であきらめたかも知れぬ。……今夜あたり急いで運び出そうとするのではないか、と睨んだこっちのカンが的中したのは、気の毒だった」

云いおわらぬうちに、横手から、

「やあっ！」

と、凄じい掛声もろとも、烈風に乗って一刃が襲った。

あおられたように、狂四郎のからだは、数尺前へ跳んでいたが、その瞬間、すでにその右手には、血を吸った刀身が光り、第一の攻撃者を背後に泳がせつつ、正面の指揮者に対して、ゆるやかに円月を描きはじめていた。

流石に、指揮者は、充分に心得のある武士であった。

円月の妖気に魅せられまいと、手裏霞に――すなわち、左足を左横に踏み、切先を右に向け、刃を上に、左右の顔面前方に挙げて、じりっじりっと踵摺りに退った。

狂四郎は、追風に、鬢と袂と裾をなぶらせつつ、三尺余すすむ間に、円月を九分通り描き終えていた。

刹那――。

「ええいっ！」

狂四郎の口から、月光を搏って、満身の鋭気をこめた気合がほとばしり、反射的に、対手

の手裏霞は、文字通りかすみの変化をみせて、宙を颯っと薙ぎ払った。ところが、狂四郎の構えが依然としてもとのままの位置にあるのに、――しまった！　と狼狽して、もとの手裏霞へもどろうとした瞬間、生じた虚は、無想正宗の一閃をぞんぶんに胴に受ける悲運をまねいたのであった。

狂四郎は、だらりと刀を垂らして、ぐるっと残りの連中を見わたし、全く闘志を殺がれているのをみとめるや、しずかな足どりで、舟へ寄り、舫綱を切りはなした。

櫓を把って、こぎはじめたが、誰一人、襲撃の気配すらみせなかった。

すぐに、高波の立った広い大川へ出たが、狂四郎は、瀬戸内海の孤島に在った当時の習練で、船頭なみのたしかな腕前を持っていた。

永代橋の際では、大塩平八郎と小登美をのせた屋形舟が、待っている筈であった。五千両を受けとれば、そのまま、品川の廻船へ運んで行くことになっているのである。

美女崩れ

一

ある日——箸にも棒にもかからぬ音痴の若い衆連に稽古をつけ終えた常磐津師匠文字若が、稽古場から茶の間へ出て来て、放俗な立膝で、一服吸いつけたおりであった。
しのびやかな跫音が、階段を降りて来て、
「あの……すみませぬが——」
と、呼びかけた。
文字若はふりかえって、
「あら、おきき苦しゅうございましたでしょう。ごめんなさいまし。あたしは、つい短気が損気で、どなっちまうものですから——」
と、わびた。若い衆たちを、おっそろしく威勢よく、ぽんぽんやっつけたのである。
「文字若さん、ぶしつけな、おねがいがあるのですけど、きいて下さいましょうか?」
「美保代さま。どうも、その遠慮しいしいの仰言りかたが、あたしゃ、おもしろくございませんねえ。文字若、こうしろ、とお命じになって下さいましよ。あなたさまは、ここ十日ぐ

らいいっぺんも、あたしにも婆(ばあ)やにも、用事をお言付けなさいませんよ。いけませんねえ」
美保代は、淋(さび)しげな微笑を泛(うか)べて、はじらいぎみに、
「わたくしの眉(まゆ)を落して、歯を染めて下さいませぬか」
「え？」
文字若は、ちょっと目を瞠(みは)ったが、すぐ合点して、ぽんと膝をたたいた。
「できました、美保代さま！　そうこなくちゃ——。先生がいらっしゃったら、さあ、この若女房ぶりをどうしてくれる、ってひらきなおってさ——」
「いえ、そういう意味では——」
「そういう意味もこういう意味もありゃしませんよ。天下に眠狂四郎の女房は、じぶんひとりしかいないという心意気が、うれしいねえ。……ばあや、ばあや、いないのかい、金聾(かなつんぼ)、お湯だよ、お湯っ！　なにまごまごしてんだい」
「いったい、なんでございます？」
のぞいた婆やへ、
「したくだよ。美保代さまが、粋(いき)な若女房におなりになるんだよ」
「へえ？」
「なにが、へえだ。素顔櫛巻(くしまき)まえだれだすき、ぬしの女房といわれたい、って——小唄(こうた)の師匠の家にやとわれている婆さんなら、それぐらいおぼえておきな」
だが——当の美保代自身の俯向(うつむ)いた白いおもてには、ふかいあきらめの愁色が刷(は)かれてい

たのであった。

その翌日、ういういしい町家女房すがたの美保代は、押上村(おしあげ)にむかって走る駕籠(かご)にゆられていた。

美保代には、じぶんの生命(いのち)が、このさきあまり長くないような予感があったのである。

微熱が出て、盗汗(ねあせ)がつづくようになったのは、この春さきからであった。階下の人たちには、かたく秘していたが、からだをうごかすことに、なんともいえないけだるさがともない、日中の往来に出ると必ず軽い眩暈(めまい)におそわれたし、梅雨の頃、二、三度、少量の血を喀(は)いていた。

しかし、その血を見ても、おどろきはなかった。当然、じぶんの運命におとずれるものがおとずれたような――そんな静かなまなざしを、しばらく、花びらの散ったような鮮紅へおとしていたのであった。

そして、その人知れぬ寂寥(せきりょう)の中に、美保代が、せめてものねがいをかけたのは、狂四郎に見取られて逝(ゆ)きたいということだった。

病めるものの鋭い霊感は、死を迎える場所は、文字若の家ではないとさとったのである。

美保代は、いつからともなく、狂四郎の腕に抱かれて死ぬのは、あの押上村の古寺龍勝寺の離れのような気がしていた。

――あそこに行って、あの方をお待ちしていよう。空然(くうねん)さんにはご迷惑だけど、わたくしの終(つい)の栖(すみか)は、あの部屋のような気がする……。

幼時、父母を喪（うしな）って、物心ついた頃から、美保代は孤独であった。あまりにも美しく、あまりにも気品高く生れついたがゆえに、彼女は、その養育者たちから、親しみを持たれなかった。

美保代は、実は非命の大名の娘だったのである。

寛政のはじめ、皇室にあって、尊号事件が起った。当時、光格（こうかく）天皇は、閑院一品太宰帥典仁（いっぽんだざいのそつすけひと）親王の御子（みこ）であった。後桃園（ごももぞの）天皇の儲君（もうけのきみ）となって践祚（せんそ）されたのであるが、即位にあたって、父典仁親王に太上（だいじょう）天皇の尊号を上る（たてまつ）ことをきめたのであった。これをきいた、幕府老中首座にある松平定信（さだのぶ）は、断乎（だんこ）として反対した。いったんは、朱子学者たる定信の名分論に頷（うなず）いた京都側は、途中で遽（にわか）に態度を強硬なものにして、是が非でも、典仁親王に太上天皇の尊号をおくることを主張したのであった。このため、京都所司代太田備中守資愛（びっちゅうのかみすけちか）は、関白鷹司（たかつかさ）輔平（すけひら）と定信の板ばさみになって、非常な苦衷に陥り、ついに、妻とともに自害して果てたのであった。美保代は、そのひとり子だったのである。

定信は、美保代をふびんにおもい、二年あまり、自身の下屋敷に引取っていたが、さる寄合旗本の大身に、正式の養育を依頼したのであった。

養育者は、預った高価な品物を粗略に取扱えぬ責任感しか持たなかった。こうした、ひとかけらの愛情もない手によって育てられた美保代が、喜怒哀楽の表現のすべを知らぬ女になったのは、当然すぎることであった。

十八歳で、本丸大奥に入り、中臈（ちゅうろう）となるや、当然、将軍家斉（いえなり）が、美保代の美貌（びぼう）を見のがす

筈がなかった。お清の中臈から、お手付きの中臈たるべく命が下った。ところが、美保代は、これをきっぱり拒絶したのである。もし美保代が、松平定信を後見としていなかったならば、その生命は、その時即座に断たれていたかも知れぬ。美保代が、隠密という世にも悲惨な職掌に追いやられたのは、このためであった。

皮肉にも――密偵となって、西丸老中水野忠邦邸に住み込んだ美保代は、そこで、何処の何者とも知れぬ素浪人に、純白の肌身を傷つけられたのである。加之、その暴力が、生れてはじめて、美保代に、愛情を芽生えさせることとなろうとは！

いま――。

駕籠にゆられ乍ら、美保代の心を嚙んでいるのは、あまりにもいたましいじぶんの宿命を、せめて、その最後だけは、わが意志でえらぶことがゆるされていいのではないか、というねがいであった。

二

渋谷宮益町はずれの楽水楼隠宅に、一人の訪問者があったのは、ちょうどその頃であった。応対に出た静香は、相手を一瞥した瞬間、全身を悪寒が走るのをおぼえた。

武士であることは大小をたばさんでいることであきらかであったが、まとったものが変っていた。盲縞の木綿の筒袖に、たっつけ袴――という、戦国時代そのままの扮装であった。

それよりも、静香を戦慄させたのはその顔の半面に――額から頰へかけて、べっとりとなす

りつけられた堆朱(ついしゅ)の漆さながらの赤痣(あかあざ)であった。

目鼻立ちに異様はなかったが、無慚(むざん)な痣ゆえに世をすねているのか、その風貌にただよわせるものは、無数の針を含んでいるような険しい非情の気色であった。

「御隠居殿が御在宅ならば、左馬右近(さまうこん)と申す者が、是非お目通り賜(たまわ)りたく参上いたしたとお取次ぎねがいたい」

「ご用のむき、おきかせ下さいませ」

「拝眉(はいび)の上で申上げる」

しかたなく、静香は、奥に入って、老人に、その名を告げた。

老人は、ちょっと、小首をかしげたが、急に、表情をひきしめて、

「顔に痣があったか？」

と訊(たず)ねた。

「はい」

しばらく、考えていた老人は、「通せ」と云(い)った。

左馬右近が、書院にみちびかれた時には、もとの穏かな顔にもどっていた。

右近が、たたみへこぶしを突いて、頭を下げ、

「もはやお忘れかと存じますが、それがし、去る七年前——」

と云いかけたのを、老人は、

「おぼえて居る」

と、断ち切るようにこたえた。

不快な思い出が、この武士との間にあるに相違なかった。

「用件を、簡単に云ってもらおう」

「それがし、本日五年ぶりに、兵原草盧に参り、伯父と面会つかまつりました」

老人は、疑惑の目を、右近にそそいだ。

兵原草盧とは、子龍平山行蔵の塾であった。兵学と儒学を講ずる兵聖閣と、武術道場たる演武場から成っている宏壮な構えの建物であった。

実は、この左馬右近は、子龍の甥だったのであるが、七年前に、所行に不埒があって義絶されていた。子龍のゆるしはまだとけていない筈であった。

絶倫なる天稟の精力を蔵した子龍も、ついに、七十歳の齢に克てずに、十日あまり前から臥牀していると、老人はきいていた。しかし、義絶の甥の見舞いを受けつける子龍でないことは、誰よりも、四十余年の交友たる老人がいちばんよく知っていた。

「子龍は、おぬしに会うたかな？」

「会うてくれました。七年ぶりに勘気がとけました。ごらん下されい」

右近は、背後に置いた太刀を把って、さし出してみせた。まさしく、それは、子龍の佩刀にまぎれもなかった。子龍自慢の品で、武田信玄の名将馬場美濃守信房が愛用したと伝えられる、三尺五寸、蠟色鞘、髑髏目抜、白柄勘助巻の剛壮無類の出来であった。

証拠を見せられ乍らも、老人の疑惑は消えなかった。いや、かえって、――子龍の臥牀を

さいわいに、掠め取ったのではないか？　と睨んだ。

「それで？」

「ききおよびますれば、兵原草廬の指南代理戸田隼人は、御当家の庭において、眠狂四郎と申す浪人と試合をいたし、一敗いたしましたる由。それがし、伯父の勘気のとけたる今日、兵原草廬が蒙れる恥辱を雪ぐのが、まずおのれのなすべき責務と心得た次第でございます」

「戸田隼人は、眠狂四郎に敗北したのではない。引分けじゃ。子龍も、それをみとめて居る筈じゃ」

「いや、伯父は、左様は申しませなんだ。眠狂四郎ごとき名もなき素浪人づれに、兵原草廬の指南代理が敗れるとは、なんたる不覚——痛恨これに過ぎたるはない、と無念の形相にございました」

その語気のそらぞらしさが、老人をして、——こやつ、子龍と会うては居らぬな、と確信せしめた。

このおり、静香が、影のように静かな作法で茶菓子をはこんで来て、またしりぞいて行った。だが、静香は、襖の外にうずくまると、全神経を耳にあつめて、胸をはげしく動悸うたせたのである。

「眠と勝負を所望ならば、勝手にやるがよい。わしにことわるまでもあるまい」

「いや、是非とも、御老体をわずらわして、御見分を賜らねばなりません。戸田隼人との試合において、たしか、将軍家拝領の雛の首が賭けられ、それは、現在も、貴方様のお手もと

預りとなって居るときいて居ります。それがしは、眠狂四郎に勝って、その雛の首を頂戴いたしたい――」

――語るに落ちるだな。

老人は、肚裡で、冷笑した。

隼人と狂四郎が雛の首を賭けたということは、子龍すらも知らぬ秘密である。もし、このことをかぎつけている者がありとするならば、それは、本丸老中側のはなった隠密である。ということは、この左馬右近が、その隠密にたのまれたと想像して、ほぼあやまたぬ。

老人が黙してこたえずにいると、右近は、抑揚のない口調で、

「眠狂四郎の隠れ家をお教え下さいますよう――」

「知らぬ！」

老人は、にべもなく否定した。

「知らぬと仰せられる――」

瞬間、右近の双眸が、ぎらっと光った。それは、殺気ともおぼしい凄じさをおびていた。

「疑うのか！」

「いえ、ご存じなくば、やむを得ませぬ。兵原草廬の門弟七百余名を動員いたすまででございます。したがって、それがしとの正々堂々の試合はのぞむべくもありません。眠狂四郎は、無数の刃をあびて、膾にされましょう」

――こやつ、もしかすれば、狂四郎が、わしの孫であることを知って居るのではないか？

老人は、竦然となった。

静香は——静香もまた、激しい身顫いをおぼえていた。静香の方は、右近の脅し文句をそのままに受けとってしまったのである。

静香は、祖父の使いで、一度、兵原草盧をおとずれたことがある。子龍の居室へ通りがけに、ちらと覗き見た道場のもの凄さは、足がすくむほどであった。居台の大筒、抱え筒、射込桶、鉄砲、鎧、槍、長刀、大鎚、木刀が、式台せましと飾られ、床の間には武蔵野に髑髏がひとつ晒された図が掛けてあった。そして、大床をふみならして巻き打ちの稽古をしている者や、片隅の四斗樽の栓口へ、茶碗を受けて、がぶのみしている者などの、荒くれた風態など。まさしく平賀源内が『刀は烟管より細し』と諷した江戸の街中から、一挙に数百年をこえて、戦国の世界へひきもどされたかと、目を疑わしめるほどの殺伐の眺めだったのである。

静香は、狂四郎が剣の妙手であることは充分承知している。しかし、あの兵原草盧の門弟たちに殺到されたら、いかに、狂四郎と雖も、百に一も身を全うするとは考えられない。

——狂四郎さまに、早く、お知らせしなければ！

三

それから二刻あまりのち——。

薄い笠雲のただよう、冷たい秋空の下を、三枚駕籠が、かけ声いさましくとんだ。

中で、きびしく眉を立てて、またたきもせず眸子(ひとみ)をひらいている静香は、その速度に、まだもどかしさを感じていた。あの不気味な赤痣の武士が、音もなく、おそろしい迅(はや)さで追跡して来ている恐怖で、背すじを冷たいものにしていた。

いくども、垂れをあげて、後方をたしかめたい衝動が起っていたが、そうすることもおそろしかった。

とある地点で、駕籠がとめられた瞬間、——あっ、来たのだ！　と、全身が凍った。

「お嬢さま、ここが、押上村の巣ノ森ってえところでござんすが、道が三叉(みつまた)にわかれて居りやすが、どっちへ参りましょう？」

その声に、ほっとして、垂れをあげた静香は、ちらと後方を覗(うかが)い、白い往還に人影もないのに、じぶんの杞憂(きゆう)をわらう余裕が生じ、

「ここでいいのです。降ります」

彼方(かなた)の色づいた梢(こずえ)で、白鷺(しらさぎ)の舞い立っている疎林(そりん)に、見おぼえがあった。

あたりの景色は、蕭条(しょうじょう)たるものに変り、原野いちめんに芒(すすき)の穂が、秋風になびいていたが、静香の辿(たど)る細道は、一歩毎(ごと)に、彼女の心を、去年の思い出へ惹(ひ)き入れて行った。

ふしぎなことに、静香は、狂四郎が、まだあの龍勝寺に住まっているものときめていたのである。

そのことに、なんの疑いも持たず、ただ、そこを兵原草廬の血気の若ざむらいたちに知られてはならない、という気持だけで急いでいたのであった。

だが、こうして、なつかしい道を辿っているうちに、静香は、

――わたくしは、このまま、狂四郎さまと一緒にくらすためにやって来たのではないかしら?

と、じぶんに問うていた。

――そうかも知れない。狂四郎さまに、江戸にいては危険だということをお報せして、どこか遠くの土地へ、ご一緒に行く!

この想像は、にわかに、静香の胸をはずませた。

龍勝寺の屋根が見える竹藪の脇を過ぎる時には、もう静香は、それにきめていた。

境内に入ると、静香は、小走りになった。離れの雨戸が開いて居り、きっちりとたてきられた障子のま白さが、黄ばんだ銀杏の葉むらのむこうに、あかるく秋の陽に映えていたのである。

からころと、置石に鳴る下駄の音も軽やかに、静香は、ついと、沓脱ぎにあがると、

「狂四郎さま――」

と、呼んだ。

中で仰臥しているその人の姿が、静香の脳裡に、疑いないものとして描かれていた。

人の気配が、うごいた。

――やっぱり、おいでだった!

だが――。

障子が、しずかにひらかれたとたん、静香の顔から、さっと血の色が引いた。

見知らぬ艶冶な若女房の姿が、あらわれたのである。眉の剃りあとも青く、かすかにひらかれた朱唇のかげに、漆黒の鉄漿が、美しい。

相手もまた、一瞬、澄んだ双眸を据えたが、すぐ、まぶたを伏せて、作法正しく、

「どなたさまでございましょう？」

そのあまりにおちつきはらった応対が、静香の全身を、かっと熱くさせた。

——卑劣者！

狂四郎に対する絶叫が、胸のうちで、ほとばしった。

すでにこのような妻を持ち乍ら、何食わぬ顔をして、じぶんを犯した卑劣者に対して、静香は、生れてはじめてといっていい凄じい憤怒をおぼえた。

障子が開くまでの心のはずみかたが大きかっただけに、裏切られた絶望も深かった。

美保代の方は、清楚な娘が、一瞬の驚愕の表情を、みるみる陰惨な瞋恚の形相に変えるのを、おそろしいものに見た。

「この部屋に残したわたくしの衣類を頂きにあがりました」

自身でも思いがけないくらい冷やかな言葉が口を衝いて出た。

——あ！　静香さんと仰言る方だった。

美保代は、かえって、ほっとなり、

「そうでございました。お残しになって居ります」

と云って、立って押入へ寄ろうとした。

「ふれないで下さい！」

静香は、切りつけるように叫ぶと、とびあがって、そこへ走った。

夢中で、その包みをつかみ出すや、濡縁へかけもどったが、一言なにか激しい言葉をたたきつけたい衝動で、きっと振りかえった静香は、しかし、そこに、いおう様のない淋しげな愁い深い色にとざされた﨟たけた顔を見出すや、ふっと息をのんだ。

そして、

「わたくし、あの男を怨みます！」

と、投げのこして、庭へ降りるや、一滴の泪さえ滲まぬ干いた眸子を宙に据えながら、急ぎ足に遠ざかった。

「あの……もし！」

美保代の呼び声に、静香は、不意に突きとばされたように走り出した。

静香に与える衝撃は、しかし、それだけではすまなかった。

竹藪の脇を通り抜けて、堀川添いの街道へ出たとたん、静香のからだは、棒をのんだように、その場へ凝結した。

あまりにも皮肉な偶然であった。

憎むべき狂四郎その人が、ゆっくりと、こちらへむかって歩いて来たのである。

数間に迫って、狂四郎が、静香の異常にこわばった顔に、かすかに、眉宇をひそめ乍ら、

なにか云いかけようとするや、同じく静香もまた、くちびるを、ぶるぶるとわななかせて、なにか、云おうとした。

しかし、双方の口から声が発する前に、静香は、風のように、狂四郎の横を駆けぬけたのであった。

頭をめぐらして見送った狂四郎は、ふっと苦笑した。

――なんの理由か知らぬが、こうされた方が、こちらにとっては気楽ではないか。

一年ぶりに、なんとはなしに、気持がうごいて、足をこちらへ向けた狂四郎は、その離れに、美保代が待っていようとは、夢にも知らぬことだった。

四

魂の抜け落ちたような足どりで、静香が、渋谷へ戻って来たのは、葉こぼれの斜陽が、一条(ひとすじ)ひとすじ消えてゆくのが、かぞえられる時刻であった。

うす靄(もや)が、太竹と細竹柴(しば)で編んだ垣根(かきね)を撫(な)でるように、目に見えぬくらい微(かす)かに動いていた。

と――。

つと、音もなく、じぶんの足もとへ、淡い影法師がのびて来たので、静香は、顔をあげて、ぎくっとわれにかえった。

赤痣の武士左馬右近が、湧(わ)き出たように、そこに出現していたのである。

「静香殿、待ちくたびれたぞ」

「…………」

「かくしても無駄だ！　それがしには、何もかもわかって居る。兄の仇である眠狂四郎に、そなたが惚れていることも、それがしのことを眠に急報して来たことも――」

「…………」

「そなたが、襖の陰で、ぬすみ聴いているのを、それがしは、気がついた。それから、そなたは、こっそりと家を抜け出て行った様子だった。だから、それがしは、辛抱強く、此処で、待っていたのだ」

一歩、のそっと迫り寄る男の、異様の相貌を、静香は、気遠いものに見た。

次の瞬間、静香は、右近の電光の拳で脾腹を搏たれて、がくっと半身を折っていた。

右近は、ぐったりとなった柔かな女体を、かるがると小脇にかかえると、灌木をかきわけて、雑木林の奥へ入って行った。

金雀枝がいちめんに掩うた地点で、どさっと静香をなげ出した右近は、なんのためらいもなく、片手を、その裾へかけていた。

意志のない白い肢体は、男の十指に弄ぶにまかせて、金雀枝をゆるがせつつ、湿った下苔の上で、さまざまな痴態を描いた。

やがて、顔の輪郭もおぼろな闇を迎えて、右近は、静香の上から、ゆっくりと身をどけた。

「おい、眠のかくれ家は、どこだ？」

死んだように動かないでいる犯された者へ、その詰問があびせられた。
返辞はなかった。
右近は、突然、荒々しく、静香の襟もとを摑んでひき起すと、
「云えっ！　それがしは、今から、お前の良人だぞ！　兄の仇を討ってやろうというのだ！」

五

冴えかえった月光が、潮のように、徐々に庭はしから、縁側へむかって、浸して来るさまを、狂四郎は、じっと眺めていた。この前、美保代が心をこめて縫いあげた渋い胡麻柄の古渡り唐桟に着換えていた。
背後の、行灯のそばでは、美保代が、脱ぎすてられたその黒羽二重の着物を膝にのせて、袖のほころびをつくろっていた。灯に映えたその顔には、この上もなく幸せそうな微笑が湛えられていた。
こんな静かな、愉しい月夜のひとときが、これまでの美保代の生涯に、曾てあったろうか。
先刻、狂四郎が、ふらりと戻って来た時の、夢のようなあのよろこびを、いま、美保代は、充ち足りた幸福感の中で、いくどもいくどもくりかえして、思い出していた。思い出すことによって、夢でないことをたしかめていたのである。
急に――、
狂四郎のからだが動いた。その動きは、ほんの身じろぎ程度ではあったが、美保代は、待

ちこがれた幸せを、やっとつかまえた者が、それを護ろうとする本能で、はっと強い衝撃を感じて、顔をあげた。

美保代の反射的な直感は、当っていた。

庭はしの花の散りはてた百日紅の下に、くろぐろとひとつの影が佇んでいたのである。

美保代の知る由もないことであったが、曾て、狂四郎のおそるべき強敵としてむささび喜平太が、忽然として出現したのが、その場所であった。

いままた、容易ならぬ対手がそこに立ったのを、狂四郎は、その黒影から放射する殺気によって、さとった。

「美保代、刀を——」

ひくく命じておいて、対手にむかって、

「わたしの生命が所望か」

と、云った。

対手は、こたえるかわりに、まっすぐに二間前まで進んで来た。

狂四郎は、月光をあびたその顔が、半面濃い痣で塗りつぶされているのをみとめるや、冷笑した。

——化物は、あらわれる場所が同じとみえる。

「無眼唯心流・左馬右近、兵原草廬を代表して参った。平山子龍になりかわって、眠狂四郎を討ち果す」

「討ち果す？」

狂四郎は、美保代が、袂持ちの無想正宗を左手に把って、やおら、立ちあがった。

問答を必要としないことだった。

両者が、ぱっと白刃を構えるのに、一秒と費されなかった。

だが、構えた刹那、狂四郎は、——これは！　と、戦慄が身うちを走るのをおぼえた。むささび喜平太と対峙した時も、そうであった。しかし、いまは、あの時よりも、はるかに、危険率の高いのを、ひしひしと感じなければならなかった。

左馬右近の構えは、奇怪というほかはなかった。あたかも、衣冠束帯者が、笏を持ったがごとく、顔前二寸と離さずひきつけて、切先を天に突き立てたのである。

そして、右近の姿は、その直立の刀身のかげに、吸い込まれるごとく、かくれた。

まさしく、右近は、狂四郎の構えを無視して、心眼に機変を知ろうとする陰刀をもってしたのである。すなわち、狂四郎の円月殺法を打破る絶好の流儀をしめしたのだ。

円月殺法は、陽刀の変化の妙である。したがって、その鋒がおそろしいのであって、刃はおそるるに足りない。ということは、上段や青眼で、これを防ぐには魔神にひとしい迅速の術をそなえていなければならぬ。陰刀をもって、おのれの目から円月をはばむのこそ、最も適切というほかはない。陰刀の場合、刃が威力を含み、鋒は大した役に立たないからである。

右近の無眼唯心流は、実に、狂四郎の円月殺法に勝つために編まれたかとさえ思いなされる奇怪の構えであった。

やむなく、狂四郎は、円月殺法をすてて、刀を下段から青眼に移した。陰刀を制するには、気根を青眼に罩(こ)めるのみである。

全身に満たした鋭気を、太刀の鍔(つば)もとより、刀身の髄を通して、鋒までつらぬかせ、技を超えた石火応変の風心刀法を使うが肝要となる。

狂四郎は、敵の攻撃を誘うべく、ゆっくりと、右へ右へとまわりはじめた。

狂四郎が、一間をまわれば、右近もまた正確に一間をまわった。

そして、両者の位置が、完全にところを変えたおりであった。

狂四郎は、視野の片隅(かたすみ)に、片袖で口を掩うて、濡縁に、崩折れる美保代の姿を映して、はっとなった。

この一秒の何分の一かの隙(すき)を、右近が、どうして見のがそう。

「ええいっ！」

月光を撥(は)ねて、流星の一閃(いっせん)が飛び……刹那、狂四郎の五体は、大地に吸い込まれるように沈んだかとおもうや、斜横に、四尺あまりすべって、片膝たてて、大霞の防禦(ぼうぎょ)姿勢をとっていた。その額から、ひとすじの血汐(ちしお)が、たらたらとつたい落ちた。

それにむかって、右近が、陰刀をすてて、大上段にふりかぶるや、

「待てっ！」

と、狂四郎の声が、はじけるように発した。

「今日の敗北をみとめる！　試合は、後日に——」

「うぬがっ、生命を惜しむかっ！」
「わたしは、試合よりも、女の方が大切だ」
「なにっ？」
「あそこで、わたしの看護をもとめて、女が倒れて居る」
「黙れっ！　遁辞はきかんぞ！」
「心緒の乱れたわたしに勝って、おぬし、凱歌の満足が得られるのか」
眸子と眸子が、互いに対手のそれへ食い入って、数秒間、固着していた。
つと――右近が、刀を下げるのと、狂四郎が立ちあがるのが、同時だった。
「それがしの通達する日時と場所をたがえるな？」
「勿論のこと――。ご免……」
狂四郎は、美保代のところへ走った。
かかえおこしてみると、美保代のかたくまぶたをとざした顔は、内の灯と外の光を、片面ずつへうけて、異常なまでに凄艶な美しさであった。口を掩うていた片袖は、喀いた血になまなまと濡れていた。
「美保代！　死ぬな！」
はじめて、狂四郎の唇を割って、悲痛な本心が、ほとばしり出た。
美保代は、素直にひとつ、こっくりとうなずいてみせた。

笑う狂女

一

回向院境内に設けられた勧進相撲小屋から、まだ興奮さめやらぬ群集が、どっと吐き出された頃あい――。

常磐津文字若は、両袖を胸で重ねて、気塞いだ俯向き顔で、一ツ目之橋を渡ろうとしていた。威勢のいい打出しの櫓太鼓の音も、彼女の耳からは、遠かった。

文字若は、押上村からの帰途だったのである。

龍勝寺の離れで床に臥している美保代の、その病い特有の白磁のような沈んだ肌いろの、儚なげな寝顔が、文字若のまぶたのうらに、焼きついていた。

文字若は、最初に、一瞥した瞬間、

――ああ！　もしかすれば？

と、不吉な予感にうたれて、怯えた眼眸を、枕もとに腕を組んで坐っている狂四郎へ送ったものだった。

狂四郎は、無表情で、

「昨日、血を喀いた」
と、たったそれだけ告げたきり、あとは、文字若が訊ねるのを拒むように、口をかたくひきむすんで、身じろぎもしなかったのだ。
——あのまま二度と起きあがれないようなことがあったら……あたしゃ、神棚をたたきこわして、雪隠へ抛りすててやる！
胸のうちで呟いて、唇を噛んだ時、
「姐御——」
と、声がかかった。
振りかえると、お店者ていではあるが、頬の殺げた、色艶のわるい、目つきの鋭い男が、うす笑いをふくんで立っていた。
「吉つぁんじゃないか。ずいぶんひさしぶりだねえ」
「ご無沙汰した。しばらく、上方の方へ行って居ったんでね」
江戸の腕ききの掏摸を集めた黒元結連の中で、随一の手練をもつ、小春吉五郎であった。曾て、江戸っ子の意気地にまかせて、水野忠邦の異母弟長谷川主馬に挑戦し、白刃をかざした対手の腰から、見事に印籠をすりとって、狂四郎の舌を巻かせた男である。
「ひどう気ぶっせいな様子のようだが、どうかしましたかい？」
「生きていると、いろいろ心配事は起きらあね」
二人は、なんとなく肩をならべて、橋を渡り、御舟蔵のうしろのひろい往還をあるき出し

た。
吉五郎は、ちょっとためらっていたが、
「姐御。その後――眠の旦那は、お達者かね」
と、訊いた。
「ああ、先生ご自身は、不死身だけどね……」
その語尾がひくく沈むのを、吉五郎は、ききとがめた。
「なにか、あったのかね？」
文字若は、ちらと、吉五郎の真剣な表情を見かえしたとたん、ふっと、ひとつの企てを思いついて、
「吉つぁん、おまいさん、先生の子分になりたいって、いつかお云いだったね」
「うむ。なろうことなら――と思ったんだが、金八とちがってごらんの通りの陰気な男だから、考えなおして、こちらから遠慮したよ」
「たのみがあるんだよ、ひとつ――」
文字若は、左手の万川魚と記された掛行灯の店へ、吉五郎をさそった。
奥の台の隅に就くと、文字若は、
「先生の奥さまが、これなのさ」
と、胸をたたいてみせて、
「しかも、重いんだよ。たくさん血を喀いちまった」

「そいつは、いけねえな。……しかし、眠の旦那に奥さまがあったとは、初耳だ」

「そのことさ。夫婦であり乍ら、夫婦じゃないんだから、じれったいやね。このまま、美保代さまを死なせちゃ、まわりのあたしたちは、平気な面ではお天道さまの下をあるけないんだよ」

「…………」

吉五郎は、じっと、鋭く、文字若を瞶めている。

「美保代さまを、もう一度起きあがらせるのに効目があるのは薬じゃないんだ。じつは、あるところにしまってあるお内裏様の首なのさ」

それをきくと、吉五郎は、急に、顔色を動かした。しかし、無言で、文字若の次の言葉を待った。

「いつだったか、美保代さまは、こんなことを仰言っていたんだよ。……じぶんは、男雛の首を持ち、あの方は女雛の首をお持ちだった。このふたつの品が一緒になる時が、じぶんがあの方の妻となる時だ、といつとなく信ずるようになっていたのだけど、不運なことに、ふたつとも、二人の手をはなれてしまった。だから、もう、じぶんに幸せがおとずれる希望もうせてしまった。……そう仰言って、淋しそうに、俯向いておしまいになったんだよ。ねえ、吉つぁん、いじらしいと思わないかい。あたしゃ、その時の美保代さまのお顔を思い出すと、こう、きゅっと、胸がしめつけられるんだよ。……あたしゃね、せめて、男雛の首だけでも、とりかえして、美保代さまの手に、しっかりとにぎらせてあげたい。そうすりゃ、美保代さ

まは、きっと、もう一度生きてみようと――」
「わかった！　姐御――、その雛の首を、あっしにとりかえせというんだね」
「ああ――。おまいさんなら、もしかしたら、できやしないかと……」
「もしかしたら、は余計だろう」
吉五郎は、おちつきはらって、微笑してみせた。
「やりそこなったら、こっちの首を、反対に、むこう様にさしあげるまでだ。お内裏様のおわします場所をきこうか」
「相手は、大物だよ。渋谷の宮益町はずれに隠居している、元大目付の松平主水正ってお方だそうだよ」
瞬間、吉五郎は、驚愕の声をおし殺すひくい音を、のどの奥に鳴らした。文字若は、吉五郎の一変した異様な形相に、思わず息をのんだ。
吉五郎は、われにもあらずひどく狼狽してしまったのを自嘲するように、口もとを歪めると、黙って、すっと立ちあがった。
「大丈夫かい、吉つぁん？」
文字若は、吉五郎が対手が大物すぎるのでひるんだのだと思ったのである。
「あっしは、いったん引受けたことを、途中でなげ出すのはきらいな性分でね」

二

深夜――。

吉五郎は、楽水楼隠宅内の長廊下に、忍び入っていた。墨を流したような暗闇（くらやみ）であるが、その中で目の利（き）く男であった。そしてまた、こうした武家屋敷の構造にもくわしい知識をもち、大切な品が置かれる場所を容易に見当つけることの出来る経験に富んでいた。

――ここが書院だな。

吉五郎は、腰にさげたひと握り大の瓢（ひさご）の栓（せん）を抜くと、敷居へ水を流した。それから、襖（ふすま）を一分か二分きざみに、音もなくひらいた。

入って、襖をしめる。つぎに、かすかな音たてて燧石（ひうち）を打って、袂（たもと）からとり出した一本の線香に火を点（つ）けた。この小さな赤い火があれば、どんなこまかな品でも見つける自信があった。

ずうっと見わたした視線を、黒棚に、ぴたっと停（と）めると、まっすぐ近寄った。上段にのせられた大文箱へ、片手をのばして、すばやく紐（ひも）を解いて、蓋（ふた）をひらいた。ない。つぎに、下段の螺鈿（らでん）細工の小唐櫃（かろうど）中を、さがした。これにもない。

――はてな？

ぐるっと頭をまわした吉五郎は、反対側の壁ぎわに据（す）えられた御厨子（みずし）へ、闇に光る眸子（ひとみ）を投じた。そこには、唐代の古鏡とか埴輪（はにわ）土偶とか、砧（きぬた）形の花瓶（かびん）などが、飾られてあるだけで

ある。
書院床には、香炉ひとつが据えられ、床脇の棚には、食籠とか茶入とか壺とか汕滴とか香合とかがならべられてあり、雛の首を入れた函らしいものは、まったく見当らない。
――畜生！　この書院には置いてないんだな！
すると、在処は、主人の寝室と考えなければならなかった。
吉五郎は、しばし、書院のまん中で、調度のひとつと化したごとく、微動もせずに立っていたが、
――くそ、ままよ！　やっつけろ！
必死の度胸をきめると、すっと、奥へ通ずる襖へ寄って、瓢の水を敷居へ流した。
開けようと、指をかけた刹那、吉五郎は、襖のむこうにある人の気配をさとって、三尺余り跳び退った。
同時に、襖がさっと開かれ、どこからともなく差す仄かな明りを含んだ闇の中に、黒影が濃く浮き出た。その両手には、槍がかまえられていた。襖は、穂先で開けられたのである。
「しずかにすることだ！」
楽水楼老人の声音は、常とかわらぬ調子であったが、それはかえって対手の四肢を動けないものにする威圧となった。
「まず……灯をつけて、顔をみせてもらおうか」
ほんのわずかの睨み合いは、おわった。吉五郎は、わるびれずに、行灯に寄った。

ぽおっと生れた赤い灯が、ゆるやかに書院の中へ、明りをひろげた。
老人は、大きな影法師を畳に這わせて蹲った男を、じっと見据えていたが、急に、烈しい驚きの色を、面上に滲ませた。
「お前は、吉五郎ではないか！」
曾て、老人が、大目付の要職にあった時、十余年間も使っていた若党が、この男であった。文字通り寝食を忘れて主人のために尽すために生れて来たような、またと得難い忠僕だったのである。
「吉五郎、お前ともあろう者が、鼠賊にまでなりさがったか——」
「…………」
「その様子では、わしの屋敷と知って、忍び入ったな？」
「…………」
「金を盗むだけの目的か！」
吉五郎は、顔を擡げた。
「お殿様！　吉五郎は、塵っけ程の曲ったことをなさらずに一生正しくおすごしなさいましたお殿様が、お役御免におなりになり、猿江町のお屋敷をお引払い遊ばされるのを見て、つくづく世の中が莫迦らしくなり、とうとう、人の懐中を掠めるところまで堕ちてしまいましたが……、御高恩を蒙ったお方様の金をねらうまでには、性根は腐って居りませぬ。わたくしが参上仕りましたのは、お殿様が眠狂四郎の旦那からお取上げになりました雛の首をお

かえし願うためでございます」
「なに？」
吉五郎は、眉宇をひそめる老人を、まっすぐに見あげて、その理由を語った。
老人は、無言のままであった。吉五郎が、口をつぐんでからも、老人の沈黙はつづいた。
やがて、長い沈思を終えると、老人は槍を、壁にたてかけておいて、しずかな足どりで机に近寄った。
吉五郎は、老人が、机の上の極古渡の古金襴の巻物を、するするとひらくのを、固唾をのんで見まもった。その中には、書画のかわりに、細長い塗七宝の函が収めてあった。
老人は、それをとりあげたとたん、あまりの軽さに不審を湧かせて、蓋をあけてみて、
「むむっ」と呻いた。中は、空だったのである。
「お殿様！」
吉五郎が、不安に駆られて呼びかけると、老人は、じろりと見やって、
「吉五郎、お前は、忍び入る家をまちがえたようだ」
と、云ったのである。

三

小春吉五郎が、麻布六本木の荒れた旗本屋敷をおとずれたのは、つぎの日の、晴れわたった午すぎであった。唐桟の着物に同じ羽織、尻ばしょりでちくさの股引をみせ、短い刀を一

本だけ差したいでたちは、さすが、曾て若党を十余年間も勤めただけに、ぴったり板についていた。これは、大奥のゴサイという御年寄つきの小者風俗であった。

——まるで空屋敷だな。

荒れた玄関に入って、鋭く見わたした吉五郎は、猿のように皺だらけのしなび面の用人が出て来るや、何食わぬ態度で、膝をついて、

「吹上の御庭よりの使いにございます」

と、顔を伏せつつ文箱をさし出した。

用人は、胡散臭げな警戒の目つきで、

「御返辞は？」

「べつに、頂いて参れとは申しきかされて居りませぬ」

「御苦労であった」

用人が奥へ引込むと、吉五郎は、すばやく玄関を出て、麻裏草履をぬいで帯にはさむや、心得た身ごなしで、すすすっとすべるように、内塀沿いにまわって行った。

奥庭は、荒れ放題で、地面は、草ぼうぼうとむらがり、樹木は、思うさまの勢いで枝をのばしていたが、曾て、一木一石に丹精こめられたであろう風趣は、松のたたずまいや白い花をつけた山茶花や灯籠と孟宗竹の調和などに、偲ばれた。

尤も、吉五郎にとって、荒廃の方が身をひそめるには都合のよいことであり、生茂った雑草の中で小さな生物たちがしきりに、音をたててくれるのは、有難いというものであった。

光る目を、遠くまっすぐに、座敷へ送りつつ、そこへむかって、敏捷（びんしょう）に身を移して行った。用人から文箱を受けとっているのは、静香であった。二人の緊張した横顔が、吉五郎に、計略の成功は疑いないと自信づけさせた。

静香が、書状をひらいた時、吉五郎は、だいたんにも、縁側から三間とはなれぬ玉造りの矮鶏檜葉（ちゃぼひば）の陰に迫り寄っていた。

黙読し終えた静香の顔は、かたわらの障子の紙よりも白く、血の気を引いていた。

用人は、ただならぬ女主人の面持（おももち）を、不安げに見まもっていたが、問うべき内容ではないことなので、無言で頭を下げて、下って行った。

茅場（かやば）家は、御庭番の家である。すなわち、吹上奉行の組下で、若年寄の支配を受けてはいるが、隠密の命令は将軍自身から直接受ける形式となっているため、たとえ当主修理之介（しゅりのすけ）がすでに非業（ひごう）の最期（さいご）を遂げていることが歴然としていても、廃家とはならぬのである。妹の静香が、兄に代って隠密の役を引き継ぐ運命に置かれている。

吹上の御庭からの使い、ときけば、その覚悟を必要とした。書面には、そのことが記してあった。もとより、それが贋（にせ）ものであろうとは、静香に見破れる筈（はず）もない。なぜなら、楽水楼老人の手によって作られた、巧妙な、本ものそっくりの命令書だったからである。

老人は、書状を吉五郎に渡す時、云いふくめたのである。雛の首を盗んだ犯人は自分の孫娘にあたる茅場静香であること。盗んだ理由は、ただ眠狂四郎に渡したくない妬心（としん）より出たことであろうから、おそらく、ありふれた場所へ置いているに相違ない。この書状を読ませ

れば、あわてて、そのかくし場所をほかに変えようとするであろうから、そこを目撃して、奪い去れ、と。

書面には、吹上奉行の署名で、『西丸老中水野忠邦が切り落した将軍家拝領雛の首が、元大目付・松平主水正の手に渡った事実を探知し、一夜、庭番が侵入捜索したが、遂に尋ね当らず、先頃まで当隠宅に滞在していた其所許として、当然これが行方について知ることがあるに相違ない故、出頭尋問にこたえられたい。庭番のうちには、其所許に対しても多分の疑惑を抱く者もあり、早々申開きをするのが身の為である』と記してあったのである。

急に、静香が、はげしいものを全身にしめして立ちあがるや、吉五郎は、——八幡！と心で叫んだ。

静香は、書棚に寄って、十炷香箱を手にとった。中から紙包みをとり出すと、急しく、部屋を見まわした。そして、床の間の香炉の蓋をとってみたり、違い棚の下の茶道具へ手をのばして、茶入や砂缶や水指などにふれてみたりしたが、思いかえして、紙包みを、ふたつに分けた。

——いけねえ！　男雛と女雛をべつべつにしやがった。

静香は、あたまから簪を抜きとると、襖の引手を抉りとって、一個をその中へかくし、元通りに引手を嵌めた。それから、もう一個を、どこにかくそうか、とうろうろと迷っていたが、一瞬、びくっとなって、立ちすくんだ。

縁側に近づく跫音がしたのである。

吉五郎は、すでに、その人物が、鉤手の端にあらわれたとたん、全神経をそちらへ移していた。一瞥しただけで、ただ者でない気配が、その姿から感じられた。顔半面に、朱漆さながらの痣が刷かれていた。左馬右近であった。静香を、この屋敷へつれもどして、自身も平然と乗込んでいたのである。

右近は、静香を見据えると、
「なにを怯えて居る？」
「い、いえ……べつに——」
「それ程、おれがきらいか？」
「…………」
不意に、右近の猿臂がのびた。
「あっ——い、いけませぬ！」
必死になってこばむのを、ぐっと抱きすくめて、
「おれはおれの流儀で、そなたを女房にした。おれとともにくらすからには、おれの流儀にしたがえ！」
「で、でも……こ、こんな——」
「夫婦が契るのに、白昼であろうと、誰に遠慮がいるか」
「おゆるしを！」
静香がもがけばもがく程、右近の五体の中にひそむ野獣の血は、次第に熱して来るようで

あった。この男にとっては、人を斬った刹那の、骨や肉が刃を嚙む手ごたえとか、美しいものを蹂躙する瞬間の、そのしなやかな肢体の抵抗感とか――そうした、極度に原始的な刺激だけが、生甲斐となっているようであった。

突然――、右近は、静香をかかえあげると、異様な呻きを発して、奔馬のように縁側を走って、庭の芝生へ飛び出て行った。

――けだものめ！

吉五郎は、野獣の下におしひしがれて、死んだように動かぬ哀れな生贄の、枯芝に拡げられた燃えたつような緋色の下着と、ゆたかに肉盈ちた白蠟の脛から股への曲線を、ちらっと、葉ごしに見やってから、あわてて、顔をそむけ、名状しがたい興奮に居たたまれない焦躁をおぼえたが、次の瞬間、この興奮をおのれの目的に奔騰させて、座敷へむかって、躍りあがっていた。

襖の引手をむしりとって、雛首の包みを摑みとるや、飛鳥の影が掠めるに似た迅さで、再び庭の植込みの陰へ逃げ込もうとした。

だが、その時、すでに、右近は、静香の繊腰の上から跳ね起きて、かたわらになげすてた脇差をひろいとりざま、猛然と追い迫って来た。

矮鶏檜葉の掩うた蹲踞をへだてて、対峙するや、右近は、殺気凄じい眼光を吉五郎にあてて、口もとだけに、ぞっとするような冷笑を泛べた。

「貴様が、そこにひそんでいるのを気づいたから、わざわざ、あの芝生で房事を行って、愉

しませてやろうとしたのだぞ。色を解せぬ泥棒猫（どろぼうねこ）め！　その右手に、何を盗んだ？」

吉五郎は、こたえず、じりじりっと退った。

ぱっと身を躱（かわ）す吉五郎の敏捷に、間髪の呼吸を合わせて右近のからだが、矮鶏檜葉上を翔（か）けた。

「やあっ！」

気合と閃光（せんこう）をあびて、吉五郎の、雛首を握りしめた右拳（こぶし）から、ぱあっと鮮かな血飛沫（ちしぶき）が、噴き散った。

普通の者ならば、この一撃で、がくっと挫（くじ）けたに相違ない。右近自身も、そう信じて、ひと息ついた。

しかし、小春吉五郎は、ちがっていた。縦に裁割（たちわ）られた右拳を、ふところへ突き入れるや、その敏捷にすこしの衰えもみせずに、あっという間に、樹木のむこうへ走り去っていたのであった。

四

狂四郎は、境内のはしの、朽ちて軒の傾いた太子堂の縁に腰をおろして、日一日と冬枯れて来た景色を、茫然（ぼうぜん）と眺（なが）めやっていた。

色さめた雑草の中に、ぬっと一本、木犀（もくせい）の喬木（きょうぼく）がそびえ立って、黄色の小花をつけているのが、この蕭条（しょうじょう）たる灰色の眺めのうちの、唯一（ゆいいつ）の彩（いろど）りであった。

　木犀や物音たえし坐禅堂

そんな句が、ふと、狂四郎の脳裡を掠めすぎた。

と——。

その喬木をまわって、ひょっこり、一人の男が姿をみせて、こちらへ近づいて来た。

どこかで見たような、と思ったが、すぐに記憶を甦らせるには、数多く会っていない顔だった。

男は、笑って、腰をかがめると、

「お久しゅうございます。お忘れかと存じます。小春吉五郎でございます」

右手をふところに入れたままで、挨拶した。

「おお——」

狂四郎は、微笑して、頷いた。

「手をどうした？」

「へえ。なに——ちょっとした、へまで、少々怪我をいたしまして。大したことじゃございません」

左手で、袂をさぐって、小さな紙包みをとり出した吉五郎は、

「とんださしでがましいことをいたしまして……お詫び申上げなければなりません。おゆるし下さいまし」

　と云って、さし出した。

狂四郎は、不審げにひらいてみて、

「これは！」

とおどろいたことだった。楽水楼老人に預けた女雛の首である。どうしたのか額から唇（くちびる）へかけてまっぷたつに割られている。

鋭利な刃物の、鮮かな両断ぶりである。白い面（おもて）からは、きれいにぬぐいとってあるが、髪先に、まだ血がこびりついている。

狂四郎は、吉五郎へ、眸子（ひとみ）を向けて、

「これを握ったその手を斬られたのか？」

と、指摘した。

「へい。面目次第もござんせん」

「老人にやられたのか？」

「いや、そうじゃござんせん」

吉五郎が、手短かに語るいきさつをきいた狂四郎は、心の内を全くのぞかせぬ無表情で、ただ、急に、目の色だけを冴（さ）えたものにすると、

「ご苦労だった。あとしまつは、わたしがやろう」

と云って、腰をあげていた。

離れへむかって歩き出した狂四郎へ、吉五郎は、

「旦那！」

と呼びかけたものの、あとの言葉がつづけられなかった。妙に、のどがつまったのである。

いっさいの感情をひそめて、この明るい枯景色にふさわしい静けさを湛(たた)えた、すっきりした立姿は、吉五郎にとって、ふるいつきたい程たまらない魅力だったのである。男が男に惚(ほ)れる——それだった。

狂四郎が、離れにもどってみると、美保代はひっそりとまぶたをとじていた。

気配を消して、床の間から刀をとりあげた時、しかし、美保代は、やつれて大きくなった潤(うる)みをおびた双眸(そうぼう)をぱっちりとひらいていた。

「ちょっと、出て来る」

「はい——」

美保代は、そっと身を起した。

狂四郎は、とめてもきかぬ美保代なので、起きるままにさせておいて、縁側へ出た。

「あの……旦那さま」

ふりかえった狂四郎は、美保代が、胸もとから、足袋をとり出すのを見た。

「おはきかえ下さいませ」

病み伏しつつも、妻としての心づかいであった。おそらく、狂四郎の目をぬすんで、こっそりよごれを洗い、乳房に抱いてかわかしたのであろう。

当時、江戸っ子は、たとえ着物につぎがあたって居ろうとも、足袋だけは、毎日はきかえたのである。

狂四郎は、黙って、それを受取って、はきかえた。柔肌のぬくもりが、身にも心にもしみわたった。

そのまま、ふりかえらず、まっすぐ前方を瞶（みつ）めて、狂四郎は、出て行った。

五

それから一刻（とき）のちのこと、茅場家の脇門の潜戸（くぐりど）を入った狂四郎は玄関を避けて、奥庭へむかって、ふみ込んで行った。

忍び入るのではなかった。堂々と、枯落葉をふんで、奥座敷へむかって、足をはこんだのである。

あおつらえむきだったのは、左馬右近がひとり、そこで朱塗りの角樽（つのだる）をかたむけていたことである。

狂四郎が、ゆっくりと庭さきへ近づくまで、どちらの口もかたくひきむすばれていて、ただ、眼光だけを、はげしく対手に食い入らせていた。

狂四郎が、ぴたりと立ちどまると、右近は、のそりと立ちあがって、奥へ入り、刀を携（さ）げて戻って来た。

「再試合の儀、お手前の御指定を待ちきれず、こちらからまかり出た」

まず、狂四郎が、静かな口調で、云った。

「殊勝だぞ！　先手をうたれたのは、こちらの不覚だった」

「いや、そうではない。わたしは、お手前のような稀代の剣客とたたかって、剣理の妙を悟ろうとする心掛けは、毛頭微塵もない。目的は、ほかにある、と申上げておく」
「なんの目的だ？」
「それは、わたしが、お手前を仆した後での話だから、お手前には無関係ということだ」
「よし！　きかぬ。みごと、おれが仆せるか？」
「お手前の陰刀に対する聊かの工夫は、してある」
「よし！」
右近は、縁側上で、きらっと右手に太刀を抜きはなって、鞘を投げすてるや、左手にも脇差を抜き持った。
同時に、狂四郎は、無想正宗を鞘走らせて、地摺り下段にかまえていた。
右近は、狂四郎から、陰の構えに対するそなえがあるときかされるや、たちまち、絶対有利の地歩を占めることに心をひるがえして、二刀をもって対したのである。
しかも、その二刀の構えもまた、異常であった。
大小を、平行に延べて――切先を、狂四郎の顔面へむかって、つきつけたのである。それは、空間に、まったく水平の線を引いた。
狂四郎は、眼下に睥睨される危機は、むささび喜平太によって、すでに体験ずみである。
喜平太には、それに加えるに、宙を翔ける奇怪の戦法があった。
そのおそるべき危機をはずした狂四郎には、地の利不利を、殆ど問題とせぬ会得があった。

ただ、警戒しなければならぬのは、喜平太とちがって、右近が、その異常の構えの中に、端倪すべからざる変幻の秘術をひそめていることであった。

「…………」

「…………」

天地の間を一切無の寂寞にかえした両者は、依然たる地摺り下段と、二刀水平との対峙のまま、いくばくかの秒を刻んだ。

と——狂四郎の刀尖が、徐々に、円月を描かんとして、うごきはじめた。

それにつれて、右近の足が、すっと前へ出た。

間——一髪の刹那、右近の軀幹が、噴火口から刎ねた溶岩さながらに、冬空をつんざく大喝もろとも、眼下へむかって、躍り込んだ。

右近は、たしかに、この瞬間、太刀の鋒から、斬った感覚を得ていた。しかるに、右近が一颯した空間からは、すでに狂四郎の姿は消えていた。

右近が、斬りはらったのは、どこからか飛んで来た小石のような黒い塊りだったのである。

——おのれっ！

ぱっと、大地をふまえて、二刀をかざした右近は、狂四郎の姿をもとめて、くわっと、眼球をひき剝いた。その朱痣は、ぱくっと裂かれて、みるみる鮮血を噴いた。

この時、まるで右近の失敗をあざけるような、甲高い、異様な笑い声が、あがった。

数間かなたの孟宗竹の脇からであった。静香であった。

「左馬右近――、今日は、おぬしが、女を看護する番だ」

おちつきはらった声が、縁側上から、なげられた。

右近は、あふれる血汐をおさえるのも忘れ、狂った静香を、黯然と見やった。

狂四郎は、縁側を降りると、苔むした置石上に落ちた品をひろいあげた。まっぷたつに面を割られた男雛の首であった。静香が投げて、右近が切ったのである。

それを袂に入れて、すたすたと歩き出した狂四郎を追って、静香の狂った笑い声が、いつまでもつづいた。

刺青（ほりもの）往生

一

冬空がのこりなく晴れた仲冬——大黒天のある寺院に善男善女が蝟集（いしゅう）する初子（はつね）の日の午後、眠狂四郎は、大久保村の久右衛門坂という淋（さび）しい往還を歩いていた。

　とある小路（こうじ）から出て来た目白取りの鳥黐竿（とりもちざお）をかついだ少禄（しょうろく）旗本のせがれらしい少年を呼びとめて、雛屋杜園（ひなやとえん）さんの家を知らぬか、と尋ね、むこうの西向天神の裏だ、ときかされて、そちらへ足を向けた。

　その家は、閑静な櫟林（くぬぎばやし）の中に在った。

　冬陽（ふゆび）が、葉をふるった梢（こずえ）から、あかい光沢をもったまだら模様を織り込む小径（こみち）をあゆむこと二十間あまり、杉皮葺（すぎかわぶ）きの入母屋（いりもや）の屋根が、ひっそりと、片側へ日光をあびて、わだかまっていた。

　戸口には、古びた魚柝（ぎょたく）がさげてあった。

　これをたたいて案内を乞（こ）うのか、と狂四郎が、まよっていると、左手の袖垣（そでがき）の陰から、ひょっこりあらわれたのは、くくり袴（ばかま）にけものの皮の袖無しを羽織った、まだ三十半ばの男であ

った。
「雛屋杜園さんは、御在宅であろうか？」
「てまえでございますが――」
狂四郎は、老人だとばかり思い込んでいたので、相手の若さにちょっと呆気(あっけ)にとられた。
雛屋杜園といえば、江戸はもとより京大阪まで名のひびいた人形師であった。たとえ江戸城大奥あるいは権勢を誇る幕閣の大名から依頼されても、二年は平気で待たせるといわれていた。御所人形と雛人形を得意としたが、時に気が向いて作る浮世人形は、富有の町人の間に、百両以上の高値を呼んでいた。狂四郎が、六十以上の老工を想像していたのも無理ではなかった。
しかし、促されて、後にしたがって庭へまわりつつ、狂四郎は、――成程、噂(うわさ)通りの人物らしい、と思った。その挙措が、いかにも気品があり、清閑の高人というにふさわしかったのである。
狂四郎の脳裡(のうり)を『……柴門半ば掩(おお)うて茅廬(ぼうろ)を閉し、中に高人ありて臥(ふ)して起(た)たず……戸を叩(たた)いて蒼猿(そうえん)時に菓を献じ、門を守って老鶴(ろうかく)夜経を聴く、嚢裏(のうり)の名琴古錦を蔵し、壁間の宝剣松文を映ず、廬中先生独り幽雅……』そんな文句が掠(かす)めた。
みちびかれた書院は、名工のすまいにふさわしい清雅なよそおいが凝らされてあった。
床には、紺紙金泥(きんでい)の阿弥陀経切(あみだきょうぎれ)が掛けてある。もとより、名のある古筆切(こひつぎれ)に相違ない。その下には、一尺あまりの九面観音像が、半眼をひらいて立っていた。十五畳の間には、くす

んだ鉄色に白鷺の散った毯がしきつめられてある。片隅に無造作に置かれてある古九谷焼壺や埴輪馬や琵琶など、いずれも、通人が垂涎の品に相違ない。
「てまえに、何かおたずねになりたいと仰せられましたが……」
杜園は、茶をすすめてから、まっすぐに、じっと狂四郎を瞶めた。澄んだ美しい眸子だった。
狂四郎は、懐中から、小さな紙包みをとり出して、開くと、
「これを作ったのは、もしや、あなたではないか？」
と、問うた。
瞬間、杜園の表情が大きな変化をみせた。そして、その唇をかすかにわななかせて、「お、これは……」と洩らしたひとことが、こたえとなった。
狂四郎がしめしたのは、お小直衣雛の首ふたつであった。どちらも、いたましくも、顔を縦に真二つに截ち割られている――。
杜園は、顫える両手に、それをのせて、目を近寄せた。
その異常なまでに激しい動揺をみせた形相を、見据えて、
――名工という者は、斯くまでに、おのれの作品に、愛情を罩めているものか。
と、狂四郎はなかばあきれつつ、
「正直に申上げておこう。そのように無慚な冒瀆を犯したのは、このわたしです。本意でなかったことは、お断りするまでもない。……おゆるしねがいたい」

と、頭を下げた。

杜園は、狂四郎の詫(わ)びも耳に入らぬがごとく、なお、それからしばし、変りはてた自分の作品を、食い入るように凝視していたが、ふっとわれにかえって、侘(わび)しげな微笑を滲(にじ)ませると、

「こうなってしまいましたものを……今更、いたしかたがございませぬ」

「いや――わたしは、ただ謝罪に参ったのではない。これと同じものを、作って頂けないだろうか、とおねがいにあがったのです」

「それは、出来ませぬ」

急に、杜園は、厳しく顔をひきしめて、きっぱりと拒絶した。

「無理を承知でうかがったのだ。あなたの人がらも製作ぶりも、ほかからとくときかされた上で、たっておねがいする決心をしたのです。……わたしは一介の無風流な素浪人にすぎぬ。復元したものを、正しく賞翫(しょうがん)する眼力もないし、名品にふさわしい高貴の場所に据えようとするのでもない。目的は、ほかにあるのです。この雛の傑作たるを惜しんでいるわけでないことはいつわらぬ。ただ、わたしは、これとそっくりのものがあれば、一人の女のいのちがすくえるのではないか、と思っているのです」

それから、狂四郎は、その理由について――病み伏した美保代の必死の信仰について語った。

黙然として、俯向(うつむ)いて耳をすましていた杜園は、狂四郎が口をつぐんでからも、長い間、

じっと沈思していたが、ようやく、擡(もた)げた顔には、やはり、心を枉(ま)げ得ぬ色を泛(うか)べていた。

「眠さま。僭越(せんえつ)ではございますが、貴方様(あなた)は、人の心を魅入らせるふしぎなお人柄(ひとがら)をお持ちでございます。もし、この雛が、別のものでございましたなら、てまえは、すぐにも明日からでもおつくりいたしましょう。お代金も頂戴(ちょうだい)はいたしませぬ。……御運がわるうございました。この雛だけは、復元が叶(かな)いませぬ。てまえ一人の力で作りあげたものではないからでございます」

そう云(い)ってから、杜園は、おもむろに、胸もとをひろげると、襦袢(じゅばん)もろとも、もろ肌(はだ)脱ぎになって、狂四郎に背中を向けたのである。

狂四郎は、思わず、息をのんだ。

その背には、色鮮やかに、女雛の刺青(いれずみ)が浮いていたのである。ふっくらとまるい顔面の中に、秀麗な半月形の眉目(びもく)、豊かな大きな耳朶(じだ)、仄(ほの)かな笑みを湛(たた)えた口もとが、品位に満ちた均等を整えて、観(み)る人を恍惚(こうこつ)の境地に誘い入れずにはおかなかった。高雅の趣き、幽玄の美は、まさしく、畳の上に置かれている女雛の貌(かお)と同じだったのである。頭に、瑶珞(ようらく)のついた天冠を戴(いただ)いていることも、水引手と称する朱線による結髪もまったく同じである。ちがっているのは、刺青の方が、数倍も大きいということだけであった。

「眠さま。ごらんの通り、その女雛は、この刺青をあわせ鏡に映しつつ、てまえが写しとったものでございます。男雛の方は……それについてのお話を、これから申しあげますれば、何卒(なにとぞ)おききとり下さいまし」

杜園は、肩を着物に入れると、端然とむきなおったのであった。

二

もう十五年前のことになります。

播磨（はりま）国赤穂（あこう）郡新浜——と申しますと、貞享元禄（じょうきょうげんろく）に、浅野さまがお開きになった塩干潟（ひがた）のあるところでございます——から父親の亡（な）くなった早飛脚の報（しら）せを受けとりましたてまえは、いくども迷った挙句、しぶしぶ長旅に出かけたことでございました。ちょうど、炎暑の盛りの、山王さまの本祭の日で、神輿（みこし）行列を横目に眺（なが）め乍（なが）ら、江戸を発（た）ったのでございました。

まことに、一生のうち、こんな気重な長旅は、またとございませんでした。と申しますのも、てまえは、物心ついて以来、父親から、ただの一度も、当然一人息子が享（う）けてよい可愛（かわい）がられかたをしたおぼえがなかったのでございます。てまえの記憶にある父親は、十四歳のてまえを、無理矢理に、裸にして、おさえつけて、細針を束ねた簓（ささら）で、背中に、墨や朱を刺した——あの言語に絶した苦痛を与えた男という印象しかなかったのでございます。

左様、てまえの背中の女雛は、父親によって、ほりつけられたのでございます。てまえの父親は、刺青師（ほりものし）でございました。それも、まことにしがない刺青師で、もともと、伝馬町（てんまちょう）の牢屋（ろうや）同心でございまして、囚人の入墨御仕置をやっているうちに、刺青に興味をおぼえて、それを本職にした男でございました。

ただ、かなりの腕前を持っていたことは、のちに、てまえが、父親のほったものを眺めて、

――これは！　とみとめずにはいられなかったことでございました。父親は、多くの文様は、ようこなさず、殆ど女にかぎられていて、清姫とか玉取姫とか滝夜叉とか、あるいは妲己のお百とか、かさねといった毒婦などを、ほったらしゅうございました。時には、蟇と蛇と蛞蝓の三すくみもほったとききましたが、まず、女の執念といったものをあらわすのはたくみであったと存じます。

それはともかく、ひどい酒飲みで、しかも酒乱ときて居りましたので、てまえの家は、文字通り、赤貧洗うがごとしでございました。貧困への憎しみが、同時に、父親に対する憤怒となりましたのは、てまえとしては、やむを得ぬことでございました。

父親が、家出をしたのは、てまえが、十六の時でございましたが、それから、一年後には、母親が、生きることに精も根も尽きはてて、てまえの留守中、縊れてしまいました。てまえは、母親を殺したのは、父親だと、自分にかたく云いきかせたものでございました。

斯様な事情でございましたから、てまえが、父親の骨をひろいに参ることに、気が滅入ったのは、無理もございますまい。

父が住んでいたという岬は――胸突きの峠をふたつも越えて、さらに、一里も、青田のまん中をてくてくと辿らなければなりませんでした。

白い、まったく白い道は、まっすぐに、どこまでつづくかと思われました。

むし暑くひろがった青空の下で、左右に迫った山も、狭い水田も、散在する百姓家も、目に映るものはことごとく、息をひそめたように、ひっそりとして居りました。ただ、生きも

のの気配と申せば、降りしきるようなあぶらぜみのなき声が、この暑さを愈々堪えがたいものにしていることと、白い道をちろちろと横切るひとにぎり程の赤い蟹が、てまえにむかって、双の爪をふりかざしてみせたことでございました。

風はまったく凪いで、ところどころに立っている葉柳や松や杉が、微動もしない影を地に落して居りました。

半刻、あるきつづけて、てまえは、海を見出しました。

湾の入江に出たてまえは、ふと、山上の湖畔に佇んでいるような錯覚にとらわれそうでございました。夏霞のたなびいた山が、急勾配で海面へすべり落ち、砂地のない狭い湾内に、椀をふせたような小島をふたつみつ浮べて、さざ波ひとつたてず、鏡のようなという形容がそのままあてはまる青々とした眺めだったのでございます。

てまえは、海藻のうちよせた干潟に、ちょっと足をふみ入れてみました。小蟹や寄生虫が、ちょろちょろとうごきまわっているのに目を落した時、ふと、このさびれた湖畔のような海辺で往生した父親に、かすかな同情をおぼえたものでございました。

とにもかくにも、父親は、江戸っ子でございました。家に一文もなくても、身の縕袍を質屋にたたき込んで一本二分の初鰹を味わわなければ、恥とした放埒な男でございました。まして、その職が、競いだて衆を相手とした刺青師であってみれば、よくもまあ、こんな、一刻眺めているだけで気が遠くなるようなものさびしい辺鄙の海岸で、五年も、じっとくらしていたものだ、と首をひねらないではいられなかったのでございます。

あ——てまえは、まだ、父親が、なぜ、家出をしたのか、そのわけを申上げませんでした。

父親は、吉原江戸町二丁目の大籬『紫屋』の、十三歳になる禿をかどわかして、行方をくらましたのでございました。

その禿は、いずれは、黒二つ星の呼出し花魁になろうと、うわさされていた眉目麗しい少女だった由でございますが、それにしても、たかが十三歳の子を、どうして、かどわかしたのか、誰しも、首をひねったことでございました。

てまえが、そのさびしい浜辺に立って、ややはっきり心にひびいたのは、父親が、その禿を、誰にも奪われまい、として、江戸から何百里も離れたこの土地をえらんだに相違ないという直感でございました。

その禿の生育したのが、このむこうの岬の家で、てまえを待っている筈でございました。

てまえを、ここまで来させたのは、それがどんな女か、という興味であったかも知れませぬ。

てまえは、いっぴきの蟹を蹴とばすと、つまさきのぼりの山道へむかって、足をはやめたのでございます。

三

ほどなく、ふかくきれこんだ入江の端へ出たてまえは、赤松の疎林の中に、小さな藁葺きの家を見出しました。それは、ここへ来る途中で、村人にきかされたことでございましたが、

近郷の山を独占している大庄屋が、息子に家督をゆずって、隠居したすまいだったのでございます。父親は、禿をつれて、その離れに居候していたわけでございます。
庭に入ってみて、思いのほか凝った、風雅なたたずまいにおどろかされました。
てまえの案内を乞う声に、すぐあらわれたのは、六十がらみの品のいい老婆でした。
老婆は、すぐに喜色を顔にのせて、
「おお……江戸の――、佐兵衛どのに生き写しじゃ。ようこそ、おいでんさった」
と、初対面の気づまりを与えぬ親身な歓迎をしてくれたものでございました。
御隠居の方は、去年、喜寿を迎えて大往生をとげられたとかで、老婆は、禿あがりの女と二人きりで、くらしているとのことでございました。
ふと――。
縁側に人の気配をおぼえてふり向きましたてまえは、思わず、はっと息をのみました。
まだ二十歳にならぬ女が、うそとしてそこに彳んで、てまえへ、じっと視線を落して居りましたが、その美しさは、たとえ様もないものでございました。てまえは、その姿に、揚羽蝶の美しさを、連想いたしました。心もちつりあがった切長の目は、比類のない妖艶さでございましたし、胸、胴、腰へかけてのしなやかな曲線は、男という男の心をとろけさせるに充分でございました。まとうたうすものを蝶の翅と看做したてまえは、同時に、その翅のかげにひそめた白い肌が、蠱惑の猛毒をもっているのを直感しなければなりませんでした。
それにしても、不審であったのは、

「さ、お津弥、おすわり」
　と、たしなめる老婆の声も、全く耳にとどかないもののごとく、女は、障子へ片手をかけて、またたきもせずに、てまえを瞶めて居りましたが、突然、「あ、あ、あっ……あっ、あ——」と奇声を発して、刀でもつきつけるようにてまえへ、人差指をさし出すや、くるっと身をひるがえして、走り去ったのでございました。
「唖でございますか？」
　てまえが、当惑の目を老婆に向けますと、
「可哀そうに、生れもつかぬ片端になってしもうて——」
　こたえにならぬこたえが呟かれたのでございました。吉原の禿であった時、唖であった筈はございませぬ。ここへ参ってから、そうなったに相違ないのでございました。
　てまえの方は、女が、こちらの顔を凝視しているうちに、ありありと激しい憎悪の色を泛べた意味を、考えなければならなかったのでございます。

四

　夜——そろそろ九つをまわった時刻でございましたろうか。
　てまえは、奥座敷で、青蚊帳の中に、しずかに仰臥いたして居りました。
　旅の疲れは、四肢を棒のように重くして居りましたが、目は冴えかえって、到底ねむれそうもございませんでした。

女の妖しい面差が、肢体が、瞳孔の中に食い入ってしまって、はらってもはらっても、すぐ泛びあがって来るのでございました。

「えい、くそっ！」

がばとはね起きたてまえは、雨戸を一枚くって、庭へとび出し、どんどん坂を下って、渚に立つや、寝衣をかなぐりすてました。

月のない夜で、彼方の山も小島も、蒼茫たる黒一色にかくれ、山頂へ落ちた天の川だけが、白く淡く光って居りました。

墨を流したような黒いなめらかな水をきって、泳ぎはじめたてまえは、しめつけるようなつめたさに、なんともいえぬ快感をおぼえたのでございました。

二十歳のてまえは、滅茶滅茶に泳ぎまわって、全身をへとへとに疲れはてさせたい衝動に駆られていたのでございます。てまえは、まだ、女の肌を知らなかったのでございますから――。

……とろりとした油のような水面を、ぬき手をきって、むかいの小島へ泳ぎつくと、さすがに砂地へあがるのも億劫なくらい、ぐったりとなって、小岩にすがって、からだを水中に漂わせて居りました。

この時、なにげなく、彼方の崖の上を見やって、そこに朦朧と浮きあがった人影を発見いたしました。

――あの女だな！

てまえは、急に、声をはりあげて、女に叫びかけたくなりました。それを、抑えて、見まもっているうちに、父親があの女を、かどわかし、啞にして、この海辺につれて来て、日々に妖しい美しさを増してゆくさまを眺めくらした気持が、なんとなくわかって来るような気がいたしました。

てまえが、こちらの渚へ泳ぎかえると、もう、崖の上の影は消えて居りました。

蚊帳の中へもどって、どたりと倒れて、ふうっとひとつ大きく息をはいたおりでございました。

ふいに、ひそやかな微風が、蚊帳をそよがせたかとおもうと、跫音（あしおと）もなく、ひらと入って来たのが何者であったか……申上げるまでもございますまい。

てまえが、蚊帳の中へすうっと入って来る女をこばまなかったのは、立膝（たてひざ）になり、首をかしげて、蚊帳の裾（すそ）をかかげるすがたの、歌麿宛然（うたまろさながら）の優美な、なまめかしさに茫然と見惚（みと）れたからでございました。

また、湯もじのくれないが透けてみえるうすもののなやましいあでやかさは、てまえの全身を石のようにこわばらせるに、この上の強烈な刺激はなかったと申せます。

露（あら）わな女体の香にむせたてまえは、起きあがることもならず、咎（とが）める言葉も出なかったのでございます。

次の瞬間、女は、翅のように両手をひろげて、てまえの上へ掩（おお）いかぶさってまいりました。

女が、まず、ねらったのは、てまえの唇でございました。はっと顔をそむけて、両手で、

女を押しかえそうといたしましたが、その両手が偶然にも、むっちりと盛りあがった双(ふた)つの隆起をつかむあんばいになり、その柔かな感触が、五官にひびきわたった戦慄(せんりつ)で、てまえは、あやうく、呻(うめ)きをたてるところでございました。

　からみあった下肢の弾力に富んだ重さや、ねっとりと汗ばんだ柔肌の熱さや、むせかえるような匂(にお)いや、めくれ縺(もつ)れる緋色(ひいろ)の湯もじのひらめきや――どれひとつとして、女を知らぬ二十歳の若者の抵抗力を狂おしい欲情の暴力へすりかえようと、あおりたてそそりたてる魔力でないものはなかったのでございます。わずかに、てまえが、この魔力に堪えることのできましたのは、女の眸子(ひとみ)に煌(きらめ)く凄(すさま)じい憎悪の光を感じとっていたからでございましたろう。

　しかし、その意識さえも、とある刹那(せつな)、視野のすみへ、大きく曲げひろげた白い太股(ふともも)のつけ根のあたりが、ちらっと映るや、くらくらと目晦(めくら)んで、膨れた血汐(ちしお)は、一挙に、全身の毛穴から噴騰(ふんとう)しそうになったのでございました。

　こちらの変化を、女は、鋭い神経につたわせたか、いちだんと、もの狂おしく、むしゃぶりついて来て、

「ああ……あっ、あっ、あっ、あっ、――」

　と奇声の中に、あらんかぎりのみだらな媚(こび)をあふらせました。

　――もうだめだ！　堕(お)ちてしまえ！

　われとわが心に絶叫したてまえは、それこそけだもののような勢いで、女を抱きしめようといたしました。

その瞬間でございました。
てまえは、頭のてっぺんから、つまさきまで、ものすごい稲妻がつらぬくような、激痛を、股間におぼえて、
「あっ！　く、くそっ！」
と、吼えて、無我夢中で、女を突きとばしました。女の右手に握りしめられたのが、刺青用の篦と知ったてまえは、女の眸子をみなぎらせていた烈しい光が、やはり復讐のためであったとさとったのでございます。
女は、じぶんをかどわかし、唖にし、もてあそぶだけもてあそんで、ぽっくり死んでしまった人間に生き写しの若い男が出現したのを、驚愕するとともに、烈しく憎悪したのでございましたろうか。
その時は、てまえは、そうとしか受けとれなかったのでございます。
――いや、ちがう！　そうではなかったのだ！　と気がついたのは、ずっと、後日になってからでございました。
女は、てまえの父親から、おそるべき閨房の秘戯をしこまれていたに相違ないのでございます。父親は、そういう忌わしい偏執狂だった、と今は信じられまする。父親は、奇怪な快楽に耽るために、あの僻地に隠れ栖んだということは、もはや疑いを容れませぬ。素直な可憐な、禿だった女が、父親の忌わしい性情に感化されて、いつの間にか、まがまがしい淫心の持主になってしまっていたのだ、と断言出来るのでございます。

女は父親に逝(ゆ)かれて以来、その秘戯に飢えていたのではございますまいか。
ただ、その時は、てまえは、女が復讐の一念を燃やしているのだとばかり思いこみ、
「おのれがっ――」
と、逆上して、道中差をつかみとりざま、ひき抜いたのでございました。
ひっと悲鳴をあげて逃げようとする女の空解けかかったちりめんの扱帯(しごき)の端を、ひっ摑(つか)んで、力まかせに、ぐんと引くと、しなやかなからだが、くるりと一廻転(かいてん)したはずみにその肩から、うすものが、すべり落ち――むき出されたそのせなかへひと目あてた刹那、てまえの息は、どきっと、とまってしまいました。
そのふっくらとした、なめらかな柔肌に、ぽっと華やかに浮き彫りされているのは、男雛の刺青(ほりもの)だったのでございます。
てまえが、どうして、その男雛へむかって、抜身をふりおろしたか――いまもって、そのじぶんの残虐(ざんぎゃく)なふるまいが解(げ)しかねます。
われにかえった時、男雛の刺青を、鮮血に染めて、女は、畳に俯伏して居りました。男雛の顔は、縦にまっぷたつに割られていたのでございます。左様、この男雛の首と、まったく同様に――。
そこまで語って、杜園は、かなり長い間、おのれの罪に堪えがたそうに深くうなだれていたが、やがて、ひくい声色で、

「てまえには……それ以来、男雛のすがたが、夢にも出て参るし、白昼うつつでも、時と処(ところ)をえらばずに、ふい、ふい、と泛んで来たのでございます。その貌(かお)はもとより、金襴(きんらん)の袍(ほう)の雲竜(うんりゅう)紋までが、こまかく、はっきりと脳裡に焼きついて居りました。……で、とうとう、てまえは、一生ただ一度の懺悔(ざんげ)滅罪をねがって――作りあげたのが、この小直衣雛だったのでございます。まことにわれ乍ら、入魂の出来ばえでございました。また、男雛の貌は、女のせなかの刺青にすんぶんちがわず、女雛の貌は、てまえのせなかの刺青そのままを写し得た自信がございました。……公方(くぼう)様に献上しておけば、永久にのこるもの、と考えて、わが手もとから離しましたのが、因果と申すものでございました」

杜園が、ふたたび口をつぐむと、長い沈黙が来た。

そののちに、口をひらいたのは、狂四郎の方であった。

「よくわかりました。復元のおねがいは、いさぎよく取下げます」

杜園は、うなだれたままだった。

「失礼いたす」

狂四郎は、男雛女雛をそこに置いたまま、しずかに立ち上って、書院を出ようとしたとたん、声がかかった。

「お待ち下さいませ、眠さま、てまえ、もう一度、作ってみようかと存じます」

ふりかえった狂四郎の目に、杜園の必死な面色が映った。

「そりゃあ、止(よ)されたほうがいい」

狂四郎は、ふっと胸中を横切る不吉な予感で、かぶりをふった。
「いいえ。てまえ、思い直しました。復元いたしましょう。お一人のご婦人のいのちをすくえるものなら、人形師の冥利に尽きまする。作ってごらんに入れます！」

五

それから二十日後の黄昏どき——。
狂四郎は、ふたたび、雛屋杜園を、その清雅な庵に訪うた。約束の日であった。
ところが、玄関に立って、いくら、高声で案内を乞うても、さらに、応える音がなかった。
狂四郎の顔が、急に、ひきしまった。
廊下に、土足の跡を見たのである。
すっと上って、足早に、廊下を通りぬけて、杜園の仕事場へ、ふみ込んだ。
狂四郎の予感は、正しかった。
杜園が、そこに、背へ、一刀をあびて、俯伏していたのである。
「しまった！」
狂四郎の口から、断腸の一言がもれた。
——おれがたずねたために、あたら、不世出の名工を殺してしまった！
悔いが、波浪のように、身内をうねった。見わたしたところ、復元した筈のお小直衣雛のすがたは、どこにもない。

いた。
狂四郎には、斬口を一見しただけで、それがただ者の腕によるものでないことがわかっていた。
——公儀隠密かも知れぬ。おれが復元を依頼したことをかぎつけて、奪い去ったのだ。
悔いのあとに、憤りが衝きあげた。
一歩寄って、屍骸に跼みかかった狂四郎は、切り裂かれた着物を、そっとひらいてみた。
その背に彫られた女雛の顔は、縦にまっぷたつに截ち斬られていた。
呻きを嚙んで、狂四郎は、一瞬の凝視を終えると、立ちあがった。
櫟林の中を、ゆっくりと戻って行く狂四郎は、あまりにも偶然な、四つの雛の顔の、同じ無慚な最期について、心をとらわれていたが、ふと、意識を別へ移して、
——いや、待て！　復元した男雛女雛は、どこかにあるわけだ。おれがそれを捜しあてて、こちらのものに出来ない、とは誰にも云わさぬぞ！
と、おのれの心に、つよく云いきかせた。
——よし！　杜園の死を無駄にはせぬ！
櫟林をぬけて、蕭索とした暮色の田園の中を、ゆっくりと辿って行く狂四郎は、決意を肚裡におさめるや、もう他人の窺知をゆるさぬ虚無の表情にもどっていた。
孤影は、やがて、夕闇の中に溶けた。

運命図絵

一

「ようよう、ようっ……そこを通るは、小町じゃないか、寄って行きな。へへっ、色深草の、少将ばかり佳い男が呼んでるんだぜ」

湯屋の二階から、首をつき出して、通りすがりの町娘をからかっているのは、金八であった。

「あら、ほんに——獅子がしらみたいな佳い男」

「なにをっ、添うた仲とて背中を腹に、かえた火鉢の獅子がしら、って知らねえか。情がある ぞ、情が——お多福め」

「ふん、お多福でわるかったね。今日は歳の市でござんすようだ。お多福も市で器量を見立てられ、ってね、買手は降る程ございます。いいィだ」

「鼻べちゃめ、くそくらえ——」

顔をつるりとなでた金八は、部屋内へ視線をもどして、茶菓子をはこんでいる湯女に、

「紫の湯もじたあ、凝りゃがったな」

「あいよ。紫は江戸の花かや水道の水に、あだな浮名の色染めわけて、いずれがあやめ杜若――」
媚をふくんだながし目をうけて、金八は、大袈裟に、身顫いしてみせた。
「おうおう、おいらの死んだ妹にそっくりだ。ひでえ藪睨みで、淫乱で、嫁に行ったところが四ツ目屋だ」
「いやらしい！」
「のひと声は、月が啼いたかほととぎす――とくらあ」
金八は、立ちあがって、唄い乍ら、出鱈目に踊りはじめた。
この時――。
「金八！」
と、ひくいが鋭い声が、かかった。
連れは、眠狂四郎であった。
金八の道化ぶりなどまったく無関心に、高欄に凭りかかって、ぼんやりと往来を眺め下していたのだが、急に、表情をひきしまったものにしたのである。
「なんです、先生？」
さっと、金八が、そばへ寄って来た。これ程素早く呼吸の合う主従は、またとあるまい。
「あそこを行く男を尾けてくれ。行先をつきとめるのだ。気どられるな！」
「あの、痣で――合点！」

金八は、敏捷な身ごなしで、たちまち、二階座敷から消えた。

狂四郎が、指さしたのは、左馬右近であった。その異風の姿を一瞥するや、咄嗟の直感が走ったのである。

右近が、足を向けているのは、麻布とは反対の方角である。

じっと見送る狂四郎の視野の中に、やぞうをきめた金八の姿が入った。

ほろ酔い機嫌とみせかけて、いい気持そうに唄って行く。

羽織きせかけ
また先の首尾
胸でむすんだ別れ際
てなこと、してみる
あいてがほしい、か——

二

兵原草廬には、いま——未の下刻、異様な静寂がこめていた。

兵学・儒学を講ずる兵聖閣と、武術道場たる演武場のちょうど中間にある母屋の、隔ての襖をとり払った広い座敷の中央で、子龍平山行蔵が、七十年の熾んなりし生涯を、閉じようとしていたのである。

おどろくべきことは、子龍は、牀に臥さず、寂然として、脇息に倚りかかって、半眼をと

じているのであった。そして、その臨終に侍っているのは、ただ一人——戸田隼人であった。しかも、子龍と隼人との間には、一対の重い破風形の脚を張った衝立が、据えてあったのである。

隼人が、見まもっているのは、恩師の顔のかわりに衝立に描かれた、蕭索たる武蔵野に晒された髑髏の絵であった。

今日、早朝、隼人は子龍に呼ばれて、

「どうやらわしの生命も、この一日で尽きる模様だ。おぬし一人で、送ってくれい」

と、云われたのであった。

衝立をへだてて坐り、わしがいつ息をひきとるか、その瞬間を、見事につきとめよ、という命令であった。然して、つきとめた刹那、心魂こめた気合を発して、衝立をおどりこえて、この首を斬り落せ、と——。

子龍は他界の一瞬において愛弟子に、忠孝真貫流の極意を悟らせたかったのである。

門弟は七百名を越えてはいるが、まことの極意をさずけたいのは、隼人一人しかいなかったのである。

弟子として、これ以上の感激はない。しかしまた、これ以上のおそろしい命令はない。

かっと双眸を瞠いて、髑髏を凝視して、身じろぎもせずに、来るべき一瞬に全神経を磨ぎすましている隼人は、まさに、兵法者として言語に絶した試練の座に据えられているというべきだった。

もし、その一瞬をあやまれば、隼人は、いまだ呼吸のある恩師の生命を断つことになるか、あるいは、すでに息絶えた屍を辱しめることになるからである。

子龍の剣法をもってすれば、この試練を弟子に課することは、なんら奇矯としないのである。

その著「剣説」の開巻劈頭に、『それ剣術は、敵を殺伐すること也。その殺伐の念慮を、驀直端的に敵心へ透徹するを以て最要とすることぞ』と記した子龍である。

武技が華法に流れた文化爛熟の時世になって、子龍こそ、兵法の真意義を発揮して、狂瀾を既倒に回さんとした稀有の士だったのである。

家は幕府の伊賀衆で、祖父梅翁、父勝籌、ともに剣法練達のきこえがあった。子龍は、年少にして、兵学は斎藤三太夫に、真貫流剣法は山田茂兵衛に、大島流槍術を松下清九郎に、柔術居合を渋川伴五郎に、武衛流砲術を井上貫流左衛門に学んだ。

いずれも、鉄中の錚々というべき師ばかりである。就中、山田茂兵衛の如きは、神田佐久間町に大火事があった時、将軍が富士見櫓から見物しているのを見つけて、濠端へ走って、

「民衆の難儀を慰みに眺められるのは、桀紂の暴虐にござるぞ！」

と、大音声に叱咤した剛直漢であった。

これらの師の薫陶よろしきを得た子龍は、文武の蘊奥を極むるにあたって、行住坐臥、瞬息の間も、心を戦場に置いたのである。

厳寒であろうとも、布子一枚しか用いず、足袋を穿かず、年中、板の間に一枚の薄い蒲団

をかけただけで休み、食は炊（た）いた粟（あわ）を水でふやかしたものを口にしたことは、すでに以前に述べた。朝は暁五更にとび起きて、居合を抜くこと三百回、次に、長さ九尺の棒を四百回素（す）揮りしたという。操行はもとより厳格をきわめ、母以外は草廬門内に入るを許さなかった。還暦にあたって、白河楽翁（松平定信）から、絹布の寝具一重ねを贈られると、子龍は短刀で切り裂いて、太刀袋を作った。あらためて木綿の夜具がとどけられると、漸（ようや）くそれを用いた、という。

雄風一世に風靡（ふうび）せしめた奇傑が、大往生にあたって、愛弟子に、わが首を斬れ、と命じたのは、まさにその風格にふさわしい企てというべきであった。

隼人が、衝立のむこうの恩師の容態を窺（うかが）って、さらにそれから、どれだけの時刻が移ったろう。

隼人が、耳にしたのは、ただ一度の、かすかな痰（たん）を切る音だけであった。

障子はすべてあけはなたれ、うす曇りの冬空の下に、ぼうぼうと枯草の繁（しげ）る広い庭がひろがっている。

三

左馬右近が、不意に、兵原草廬へ姿をあらわしたのは、このおりであった。

二百名を越える門弟たちが、咳（しわぶ）きひとつたてず、木像のように居並んだ演武場内に、うごいているものといえば、正面上段の間に炷（た）かれる香の煙が、ゆらゆらとたち昇っているだけ

であった。

右近が、入口に立つと、幾人かが、ちらと見あげたが、すぐに、顔をそむけてしまった。

右近は、一人をつかまえて、

「伯父上は、まだ御臨終ではないのか？」

と訊ねた。

「もはや、ほどなく――」

そっけないこたえに、右近は、すっと廊下へ出ようとした。

「御居間へは、何人も入ることを禁じられて居りますぞ！」

鋭く咎める声に、ふりかえった右近は、

「何故だ！」

「戸田隼人殿お一人にて、お見送りされます」

「それは、どういう理由だ？」

右近は、この時、あらためて、場内の静寂の空気が、ただならぬものであるのを見てとった。

恩師の逝くのを悲しみ悼むだけではなく、なにかべつの異常な緊迫感がみなぎっているようだ。のみならず、門弟たちの表情ひとつひとつに、目をとめてみると、あきらかに、険しい不満の色を含んでいる。

右近は、つかつかと、中へふみ込むと、上座にいる兵原四天王の筆頭松村伊三郎の前に進

んで、ぴたっと坐った。
「おのおの方が、師の最期を見とることをゆるされぬとは、なんとしたことだ？　戸田隼人一人だけが侍っているわけをうかがいたい！」
「先生は、戸田隼人に、当流の極意をおさずけになり、兵原草廬をおゆずりになる」
「なに！　四天王の貴公たちを差置いてか——莫迦な！　貴公ら、それを黙って、承知したのか！」
「先生の御命令だ。但し——」
松村は、かすかな皮肉な微笑を口もとに刻んで、
「戸田隼人は、極意を悟ることは、千に一も、おぼつかぬ。われわれは、それをおそれて居る。われわれのうち、戸田に代って、あの席に就くように命じられたとしても、お受けする自信のある者は一人も居らぬ。……たとえ、お手前でも、だ」
「戸田は、何をせよと命じられたのだ？」
「先生御他界の瞬間をはずさず、おん首を打ち落すことだ」
これを聞くや、右近の双眼が、焔を噴くように、ぎらっと煌いた。
無言ですっくと立つ右近へ、松村は、何か云おうとしたが、思いかえして、口を緘んだ。
松村はじめ、すべての門弟は戸田隼人の命じられた所業には、内心反対だったのである。皆は、垂死の恩師の口を、一人一人湿す普通の臨終の場面を望んでいた。たがいに悼みをわかち合って、その最期を見取りたい気持が、強く脳裡に働いていたのである。

右近が、もはや、誰からもひきとめられなかったのは、そのためであった。右近は勘気を蒙（こうむ）った肉親である。臨終の座を擾（みだ）すには恰好（かっこう）の人物である。右近によって、戸田隼人の所業が中止させられるならば、と皆は考えたのであった。

長廊下を、まっすぐに進み入った右近は、しかし門弟たちの願望とは全く逆の企てを、肚（はら）にひそめていたのである。

衝立の前に端坐する戸田隼人へ、刃物のように冷たい眼光を送った右近は、

「戸田隼人殿に申入れる。その役目は、それがしが代る！」

と、云った。

隼人は、ほんのわずかに眉宇（びう）をひそめたきりで、微動もしなかった。

「貴公には、その役目は、荷が勝ちすぎる。第一、貴公は、忠孝真貫流の極意をさずかる資格はない！」

「去られい！」

隼人は、静寂を擾される焦躁（しょうそう）を、語気にあふらせた。

こうしたあいだにも、恩師の息が絶えるのではないかという不安で、隼人は、ただ一秒をも心気を逸（そ）らすわけにはいかなかったのである。

「去らぬぞ！」

右近は、傲然（ごうぜん）とはねかえすや、

「伯父上！」

衝立のむこうへ、大声で呼びかけた。

「それがしは、眠狂四郎との試合に見事勝利を得ましたぞ！」

そう云いはなつや、懐中より、小さな紙包みをとり出して、隼人の膝の前へぽんと投げた。

「戸田殿、見よ——眠狂四郎に勝った証拠だ！」

ひらいた紙から、ころりところがり出たのは、お小直衣雛の首ふたつであった。

雛屋杜園を斬って、復元の男雛女雛を奪ったのは、左馬右近だったのである。

右近は、これを、眠狂四郎との試合に勝った証拠品と偽って、垂死の伯父子龍から勘気を解いてもらい、あらためて、隼人や四天王と試合をして、ことごとく打ちすえ、兵原草盧の主たるべく——野望を抱いて、乗り込んで来たのであった。

「貴公は、眠に一敗した。それがしは、勝った。兵原草盧において坐すべき位置は、おのずから明らかだぞ！」

すると、この時——。

衝立のむこうから、かすかな喘鳴がもれて来た。

隼人は、はっと全神経をそれへ集中した。右近も、息をのんだ。

「は、はやと！」

「はっ！」

「うこんを、きれ！」

はっきりと、その一言が、隼人と右近の耳朶を打った。

刹那――右近の面相が一変した。赤痣の中をひとすじ走っている生々しい創痍が、ぶっつり裂けて血を噴くかとおもわれるくらい、筋肉という筋肉が、みにくくひき歪んだ。

四

「庭へ出い！」

と、叫んだのは、右近の方であった。

隼人は、右近を無視して、

「先生っ！」

と、呼びかけた。

「うこんを、きれ！」

ふたたび、その言葉が、ひびいた。

「庭へ出ろ、戸田隼人！」

右近からも、ふたたび、同じ言葉をあびせられた隼人は、ぴくりと眉宇を痙攣させると、左手に太刀を、ぐっと摑みしめた。

このおり、空がついに崩れて、急に音たかく、ぱらぱらとしぐれて来た。すがれた庭を、雨が、仄白くけむらせて、ひとしきり降りそそぎ、また中空へ遠のいて行ったあとに――濡れた地上に、二人の剣士は白刃を抜きあわせてそのまま、ひそと凝結していた。

それから、いまの時間にして、ものの二十分も過ぎたろうか。

すでにもう、魂を中有(ちゅうう)に去らせたかのごとく寂然として脇息に倚(よ)る子龍の、死相濃い灰色の面貌(めんぼう)が、ふっと、わずかにうごいた。

背後の花頭窓(かとうまど)の明障子(あかりしょうじ)が、ことりとはずれたのである。そして、そこから、すっと音もなく忍び入ったのは、眠狂四郎であった。

金八をして、左馬右近の後を尾けさせたのは、無駄(むだ)ではなかったのである。金八は、右近が兵原草廬に入るのを見とどけただけでは満足せず、裏庭へもぐり込み、左様、この母屋へ迫り寄って右近の高言を耳にし、

――なにをっ、くそっ、痣野郎め、先生に試合に勝ったとほざきゃがったな！　いまにみてやがれっ！

と、まっ赤になって宙をとんで、湯屋へ駆け戻って来たのである。

兵原草廬と湯屋とが、わずか数町しかはなれていなかったのは、さいわいであった。

狂四郎は、すすっと、子龍の前へまわってひざまずき、

「眠狂四郎、無断の推参――ご容赦下されたい」

と、詫(わ)びた。

子龍のどす黝(ぐろ)く隈取(くまど)られた目蓋(まぶた)が、わななきつつ、うっすらとひらかれた。しかしそれだけで、声はなかった。

狂四郎は、一礼して、衝立の外へ出た。

畳にころがった二個の雛首へ落した視線を、すぐに、庭へ移した狂四郎は、大股に縁側へあゆみ出た。

「その試合は、中止ねがおう。左馬右近を対手にするのは、てまえの役だ」

そう云いはなつや、狂四郎は、わざと右近の背後へ、跳んだ。

間髪を入れず、右近の五体は、一間を躍って蘇鉄の脇へ移っていた。

狂四郎は、すでに、右近と隼人の肉体的な変化の差をくらべて、

——このまま過ぎていれば、戸田隼人は斬られたろう。

と、見抜いていた。

隼人の蒼白と化した面上には、汗の粒がふいているのにひきかえて、右近の顔は愈々冷たく冴えたものになっていたのである。

狂四郎は、右近の蛇のような睥睨を冷笑で受けとめて、

「左馬右近——こういう歌をご存じか。急がずば、濡れざらましを旅人の、あとより晴るる野路のむら雨。……少々あせりすぎて、ひどく濡れておいでだ。ところが、どうやら、今になって霽れて来たらしい」

「来いっ！　眠っ！　今日こそは、かたをつけてやるっ！」

「落着け！　こっちは、おぬしに、休息を与えてやろうというのだ。……戸田殿、お手前の方は、師をお見取りなさるがいい。こちらの試合は、凩が吹いている程度に思って頂くことだ」

「かたじけない。おまかせいたす」
隼人は、礼をのべて、走って、もとの座へ就いた。
狂四郎は、右近の迅速の攻撃にそなえて、居合の構えをとりつつ、
「先刻、おぬしが、往来をいそいでいる様子を、湯屋の二階から、見下して、霊感があった。もしや、雛屋杜園を殺害したのは左馬右近ではないか、と——。八卦は見るものだな」
「うるせえっ！　眠狂四郎っ！　左馬右近が、兵原草廬七百名を代表して、討ち取ってやるぞっ！」
右近は、演武場に詰めた門弟たちにきこえよがしに、のど一杯に咆哮した。
「やがて死ぬ、気色は見えず蟬の声——か。いまは冬だぞ。季節はずれの声を出すな！」
云いざま、すっと一足引いて、狂四郎は、無想正宗を白く閃かせるや、ぴたっと地摺り下段にかまえた。
廊下に、どっと多勢の姿があふれた。
すると、隼人が、そのままの姿勢で、
「近寄ってはならぬ！　左馬右近を斬れとの先生のご命令だ！」
と、叱咤した。
隼人に叱咤されなくても、ふたすじの白刃の光は、人々のまなこを眩ませるに充分であった。
「…………」

人々は、遠く、足を釘づけにして、ここに、ふたつの峻厳の光景を、見まもらなければならなかった。

しらじらと広い座敷には、衝立のむこうの垂死の恩師を心眼に凝視して、身じろぎもせぬ戸田隼人の坐姿があった。

凄々たる庭には、二間の距離を置いて、壮絶の構えを固定させた左馬右近と眠狂四郎の真剣の対立があった。

そのいずれの静止も、おびただしい生命の量を消耗する一瞬一瞬の連鎖であった。

右近は、左半身の上段をとっていた。円月殺法に対する最も適切な陰の構えをすてたのは、おのれのあせりを知っていたからである。自らの刀身に自らのからだをかくす陰の構えに、ほんの毫末のあせりがあってはならぬ。敵の攻撃を待つ異常の忍耐を必要とするからであった。

いまは、右近は飢えた鷹の哮りをもって、狂四郎の脳天を襲う以外に術はなかった。

狂四郎の、無想正宗を根生えたように地に下げた姿勢は、それをささえとした金剛力士の立像のごとく、永久に不動をまもるかとみえた。

——おのれがっ！　眠め、まわせ円月を！

ひくひくっ、ひくひくっ、と顔面筋肉を絶え間なく痙攣させつつ、くわっとひき剝いた眼球から、殺気の光芒を射放った右近は、奔騰する闘志に、対手が同じ闘志をぶちつけて来る

のをねがった。

怒濤に怒濤がぶっつかれば、力と技は、すでにおのれ自身の思念を越えた働きをするものである。勝っても勝った意識はなく、負けても負けた無念を知らずにすむ。

右近は、それをのぞんだのである。

狂四郎が、想像すべくもない迅速の極意を内につつんで、水のように冷静であるのは、右近にとって堪えがたいことだった。

この前の二度の試合においては、狂四郎は、その目にも口にも、四肢にも、凄絶な殺気をこめていた。ところが、いまは、構えこそ同じではあるが、まったく殺気をひそめてしまっているのだ。

目は、右近へあてているにも拘らず、右近を見ていなかったのである。

これは、おそるべきことであった。

名状しがたい戦慄が、二度ばかり、つうっ、つうっと、右近の背すじを走り降りた。

「うぬっ！」

右近の左足がぐっと一歩出た。

とたんに、狂四郎の地摺りの白刃が、糸で引かれたごとく、すい、とうごいた。

右近の足が停まるや、狂四郎の一刀も、移った空間の位置へぴたりと止まった。

右近の左足が、さらにもう一歩、進むや、同時に、無想正宗の刀尖も、つぎの位置へまわった。

いわば、右近は、おのれが肉迫することによって、狂四郎に、円月を描かせるあんばいとなったのである。
「く、くそっ」
右近が、ツツと一間をすべるや、狂四郎もまた、すばやく、大きく、白い弧線を宙に引いて、刀尖を、頭上より高めに置いた。
「やあっ！」
天地をつんざいて、右近は、濡れ土を蹴(け)り、五体を、空中のものとした。
「むっ！」
ほんの短い、ひくい気合をほとばしらせて、狂四郎は、颯(さっ)と、円月剣を、右から左へ薙(な)いた。
そのきっ先から、一条の血の虹(にじ)が走って、枯草へ消え落ちた。
右近は、狂四郎の右方一間半の地点に、立った。
その両眼は、横へ一直線に切られて、永久にとじられていた。と——、そのかたくとじられたまぶたから、泡粒(あわつぶ)のように、ぷつりぷつりと血が噴いた。
右近のからだが、ぽきっと折れて、崩れ落ちた時であった。
座敷にあって——。
「ええいっ！」
戸田隼人が、満身からの気合を発して、衝立を躍り越えていた。

門弟たちが、なだれうって、座敷へ駆け込んでみると――。
茫然と自失した戸田隼人の足もとに首と胴を三尺余はなした平山子龍の屍骸が、横たわっていた。
狂四郎の方は、黙然として、両手で顔を掩うて蹲った右近を見下していた。
右近の口から呻き出た一語が、狂四郎の胸を、針のように刺したのである。
「静香！」
と、呼んだその一語が――。

五

黄昏――。
一梃の駕籠が、麻布六本木の茅場家の門前へ着いた。
「ここで、そのまま、待っていてもらおう」
と、命じたのは、つき添って来た狂四郎であった。
玄関に入って、案内を乞い、出て来た用人の、敵意あらわな顔へ、
「静香殿は、平常に復したときいたが、お目にかかりたい用件が出来た」
「お嬢さまは、どなたさまにもお会いになりませぬ」
「ここまで出て来て頂こう。お前さんがどうしても阻むなら、押通るまでだが、それは好まぬ。今日は、こちらが辞をひくくしてたのむ側に立って居る」

狂四郎は、それから、かなり長い時間を待たされた。
あらわれた静香の、伏せたおもては、まったく血の色がなかった。狂気は去っていたが、それはかえって、彼女自身にとってうらめしいことかも知れなかった。むごたらしくいためつけられた魂の疼きをありありと滲ませた姿は、正視に堪えなかった。もともと、強く抱けば砕けそうな、ほっそりとした、影の薄さが、会う者の印象にのこる娘だったのである。
狂四郎は、思わず逸らした視線をもどして、
「用向きだけ申上げる。門前の駕籠の中に、左馬右近が、盲目となって、坐って居る。わたしとの試合の結果だ」
「………………」
「そなたの兄を斬り、そなたの良人を盲目にしたわたしは、悪魔だろう。……そなたが、十字架に誓った信仰心にも限度があろうが、こうなったからには、わたしの謝罪など、なんの意味もなさぬ。ただ、わたしという人間を、一日も早く記憶から遠いものに、しりぞけてもらうことだ。……右近を、そなたにかえしに来たのは、残酷だったろうか？」
「………………」
「余計なお節介だというなら、駕籠をこのままひきかえさせて、どこかへ右近をすてることになるが……」
そう云って、狂四郎は、辛抱強く、返辞を待った。
静香が、顔をあげた。

「わたくしは、おん主でうすさまのおめぐみをうたがいませせぬ。ぜすきりすとさまがわたくしをお扶(たす)け下さいますでしょう」

「右近を世話すると申されるのだな？」

「はい――」

狂四郎は、一礼して、玄関を出ると、脇門を抜けて、駕籠舁(か)きに、駕籠をかつぎ入れるように云いのこして、すたすたと歩き出した。その表情も足どりも、常の狂四郎とかわりはなかったが、胸中をしめつけている苦しさは、曾(かつ)ておぼえたことのないくらい堪えがたいものだったのである。

ちょうど、それと同じ時刻、金八は、いちだんと陽気な唄声をたて乍ら、龍勝寺の境内へ走り込んでいた。

「会うた会うたよ男雛と女雛、とくらあ、桃に炒豆(いりまめ)、白酒進上(しんじょ)か、酔うておぼろの春の月、ってんだ。はだとはだとが重なり合うて、色をあらそう菱(ひし)の餅(もち)、たあどうだい、こん畜生――おうい、師匠っ！」

「なんだい、騒々しい。しずかにおしよ、ここをどこだと思っているんだい！」

離れの障子を開けて、看護に来ている文字若が、顔をのぞけた。

「へっ。これがしずかにしてられるかい。雛があるぞ、雛が――」

「えっ！　なんだって？」

「どうだ――みてくれ。賤(しず)が家も雲井にまごうおかんばせ、ってな。こうしてならべておがんだら、朝鮮人参(にんじん)を百本くらうよりも、験(げん)があらあい」

「ありがとうよ、金さん」

「ぶるぶるっ、よしゃあがれ。さんづけされる程まだ三悪道(さんあくどう)を積んじゃいねえや。――へい、美保代さま、お目出度(めでと)うございます」

金八が、ぺこりと頭を下げると、床の中から、美保代が、美しく微笑(ほほえ)んで、

「夢なら、どうぞ、さめませぬように――」

「冗談じゃありませんや」

文字若が、そっと、とりあげて、さし出した男雛女雛を、美保代は、かすかに顫(ふる)える両手に受けた。

ついに――わが手にもどって来たのだ。まこと、夢ならさめるな、と美保代は、もう一度祈った。

「そいで……先生は？」

文字若に訊(き)かれて、金八は、急に、当惑の色を泛(うか)べて、口をとがらした。当分、帰らぬと伝えてくれ、と云われていたのである。それが、狂四郎にできる、せめてもの静香へのつぐないだったのであろう。文字若が、敏感にそれを察して、ちらと美保代を見やった。

美保代は、しかし、てのひらにのせた臈(ろう)たけた品から、目をはなさずに、しずかに云ったことである。

「よろしいのです。どこへお行きになっても……きっと、いつかは、ここへ帰って来て下さいます」

切支丹坂

一

大晦日(おおみそか)をあと数日後にひかえて、街角に松市が立ち、鳶(とび)の者が門飾りを急ぎ、厄落(やくおと)しの遠声やら寒行僧の打ち鳴らす鉦(かね)の音やら、餅搗(もちつ)きの杵(きね)の音やらが、あわただしく寒空に入れまじってひびいている節季の一日——。

いまにも、ちらちらと白いものが、ひくく垂れこめた鉛色の雲間から舞い落ちそうな陰鬱(いんうつ)な午後、ここ小日向(こびなた)の、険しい勾配(こうばい)の庚申坂(こうしんざか)に、あちらにひと群(むれ)、こちらにひとかたまりと、老若男女が、うそ寒げに肩を寄せあって、間もなく、ここへ登って来るであろう或(あ)る一行を待っていた。

この庚申坂は、俗に切支丹坂といわれていた。この上に、切支丹屋敷があったからである。といっても、切支丹宗門の徒がおもてむき断絶して久しく、もう数十年間も、切支丹屋敷に繫囚(けいしゅう)の者はなかったので、いまは、御用屋敷とよばれていた。

江戸の人々にとって、切支丹などという存在は、遠いむかしの物語中のものに思えていたのである。もし、目の前に、切支丹門徒があらわれるとすれば、それは、倶(とも)に天を戴(いただ)かざる

忌わしい魔性のもののように思いなされるのであった。

ところが、実は——群集は、いま、その魔性の人間を、見物しようと待ちうけていたのである。

「来たっ！」

一人が、声をあげると、波のようにざわめきが、坂の下から上へ、ひろがった。しかし、すぐに、ひそとしずまりかえって、どの顔にも、好奇に満ちた目の光があった。日頃、陽気な駄じゃれをとばす江戸っ子たちも、伴天連というしろものに対しては、ぶるぶる七里けっぱいの非常な恐怖を抱いて、へたな軽口をとばして、わが身の禍いになることを極度に警戒したのである。当時にあっては、曾て信徒たりしものの子孫ならびに眷族は、切支丹類族と称して、近隣づきあいさえも避けたくらいであった。

やがて——。

六尺棒をかかえた、白衣帯刀の矢の者（穢多頭弾左衛門配下）に前後左右をまもられて、あばら骨の浮いた痩せ馬上の囚徒が、坂をのぼって来た。

人々は、固唾をのんで、見あげた眼眸を、それに食いつけた。

浅葱色の綿衣を着せられ、高手小手に縛られた囚徒は、栗色の頭髪と鳶色の瞳と高い鼻梁と白子の皮膚をもった異邦人であった。

頭上が、丸く剃ってあるのが、布教師であることを明白に証明している。

慶長、寛永の厳しい禁遏以後、大目付、作事奉行の宗門攻めは、絶え間なくつづけられて

来たにも拘らず、おそるべき信仰の強さをもって、あえてこの禁絶に挑む伴天連が、幾年かに一人、海の彼方から渡って来ていたのである。

正しい記録にも――宝永五年に、九州大隅の屋久島に、イタリア人ヨハン・バッチスタ・シドッチとよぶ布教師が、だいたんにも上陸したことが記してある。彼は、シチリアの生れで、一七〇三年の春、肉親に見送られて、東洋への布教をめざして、スペインのカディスを経て、カナリア群島でフランス船に乗りかえ、アフリカ南端をまわって、印度のポンディチエリに着き、さらにフィリピンへ渡り、五年後、スペイン船サンタ・トリニダット号で、屋久島の沖合まで運んでもらい、単身小舟をこいで、上陸して来たのである。

このような努力は、まこと尋常一様のものではなく、真の信仰の力がなくては叶うまい。シドッチは、ただちにとらえられて、江戸へ連行され、新井白石の訊問を受けた。白石が、この訊問によって、「西洋紀聞」「采覧異言」をものしたことは、有名である。

シドッチは、この小日向の切支丹屋敷で獄死したのであるが……それを最後として、今日まで、幕府が公然ととらえた伴天連は、一人も、ここにつながれたことはなかったのだが――。

この異邦人は、けだし、シドッチ以後、布教師であることが一瞥でわかる風態で堂々と日本へ乗り込んで来た唯一人に相違なかった。

その不屈の気魄は、昂然と擡げた面貌に静かに湛えられていた。

見知らぬ国の凩と好奇の目にさらされ乍ら、彼の眸子は、澄んで、曇天へはなたれていた。

神の子きりすとにむかって、使徒の一人がこうして、あなたと同じ苦難に遭うて居りますぞ、と訴えるように——。
と——。
なにげなく、その眸子を、ゆっくりと群集へ移した布教師は、急に、はっと、表情をこわばらせて、馬上から、からだをのり出すようにして、小さな叫びをもらした。
「もん・ふれーる！」
布教師の視線が、あてたのは、群集よりすこしはなれた土蔵壁の路地口に、一人うっそりとイんでいる眠狂四郎の蒼白い顔であった。
狂四郎は、その視線を、じっと受けとめて、微動もしなかった。
布教師は、行き過ぎても、ふしぎそうに、三度まで、ふりかえって、首をのばして、狂四郎を見やった。
人々が散り、狂四郎も、ふところ手で、歩き出した。
——なぜ、あいつは、おれの顔を見て、声をあげたのか？
その疑問にこたえて、狂四郎の脳裡を、おのれの陰惨な出生の秘密が掠めた。
ちょうど、このおり、急ぎ足に坂を上って来た者が、狂四郎の悽愴をきわめた形相に、眉根を寄せた。
「どうなさいました？」
小春吉五郎であった。

二

清水観音の森のいただきを彼方に眺める根津門前町の小料理屋の二階で、狂四郎は、思い出したように、さかずきを口にはこんでいた。

明日は、大晦日である。どうやら、正月は、このうすぎたない部屋で迎えることになるらしい。

天井は汚染だらけ、襖も障子も破れ、畳は赤っちゃけて、焼け痕がいたるところについている。正月用の彩りといえば、床の間に、鉢植えの室咲の梅が、根〆に福寿草を添えて、白一重の一輪を咲かせているきりである。

親爺が気心の置けぬ好人物なので、狂四郎は、なんとなく居据っているのであった。

街の騒音が、潮騒のようにつたわって来る。獅子舞いの遠音、厄払いの叫び声、節季候と乞食のさわがしく叩く割竹の音、そしてあわただしく往還を行き交う人の足音……。

――おれに、大晦日らしい大晦日が、正月らしい正月があったろうか？

母を喪った十四歳から、今日まで、狂四郎は、四季の移り変りや、祝祭の恒例とは、まったく無関係に生きて来たのである。

床柱に倚りかかって、目蓋をとじた狂四郎は、ふっと、またもや甦って来たふたつの鳶色の目に、かすかな苛立たしさをおぼえた。

それは、切支丹坂で、自分を凝視した異邦の伴天連のまなざしであった。どうしたのか、

そのまなざしが、強い印象としてのこっていて、ひょいひょい、と甦って来ていたのである。
梯子段(はしごだん)が、ぎしぎしと軋(きし)んで、誰かがあがって来た。
「ご免下さいまし」
小春吉五郎の声であった。狂四郎は、ここで、この男を待っていたのである。
「おどろきました」
吉五郎は、狂四郎が注(つ)いださかずきを頂いて、ひと口飲んでから、まず、そう云(い)った。
「責めたてられて居るのか？」
「へい。あっしも、小伝馬町にたびたび厄介になって居りますから、責問牢問(せめどいろうどい)は見て居りますが、その比じゃござんせん。ちゃんと、拷問蔵(ごうもんぐら)がござんして、海老責(えびぜめ)やら釣責(つりぜめ)やらを、小止(こや)みなくやって居ります」
吉五郎は、狂四郎にたのまれて、あれから三日間、切支丹屋敷に忍び入って、伴天連が受ける苦難を目撃しつづけて来たのである。
海老責は、両腕を背後に扼(やく)し、両脚を前に組ませて縛りあげ、そのまま引きあげて顎(あご)にくっつける。ものの小半刻(こはんとき)にもおよぶと、総身はまっ赤になり、冷汗が淋漓(りんり)となる。さらにこれを小半刻つづけると、すべての皮膚は、暗紫色になり、ついに蒼白(そうはく)と化す。
釣責は、両の手首を紙で巻いて、青細引で背後に縛り、その細引を梁鐶(りょうかん)に通して、地表を三寸ばかりはなれる宙へ釣上げる。この形は、苦痛は直ちには来ないが、一刻を過ぎる頃には、満身の筋肉と骨が呻(うめ)きをたてて、足の爪先(つまさき)が血を吹く。

「ところが、あの覚悟っぷりは、見事なものでございます。あっしが、のぞいていた間、伴天連は、ただの一度も唸り声をもらさず、そのかわり、お祈りの文句を、ずうっとつぶやいて居りました。気を失って、水をぶっかけられて、われにかえると、すぐ、その文句を唱えて居ります。のぞいているあっしの方が、ときどき、めまいがいたしました」

「おぬしが眺めた見当では、ころぶ気配はないのだな？」

「まず、そうとしか思えません」

狂四郎は、しばらく、黙考していたが、急に、刀を把って、立ちあがっていた。

「ご苦労だった。今夜は、わたしが行こう。おぬしはここでゆっくり飲んで行ってくれ」

三

陽が落ちてしばらくして、狂四郎は、茗荷谷からのぼって、御家人の住む七間屋敷の中の往還を、ゆっくりと、御用屋敷へむかっていた。ふだんならば、暮れるとともに人影の絶える淋しい場所なのだが、正月を明後日にひかえた慌しさで、弓張提灯を携えた通行人が、絶え間なく行き交うていた。

このあたりは、むかしは、全部、切支丹屋敷の地所だったのである。長崎の出島に等しく、高低四千坪余もあり、高い石垣をめぐらし、御蔵、番所、吟味所、牢屋、斬罪所、火刑所、梟首所が、棟を並べていた。もともと、寛永末年、井上筑後守の下屋敷だったのであるが、この人が宗門奉行となったのを機会に、牢屋敷に改造したのである。元禄までは、与力同心

が、みな構内に居住していたが、享保年間に回禄の災にかかって烏有に帰してから、北方の二千坪あまりを御家人の宅地に下げ渡しになり、享保に入って正式に、切支丹屋敷の名称が廃されてしまっていた。

牢屋と庁事の建っていた地面は、今は、柳生但馬守の下屋敷となっている。

のこされているのは、五百坪に満たないが、それでも、近年にいたって、御用屋敷と変えられて、御蔵と牢屋が改築されていたのである。

土塀と、その上から枝を伸ばしている樹木が、わずかにむかしの面影をとどめている。

狂四郎は、手ごろの枝ぶりをえらぶと、身を躍らせて、音もたてずに、土塀を越えていた。

星夜であったが、狂四郎は、ためらわず、鬱蒼と茂った樹木の間を抜けて、南の建物に近づいて行った。

吉五郎に教えられていたし、雨戸から灯影を漏らしているところが、牢屋敷でいう吟味場と、すぐ知れた。

しかし――やがて、狂四郎が、忍び入って、座敷の杉戸の隙間から覗き見た光景は、期待したのとは、別のものだった。

五坪あまりの白洲にひき据えられているのは、まだ二十歳にならぬ町娘であった。

もろ肌を、乳房も露わにひき剥かれて、苧縄で後手に縛られ、二人の下男によって、その手を肩まで緊めあげられていた。

吟味しているのは、真竹二本を麻苧でつつんだ拷問杖をもった牢屋同心一人だけで、監察

の徒目付も小人目付も姿をみせていなかった。
拷問杖のさきを、裾にひっかけて、強く引っぱっているので、娘の白い両膝から、内股まで、のぞいていた。
「……お前の親爺が、切支丹とは云わぬ。しかし、斯様な禁制の観音を作ったからには、八方の陳弁も身のあかしをたてることにはならんではないか」
同心は苛立たしげに、吐き出した。彼が腰かけている框の端に、ころがされているのは、二尺あまりの、青銅のびるぜん・さんたまりあ像にまぎれもなかった。
「芦部光源ともあろう、上方まできこえた仏像師が、なにに血迷うて、こんな代物を作ったものかのう。……お艶、親爺をすくうためじゃ。決心せい。父の生命をまもるために、操をすてる——後世にのこる美談ではないか。娘の操などというものは、こういう時に役立てるためにあるものだぞ。な、思いきって、あの伴天連に身をまかせい」
白髪まじりの本多髷に、粗末な小倉木綿、京桟留の袴着——くたびれた恰好の同心は、目出度かるべき正月になっても、伴天連をころばす拷問をつづけなければならぬことに、うんざりしているに相違なかった。なろうことなら、今夜のうちに、片づけてしまいたいのだ。
この町娘を囮につかって、ころばせる——思いつきとしては、できていた。
娘は、ふかく俯向いたきり、身じろぎもせぬ。
杉戸の陰の狂四郎は、その横顔が、勝気な色をはりつめているのを見てとって、かなりの興味をそそられた。

「お艶っ！　拙者がこれ程たのんでいるのがわからんのか！」
同心は、捕吏本来のもの凄い面がまえになると、いきなり拷問杖を、娘の膝のあいだに突き入れた。
「ここで女の赤恥をかかされるか、伴天連に操を呉れるか――どっちだっ？」
杖の先をぐいぐいと、内股の奥へねじ込み乍ら、同心は怒鳴った。
娘が、屹となって、顔を擡げた。
「岡石さま！　あなたさまは、まさか、あたしをお欺しなさるのではございますまいね？」
「なんだと？」
「あたしを使って、伴天連をころばしておき、ご自分お一人の手柄のような顔をなさり、小伝馬町につながれているあたしのおとっつぁんは、そのままにすてておく――そんなこんたんをお持ちではございませんか？」
「ば、ばかな！　なにをたわけたうたぐりを――。拙者は、手柄どころか、来年早々、本元服の倅にゆずって、お役御免を願い出るつもりなのだぞ」
「左様ですか。では、本当におとっつぁんを、無罪放免にして下さいますのでしょうね？」
「くどく申すな。但し、久離御帳外（江戸追放）はまぬがれぬぞ」
「それぐらいでおゆるしがねがえれば……」
「もし、失敗におわったら、光源は、三朝の屠蘇も頂けずに、七草の宵に、打首だぞ！」
「わかりました」

娘は、夜叉(やしゃ)となるはげしい気色をみなぎらせて、頷(うなず)いた。

四

三方が石壁、一方が太格子(ふとごうし)になった牢屋で、ヨハネス・セルディニイは、蛍火(ほたるび)のような短(たん)檠(けい)の仄明(ほのあか)りを受けて、痛めつけられたからだを襤褸切(ぼろき)れのように、氷のような板の間へ横たえていた。

言語に絶する海老責、釣責の苦痛に遭いつつも、不屈の信念は、彼を断じてころばさずに堪えさせているし、また明日もそうであることにかわりはないのだが、肉体の生理は、精神とは別に、烈(はげ)しく、

——水……水が欲しい！　たったひと口の水を！

と、餓(う)えていた。

そのもだえを抑えるために、ヨハネスは、ゴルゴダの丘に、十字架を背負わされて、一歩一歩、よろめきつつのぼって行った基督(キリスト)を想(おも)っていた。

……その時、基督、我渇(かわ)くと曰(のたま)いしが、そこに醋(す)のみちたる器、おかれてありしに、兵卒ら、海綿を醋に浸し、茎長き草に刺して、その口に差付けしかば……。

「ああ！」

と、ヨハネスは、呻いた。

——主も、その時、それに堪えられたのだ！

われとわが心を鞭（むち）うった時であった。
「ヨハネス！」
ひくい声が、格子戸から投げられた。
ヨハネスはのろのろと身を起して、闇（やみ）の中におぼろに浮いた影をすかし見て、
「水を……水を、ください……」
と、はっきりした日本語で、ねがった。曾（かつ）て、シドッチが、横文字をはめた日本語の手控帳を持参していたように、ヨハネスもまた、通詞（つうじ）を必要とせぬまでに、この国の言葉をわがものにしていたのである。
「待って居れ」
影は、すっとはなれて行ったが、ほどなく戻って来ると、茶碗（ちゃわん）を、格子からさし入れた。
「ぐろしあ！……あ、ありがとう！」
わななく両手で受けて、夢中で、口を寄せて、ひと息にのみ乾（ほ）したヨハネスは、大きく胸をはずませて、格子にすがると、
「あなたは、だれです？」
と、顔を近寄せた。
相手は、無言であったが、ヨハネスの方で、乏しい短檠の灯影をあびたその顔を見わけて、
「おお！」と声をたてた。
「あなた……あなたが、来て、くださいました！」

「おぼえていたのか――」
狂四郎は、かわいた冷たい声音で、云った。
「おぼえていますとも！」
「わけをきこう。おぬしは、なぜ、わたしの顔を見て、何かを、叫んだのだ？　わたしの顔が、おぬしら異人と同じ骨相をもっているからか？」
「骨相？　おお、そう……そうです、あなた、わたくしたちと、同じヨーロッパ人の顔をしています。しかし、わたくし、おどろいたのは、それだけではありません」
「なに？　それだけではない？」
「そう……、わたくし、あなたの顔に、ふしぎな――不幸な――孤独な――くるしい顔、見つけました。あなたは、ほかの日本人(ヤアパンジス)とちがう。ほかの日本人の顔、なにか信じています。仏教を信じています。殿さまを信じています。親や妻を、信じています。お金を、信じています。しかし、あなたの顔は、なにも信じていません。さびしい、きのどくな顔です。わたくし、はっきり、わかります」
「…………」
「なぜですか？　なにが、あなたを、不幸にしましたか？」
ヨハネスは、おどろくべきことには、おのれの苦難を忘れて、情熱を語気に罩(こ)めて、いたましげに狂四郎に問うたのである。
「ヨーロッパにも、あなたのような、孤独な、くらい顔、めったに、ありません……。あな

たこそ、神の手で、すくわなければなりません。わたくし、日本へ来た目的は、それです。あなたのような人に、神の教えをきかせるためです……」

「…………」

「あなた、すくわれます。あなた、わたくしに、水くださいました。あなたの心の中には、やさしいものあります」

狂四郎は、自嘲の色を口辺に刻んでいた。

「おぬしに、水をくれたのは、べつに、おぬしを憐んだからではない」

「わたしは、おぬしの口から、でうすの広大無辺の慈悲をきこうとは思わぬ。それよりも、わたしがたのみたいのは、おぬし自身の心とからだで、信仰の力がどれだけ強いものか——それを見せて欲しいということだ。一杯の水が、たのみ代だと考えてもらおう」

冷酷に云いはなった時、かなたに跫音がして、提灯の火が、ぼうっと赤く、闇に滲んだ。

狂四郎の姿は、ヨハネスの返辞を待たず、つと消え去った。

五

牢屋の中は、一変していた。

暗い短檠は、あかるい角行灯にとりかえられていた。片隅には、ふっくらとあたたかそうな媚茶の碁盤格子の夜着がのべられていたし、かつぎ込まれた唐金の大火鉢には、鉄瓶が、湯をたぎらせて心地よい松濤の音をひびかせていた。

そして——。

ヨハネスの前には一瞥芸妓(いちべつげいぎ)の風姿のお艶が、あだな横坐りになり、黄柄茶の江戸褄(えどづま)を返して、燃える緋鹿(ひが)の子(こ)の対丈(なが)襦袢(じゅばん)と淡桃色(ときいろ)の湯文字をこぼしていた。

ヨハネスは、かたく目蓋をふさいで、口のうちで、おらしょをとなえつつ、幾度も、胸で、十字(くるす)の文(もん)をしるしていた。

これは、海老責・釣責にまさる拷問であった。

「今から、この娘が、貴様とともに、この部屋に住む」

いやしげな薄ら笑いを浮べた同心から、そう告げられ、みるみるなまめかしい模様がえがおこなわれるのを、ヨハネスは、終始、目をとざして見まいとした。

しかし、ただよい寄せる甘い脂粉の香は、ふせぐすべもなかった。渇した咽喉(のど)は湯の音に、呻いた。あたたかな夜具にくるまって、のびのびと四肢(しし)をさし延べたかった。

「おねがいです！」

長い沈黙を破って、お艶が、声をかけた。

「あたしを、どうか、お前さまの女房にして下さいまし」

ヨハネスは恐しいものを眺めるように、薄目をひらいた。

「あのさむらいは、わたくしに、神さまを裏切らせようとしています。わたくし、まけません！」

「おねがいです！」

お艶は、とらえた相手の視線を、もう二度とはなすまいと、必死の表情で、いざり寄った。
「おねがいです！　あなたが、こ、これに、血判を捺して下されば、あたしの父親は、首を斬られなくてもすむんです。どうか、おねがいです！」
お艶は、懐中から、とり出した一枚の書面を、むりやりにヨハネスにおしつけた。
それは、宗門改めの南蛮誓詞であった。

切支丹ころび誓詞
一、私儀伴天連にて御座候得共この度御法度によりころび申事疑い無之候、此後は仏徒にて御座候
一、切支丹宗旨にて願い申候事今に後悔仕候、後々末代切支丹に立帰る事仕間敷く、自然何方より伴天連参り懺悔のすすめと云共、この書物判を致し申上候儀かつて以妄念にもおこし、取あつかう事に同心致すまじく候
一、上には天主でうす、さんたまりあを始め奉り、もろもろの天使の御罰を蒙り、死にては地獄という獄所に於て諸天狗の手に渡り、永々五寒三熱の苦しみを請け、重而また現在にては癩病になり、人に白癩黒癩とよばれるべきもの也、仍おそろしき誓詞
如件

ヨハネスは、けがらわしげに、紙片を抛ると、せわしく、虚空に十字を切った。
天主六番の御掟に応わぬ重罪！　さんたまりあ！　さんとじょぜ！　ぱてる！　ひりょ！　すぴりとさんと！

お艶は、邪神に合力をたのんで、一心不乱に、祈禱をとなえはじめた異邦人を、乾いた眸子で瞶めていたが、不意に、狂ったような烈しさで、

「伴天連さん！　お前さまは、人の生命をすくうために日本へ来たんじゃありませんか！　あたしの父親は、切支丹でもなんでもないのに……ただ、南蛮渡来のまりあ観音像を見てから、その神々しい美しさに目がくらんで……それで、とうとう、こっそり、お上にかくれて、作ってみただけなんです。それだけのことなのに、打首にされるんです！　あたしの父親は、仏像師なんです。阿弥陀さまのほかに、びろしゃなさまだって、四天だって、仁王だって、十六羅漢だって、なんだって作ります。まりあ観音だって、おんなじ仏像じゃありませんか。切支丹にさえならなけりゃ、作ったってかまやしないと思ったんです。……そうしたら、切支丹だから、作ったんだ、とお役所で、かってにきめちまって――」

両手で顔を掩うて、はげしく嗚咽する娘を、ヨハネスは、困惑と憐憫の表情で、見まもった。

嗚咽がおさまるのを待って、ヨハネスは、やさしく、

「まりあさまの美しさを見つけたあなたの父は、神さまのありがたさがわかったのでしょう」

と、云いかけた。

瞬間、お艶は、ぱっと両手をはなして、ヨハネスを、はったと睨みつけた。

息づまる重苦しい沈黙ののち、お艶は、ぞっとするようなひややかな口調で、

「あたし、お前さんの女房になってみせる」

と、呟きすてるや、すっくと立ち上って、飛色のごろふくれん帯を、するすると解きすてた。

ふわり、ふわり、とお召縮緬の上着が、黄八丈の下着が、対丈襦袢が、肢体から剝ぎ落されて、足もとへ絡み纏わるたびに、ほのかな女の匂いが舞い漂うた。

ついに——肌の透き徹る淡桃色の綾羅いちまいになった女身は、胸も脛もあらわに、夕陽を受けた旗雲が靡くに似せて袂と裾を灯影にひらめかせるや、さっと、ヨハネスにすがりついたのであった。

ヨハネスは、目蓋を膠付けしたように、ひたとふさいで、全身の筋肉を石と硬直させるや、——五体を寸断されるよりも、地獄の劫火に焼かれるよりも、さらにまさるこの苦患から、主よ、おん身のしもべをまもりたまえ！

と、心中で、絶叫していた。

翌朝——、格子の前に立った同心は、茫然たる痴呆の面持のお艶へ、目くばせした。お艶は、のろのろと身を起して、外へ出て行った。そして、それっきり戻って来なかった。ヨハネスの方も、この日は、拷問をまぬがれた。

夜もかなり更けて、ふらりと牢舎に入って来たお艶は、別人のように、盲縞の木綿ものを襟もと固くつけていた。

「おゆるし下さいまし。あたしが、心得ちがいでございました……ヨハネスさま、あたしに、でうすさまのお話をおきかせ下さいまし」

と、つつましく両手をつかえるお艶を、ヨハネスは怪訝なものに眺めた。

「どうしました？」

「あたし、今日、小伝馬町の牢にいる父親に会って参りました。父親は、あたしの話をきくと、大莫迦者、おれは、あのまりあ観音をつくったことをすこしも後悔して居らぬ、よろこんで死んで行く、と申しました」

「おお！」

ヨハネスは、われを忘れて、お艶の手を把った。

それから、一刻のち、心をこめて神の光栄を説き終えたヨハネスは、お艶が、傷の妙薬と云ってすすめた瓢の白水を、誑かされると知らずに、受けて飲んだ。それは、酔いが小半刻後に発する濁醪であった。

不運であったのは、ヨハネスが、酒で変貌する体質の持主であったことである。

新しい年を迎える百八の梵鐘が、元旦の用意万端を整え終って、ひっそりと静寂にかえった江戸の町空へ、いんいんとして鳴り渡りはじめた頃、突然、暗黒の牢室の中で、けたたましい、狂ったような女の笑い声があがった。

「ころんだ！　ころんだ！　伴天連がころんだ！　あたしが、勝った！」

その凄じい驕った叫びにおしひしがれた悲痛な呻き声が、かすかに地を這った。

「さ、さ、さたんめ！」

六

正月三日朝――元旦、二日の雨のあと、空(から)っ風は強かったが、空は一片の雲もなくからりと晴れわたり、街にどっと、年礼廻(まわ)りの人が出た。

ここ――切支丹坂も、武家町人職人の晴れ姿をはじめ、紙鳶(たこ)もちの子供やら太神楽(だいかぐら)やら鳥追いやら三河万歳やらが、ぞろぞろと行き交うていた。

そして、その中に黒羽二重紋付小袖(こそで)、麻裃(あさがみしも)、白足袋雪踏(せった)、小脇差(わきざし)を一腰おびたヨハネス・セルディニイ改め瀬戸与右衛門が、小人目付と同心につき添われて、のろのろと歩を運ぶ姿が交っていた。

七日前、囚徒として、この坂を登った時は、昂然(こうぜん)と頭を高く擡(もた)げていたのだが、今日、許されて、この坂を下るその姿は、悄然(しょうぜん)として深く首を垂れていた。

坂の中途にさしかかった時――。

坂下から、急がしく馬を飛ばして来た者があった。

通行人が、「らんぼうな！」と非難の目をあびせる中を、烈しく鞭(むち)くれて、馬の足掻(あが)きをすこしもゆるめず、だだだっと躍りあがらせて来たのは、頭巾(ずきん)で顔をつつんだ、黒の着流しの武士であった。

まるで通り魔のように、ヨハネスたちの脇を駆け抜けざま、

「地獄へ行けっ！」

と、大喝を残したのであった。

小人目付と同心は、その刹那、きらっと宙を一閃した白光に、あっと目晦んだ。

次の瞬間、彼らは、まん中のヨハネスのからだが朽木のように仆れるのを見て愕然と色をうしなった。それには、首がついていなかったのである。首は、遠く、刎ねて、反対側の路上にころがっていた。

賭場女房

一

春――といっても、初午祭りの幟が、ちらほらと咲いた梅の林間に見える、まだ風が肌にしみる季節であった。

宮（熱田）へ一里半、ここ尾張鳴海宿はずれ――。

黒の着流しの眠狂四郎が、東海道を西へむかって、あてのない旅路をひろっていた。

ゆるやかな流れの天白川が、行手にある。このあたりは、往時は、汐干潟であった。「星崎の闇をみよとやなく千鳥」と、芭蕉が詠んだのは、このあたりであろうか。

天文二十二年、弱冠十九歳の信長が、今川方へ寝返った山口左馬助一門を討つべく、わずか八百の手勢を率いて、疾風のごとく襲った小丘は、すぐ彼方に望まれる。

狂四郎は、ふと、そのつわものどもの跡をしのびたくなって、そちらへ、足を向けた。

　恵みあう鳴海潟、干潟も遠く浦伝い、天照神は星崎に、光もくもらぬ世にしあれば、願いをみちの汐風も……

ひくく『海道くだり』を口ずさみつつ、むかしの防風林とおぼしい松並木を辿って行こう

としたおりであった。

突然——。

かなり遠くから、異常な絶叫が、風におくられて来て、狂四郎の眸子(ひとみ)は、反射的に、その方角をとらえていた。

半町余へだてて、鎮守の森があった。絶叫は、その陰からあがったのである。

狂四郎は、それを断末魔のものときいた。

ほんの瞬間を置いて、杉木立の中から、一人の男が走り出て来た。つづいて、とび出して来たのは、少年であった。

「かたきっ！　ちきしょうっ！」

少年が、声をかぎりにふりしぼるや、男は、踵(きびす)をまわして、

「餓鬼(がき)っ！」

と喚(わめ)きざま、懐中から、匕首(あいくち)を閃(ひらめ)かせて、ふりかぶった。

すると、少年は、不敵にも、小脇(こわき)にかいこんでいた脇差を、ぎらっとひき抜いて、身がまえた。もとより、稽古(けいこ)などまるっきりしていない恰好(かっこう)だが、そのひとみは、微塵(みじん)も臆(おく)する色はなく、らんらんと闘志に燃えていた。

一瞥(いちべつ)で博奕打(ばくちうち)とわかる風体の男は、少年の意外な気魄(きはく)をあびて、けだものじみた唸(うな)りを発した。

狂四郎は、男の姿勢が、威嚇(いかく)から本気の殺意をこめたものに変るのを見てとるや、それに

むかって、足をはこんだ。
剣法知らずの者同士の対峙は、達人同士の試合と同様、睨みあいが長くつづくものである。
狂四郎が、ゆっくり近づいて行っても、充分間に合った。
「おい――」
背後から声をかけられて、男は、びくんと肩を顫わせた。
この瞬間、少年の方は、目蓋をふさぐと、滅茶滅茶に刀をふりまわしつつ、だだだっと突っかけた。
男が、あやうく身を躱すや、少年のからだは、そのまま、狂四郎の前へ来た。
狂四郎は、苦笑しつつ、その右手をおさえた。
「ちきしょうっ！　かたきっ！」
必死にもがきつつ、少年は、目をひらくのを忘れていた。
「どうした？　かたきは、あっちだ」
と云われて、はじめて、目をひらいた少年は、はげしく狂四郎を睨みあげたが、無言で、またもや、男にむかって、突進しようと跳ねあがった。
「まあ、待て――。あの男は、お前の父親でも殺したのか？」
「そ、そうだい！」
狂四郎は、男を、じろりと見やって、
「そうか？」

と、念を押した。
「痩浪人などの知ったこっちゃねえ！」
男は、目と歯を剝いて、じりじり退った。
「あいにくだったな。わたしは、仇討の助太刀などにはもって来いの痩浪人なのだ」
狂四郎は、笑うと、少年をふりかえって、
「こんどは、目をとじてもかまわぬが、刀をふりまわさずに、まっすぐにかまえて走るのだ。よいか。わたしが、走れといったら、走って来い」
云いのこすや、不意の疾風を起して、男にむかって、身を躍らせた。そして、目にもとまらぬ迅業で、片手を捻りあげて、男のからだを動けないものにした。
「走って来い！」
「よーし！」
少年は、こんどは大きく目を瞠いたまま、刀を水平に突き出すと、猛然と突撃して来た。
が、切先が、男へとどこうとする刹那、本能的に、ぎゅっと目蓋をふさいだ。
「う、うっ！」
呻いて、弓なりに反る男を、狂四郎は、ぐいっとおさえつけた。
少年の刀は、男の高股へ、ふかぶかと突き刺さっていた。
狂四郎が手をはなすと、男のからだは、ずるずると地べたへ崩れ落ちた。
少年は、それにひきずられるように、膝を折った。刀の柄を摑んだ十指が、そのまま硬直

してしまって、はなれなくなっていたのである。
狂四郎が指を一本一本もぎはなしてやると、少年は、よほど気丈とみえて、二、三度その両手をふってから、またもや柄を摑もうとした。
「もうよい」
狂四郎が、たしなめると、
「いいや！　こいつ、まだ生きてやがるもの——。心の臓を、ひと突きしてやるんだ！」
「まあ、待て、坊主（ぼうず）。この男は、三下奴（さんしたやっこ）らしいが、お前の父親を殺したのは、親分から命じられてやったのではないか」
そんな直感が、狂四郎にはあったのである。わざと高股を突かせたのは、まだ十二、三にしかならぬ少年に、殺人行為を犯させたくなかったからである。
「そ、そうなんだ。こいつの親分の姫松の河東次が、おいらの父（とと）を——」
そう云いかけて、少年は、何を思ったか昏絶（こんぜつ）した男にとびつくと、胸に巻いた晒（さらし）へ片手をさしこんで、さぐっていたが、
「あった！」
と、目をかがやかせた。
少年が、うばいとったのは、二個の賽（さい）ころであった。

二

神社の裏手にあるかなり大きな構えの、べにがら塗の格子蔀をもった家に入ってみると、白衣に草色袴の男が、広土間の大黒柱に凭りかかって、藁打ち石に腰かけたまま、こときれていた。

狂四郎は、無造作に、屍骸をかかえあげると、奥の部屋へはこんだ。

少年に夜具を敷かせて、それに横たえ、死顔へ掩いをかけてから、

「お前の父御は、神主だったのか！」

と、訊ねた。

「うん――」

「神主が、どうして、博奕打などの恨みを買ったのだ？」

少年の顔に、当惑の色が泛ぶのを眺めた狂四郎は、わざと、威容をつくって、

「お前が見たり聞いたりしたことを正直に云ってみないか。大人たちが斬ったり斬られたりするのは、嘘をついて騙したり、本当のことをかくしたりするから起るのだ……。小父さんが、お前の味方だということを信じられるなら、ありのままを話してみるがよい」

と、うながした。

少年は、じっと狂四郎の目へ、目を合わせていたが、こくっと合点した。それから、手に握っていた賽ころを、そっと、たたみへころがし、それへ視線を落し乍ら、呟くように、最

初に口にしたのは、

「父(とと)は、これを作っていたんだ」

この言葉だった。

狂四郎は、黙って、その賽ころをてのひらにのせてみた。べつに、変ったところのない普通の一寸角の鹿(しか)の角(つの)で出来た品である。しかし、この微妙な重さをはかり、三度ばかり、たたみにころがしてみて、狂四郎は、——種無しの曲賽だな、と見破った。

人には、思いがけぬ特技というものがある。少年庄作(しょうさく)の父五味義寛(ごみよしひろ)は、賽ころというものに、異常な執心をもった人間であった。神主という浄職にある身であったから、賭場などには、一度も出入したことはなかったが、ひそかに、各種の賽ころを作るのを唯一(ゆいいつ)の愉(たの)しみにしていたのである。若い頃(ころ)、江戸で、偶然、明和年間の賽作りの名人といわれた六趣斎音吉の作品だという巧妙な曲賽を見て、是が非でも、これに劣らぬものを作ってやろうと決心したのであった。

曲賽というのは、角賽、粉曳(こなひき)、鳴針(とどろき)入、途呂付、曳綱と、種々さまざまである。いちばん簡単なのは、一点物といい、一方だけが十度伏せるうちに、五度乃至(ないし)六度出るしかけになっている。出そうと思う目の方を、ほんのすこし真空にして、その裏の方へ鉛を入れて重くしてある。これは、手にとればすぐわかる。二方が出るのを二点物、三方が出るのを三点物。丁半に最も多く用いられ、博奕打が、堅気の客からまきあげるのは、三点物——二四六の丁

目か、五三一の半目か、いずれの方かが、七度以上出る賽ころである。
粉曳賽というのは、その名称通り、黒い粉が出るしかけがしてある。鳴針入というのは、五三一の目のまん中から、針の出る賽で、伏せて、壺皿を引くと、針がひっかかる手ざわりがあれば丁、手ざわりがないと半目と判る。途呂付というのは、一種の薬を指先につけて、賽にそっと塗る方法である。曳綱というのは、極細の糸をむすびつけておいて、自由自在にころがす方法である。
しかし、いずれも、いかに巧妙な熟練の腕前をもって使用しても、本職の慧眼をくらますわけにはいかない。
ところが、六趣斎音吉の曲賽は、どこにも種もしかけもなく、しかも丁半自由に好みの面を出すことが出来たのである。六趣斎は、愛宕山下に住んでいたが、芝の大親分仏子の長吉から、種無し賽をつくってくれるなら、月百両で、一生涯飼殺しにしてやろうといわれて、ぽんとはねつけたくらいの気骨者であったという。
義寛は、この六趣斎をめざして、およそ二十年間も、こつこつとひとりで工夫して来たのであった。
そして、ようやく、どうやら満足のゆく種無し曲賽をつくりあげた時、当然のこと乍ら、一度それを賭場で試してみたい欲求が起った。
昨年秋、上州の博奕打が、大阪戻りに、鳴海宿で一泊したおり、ふとしたきっかけで、義寛は知りあいになり、長年の秘密の研究の成果をうちあけて、使ってみてくれまいか、とた

のんだのが、おのれの運命を大きく変えるきっかけとなった。

上州の博奕打は、曲賽のすばらしさに小おどりして、名古屋伝馬町の姥堂の祭礼で、開帳された賭場へ乗り込んで行き、おかげで、一夜のうちに、二百両あまり儲けたのであった。

ところが、大須の廓に行った博奕打は、上った大まがきの敵娼に、寝物語に、ついこのことを口をすべらせたのである。すると翌日には、それが賭場の貸元である姫松の河東次の耳にとどいてしまった。

姫松の河東次は、東は池鯉鮒、西は桑名の東海道すじ、北は、宮から、洲股、大垣、垂井に出る中仙道すじまで、手広く縄張りをひろげた親分であった。

ある日、突然、この親分の訪問をうけた義寛は、血のついた片欠けの賽ころをしめされて、さっと顔を蒼白にした。

河東次の子分たちが、上州の博奕打を襲撃して、奪いとったことは、きかずともあきらかだった。

「神職さん、これについちゃ、なんにも云わねえ。ただ、ひとつだけ、こっちのたのみをきいてもらおう。これと同じ賽ころをつくってもらいてえ」

百両出そう、と云われた時、義寛は、六趣斎の気骨ぶりを思い出した。

この大親分に曲賽を作ってやることは、堅気の客たちを片端から裸にすることを意味する。

被害の大きさは、想像以上のものとなろう。

といって、きっぱり拒絶して、河東次の怒りを買えば、これは、神の祟りよりも、もっと

おそろしく、この土地に住むかぎり、何かにつけて災難を蒙ることになるのは、火を見るよりもあきらかであった。表面は、大親分の貫禄をみせ乍ら、自分の邪魔になる対手と見たなら、蛇のように執拗に、とどめを刺すまでどんな陰険な手段でも敢えて辞さない性向の持主であることを、義寛もきき知っていたからである。

義寛の沈黙が長すぎるのを、河東次は、その日は、別に苛立ちもせず、お茶を入れかえに出てきた若い後妻のお稲へ、十両包んで、置いて、立った。

義寛は、河東次が去ると、お稲に、十両に手をつけるな、ときびしく命じた。

しかし、お稲は、貧乏神主のくらしにふさわしくない人柄の女であった。十両という大金を、ほんの気軽くなげ出して行った男が、大層立派に見えたとたん、それまで、貧乏神に抑えられていた虚栄心が、にわかに芽吹いたのである。

十日後、河東次が、ふたたびおとずれた時、その金は、半分に減っていた。

義寛は、そのひけ目で、弱々しく、

「半年はかかろうと思われるが、……」

と、なかば承諾の云いのがれをするよりほかはなかった。

「なあに、半年ぐらい待つのはなんでもねえ。おれは、辛抱強い方だ。しかし、忘れられちゃ困るから、ちょいちょい、催促にうかがわせてもらう」

大様に笑ってみせてから、その日も、河東次は、十両をお稲に渡して行ったのであった。

爾来――。

河東次の姿が、月に二、三度は必ずあらわれるたびに、義寛の表情は暗さを増し、反対に、お稲の面相はいきいきとして来たのであった。もともと、色白の整った顔だちで、神主さんの女房にはもったいない色っぽさがあると、村人たちからうわささされていた女であった。

三

義寛が、河東次に依頼された曲賽を完成したのは、正月七草を迎えてからであった。すると、まるで、それを監視していたように、翌日――松飾り〆縄を取りはらった門口に、河東次の声が、案内を乞うたのであった。

座敷に通った河東次は、新年の挨拶をすませると、懐中から、百両の包みを出して、ぽんとたたみに置いた。

「おれのところに、暮から滞在している降巫が、七草に、百両の金をすてると、今年は、運がひらける、とご託宣をいただきゃがったんでね。これは、もしかしたら、賽ころが出来あがったんじゃねえか、と思って、やって来てみたんだ」

たくみに、きり出されては、もはや、義寛がとぼける余地はなかった。

河東次は、さし出された二個の賽ころに、鋭く光る目を、吸いつけた。

「これは、どういうしかけになって居るんだね、神職さん？」

「三点物と同じだが、ちがうところは、わたしのは、百発百中だ。丁目の丁、半目の丁、半目、とこれを確実にくりかえす」

義寛は、心中の憂悶（ゆうもん）に堪えた抑揚のない口調で、しかし、きっぱりと云った。
すると、河東次は何を考えたか、陰険な目つきで、
「確実だ——と云いきれる自信がおありなんだね？」
と、だめを押した。
「疑うなら、わたしの方は、べつにすすめては居らん」
憮然（ぶぜん）として、義寛は、こたえた。
「いや、別に疑うては居らんが、わしの方も、百両で買うのだからな」
「勿論（もちろん）、ためしてもろうた上でのことだ」
河東次は、つれて来た壺振りに熟達した子分に、やれ、と目くばせした。
お稲が、心得て、蒲団（ふとん）をもって来て、その上を白布で覆（おお）い、四隅（よすみ）を、鎹（かすがい）で留めた。
子分は、ぱっと威勢よく、もろ肌脱ぎになると、渋紙張りの藤籠（ふじかご）の壺皿へ、二個の賽ころを入れて、くるりと廻（まわ）して、ぴたっと盆台へ伏せるや、ゆるやかに、二、三度、すすっと動かした。
とたん河東次が、
「神職さん！　万が一、ということがある。その時は、どうなさる！」
語気鋭く訊ねた。
「一文も要らん！」
「そりゃ、あたりまえのことだ。こっちののぞみ通りの賽ころでなけりゃ、鐚銭（びたせん）も払わねえ。

……どうだ神職さん、賭けなさるか？」

「わたしの生命を賭けてもいい！」

「お前さんの生命など貰ったって、仕様がねえ。それだけ自信があるなら、生命のつぎに大切なものを賭けてもらおうか」

「…………」

「そこにいなさる、お前さんのお内儀さんは、どうだ？　わしが勝ったら、もらって行く」

ずばりときり出されて、流石に、義寛は、息をつめた。しかし、次の瞬間、侮辱に対する激しい反撥で、

「よし！　賭ける！」

と、睨みかえしたのであった。

この時、お稲の双眸が、河東次の視線を吸いとって、意味ありげにまたたくのを——そうだ、少年庄作は、次の間の茶器入の素棚に攀じのぼって、欄間の透彫から、見ていたのである。

——父は、負ける！

庄作は、直感した。

庄作は、知っていたのである。

暮十三日——煤払いの日であった。父は、鳴海の大庄屋の家へ、伊勢より送られた皇大神宮御祓いと新暦を持って出かけて留守であった。

そこへ、河東次がおとずれ、庄作は、すぐ隣村の亡き生母の実家へ使いに出された。ところが、街道へ出た時、隣村へ行く男に出会い、庄作は、継母に持たされた品を、あずけて、河原でひと遊びして、わが家へ戻って来た。

茶の間の囲炉裏に、出がけにそっと甘藷を突っ込んでおいたのを思い出した庄作は、継母に知られぬように掘り出そうと、ぬき足さし足で、裏口から入った。

囲炉裏へ匍匐した庄作は、そのとたん、座敷から、ひくい呻き声がもれるのをきいた。息を殺していると、呻き声は、きれぎれに、いつまでもつづく——。

そうっと、唐紙の隙間へ、しのび寄ってみた庄作は、心臓がとまる程強烈な衝撃をうけた。置炬燵のむこう側に、河東次と継母が組み合って、倒れていたのである。

蒲団の中から、にょっきりと生えたように、太い白い脚がもちあげられて、櫓へ踝を掛けていて……その皺だらけの蹠が、庄作のひとみに、なんともいえぬいやらしいものに映った。

——ちきしょうめ！

あの日の光景を、まざまざと思い出し乍ら、庄作はからだ中が、わなわなと顫えた。しかし、父が負ける、と直感しつつも、大声あげて、とび込んで行かなかったのは、父が負ければ、継母がいなくなる、という歓喜の期待が働いたからであった。

「勝負っ！」

鋭い掛声とともに、壺振りは、ぱっと壺皿をあげた。

刹那――義寛が、愕然として、わが目を疑った。

半目の半。

信じられないことだった。絶対に、丁目の丁が出なければならない筈なのだ。義寛は、すでに百度も試してみて、一度も狂ってはいなかったのだ。

「こ、こ、こんな……莫、莫迦なっ――」

義寛が、わななく手で、二個の賽ころをひろいとろうとすると、壺振りが、すばやく奪いとってしまった。

「神職さん。やっぱり、わしの懸念通りに、しくじったね。お内儀さんを頂戴して行くぜ」

ひややかに云いはなつ河東次へ、欄間から、庄作は、殺してやりたい憎悪の目を射込んだことだった。

その夜、父子二人きりの食膳にむかった時、庄作が、不意に、重苦しい沈黙をやぶって、

「父さん。おいらにゃ、わかってら」

と、云った。

「なにが、わかるんだ？」

義寛は、陰鬱なまなざしを、緊張して伜の顔へ向けた。

「あの賽ころは、別のものだったんだよ」

「見ていたのか、お前――」

「うん」

「別のものの筈がない。わしが、作りあげて、しまっておいたのを、持って来て、渡したのだからな」

「ちがうんだ。父さんがしまっておいたのを、母さんが、別のと、すりかえたんだ！」

庄作の叫びが奔流となって、義寛の脳中で、停っていた思考力を、水車のように勢いよく廻転させはじめた。

凝然として、まばたきも忘れて、伜の必死の表情を瞶めかえしていた義寛は、やがて、

「そうか！　そうだったのか！」

と、唸った。

「河東次め！　わたしの苦心の曲賽をただ取りしたばかりか、女房までも――く、くそっ！　よし！　あいつに、ひと泡ふかせてやる！　あの曲賽と、反対の目の出る曲賽を作って、どこかの渡世人にたのんで、あいつの賭場を、滅茶滅茶に荒してやるぞ！」

「ふむ。すると、これが、河東次がまきあげて行ったのとは、反対の目が出る賽ころなんだな」

狂四郎は、たたみにころがしてある二個の賽ころを指さした。

「そうだよ。父さんは、正月から昨日まで、夜も寝ないで、これを作ったんだ」

「いつの間にか、河東次が、このことをかぎつけていて、出来上るのを待って、子分に、盗み取らせようとしたというわけか」

狂四郎は、賽ころをひろいあげると、義寛の居間に入った。

ところせましと置いてある賽作りの道具を、狂四郎は、あわれなものに眺めてから、棚の片隅の壺皿を把(と)ると、その賽ころを入れて、あざやかな手つきで、伏せて、あげてみた。半目の半、と出た。つぎに、丁目の半、それから、丁目だった。まさしく、前に作ったのとは、逆の目が、正確に、くりかえされる。

狂四郎は、かたわらに立っている庄作を見あげて、やさしく、

「お前は、もうこんなものを作らぬことだな。どんなにすばらしい技術でも、これは、正しい仕事ではない。お前の父さんは、そのむくいを受けたとは思わぬか」

「うん――」

少年は、素直に頷(うなず)いた。

四

その夜――。

姫松の河東次の賭場では、曾(かつ)てない異常な緊迫した空気がたちこめた。

五つ刻(どき)が半をまわって、勝負が酣(たけなわ)となった頃、ふらりと入って来た見知らぬ浪人者が、一刻経(ときた)たぬうちに、膝の前へ、金の山を築いたのである。

不気味だったのは、いかに勝とうが、その彫のふかい青白い面貌(めんぼう)に、なんの表情も動かなかったことである。

客は、無職者(ぶしょくもの)ばかりであった。
九つ刻を迎えた時、客のすべてが、財布の底をはたいていた。
ついに、貸元の座から、河東次が、声をかけた。
「お客人――」
「今夜は、豪儀に目花を咲かせなすったが、どうだろう、わしとひとつ、勝負をやってみなさる気はござんせんか」
眠狂四郎は、冷やかなうす笑いを、目もとに刷(は)いた。
「よかろう――」
実は、河東次がこう出て来るのを待っていたのである。
河東次が、向いの座に、どっかと就くと、狂四郎は、こともなげに、
「一本勝負でいこう。これを全部賭ける」
「見上げた度胸の御仁だ。ようがしょう」
「もうひとつ、条件がある」
「なんでござんしょう?」
「おれは、もうこれ以上、金は欲しくはない。女が欲しい」
「…………?」
怪訝(けげん)な面持(おももち)の河東次の視線を、狂四郎の人差指が誘って、長火鉢(ながひばち)の脇に横坐りになっている黒襟(くろえり)つきの黄柄大格子の縮緬(ちりめん)を着た女を、ぴたりとしめした。義寛の女房だったお稲であ

った。
「その別品を賭けぬか――」
そう云われて、河東次は、一瞬、険しい面色を走らせたが、すぐおさめて、
「承知した」
と、頷き、子分の一人に、「縁起だ。賽ころをとりかえろ」と命じた。
壺振りが、それを受けとって、狂四郎にさし出した。
「おあらため下せえまし」
狂四郎は、右のてのひらにのせて、
――これだな！
と思いつつ、ころころところがしてから、左のてのひらへ、ころんと渡し、かるくにぎって、壺振りの手へかえした。
誰の目にも、それは、ごく自然なしぐさに映った。左のてのひらに移すとみせたのが、巧妙きわまる手爪(てづま)であったことを、誰一人見破る者はいなかった。賽ころは、すりかえられていた。
壺振りが、ぱっと壺皿を伏せるや、すかさず、河東次の口から、
「丁だ！」
と、ほとばしった。
狂四郎は、依然として、まったく無表情だった。

「勝負っ！」
結果は、明白であった。
茫然となった河東次へ、狂四郎の静かな声が送られた。
「女をもらうぜ、親分——」
水をうったように、しんとなった静寂は、一瞬、殺気をはらんだ。
この殺気を擾したのは、狂四郎がのそりと立ったとたんに、お稲が切り裂くように叫んだことである。
「いやです！　親分っ！　あ、あたしは、こんな人のものになるのなんか、いやです！」
恐怖と憎悪をあふらせたお稲の視線を氷のように冷たい眸子で受けとめて、狂四郎は、ゆっくりと、二歩すすみ寄った。
一刹那——。
狂四郎の腰から、白い閃光が噴き、女の悲鳴とともに、鉄瓶がひっくりかえって、もおっ、と灰神楽が舞い立った。
「野郎っ！」
「さんぴん！」
子分どもが、長脇差をつかんで、どっと立つや、
「さわぐなっ！　三下ども！」
と、きめつけた狂四郎の気合は、肺腑をえぐる威圧力があった。

「おれが取った女を、おれがどうしようと勝手だ！　そうではないか、親分——」
お稲は、両の耳を切り落されて、仰向けに、ぶざまに、昏倒（こんとう）していた。
暈（かさ）をかぶったおぼろ月の光をあびて、しろじろと、まっすぐに、どこまでもつづいている東海道のとある路傍に、少年庄作は、父が遺（のこ）した愛馬にまたがって、小父さんの来るのを辛抱づよく待っていた。
やがて——。
右方の河原堤の靄（もや）の中から、まず、ひとつの人影があらわれた。急ぐでもない足どりである。それから、二十間あまりおくれて、こんどはかなりの頭数の影が、かたまってあらわれた。
先の影が、小父さんであることは、庄作には、すぐわかった。
すたすたと近づいて来た小父さんは、笑って、携（さ）げて来た重そうな包みを、鞍（くら）へむすびつけると、
「さきへ行け」
と、云った。
「小父さんは？」
「あの連中と、約束したのだ。逃げたと思われるのがいやでな、困った性分なのだ」
狂四郎は、馬が躍って、蹄（ひづめ）の音を遠ざけてゆくと、おもむろに向きなおり、腰の無想正宗がおこすであろう修羅場（しゅらば）へむかって、しずかに足をふみ出していた。

狂四郎哄笑（こうしょう）

一

東海道の旅は、三つの難所がある。箱根八里、大井川、そして、熱田の宮と伊勢の桑名の間の海上七里の舟渡しである。

宮——桑名は、すこし風波が荒れると、舟は出なくなる。すると、旅人は、佐屋路を選ばなければならぬ。岩須賀、石場、冠守を経て、佐屋に達し、これより三里の間を川舟に乗って、桑名に出るのであるが、これは一度に多勢が渡るわけにはいかぬ。

ところで、かりに風波が荒れなくても、大大名の行列が二組も、ぶっつかると、旅人は、渡船場で、立往生させられる。

今日も——。

宮の舟番所の前には、扇ひらきの紋をぬいた四半の幟（のぼり）が立てられていた。尾州官船待ちのしるしであった。

千浜の鳥居の西にあたる宏壮（こうそう）な屋敷の前には、葵（あおい）の紋を染めた紺地の幔幕（まんまく）が張りめぐらされていた。ここは、西浜屋敷と称（とな）える藩の接待屋敷であった。貴人を迎える用意と知れる。

庶民を通行止めした往還を、急がしく行交うているのは、藩の役人や、本陣、脇本陣の連中ばかりであった。

旅人たちは、脇本陣前に臨時に設けられた木戸口で、役人から、勅使として江戸へ参向の公家が、本日中に桑名より御到着になるから、明朝まで我慢するように告げられて、しぶしぶ、踵をまわさなければならなかった。

そのために――松並木の道中畷は、いつにない夥しい人群だった。

眠狂四郎は、とある小土手の上に、腰をおろして、その足音頻繁な往き来のさまへ、行先に当てのない者の無関心な視線を投げていた。

と――。

背後に、忍びやかな人の気配がして――その気配から、普通の稼業の者ではないことを、狂四郎は、直感しつつ、しかし、知らぬふりをした。

「もし――旦那、失礼でございますが……」

と、声をかけて来た者へ、狂四郎は、前方を見たまま、ずばと云った。

「お前は盗っ人だな」

ほんのちょっとの沈黙があってから、うしろの男は、呟くように、

「背中に、目がついておいでになる。流石は、眠狂四郎の旦那だ」

落着いた声音だった。

狂四郎は、しずかに、首をまわした。

三十五六の、小肥(こぶと)りの、一見商人だった。腰に道中差(ざし)がないのは、旅姿を目立たせないためであろう。当時、平常刀を差したことのない者は、道中差を帯びると、腰が痛くて長旅は出来なかったものである。狂四郎の目には、かえって、その無腰が、旅馴(たびな)れた男としては不自然なものに映った。

「江戸か？」

結城紬(ゆうきつむぎ)に一本独鈷(どっこ)の博多帯が、小意気に似合っていたのである。

「へい——」

「御膝許(おひざもと)の陽(ひ)の目が、眩(まぶ)しくなったというわけだな」

「まあ、そんなところで——」

男は、両手の親指を反らして、土手芝へ突くと、

「向いましての旦那さんには、初の御見(ぎょけん)にござんす。あっしは、江戸無宿次郎吉と申し、世間で鼠小僧(ねずみこぞう)と呼び馴らされる入墨(いれずみ)追放の兇状(きょうじょう)持ちでござんして——」

「くだらぬ仁義はやめて、用件を云え」

狂四郎は、冷たく云いすてて、顔をもとへもどした。

次郎吉は、ちょっと戸惑った面持(おももち)になったが、

「旦那——実は、ひとつ、お願いが……」と、云いかけて、急に、ひくい叫びをあげた。

「おっ！　来やがった！」

狂四郎は、ちらと次郎吉を見やり、その視線の放たれた方角へ、目を移した。

街道を、東から、ひどくあたふたとした様子でいそいで来る浪人者があった。洗いざらしの木綿縞を着流した見すぼらしい風態である。

「旦那！」

次郎吉が、鋭くささやいた。

「あいつ、旦那を捜して来やがったんでさ。旦那をつかまえて、何をたのむか――そいつを、陰で、きかせて頂きます。あとで、お目にかかりやす」

次郎吉の姿が、すっと音もなく消えるのと、浪人者が、狂四郎を発見して、顔をかがやかすのが、殆ど同時だった。

「おお……こ、ここに、おいでてござったか」

持病でもあるのか、息苦しそうに、血の気のない灰色の皮膚に滲んだ油汗を、手の甲でぬぐい乍ら小土手をのぼって来た。

狂四郎は、どこかで見た顔だな、と思ったが、すぐには脳裡に甦らなかった。

「拙者、磯原左内と申す者。お見知り置き下されい」

「お手前は、わたしが、眠狂四郎とご存じなのか？」

「い、いや……御尊名は、存じあげませぬが、お腕前の程は――」

と云われて、狂四郎は、思い出した。

昨夜、この土地の親分姫松の河東次の賭場へ乗込んで、勝ちまくった時、たしかに、この浪人者が片隅にいた。そのあとで、天白川の磧で、狂四郎は、河東次一家十余名を対手にし

て、あっという間に八名あまり斬り伏せたのであったが……その光景を、この浪人者は、もの陰から目撃していたに相違ない。

「お願いがござる。何卒、おききとどけ下されい！」

いきなり磯原左内は、べたりと地べたに正坐すると、平伏しかねまじい必死の態度をしめした。

「わたしの腕を貸せと云われるのか？」

「左様――。拙者の祈願を叶えて下さるは、貴公を措いて、この世に余人はござらぬ！」

「わたしに、何をしろと云われるのだ？」

「明日は初午でござる。すなわち、熱田神宮において、八剣宮大供御調進がござる。おりもよし、京より江戸へ御参向の勅使が、西浜屋敷へお立寄りになるを機会に、往古の遺風をしのんで、勅使饗応規式がとり行われる由。そして、特に、勅使殿の前で、御的射の神事の式の後に、奉納の武術試合が開かれるのでござる。……拙者がお願いと申すのは、貴公に、出場たまわり、是非とも優勝して頂きたいことでござる」

熱田神宮は、日本武尊の草薙の宝剣を祀ってある。織田信長が、桶狭間へ出陣にあたって、当社へ参詣して祈念するや、白鷺二羽、神殿より舞い出て、東方へ飛んだという霊験のことも、あまりに有名である。いわば、武運の神宮である。

歳首の初卯祭において、卯杖卯槌の儀に添えて、奉納試合が、行われるのは、まことにふさわしいといえる。

二

狂四郎は、じっと、磯原左内を見据えていたが、
「わたしに優勝させて……それで、お手前はどうなさる？」
「優勝いたすと、神宝のひとつたる砧手の青磁の花瓶を一個賜ることになり申す。そ、それを、拙者に、お、お譲りねがえまいか？」
左内の顔は、異常なまでの執念をあふらせて、醜くひき歪んでいた。
「その品を手に入れたら、なんの神助がおありだ？」
「ど、どうか、それは、不問に付して頂きたい。そのかわり、お礼は……五百両……いや、千両でも――必ず、違約はいたさぬ」
「失礼だが、お手前が、千両もお持ちとは思えぬが――」
「い、いや――必ず、八幡、誓って、お支払い申す！」
「商取引というものは、手金を打つことになっているが――」
狂四郎が、冷やかにからかうと、左内は、みるみる困惑の色をみせて、瞬時も落着かずに苛々と血走った眼球を動かしていたが、急に、捨鉢な語気で、口走った。
「手金のかわりに……拙者の妻を、貴公の伽に、提供つかまつる！」
狂四郎は、唖然とした。次の瞬間には、むなくそわるくなって、立ち上った。
「お、お願いでござる！　拙者の妻は、美貌でござる！」

「たわけっ！」

一喝したとたん、狂四郎は、ふっと、反対側の斜面に伏せているもう一人の男の気配に、神経が働いた。

この浪人者を狂人と看做すのは、軽率のようであった。鼠小僧と名乗るひと癖もふた癖もある盗賊が、一枚加わっているのである。これには、何か貪欲な秘密がかくされていると考えていいことだった。

しばしの沈黙の後、狂四郎は、云った。

「御案内願おう」

遠山の頂きが残照で燃える時刻、狂四郎は、磯原左内について、陽がかげりはじめた野の中の一筋道を、影法師をうしろに長く引いて、歩いて行った。

林の梢をそよがせ、野面を渡る風が、急に冷えて、音が鋭くなったようである。

狂四郎は、左内のうそ寒げな猫背を眺め乍ら、自分の酔興さ加減に、かすかな自嘲があった。ただ、ここまで来た以上、あとへはひけぬことだった。ずうっと離れてはいるが、鼠小僧次郎吉が、軽捷な無足の術を利して尾けて来ているのである。

ほどなく——。

左内が、狂四郎をみちびいたのは、深い竹藪の陰にあるかなり大きな屋敷であった。建ってから百年以上は経っているとおぼしく、ひどい荒れかたであったが、草葺きの千鳥破風の

入母屋造りの大屋根は、見事なものであった。破風には虹梁を架し、大瓶束を配しているところをみると、曾ては、代官でも住んでいたかと想像される。

母屋の雨戸は、たてきってあった。庭のかなたの別棟の障子だけが、白く、夕陽に映えていた。左内は、いそいで、雨戸を繰って、

「さ、さ、どうぞ——」

と、すすめた。

狂四郎は、苔を踏んで、縁側へ近づき、そこへ腰かけて、こわれた筧をのせた置石のわきに、こまかな黄花をつけている草へ、視線を落した。

——なんという花だったたか？

いつか、どこかで、俳味をおびて、楚々たる、早春の静かさを湛えた風情に惹かれた記憶があった。

「どうぞ、おあがり下されい」

かさねて、すすめる左内を無視して、じっと、花を瞶めていた狂四郎は、

——そうだ。山茱萸の花であった。

と、思い出した。

すると、なぜか、この花をはじめて見たのは、水野忠邦の上屋敷の中庭に、美保代とともにひきすえられていた時のような気がした。武部仙十郎の謀計に一役買って、美保代を犯し、憤怒した忠邦が広縁にあらわれるのを、待っていた静かな朝、かたわらの蹲踞のそばに、こ

の花が咲いていたような気がする。

――思いちがいかも知れぬ。

いずれにしても、こんなところで、狂四郎は、ゆくりなくも、早春の花の中に、ふっと、美保代の俤(おもかげ)を偲(しの)んだのである。

と――。

彼方(かなた)の離れの障子が開いた。とたん――狂四郎は、美保代がそこからあらわれたような錯覚をおぼえて、はっと、眉宇(びう)をひそめた。

沓脱(くつぬ)ぎへ、すらりと、降り立った姿がそっくりといっていいくらい似ていたのである。

女が、裾(すそ)を取って、苔につつまれた延壇(のべだん)を、まっすぐにこちらへ歩いて来るや、狂四郎は、おのれの錯覚を嗤(わら)っていた。似もつかぬ貌(かお)だった。しかし、狂四郎の目を離させなかったのは、凄艶(せいえん)というに足りる美しさをもっていたことである。

「妻は美貌でござる！」と左内が叫んだのは、いつわりではなかったのである。

この見すぼらしい素浪人と、余りにも釣合(つりあい)のとれぬ妻というべきであった。

「おいでなされませ」

作法に叶った一礼をした女が、顔を擡(もた)げる刹那(せつな)、ちらとこちらの人体(にんてい)をさぐろうとして光らせた眸子(ひとみ)に、鋭い棘(とげ)があるのを見抜いた狂四郎は、

――相当な化粧者だな。

と、思った。

「妻の利枝でござる」

座敷に対坐して、あらためて、女をひきあわせる左内は、妙にそわそわとした様子をしめした。それにひきかえて、女は、端然と落着きはらっていた。

やがて、女は、点前をみせたが、それは、型通りの所作から、一歩ふかく茶道の奥義に入ったゆとりのある姿であった。格式ある家に育った者であることを暗示した。

行灯の明りが増してから、半刻も過ぎた頃、終始無言をまもっていた女がひきさがり、つづいて、左内がその後を追った。

左内が戻った時、狂四郎は、同じ位置に、同じ姿勢で、黙然と坐っていた。

左内は、目を伏せて、告げた。

「離れで、妻がお待ち申し上げて居ります」

三

黒い影が、ゆっくりと、延壇を鳴らして、離れへ近づいて行った。

障子が火影に、あかく浮いているが、物音は絶えている。

村里の夜は、まだ五つ過ぎだというのに、もう夜半の静寂がこめている。暮れがたまで、庭の樹々を鳴らしていた風もすっかり歇んでいた。訪問者の足が、沓脱ぎに上ったとたんに、ふっと、灯が吹き消された。

一瞬にして、内も外も、墨でぬりつぶされたような暗黒の世界になった。

訪問者は、しばし、沓脱ぎに立ったまま、動かなかった。障子の内側でも、息をひそめている様子である。

訪問者が、気配をうかがう間が去った。

濡縁を、みしりと踏んで、障子を、すうっと開く。そして、また、用心ぶかく、闇の充満した部屋の中を、じっと測っていたが、そろりと、一足入れた。

迎えた方は、一分も動かぬ。ただ、ほのかな、甘い香を、その肌から送り出しているだけである。

ようやく――訪問者の目が、闇に馴れた。

女は床の中に在った。

訪問者は、障子を閉めて、床に近寄った。

腰を折って、掛具へ手をかけて、そっとめくると、女の匂いは、にわかにつよく、部屋の中へひろがった。

互いに、双眸を大きく闇に瞠いて、あいての顔をとらえようとしているのがわかった。しかし、朦朧と輪郭が滲んでいるだけで、目も鼻も口もしかと見わけられなかった。

不意に、男は、女の上へ掩いかぶさった。

それから――闇は、荒い喘ぎを吐いて蠢く男女をつつんで、かなり長い時刻を移していった。

喘ぎも、ほかの音も、ぱったりとだえてから、さらに、いくばくか過ぎた頃、女が、はじ

めて、ひくいささやきを口にした。
「おねがいです！　左内を殺して下さい！」
「…………」
「貴方様のようなお方を、わたくしは、お待ち申して居りました。……わたくしは、左内の妻ではありません。わたくしは、江戸深川と九州平戸に大きな店をかまえていた海産物問屋の娘でした。父は、唐船やオランダ船をあいてに、大がかりな商いをして居りました。左内は、その用心棒だったのです。……父が、抜荷買いの罪で捕えられた時、左内は、わたくしをむりやり、手ごめにして――とうとう、こんなところへつれて来てしまいました。……わたくしは、左内を心の底から憎んで居ります。いつか、怨みをはらしてやろう、と機会をねらって居りました。……おねがいです！　左内を斬って下さい！」
ちょっとのあいだ、男は、沈黙をまもっていたが、女が急に狂おしげにしがみついて来るや、そうさせたまま、身を起して、
「おれが、左内を殺したら、その報酬は？」
「貴方様に、明日の熱田神宮の奉納試合で、勝って頂くことです。左内は、貴方様が、姫松の河東次とその子分を七人も、またたくうちに斬り仆しておしまいになったと申しました。貴方様なら、優勝なさいます。……そうすれば、わたくしが、一万両、手に入れてごらんに入れます」
「それは、どういうわけだ？」

「賞品として賜わる砧手の青磁の花瓶の中に、わたくしの父が、ひそかに一万両を匿した場所の絵図面が入って居ります。それは、わたくしだけにわかる絵図面なのです」

女の言葉が、おわるかおわらないうちに、突然、外で、かちっと燧石を打つ音がしたかと思うと、障子が、ぽっと灯に映えた。

明りが、満ち汐のように部屋にひろがった。

次の瞬間、女は、異様な驚愕の叫びを発して、撥かれたように、男から、とびはなれた。

意外にも、男は、先刻座敷で会った武士とは、別人ではないか！

いつの間に、すりかわったか——鼠小僧次郎吉が、大あぐらをかいて、皮肉な微笑を泛べていたのである。

外で、蠟燭を燃やしたのが、眠狂四郎であった。狂四郎は、次郎吉を、この離れへ忍び込ませておいて、時刻を見はからって、左内をつれて来たのである。

障子をさっとひき開けた狂四郎は、うしろに佇んでいる名状しがたい形相の左内をかえり見て、

「きかれたか。多分、お手前の御家内は、こういうこんたんではないか、と想像していたが、お気の毒に当った。つまりお手前は、自分を殺す男をさがして来て、女房にあてがったということになる」

左内は、わなわなと唇をふるわせたが、極度の興奮で咽喉がひきつれたか、声を出せなかった。

「女房の操を売るのは、お手前の本意ではなかったろう。御家内の主張したところと察しがつく。それを承諾したお手前の気の弱さは——武士の風上にも置けぬとは云わぬが、殺されたとしても自業自得ということになる。……お互いさまに莫迦をみた。とくをしたのは、この盗っ人だけらしい」

狂四郎が、笑うと、女が、夜叉の凄じさで、つッ立ちあがり、

「ち、ちきしょうッ！」

と、喚いた。

次郎吉が、さっとはねあがって、蹴倒した。

「おい、次郎吉！　その役目は、こちらの御亭主だぜ、お前は、たっぷり愉しませてもらったのではないか。いたわってやるのが、人情だろう。……御亭主が、成敗されるか、ゆるされるか、それは、われわれの知ったことではない」

云いすてて、もう狂四郎は、庭へ降りて、すたすたと歩き出していた。

「旦那！　待っておくんなさい」

あわてて、次郎吉が、あとを追った。

四

狂四郎と次郎吉が、竹藪の外へ出た時、雲が切れて、月光が、靄の野に落ち、おちこちの人家の聚落の屋根や、林や、丘陵を、ひと刷毛ひと刷毛、なでるように浮きあがらせて来た。

突如、寂寞をつんざいて、呶号と悲鳴が、竹藪のむこうからあがった。二人が出て来た家からであることは、いうまでもない。

「やりやがった」

次郎吉が、ひくく、呟いた。流石に、イヤな後味らしい。

「次郎吉、あの女の本当の素姓はなんだ？」

「へい。海産物問屋の娘だなんて、まっ赤な嘘でさあ。……旦那は、万古焼って、ご存じでござんすか？」

「沼波五左衛門だろう」

伊勢桑名の商人で、風流の道にくわしく、点茶を好んで、楽焼を製作するに妙であった。交趾または阿蘭陀の彩色釉画も善くし、自ら窯を、三重郡朝日村小向に開いたが、一切売らずに、愛玩者に頒った。のちに召されて江戸に上り、小梅村に居をかまえて、将軍家の茶器の製作に従事した。薩摩小ひび器に類する一種、釉面に彩画を施した佳品で、それに万古の印を款した。好事家には、千金も安し、とされている。

「あの女は、沼波五左衛門の孫娘でござんすよ」

「ふむ――」

「なんでも、五左衛門は、途方もねえ偏屈者で、陶法を子孫にも伝えなかったてえ話でござんすねえ。面白えのは、その遺言でござんした。なにしろ、桑名きっての長者だから、遺す金は莫大なものでさあ。ところが、金はどこかに匿した、欲しかったら、熱田神宮に奉納し

た砧手の青磁花瓶の中をさがせ、という遺言でござんした。その時はもうその花瓶は、とっくに神宝のひとつになってしまって、大名だって、拝めねえ奥殿ふかくにまつられてしまっている。……なさけなや、指をくわえて、数十年が経っちまった」

「五左衛門の子孫は、あの女ひとりだけか？」

「そうなんでさあ。……ひょんなきっかけから、あっしは、その秘密をさぐり出しやしてね、なんとかして、熱田神宮へ忍び込んでやろうと、ねらっていたところが、奉納試合に優勝したおさむれえに、その花瓶が、くれられるという話じゃござんせんか。あっしもあわをくらったが、もっとあわてやがったのは、あの女でさあ。あいにく、亭主は、やあとうはからきし駄目だときてやがるから……とうとう、あんな、とんでもねえ仕掛を思いつきゃがって、眠狂四郎の旦那をつかまえたところまでは上出来だったが……」

「花瓶の中に、そんな書置が入っていることを知っているのは、あの夫婦とお前だけなのだな？」

「そうだと思いやす」

それきり、狂四郎は、黙って、足をはこんで行った。

「旦那、どうなさいやす？　試合にゃ、出ておくんなさいますか？」

次郎吉が訊いたが、返辞はなかった。

五

翌日は、天は一朶の雲影も置かぬ絶好の祭礼日和であった。

樹齢数百年を閲する森につつまれた熱田神宮境内においては、数千の民衆を蝟集せしめて、御的射の神事式がとり行われた。海蔵門外に、六尺あまりの大的を出し、神官二人、中臈二人、祝部二人――総勢六人が射人となって、荒木の弓に紙で矧いだ白羽の矢をつがえて、天に一筋、地に一筋、的に一筋を射はなつ式があってのち、始められる儀式であった。これが終って、拝殿の南の神楽殿において、太神楽がとり行われた。

勅使は、祭文殿に、前夜献上した神供を下げ、楽人三管の音楽を奏するうちに、廻廊をめぐって、勅使殿の南の透垣にはりめぐらされた幔幕の内に入った。

奉納試合場である。

早朝から、はじめられ、五十六組の試合が終って、いま――申の下刻、決勝をあらそうさいごの二名の剣士が、のこって勅使を待っていた。

衣冠束帯の勅使が、らでん剣をきらめかせ、浅沓を擦って、正面上座の牀几に就くと、びっしりと詰めた尾張藩の侍席も、はるかな下座の足軽組も、ひそと、ざわめきを消した。

その静けさをやぶって、審判の声が、高く、ひびいた。

「直心影流師範　北条弥九郎」

こたえて、南の席にひかえていた武士が、三尺余の木刀を携えて、夕陽がななめに落ちた

玉砂利を、白足袋で踏んで出た。熨斗目の小袖に、仙台平の袴、なめし革の襷を綾どった、六尺ゆたかの大兵であった。年は五十歳をまわっていよう。

つぎに――、

「円月一刀流　眠狂四郎」

と、呼びあげられるや、各所にひくいさざめきが、小波のようにおこった。

人々は、試合に時刻が移るにつれて、勝ち残ってゆく者の中に、奇妙な名まえと、異相をもった黒の着流しの浪人者が必ず入っているのに気がついた。

そして、ついに、北条弥九郎との対戦者として、その浪人者が決定するや、場内は、異様にひき緊った空気が流れたのであった。

北条弥九郎の剣名は、尾張にあっては、絶対的なものとして認識されていたのである。

弥九郎は、直心影流中興の達人藤川弥司郎右衛門の高弟で、その極意たる韜の形（竜尾・面影・鉄破・松風・早船・曲尺）の印可を受けた唯一人の人であった。

直心影流には、左の順序の伝書がある。

霊剣伝。窮理の巻。目録。免許。命剣伝。

弥九郎は、この伝書をことごとく授与されて、師より、その名を一字もらったのである。

この抜群の剣客が、本日の試合に加わった以上、すべての者が、優勝者が誰であるかを区々意見を分ける余地はなかった。

ところが――。

意外にも、まったくきいたこともない浪人者が、颯爽として出現して、北条弥九郎の前に立ちはだかったのであるから、これは、場内に、激しい興奮を盛りあげたとしてふしぎはない。

眠狂四郎は、わが名を呼ばれて、襷もかけぬ平常の姿のままで、借りものの木刀を片手に、あゆみ出た。素跣である。

両者は、二間の距離を置いて相対し、挨拶してから、上座へ向き、一礼した。

審判役は、尾張藩の師範、鹿島神道流の芳賀孤心であった。すでに、七十歳を越えた白髪白髯の神仙的風格の持主である。

弥九郎と狂四郎が、ともに、一足引いて、下肢を八文字にとって、ぴたっと木刀を構えるや、碧縫ふかく合した幽遠の境内に、さっと剣気がみなぎった。

その剣気におびえたか、数羽の白鷺が、羽音あわただしく、虚空へ翔け去った。

弥九郎は、青眼。

狂四郎は、つまさき前三尺に切先を落した地摺り下段。

その構えで——両者は、二基の献灯と化した如く、微動もしなくなった。

間合は、九尺。

ともに、その眼光は、対手の眉間の中点を射ていた。目蓋は細められ、黒瞳は動かず、瞬きもせぬ。

そうして……どれだけの時刻が流れ過ぎたろう。

弥九郎は、恩師弥司郎右衛門のほかに、この世に、かくまでにおそるべき剣の使い手がいたか——と、いま、ひしひしとおのれの実力のおよばざる嘆きを胸中に嚙んでいた。

わが剣が老いたのではない。敵の剣が神秘の魔力を含んでいるのである。

と——。

狂四郎の木刀が、目に見えぬ糸に引きあげられるように、ゆるやかに、円月を描きはじめた。

——弓矢八幡っ！

弥九郎の顔面が、蒼白となった。

九尺の間合から、濛々として立ちのぼる殺気は、凝視する千余の目を眩ました。

ついに——狂四郎は、完全な円月を描き終った。

刹那、弥九郎の切先が、鶺鴒の尾のように、ぴくぴくとはねた。

「やあっ！」

同時に、ふたつの口から、生命の火焰が噴いた。

次の瞬間、両者は、ぱっと、元の姿勢に戻っていた。

ものの十をかぞえる間、両刀はそのまま、その構えを持続していたが、やがて、弥九郎の姿勢が、徐々に、前へのめった。

にぶい音たてて、弥九郎のからだが地上に俯伏した時、狂四郎は、刀を引き、正しく、頭を下げ、正面へも礼を送っておいて、踵をまわしていた。

つぎの日の朝、東海道佐屋路の、庄内川のとある堤の斜面に、狂四郎は、ごろりと仰臥して、後頭で手を組んでいた。
そばで、鼠小僧次郎吉が、目をかがやかせ乍ら、
「じゃ、旦那、拝見いたしやすぜ」
と云って、白布で包んだ品をひき寄せていた。
白布を解き、桐箱の蓋に、『砧手花瓶沼波五左衛門作』と記されてあるのを読むや次郎吉は、ぱんぱんと拍手を打った。
うやうやしく蓋をひらいて、花瓶の口からそろそろと、片手をさし入れた次郎吉は、
「あ、あった！」
と、叫んだ。
だが――。つかみ出した一枚の紙片をひろげたとたん、
「な、なんでえ、こりゃあ――」
と、次郎吉は、拍子ぬけの声をあげた。無言で、それを、狂四郎は、受取った。
達筆に、一行、記して曰く――
『散りはてて跡なきものは花火哉』
突如――。
「はっはっはっはっ」

狂四郎の口から、哄笑（こうしょう）が爆発した。そして、それは、青空へ、高く、遠く、ひろがっていった。

しかし、なぜか、その哄笑の底には、うつろなひびきがあった。

槍と驕姫

一

春の陽ざしが、見はるかす琵琶湖いっぱいにひろがっていたが、寒気を含んだ風は強く、湖面にとがった三角波を立たせ、岸辺の蘆を、西から東へなびかせていた。

ギイ……ギイ……ギイ……

風の唸りの中へ、櫓音をまじえて、いま、一艘の舟が、瀬田の長橋を彼方にのぞむ湖上にこぎ出されていた。

大津へ渡る矢橋舟であった。

乗っているのは、眠狂四郎と鼠小僧次郎吉だけであった。といって、べつに、二人が借り切っているわけではない。

こういう風の強い日は、旅人たちは、よほど行路を急ぐのでないかぎり、矢橋舟を避けたのである。比叡山から吹きおろす疾風——所謂比叡おろしのために、舟が往々覆没の厄に遭うからであった。

「もののふの矢橋のわたり近くとも、いそがばまわれ瀬田の長橋」という歌さえも、『醒睡

笑』という古書に出ているくらいである。

普通、東海道または中仙道の旅は、分岐点たる草津宿から、野路を通って瀬田へ出て、小橋・大橋あわせて百十九間の青柳橋を渡って、大津へ着くことになる。

狂四郎たちも、そのつもりで、堅原あたりまで歩いて来たところを、一人の船頭につかまったのである。

「舟で行ってくれんけえ。明智左馬之介が、絶景かな絶景かな、と扇をひらいて湖水渡りをしたところをよお――」

と、すすめられて、狂四郎もつい、

「よかろう、盗っ人と相乗りじゃ色気がないが、明媚の風景で、お互い性根を洗おうか」

と、承知したのであった。まことに、湖上一里、眺めは絶景であった。

右方に、三上、鏡山、あるいは八幡、長命寺、伊吹の峻峰をのぞみ、左方には、日枝、比良の高嶺、志賀、唐崎の松、堅田ノ浦、真野の入江まで、春の翠黛を湖面にすっきりと鮮やかに映しとって、近江八景随一の勝景を誇っていた。

ところが――。

それを愛でる筈の旅人の方は――狂四郎は、いつの間にか、ごろりと仰臥していたし、次郎吉の方は、草津で買ったうばが餅をもっぱら賞味することに心をとられていたのである。

船頭は、しかし不服もとなえずに、黙々として櫓をあやつっている。

次郎吉は、一個のこらず平げると、

「おう、船頭、不愛想に黙りこくっていねえで、ひとつ、なにか、唄ってみな」

「ふふふ、やらかすか」

船頭は、にやっとして、咳ばらいすると、顎を仰向けた。

「やあんれ、さあ……沖の船頭衆に、さらし三尺、もろうてよう、わしがかぶろか、殿さにやろうか……わしが冠るなら、白でもよいが、殿さにやるのは、白ではわるい……何に染めてと紺屋に問えば、一に朝顔、二に杜若、三に下り藤、四に獅子牡丹、五ついやまの千本桜、六つ紫鹿の子のしぼり、七つ南天、八つ山吹よ、九つ小梅をちらりと染めて、十で殿さの心意気染めた……」

しぶいのどの巧みな節まわしであった。

狂四郎は、視野いっぱいに拡がった高積雲を、見あげ乍ら、いつか、こうして、舟に仰臥して、これとそっくりの模様の空を仰いだことがある、と思った。そうだ、たしかに、いつか、これと同じ雲を——と、狂四郎は、きらめく太陽の縁を彩った真紅の雲の輪へ、じっと眸子を送った。が、どうしても、思い出せなかった。

そのうち——。べつの櫓音が、この舟のものとは一調子迅く、きこえて来るや、

——あ、そうだ！

と、狂四郎の記憶に甦ったのは、十年前、瀬戸内海の孤島に在って、老いたる剣客について剣の天稟をみがいていた時の、ある日の光景であった。

狂四郎は、その日、この琵琶湖上よりもおだやかな青畳の上へ、ひとり舟をこぎ出し、ご

ろりと仰臥して、師が教えてくれた一刀流の極意について、思念を凝らしていた。

師は、狂四郎に、天中地陰陽の五形を授けたのち、その極意――水月の位を工夫せよと命じたのである。新影流は、陽中の陽をもって、上段に遣うが、一刀流は、陰をもって下段に遣う。陽中の陽は、発して陰に落つ。陰中の陰は、発すれば陽の働きもなす。師は、狂四郎に、陰の太刀の法形に、水に映った月を――遠近の差別なく、手にとらんとすれば、波に砕けて散り、そしてすぐまた円をとりもどす流通円転の表象を映せ、と命じたのである。これは、柳生流新秘抄にある月陰、山陰の構えにも通ずる極意にほかならなかった。

狂四郎は、仰臥したまま、木刀をかまえて、かっと、太陽を直視したものだった。当然、目は眩んで、視力はまたたく間に失われた。

この折、師の舟がこぎ寄せられた。

狂四郎は、一瞬、水鳥のように、ぱっと飛び立つと、師にむかって、木刀を、つまさき前三尺に落す下段にかまえた。

眦も裂けよと、双眸を瞠いてはいるものの、太陽に焼かれた瞳孔は、焦点がかすんで師の姿をとらえ得なかった。だが、そのかわりに、その周辺を、はっきりと見てとることが出来た。

狂四郎は、見えぬ師を睨んで、木刀をゆっくりと、大きく、その姿の周囲を――見さだめ得る視界を、円く切ってまわしたのであった。

もとの下段へまわしおわった刹那、

「えいっ！」
五体を怒濤と化して、師の舟へ躍り込んでいた。師は、辛うじて、膝を折って、木刀を鳥居の構えにとり、狂四郎の飛電の一閃を受けとめるや、
「できたぞ！　狂四郎――」
と、叫んだことだった。
円月殺法は、こうして生れたのである。――あの日の空が高積雲であった。

二

おのれの剣の真髄たる円月殺法をあみ出した日の天のすがたを、容易に思い出さなかったことに、苦笑があった。
わが法形は、こうして舟に仰臥して、太陽を睨んでいるうちに、偶然つくりあげられたのではないか。
太陽に対する月――すなわち、陰の構えは、それに象徴を得たのである。
ふと――。
狂四郎が、現実に、意識をもどしたのは、近づいて来る櫓音が、ひとつだけでないのをききわけたからであった。
二艘の舟が、同じ速度で迫って来る。
鋭い神経が、ふっと働いた。敵の気配を直感して、あやまったことのない狂四郎であるこ

とは、もはやことわるまでもあるまい。

「次郎吉、あちら様は、どんな御人態だ？」

「へへへ、旦那、ずいぶん鼻がききやすね。匂って来やしたか。右も左も花ざかりでさあ。近江八景よりも、ずんと目の保養になりやすぜ。まあひとつ、起きてごらんなさいまし」

「女ばかりだというのか？」

狂四郎は眉宇をひそめた。

「とびきりの上物がね……三人ずつ、ならんでいまさあ。どこかのお大名の北の方やら南の方が、腰元つれて舟遊びとしゃれてやがるらしい」

「ふん。やばせ乗る嫁よ娘よ春の風、か――。琵琶湖にも、川獺が化けて出るとみえるな」

呟きすてて、狂四郎は、しかし起き上ろうとはしなかった。

――こっちを、どうしようというのだ？

対手がたが、女ばかりというのが、面白かった。なんでも、お好きなように仕掛けてくれ、である。

二艘の舟は、みるみるうちに、狂四郎たちの舟をはさんで、舳先をならべた。そして、すこしずつ、間隔をちぢめて来た。

いずれも目にまばゆい千代田模様の衣裳をまとい――まさに、次郎吉の云った通り、湖上に、ぱっとあでやかに花が咲いた景色であった。

遠くの岸辺の者の目には、ただ、偶然、三艘が並んだのだと映ったろう。

　また、そうであるかのように、女たちは、まん中の舟へは、一向に目をくれようともせず、湖面に映ずる山容に、芭蕉の遺吟などを偲んでいるかのような風情をみせていた。
　舟と舟との水幅が、四尺あまりにせばまった時――。
　左の舟の、まん中の女がふわりと立ちあがった。
　とたんに、偶然、仰臥している狂四郎と、ばったり視線が合い、女は、にこりとした。
　美貌ではないが、大きな切長の眸子が、正視の対手の意識を一瞬わがものにするだけの冴えた光を湛えていた。
　女は、つと、片足を、舟縁へ掛けた。燃える蹴出しと、白い脛が、ちらとこぼれた。次の瞬間、女は、舟縁を蹴って、ぱっと、その身を宙のものにした。
　小袖の扇面散らしの裳裾が、ふわっと大きく翻るや、真紅の縮緬と、水色の薄絹が、きりきりともつれ舞って、ぱあっと、裳裾のあとを慕って虚空に躍り、滑石のようになめらかな脚を陽光に曝しつつ、狂四郎の頭上を、翔け過ぎたのであった。
「むっ！」
　ひと呻き発して、狂四郎が、身をはね起した時、女は、右の舟の中へ、降り立っていた。
　おどろくべし、二間の空中を、かるがると、とび越えたのである。
　しかも、その右手に携げられた太紐の端の碇形の鉤には、狂四郎のかたわらに置いてあった包箱が、ひっかけられていたのである。それは、狂四郎が、先日、熱田神宮の奉納試合で、北条弥九郎を仆して、賜った万古焼砧手の花瓶であった。

「ほほほほほ……」

一斉に――左右の舟中から、なまめかしい笑い声が、湧き立った。

「眠狂四郎とやら――、羽衣の天女を仰いだ博陸の酔心地は如何じゃ？」

そう云ったのは、右の舟の艫にいる女であった。これが、かしらとみえて、いちだんと高慢げな気品を誇った面立で、ひとり、けんらんたる御簾模様の打掛をまとうていた。まだ、二十代をなかばも越さぬ若さである。

狂四郎の顔面は、たださえの蒼白を、さらに冷たく、血の色を引かせていた。これ程の屈辱をおぼえさせられたのは、近来なかったことである。

ただ、それを、言辞挙措に憤怒としてしめさない虚無の性格が、この場合も、すくいとなった。

「このいたずらは、なんの理由によるのか、おうかがいいたしたい」

「理由などありはせぬ。そなたが、熱田神宮で、当代の使い手北条弥九郎を打負かしたのが、小憎らしかったから、その褒美の品を横取りしてみただけじゃ」

「ただのからかい事と云われる――」

「左様じゃ。不覚であったと、みとめるがよい」

まさに、不覚であった。鰭衣を舞い翻して、下肢あらわに、天女が、空中を飛ぶとは、こちらの意表を衝いたはなれ技というべきであった。

「いかにも、手前一生の不覚。博陸となるより、猿田彦となって、そこの天鈿女命の舞いぶ

りを一人占めしたい了簡(りょうけん)さえ起ります」
「ほほほほ、この娘は、道祖神(さいのかみ)などに祀(まつ)られるのはいやじゃと申して居る」
「いずれの御簾中(ごれんちゅう)かうけたまわりたい」
「知りたくば、あとからかぎつけるがよい」
「承知いたしました。手前も、生来のひねくれ者です。奇抜の御趣向を拝見させて頂いた以上、こちらも、貴女(あなた)様を、ぐうの音も出させぬやりかたで、その花瓶を、取戻させて頂こう」
「みごと、むくいてみるがよい」
問答の間に、舟と舟は、すでに五間余はなれていた。
勝ち誇った二艘の舟が、打出浜めざして遠ざかっていくや、狂四郎は、船頭をふりかえって、
「おい、どうした?」
と、咎(とが)めた。舟は、一向にこぎはじめられなかったのである。
「こん畜生！　びっくり仰天しやがって、櫓を、流しちまやがったんでさ」
そう云う次郎吉も、まだ、宙に躍った白い太股(ふともも)が、目さきにちらついているような惚(ぼ)け面(づら)だった。
「櫓を落した?」
狂四郎は、じろりと船頭へ一瞥(いちべつ)をくれたが、その時は、何も云わなかった。

狂四郎たちの舟が、漁舟に曳かれて、義仲寺前の松本渡口に着いたのは、八景中の瀬田夕照の美観を迎えた七つさがりであった。

突堤へ、舟が横づけされた時、やおら身を起した狂四郎は、陸へ上るとみせかけて、突如、躍って、船頭の胸ぐらをつかんでいた。

「な、なにをするっ！」

形相一変して、ふり捥ごうとする船頭へ、冷然とまなこを据えて、

「それ、その面つきは、武士のものだ。貴様が、あの増上慢の女の輩下であることは、櫓を落す前からわかっていた。この頬かむりを取ったら、面ずれもあるだろう。そういえば、湖上でうたったかぞえ唄は、越後節だったようだな。琵琶湖の船頭が、越後節をうなるとはどうだ。大層上手だったが、本場で仕込んでいるからだろう。察するところ、あれは、越後の大名の女房ということになるのだな」

三

陽が落ちて、湖舟の便のための山伏湖岸の高灯籠をはじめ、浜辺にならんだ水茶屋の灯が、あかあかと、湖面に映る頃あい——。

宗十郎頭巾の眠狂四郎と、盗っ人かぶりの鼠小僧次郎吉は、浜通を過ぎて、京街道へ出ていた。

札の辻より黒門まで、八町と呼ぶ。ずらりと、本陣、脇本陣、旅籠屋、立場茶屋が、なら

んで、店の内外に、人影の動きがあわただしい。京三条橋より発程する五十三次の第一駅であるこの大津には、当時、旅籠屋は、百三十軒もあったのである。

狂四郎と次郎吉が、立ちどまったのは、肥前屋という本陣（またの名を鍋島（なべしま）本陣）の前であった。

幔幕（まんまく）がはりめぐらされてある。

ここが、あの高慢女の宿舎であった。実は、将軍家斉（いえなり）の女（むすめ）高姫というのが、その素姓だったのである。

越後村松の堀丹波守（ほりたんばのかみ）（三万石）に嫁いだが、良人（おっと）に早逝（そうせい）されてからは、自由奔放なくらしをはじめ、なにかの理由をかこつけては、江戸へ、京へ、遊びまわっているもてあまし者であった。

家斉の子女は五十余人あり、この子福が全国各藩に、さまざまな悲喜劇を演ぜしめたことは有名である。加賀前田家では、わずか七歳の溶姫を押しつけられて、その輿入（こしいれ）のために、現在の東大の赤門を造って、大上臈（おおじょうろう）以下八十六人の大奥女中を受入れなければならなかった。そして、百万石の君主は、それらの女中どもから、「加賀守（かがのかみ）、加賀守」と呼びすてにされる屈辱にあまんじなければならなかった。尾州家では、前後四回、養子を押しつけられた。水戸家では逆に、峰姫を斉修（なりのぶ）の簾中に迎えて、毎年化粧料二万両ずつせしめて、財政大いに潤（うるお）った。福井の松平家では、浅姫を貰（もら）って、二万石増封された。そのためにさらに、盲目の民之助を養子にもらわなければならなかった。

高姫もまた、年額三千両百俵の化粧料つきで、越後へ嫁いだのであり、そして後家となってからも、その金は、彼女自身の思いのままに費消することが出来たのである。ところが、昨年、西丸老中水野忠邦は、幕府財政窮迫の諸因を、本丸老中水野忠成に迫って、鋭く追及し、公方子女の化粧料を、悉く廃させてしまったのである。

高姫は、子女のうち、将軍の殊寵を得ている一人であったが、この定めには、抗すべくもなかった。しかし、すでに年中の行事としている、江戸から京への旅を中止することは、断じてきき入れなかった。正月早々、堀藩重臣の渋面をあとに、出府して、公儀からいくばくかせびって、東海道を上って来たのである。

尾張大納言は、高姫の弟であった。ここからも無心すべく、数日逗留した際、熱田神宮の初午祭がとり行われ、彼女は奉納試合場で、眠狂四郎が北条弥九郎を打負かすのを見物したわけであった。

「次郎吉――」

「へい」

「お前は、こうして外から眺めただけで、本陣の内部のおよそは、わかるか？」

「まあね、見当はつきまさあ」

「よし、では、つきとめて来い」

「やりやしょう」

次郎吉は、頷くと、つと、狂四郎から離れて、すたすたと、彫刻絵模様の豊富な唐破風造

りの玄関の前を行き過ぎ、幔幕に沿うて、たちまち、彼方の闇の中へ、姿を没した。
すでにこれまで、八十数カ所の武家屋敷へ忍び入っている鼠小僧であった。

四

「……げに豊かなる日の本の、橋の袂の初かすみ、江戸紫の曙染めや、水上しろき雪の富士、雲の袖なる花の波、目もと美し御所桜、御殿山なす人むれの、薫りに酔いし園の蝶……」
高姫は、本陣上段の間で、脇息に凭りかかって、大名の簾中にあるまじき、長唄を口ずさんでいた。こんどの出府で、こっそり、杵屋六三郎を呼びよせて習った『吾妻八景』であった。
「花の簪を垣間見に、青簾の小舟声高輪に……遥か彼方の時鳥、初音かけたか羽衣の、松は天女の戯れを――」
そこへ、しずしずと、まだ二八にとどかぬ町娘が、盛装をこらして、三方へ絵草紙をのせて、入って来た。
「御簾中さまに、申上げまする。浮世絵又平のざれ絵にござりまする。おつれづれに、お笑い下さりませ」
教えられた口上を、けんめいな声音で、述べて、平伏した。
それは、所謂大津絵で、槍持奴や鬼念仏や瓢簞鯰や犬追座頭を描いたものであった。芭蕉の「大津絵の筆のはじめや何仏」――それであった。

「おお、よく気がついた。そなた、この肥前屋のむすめか？」

「はい」

高姫はじっと、娘を見据えていたが、一瞬、きらりと妖(あや)しい光を眸子(ひとみ)に加えると、

「近うお寄り――」

と、命じた。

おそるおそる、娘が、膝ですすむと、高姫は、すっと片手をのばして、畳についたふっくらとしたその手を把(と)った。

はっと、身をひきちぢめるのを、

「さ、もっと――」

と、引寄せ、いきなり、ぐいと抱きすくめた。

「こんなに、顫(ふる)えていやる。怕(こわ)いかえ？」

「い、いえ……」

「南蛮の作法を教えて進ぜる」

逃げようとする娘の顔を片手へ力を罩(こ)めて、ひきもどし、そのわななく唇(くちびる)へ、唇をおしつけたのであった。

破瓜期(はかき)の女童(めわらわ)には過ぎた豊満な肉づきを愉(たの)しむように、高姫の十指は、頸(くび)を、肩を、胸を、腰を、ぬめぬめとなでさすった。そして、いつまでも、口をはなそうとはしなかった。いじらしく血汐(ちしお)を波うたせて、すべての筋肉をわなわなとうち顫わせる抵抗感が、この不逞(ふてい)の後

家にとっては、この上もない快感のようであった。
「姫さま――」
冷やかな声をかけられてから、高姫は、娘をはなした。
娘は、痴呆と化したように、お辞儀も忘れて、ふらふらと立ち上り、入側（書院）の柱にぶっつかって、ひとよろけしてから出て行ってしまった。
次の間から入って来て、一間の前方へ端坐したのは、湖上の空中を翔けた女中であった。
膝の前へは、狂四郎から奪った包箱を置いていた。
主人の振舞いには、いっさい無関心をよそおうた木彫の面のような表情で、
「花瓶の中を、おしらべあそばしますよう――」
「そうであったな」
高姫も、けろりとした顔で、とり出された砧手の青磁の花瓶を眺めた。
「綱代」
「はい」
「沼波五左衛門が、この花瓶に、遺産の匿し場所の絵図を、本当に封じこめていたなら、手柄をたてたそなたに、どれぐらい礼金をつかわそうか？」
「まず、おしらべなさいませ」
「十万両も匿してあったなら、そなたは、千両や二千両では承知いたすまいの」
高姫は、ほほほほ、とかん高い笑い声をあげた。

高姫は、どこからか、花瓶の秘密をさぐり出して、眠狂四郎から、横取りしたのである。公儀化粧料を断たれた者が起した欲心であった。

「どれ――」

膝の上へ、花瓶をのせて、片手をさし入れて、次郎吉を呆気(あっけ)にとらせ、狂四郎の哄笑(こうしょう)を呼んだ紙片をつまみ出した高姫は、しかし、「散りはてて跡なきものは花火哉(かな)」という皮肉な一句を読んでも、眉毛(まゆげ)一本動かさなかった。

「綱代、花瓶をうち毀(こわ)さねばなるまい」

「は――？」

「知恵のない者なら、これを読んで落胆するであろうけれど、わたしは、だまされぬ。五左衛門は、絵図を粘土の中へ塗りこめて、焼いたのであろう。それを見破った者に、宝を与えるとの深慮に相違あるまい」

と、高姫が、じしんの頭脳の働きを誇らしげに告げたとたん、綱代が、さっと鋭い緊張をみせて、手で制しておいて、一瞬、躍り立ちざま長押(なげし)に架けられた長槍をつかみとるや、

「えいっ！」

女のものと思われぬ凄(すさま)じい気合を発して、天井の一隅(いちぐう)を、ぶすっと突き通した。手ごたえあった。

しかし、ふしぎにも気配が消えている。

凝然と睨(ね)めあげていた綱代は、もう一度、懸声もろとも、べつの一隅へ、穂先をつらぬか

せた。もはや、手ごたえはなかった。

「曲者（くせもの）じゃ！　出あえっ」

絶叫がほとばしり、本陣内は、騒然となった。

やがて——というより、瞬時の後、警衛の人々は、広い砂庭を掠（かす）めて、泉水の彼方の斜庭の繁（しげ）みへ逃げ込もうとする黒影をみとめて、

「やるなっ！」

と殺到して行った。

黒影は、月あかりにははっきりとわかる跛（びっこ）をひいていた。

みるみる追い迫った人々は、しかし、泉水沿いの苑路（えんろ）へ達したとたん、あっと、ひとかたまりになって居竦（いすく）んだ。

跛の黒影をかばって、もうひとつの黒影が、幽鬼のようにうっそりと佇（たたず）んでいたのである。

「逃げろ、次郎吉——」

そう云いすてて、宗十郎頭巾のその影は、たたかいをのぞむが如（ごと）く、ゆっくりと二歩あまり出た。

「何者だっ？　名乗れっ！」

それに対するこたえも、皮肉なものだった。

「大伴（おおとも）の黒主（くろぬし）——」

延喜（えんぎ）のむかし、この大津の浜で、宇多法皇を、国司に代って、軽くいなした六歌仙の一人

の名まえであった。
高姫は、砂庭の中央にあゆみ出ていたが、じっとすかし見て、
「眠狂四郎じゃな」
と、綱代にささやいた。
すぐに——、狂四郎のよく透る声がひびいて来た。
「高姫君に、伝えて頂こう。べつに、花瓶をとりかえしに忍び入ったのではない。ただ、われわれから花瓶を横取りされたのが、どうも、ただのいたずらでないような気がしたので、その御存念の程をたしかめに来たのだ。こちらは、奇抜な御趣向には、同じく奇抜な趣向でおこたえすることにしている——」
云いおわらぬうちに、追手の群から、一人が、白刃を月影に閃かせた。
次の刹那、斬りつけた者は、泉面へ落ちて、高い水音をあげていた。

五

翌朝——辰の上刻。
大名行列が、鍋島本陣から、供揃い美々しくしずしずとくり出した。
石山寺に詣でたのち、京都へむかうのであった。
金紋の先箱につづく、羅紗鞘の鳥毛の鎗のほかに、薙刀を二本立て、着替の衣服を蔵める挟箱の数の夥しいのが、行列の主が女であることをしめしていた。もとより、徒、小人など

よりも、女中の頭数が多くならんでいることも、それを意味していた。
ただ、いずれの顔も、艶を衒い美を競う誇りの色のかわりに、今朝ばかりは、異常に緊張の色をみせているのが、見送る群集の目にも、はっきりと映じた。
眠狂四郎という、奇妙な名まえを持った妖剣の使い手が、いつ、どこから、襲撃して来るか知れないから、かまえて油断すな、と若党、足軽にいたるまで警告を与えられていたのである。
だが、最も懸念された馬場から西荘にかけての松並木も、ぶじに過ぎた。
膳所を過ぎ、粟津松原へさしかかった頃、行列の人々は、
——もう出まい、
と、幾分安堵した。
総蒔絵の乗物が、ちょうど、新堀に架けられた橋を、渡ろうとしたおりであった。
急に、どうしたのか、ぴたりと停止したのである。舁いでいる中間たちが、足をとどめたわけではない証拠は、彼ら自身、怪訝そうに、きょろきょろしたことであきらかであった。
乗物は、意志あるもののごとく、動かなくなってしまったのである。脇に添っていた綱代はじめ、前後の小納戸や徒目付は、不審に堪えぬ面持で、視線を見合わした。なにか、異様な音がしたのは事実である。
ただ、ひとり、おそろしい驚愕で、目を瞠っていたのは、乗物の中の高姫であった。悲鳴をあげなかったのは、気丈なゆえではなく、衝撃が大きかったからである。

一本の素槍が、高姫の膝のまん中から、芽ぶいたように突きあげられて、穂先を、鼻さき一寸のところで、ぴたっととめていたのである。

すなわち、槍は、橋板と乗物の底を縫い貫き、高姫の太股と太股の間をくぐって、びゅっと、膝から噴きあがったのである。

まさに、驚嘆すべき手練の魔技というべきであった。

高姫は、ぎりぎりっと歯を噛みしめると、ふるえる指で、槍の穂の根のくびれに巻きつけた紙片を、解いた。

『空中より攫われたる品を、地下より御返却の段御請求申上候。もし、御拒みの節は、用意のもう一槍が、臀部より脳天まで刺し通すことに相成る御覚悟被下度

眠狂四郎』

高姫は、そっと、窓を開いた。

覗き込んだ綱代が、あっとなり、あやうく叫びを歯裏で怺えた。

高姫が、膝わきに置いた包箱をとって、綱代に渡す。綱代は、それを、かかえて、橋縁へ寄って、そっと、下へおろす。すると、一本の槍が、橋板の裏側から、すっとさし出され、包箱の結目へ穂先をひっかけて、ひっ込む。……これらの動作は、いっさい無言のうちに行われた。

やがて――。

行列は、何事もなかったように、ふたたび、しずしずと進みはじめたのであった。

京の雨

一

大津から京への一里は、山道で、水光山色おのずから、その趣きをあらためる。大谷、追分、横木、四の宮を通って、奴茶屋、藪の下、日の岡を過ぎ、京に入り、蹴上げ、粟田口、白川橋を経て、三条大橋に至るのであった。

妙な旅人心理で、江戸から東海道を十余日の旅程で上って来た人々は、たとえば、鹿ヶ谷方面や鳥辺山方面へ行く目的をもっていても、いったん、三条大橋を踏んでみなければ、気がすまないのであった。

眠狂四郎が、そのならわしを無視して、粟田口から、青蓮院へ通ずるゆるい坂をひろって行ったのは、べつに、ひねくれてみたわけではなく、後を尾けて来ている者を、どのあたりかで、捕えてみる心が働いたからであった。

眉の剃りあとも青い、黒襟つきの角袖半纏を羽織ったその女が、水色の湯文字から白い脛をちらつかせる仇っぽい裾さばきで、尾けて来るのに気がついたのは、蹴上げのあたりからであった。

狂四郎は、ゆっくりと、青蓮院の前を過ぎ乍ら、この人影の稀な通りを、依然として、一定の間隔をとって尾けて来る女の大胆さに、ちょっと感心した。

花曇り、というより、春を通り越して梅雨を迎えたような、へんに肌がじんわりとしめるなま暖かい気候であった。

朝から、いつ崩れるか危ぶまれる空模様であったが、知恩院の前へ来た時、ついに、白い雨の幕が、音もなく、華頂山の方から、さあっと、巨大な山門の屋根をおしつつんで来た。

狂四郎は、べつに足を速めるでもなく、石段をのぼって、楼門の下に入った。

すると、すぐつづいて、後を追って、不敵にも、女が、あわただしく駆けあがって来て、太柱をはさんで、そこに立ったのであった。

日暮れの暗さをもって、音もなく遠くから来た雨は、まるで、この山門をうちたたくためであるかのように、突然、ざざっと凄じい響きをひろげたのであった。道や石段を打つ雨足が、おもしろい程高い飛沫を刎ねあげた。

「おお、ひどい降りだこと――」

女は、両袖を胸であわせて、蹲むと、この強い雨を愉しむような声をあげた。それから、いかにも気さくな調子で、狂四郎へ云いかけた。

「このぶんじゃ、今年は、春はないかも知れませんねえ、旦那」

狂四郎は、黙って、女に彫のふかい横顔をみせたままだった。

狂四郎がこういう場合黙っているのは、おそろしい返辞を用意しているのを意味している

ことに、女は、気がつかなかった。
「こんなに猫の目のように、あたたかくなったり、寒くなったり、降ったり照ったりじゃ、花もとまどって、色をうしなってしまいますねえ」
　そう云ってから、女は、のんきそうに口ずさみはじめた。
　　春は花、いざ見にごんせ東山、色香あらそう夜桜や、うかれうかれて、粋も不粋も物がたい、二本さしても柔らこう、祇園豆腐の二間茶屋……
「おい——」
　不意に、狂四郎が、その唄声をさえぎった。
「色をうしなうのは、桜だけではないだろう。そういうお前自身が、この雨の中に散って果てる場合だってある——とは考えないか」
　薄闇の中に、狂四郎の冷やかな微笑を見て、女は、はじめて、ぞくっと肩をすくめた。
「立ちあがったらどうだ。その恰好は、首を打ち落せと、いわぬばかりだ」
と、あびせられて、女は、怯えた眼眸を狂四郎にあてつつ、あわてて腰をあげようとしたが、膝が、がくがくとなって、半身崩すと、片手を石畳に突いた。
　そのさまを見おろした狂四郎は、
「お前は、度胸はよさそうだが、この役目には馴れて居らぬな」
「…………」
「わたしを尾けるのを、お前にたのんだ奴が間抜けだったということだ。……まず、お前の

名まえと住所をきいておこう。せっかく京へ来たのだ。知合いが一人でも多く出来た方がいい」

二

雨が上った。
反りをうった屋根の甍のあたりまでひくくたれこめていた雲が、急に遠のいて、薄陽さえ差しそうなけはいをしめした。狂四郎は、柱に吸いつくようにして居竦んでいる女に、
「縁があったら、また会おう」
と云いすてて、しずかに、石段に、雪駄を鳴らして、降りて行った。
女は、お春といい、五条大橋を左に折れた高瀬川筋の小路に、地唄と踊の師匠の看板をかかげている、という。狂四郎を尾けたのは、町奉行所の役人の手先になったのではなく、所司代屋敷の留守居役にたのまれた、と白状したのである。
狂四郎は、凝視の眼光が、女に嘘をつかせない自信があった。
所司代屋敷の留守居役にたのまれた、という言葉に、頷けるものがあった。大津で嘲弄した将軍の女高姫が、あれなりに泣寝入りする筈がない、とは、脳裡の隅にあったところである。
高姫が、所司代にたのんで、まず、こちらの宿舎をつきとめておこうとしたのである。そこの留守居役が、町の女師匠を使ったのは、こちらの腕を安く見積った証拠であり、それは、

高姫のたのみ方が、万事を伏せたからに相違ない。警戒する程のことはなかったのである。
狂四郎が、まっすぐに、東大路へむかって歩き出した時、お春は、柱の陰から、走り出て、
「もし――」
と、呼びかけた。
お春は、じいっと見送っているうちに、衝動的に、はげしく惹きつけられる妖しい魅力を、その後姿から、感じたのであった。曾て、おぼえたことのない、名状しがたい疼痛が、胸を走ったのであった。
狂四郎は、ふりかえらず、遠ざかって行った。
やがて、行先のあてのない狂四郎の姿は、八坂神社の前を曲って、祇園の裏通にあらわれていた。
ここの一郭に入ると、急に、空気が活気を帯びて、さまざまの物音が、どれもみな、なまめかしいひびきを含んでいるようであった。綺羅を張った女たちが、褄を高く胸のあたりに取って、水たまりを避け避け、すれちがいの人々へ会釈しつつ行く姿が、仄暗い小路を、眩ゆく彩っていた。
こうした風景は、狂四郎も、江戸の深川で、見馴れてはいるものの、受ける印象は、まるっきり異っていた。ふしぎに、家のたたずまいも、三絃の音も、妓の衣裳も、身ごなしも――この町がかもし出している雰囲気は、都の雅びた匂いをふくんでいたのである。
古きを尚び、由緒を重んずる土地柄が、馬琴が『羇旅漫録』に曰う、洛中半ば皆妓院なり、

の繁栄を、斯様に、洗練された静かな美しいものにしているのであった。

——どこかへ上って、京言葉でもきくか。

と、思いつつ、同じ格子構えの家々の前をゆっくりと辿っていると、人一人やっと通れる程の細露地の出口に、しょんぼり佇んでいた一人の少女が、

「あ！」

と、声をたてた。

視線をそちらへ移した狂四郎は、この自分にむかって大きく目を瞠っている少女に、

「どうかしたか？」

と、やさしく訊ねた。

粗末な身なりで、蘇芳染めの海ほおずきを盛った竹籠をかかえていた。花街めあての呼売りの少女であった。

狂四郎に訊かれると、少女は、すぐ、はずかしそうに俯向いてしまった。

狂四郎は、近寄って、その小さな肩へ手を置くと、

「わたしを見て、なぜ、びっくりしたのだね？」

と、覗き込んだ。

ふたたび、顔を擡げた時、少女は、必死の表情になっていた。

「小父さま！　わたくしの母さまを買うて下さいませ」

気品のある、おっとりした面立の、まだ、十歳になるかならぬの少女が、さむらいの家に

生れた言葉づかいで、そう、云ったのである。唖然としたことであった。
しばし沈黙ののち、狂四郎は、
「そなたは、このあたりで、毎日、そうして、男を呼びとめているのか？」
「いいえ、今日が、はじめてです」
少女は、いまにも泣き出しそうな、怯えた目色で、こたえた。
「そなたひとりの考えでたのむのか？」
「はい――」
少女は、はっきりと頷いた。
「わたしを家へつれて行ったら、母者は、承知すると思うのか？」
「母さまは……このあいだ、いっそ身を売ろうか、とひとりごとを申していました」
身を売るとか、男が女を買うとか、それがどういう意味かは知らないままに、花街を毎日物売りに歩いているうちに、いつとなく、そうしたことが、こんな女たちのくらしをゆたかにしてくれているのだ、と思い込まされたのであろう。
「わたしをえらんだわけをきかせてくれぬか――」
一昨年の夏のこと、狂四郎は、渋谷宮益町の御獄神社の境内で、遊戯中の子供たちから、怯えられ、逃げ出されたにがい経験があった。
その時、脇で眺めていた老人――楽水楼松平主水正から、血の匂う剣気が子供を怕がらせたのだ、と指摘されたものだった。

少女は、黙って、狂四郎の着物の紋を指さした。
「これが、どうした？」
「父さまと同じです」
紋は、竜胆であった。
竜胆紋は、清和源氏の代表家紋と称せられているが、実はそうではなく、寛政重脩諸家譜に記された清和源氏の後裔は一千五百三十二家あるが、そのうちで、竜胆を用いたものは、わずか四十二家しかなかった、という。徳川時代にいたって、坊間画くところの源頼朝、義経の画像に、いずれも竜胆紋が描かれたので、誤られたのである。
武家の紋としては、珍しい方だといえた。
といって、狂四郎が、これを家紋にしていたわけではない。この着物は、美保代がつくってくれたのであり、
「ご紋は、なんでございましょう？」
と、訊ねられて、
「わたしは、家紋のきまった生れかたをして居らぬ。そなたの家の紋を借りる」
と、こたえたのであった。
出来上ったこの着物に、竜胆がついていたところをみると、美保代の家の紋が、そうであったのであろう。
狂四郎は、少女から、父と同じ紋だ、と云われて、ふと、ひとつの直感を脳裡に掠めさせ

た。

「そなたの家へ行こう――」

三

狂四郎が少女について、如意山の麓に沿うた疏水をつたって、南禅寺道から鹿ヶ谷の聚落に入ったのは、すっかり日暮れてからであった。途中で、少女に、夕食をふるまってやったのである。

少女の家は、聚落の中にはなく、廃寺の土塀が長くつづく暗い坂道を辿らなければならなかった。巨樹が空を掩っていたし、竹藪も多く、たださえの暗さが、さらに不気味な気配さえ加えていた。梟も啼いていた。

「そなたは、夜になって、よくここを通るのか？」

と、訊くと、毎晩です、というこたえだった。

狂四郎は、胸にかすかな、痛みをおぼえた。

不幸な子供がいじらしく生きのびて行こうとするのを見せられる時だけ、この虚無の男の心に、熱い血が流れるようであった。

「小父さま、ここです」

少女に、指さされた家は、洩れ灯に透かして見ただけでも荒れかたがひどいが、生垣をめぐらし、庭も広く取った、かなりの構えのようであった。

──不如意な公卿の別荘といったところだな。

と思い乍ら、狂四郎は、少女に、

「母者に相談して来なさい。ゆるしがあれば、あがらせてもらおう」

と、云った。

やって来たのは、少女の母を買うためではない。べつの考えがあってのことだ。勿論、いくばくかの金をめぐんで去るつもりだった。

少女が、駆け入ってから、かなり長い間、狂四郎は、待たされた。

──鼠小僧のやつ、どうしたかな？

足に怪我をした次郎吉を、山科の古寺にのこして来ていたのである。沼波五左衛門の砧手の花瓶を渡して、

「たたき毀して、遺産の絵図をさがし出してみるがいい」

と、云いのこしておいたものだったが……。

やがて、戸が開き、灯影を背負った少女の姿があらわれたので、狂四郎は、近づいて行った。

泣いた痕が、顔にのこっているのを見て、狂四郎は、笑って、

「叱られたな」

「はい──」

少女は、頷いた。

屋内は、きれいになっているというより、空家のように、調度ひとつない、さむざむとした広さだった。

「あちらに……母さまが――」

しめされた廊下を、大股で歩いて行き、灯影のある障子をためらわずに、ひき開けた。

有明行灯の仄ぐらい光の中に、すでに夜具が敷かれ、男ものを直したような唐桟留の木綿をつけた女が、壁へむかって、俯向いて坐っていた。その項の細さが、いたいたしかった。

――病んでいるな。

と、狂四郎は、見てとった。

「おいでなされませ」

女は、すこし膝をにじらせて、顔をそむけたまま、挨拶した。

狂四郎は、わざと意地わるく、女と向いあう行灯の脇へまわった。とたんに、眉をひそめた。

女は、能面をかむっていたのである。小面という、しとやかな表情のものだった。身を売るはずかしさに堪えられないためか、病んで窶れたのをかくすためか――そのいずれでもあろう。

狂四郎は、まず、懐中から、一両小判をとり出して、女の膝の前に投げた。

「これで、いかがだ?」

女は、金額の多さに、おどろいて、能面を擡げて、狂四郎を見た。

「さきに、寝てもらおう」
「は、はい」
狂四郎は、冷たい目で、女が、立って、着物を脱ぐのを、じっと見まもった。意外にも、粗末な上着の下には、なまめかしい緋縮緬(ひぢりめん)の対丈襦袢(ながじゅばん)をまとうていた。たった一枚のこっていた娘時代の品を、いそいでつけたかと思われる。
女が、そっと、床の中に身を横たえるや、狂四郎は、依然として腕を組んだままで、
「わたしが、この一両で買うのは、貴女(あなた)のからだではない。貴女のからだは、一両のねうちはないようだ。買いたいのは、貴女の身上話だ」
と、云った。能面の下に、どんな表情がつくられたか——ほぼ想像がついた。
「お娘御が、今日はじめて京へ着いたわたしを、呼びとめたのも、なにかの御縁だろう。……御主人は、亡(な)くなられたのか？」
女は、こたえるかわりに、身を起そうとした。狂四郎は、それを抑えた。
「……生きて居ります」
「そういう予感がして居った、何処(いずこ)に居られる？」
「捕えられて、所司代屋敷の地下牢(ちかろう)に、とじこめられて居ります」
「所司代屋敷に？」
町奉行所管轄(かんかつ)でないとすれば、国事犯である。
「御主人は、御浪人ですな？」

「はい。長らく備前の閑谷黌で、朱子学の教授をして居りましたが、三年前に、この京に学校建設の企てがございまして、召されて、移ってまいりました」

「左様か——」

幕府将軍制度に対する反撥として、尊皇思想が、漸く目に見えて擡頭しつつある事実を、狂四郎も、知っていた。宝暦年代の竹内式部事件、明和年代の山県大弐事件、そして寛政時代の高山彦九郎の国土浪遊にいたって、朱子学者間に、その信条の一たる春秋尊王の大義を、公然と口にして、幕府御用学者たる林家が、朱子学の根本を歪めたと論難する声が高くなって来ていた。御用学者の中からも柴野栗山、尾藤二洲らの正名論者があらわれて、名分を正すことをはばからなくなっていた。

二百数十年間、踏襲し来った階級制度が、富の配分の均衡崩壊とともに、その弊に禁え得ざる状態となった以上、幕府単本位政権に対する批判が、国典の研究者たちの思想とむすびつくのは当然であった。

もとより、瞭然として倒幕の運動に移ろうとする趨勢こそなかったが、天下の大勢が、潜運默移、尊皇主義に進んでいることは、もはや疑いないところだった。

げんに——。

この正月、江戸に行われた流行唄は、すでに、この機運が、庶民の間にゆきわたっていることをしめした。

菊は、咲く咲く、葵は枯れる

西で轡(くつわ)の音がする
江戸が見たくば、この節ござれ
やがて武蔵(むさし)の原となる

この思想が、幕府に対して、いまはまだ、なんらの妨害も加えず、危害も与えていないとはいえ、幕閣としては、未然に、禍根を断とうとあせるのも、無理からぬところであったろう。

この女の良人(おっと)の朱子学者も、つい、正名論を公言したために、捕えられたに相違ない。

「もうひとつ、うかがっておきたい。貴女の御主人の御姓名だ」

「そればかりは——」

「では、わたしの方から、云おう。当っていなければ、御姓名は、うかがうまい。……貴女の御主人は、もしや、先の所司代太田備中守(びっちゅうのかみ)殿の御縁故ではないか？」

太田備中守資愛(すけちか)——すなわち、美保代の父であった。寛政中の尊号事件に、皇室と幕府の板ばさみになって、切腹して果てた人である。

すると、女は、こたえた。

「太田備中守は、わたくしの父でございます。主人は養子でございます。松尾内記と申します」

「貴女が、備中守殿の……、しかし、備中守殿には、娘は一人しかなかった筈だが——」

「わたくしは、いやしい稼業(かぎょう)の女の腹から生れました」

——そうか！

狂四郎は、肚裡で暗然と呟いた。

——この女は、美保代の腹ちがいの姉であったのだ！

しばしの、重苦しい沈黙ののち、狂四郎は、立ちあがった。

「生きている以上、希望をすてないように心掛けることです」

しずかにそう云いのこして、踵をまわそうとすると、女が、撥かれたように起きあがるや、能面を剝ぎとって、

「もし！　貴方様こそ、太田家にゆかりのあるお人でございましょう？」

と、息せわしく問うた。

狂四郎は、反射的に視線をそむけて、

「いや、無縁です。……ご免——」

さっと、廊下へ出ていた。

四

——どういうひとなのだろう、あのさむらいは？

お春は、床の中で、闇に大きく眸子をひらいて、考えていた。寝つきがいい方なのだが、今夜ばかりは、頭のうちが冴えかえっていた。

所司代屋敷の留守居役から、ただの痩浪人だ、ときいていたが、どうして、じぶんなどの

歯の立つ対手ではなかった。留守居役自身も、どんな浪人者だか、よく知らぬ様子だったので、じぶんなどにたのんだろうが……。

いきなり、花よりもお前の方が散るぞ、と冷笑された刹那の、あの戦慄は、まったく生きた心地もないものだった。

ところが、いまは、あの戦慄を甦らせつつ、ふしぎな、一種の恍惚とした感覚が、四肢をしびれさせる……。

——女なんだねえ、あたしも。

両腕を組み交して、われとわが胸をぎゅっと抱きしめ乍ら、お春が、口のうちで呟いた時であった。

突然、隣室で、かちっと燧石を打つ音がした。

お春は、欄間の透彫に、ぽうっと灯が映えるのを、固唾をのんで見やった。恐怖のかわりに、女の鋭い直感が、あった。

——あのさむらいだ！

まさしく、襖をさらりと開いて、敷居に立ったのは、狂四郎だった。

「縁があったな。泊めてもらいに来た」

最初のせりふが、それだった。

お春は、冷えたからだに、熱い酒がめぐるような、なんともいえない陶酔が全身にひろがるのをおぼえた。

「あたし……たったいま、貴方さんのことを考えていたんです」
自然にその言葉が出た。
狂四郎は、笑って、
「それは、都合がいい。泊めてもらうついでに、明日たのまれて欲しいことがあるのだが、承知してもらえそうだな」
そう云って、お春が起き上ろうとするのを、
「いや、その脇を、すこし空けてくれればいい。作法なしに、家へ忍び込んだのだから、そのやりかたで寝かせてもらおう」
翌日、午すぎ——。
狂四郎は、お春とともに、所司代屋敷の書院に坐っていた。
今日も、陰鬱な曇り空で、広縁から望む奇怪な立石を組んだ枯山水の庭を、また冬が戻って来たかとおもわせる寂寥の影深いものにみせていた。
しばらく待たせてから、入って来た留守居役は、四十がらみの、痩せたひょろ高い男であった。目つきに人の好さがあらわれていて、成程この御仁なら、容易にお春などを追跡者に傭いそうだ、と読みとれた。
「お春、ご苦労——。貴公、眠狂四郎とは、妙な名前だの。……高姫様を大層御立腹おさせ申したようだが、どんな不埒な粗相をしでかしたのだな?」
せかせかした口調で訊ねた。

「つまらぬ武技をちょっと御覧に入れたにすぎませぬ」

「ほ、ほう……どんな武技だな？」

留守居役は、侍女がはこんで来た黒茶碗を把りあげ乍ら、なかば横柄に、なかば好奇の様子をみせた。

「左様——たとえば……」

そう云いかけて、狂四郎は、つと、片膝を立てた。

「えいっ！」

その口から発した懸声は、決して静けさを擾すものではなかったし、留守居役の目にとまったのは、狂四郎の右袖がひらと翻るのだけだった。

脇差を抜いて、納めた——その迅業をみとめる証拠が、どこにもなかったのである。

ただ、わずかに、留守居役は、茶碗を握った右手に、びりりっと神経の顫えを感じただけであった。その一瞬が過ぎたあとにも、自身は、依然として変りなく茶碗を握っていたし、まわりになんの変化も起ってはいなかったのである。

——一体、なんの真似事だ？

そんな面持で、留守居役は、ひとくち飲んで、茶碗を下に置いた——とたん、その茶碗が、真二つに割れて、ころがるのを見て、あっとなった。

無礼を咎める声も出なかった。茫然と、痴呆のように、狂四郎の冷たく冴えた面貌を見まもるばかりだった。

「こういうあんばいに、高姫様の御立腹を買いました」
狂四郎は、にやりとした次には、たちまち、眸子に鋭い光を帯びさせると、
「本日、手前の方からまかり出ましたのは、高姫様へお詫びのおとりなしを願うためではなく、当御屋敷地下牢に拘禁中の朱子学者松尾内記を釈放して頂きたいためです。……これは、お手前様御一存でとりはからい得る、と見て居ります」
と、云いはなった。
留守居役は、生れてはじめてという凄い眼光を射込まれて、はらわたまで凍るような恐怖感で、全身を硬直させた。

五

そんな時刻でもないのに、すっかり闇が降りた鹿ヶ谷の林間の坂を、一梃の駕籠が、のぼって行った。うしろから歩いているのは、狂四郎であった。
坂をのぼりきると、急に、あたりがひらけて、狂四郎は、その家をむこうに見出した。生垣の前で駕籠をとめて、たれをあげた狂四郎は、
「着きましたぞ」
と云って、手をさしのべた。ささえられて、よろめき出たのは、総髪をぼうぼうと乱した正視に堪えぬ土色の皮膚をした人物であった。一年余の苦難は、その年齢さえも不明なものにしていた。

門をくぐってみると、どの雨戸も閉じられていたし、玄関の格子へ手をかけると、鍵(かぎ)がかかっていた。

内記を扶(たす)けて、台所へまわると、水口のさるは、はずしてあった。

屋内は、闇につつまれ、しいんとして、なんの気配もなかった。

「か、かたじけのうござった。ご恩の程は、一生忘却仕(つかまつ)りませぬ」

内記は、勝手の板の間へ腰をおろすと、ひくく頭を下げた。

しかし、どうしたのか、狂四郎は、異様に緊(しま)った面持で、奥の方を見ていたが、不意に黙って、上ると、つかつかと進み入った。

かすかな臭気が鼻孔に入った刹那、いなずまのような直感が、脳裡を走ったのである。

襖をひきあけるや、狂四郎は、ひくく呻(うめ)いた。やはり、それは死臭であった。

一枚雨戸が繰られるや、居間に罩(こも)ったその死臭が、一時にうごいて、堪えがたいばかりだった。

少女は、夜着にくるまって、寝顔そのままだった。その母は、枕(まくら)もとに、膝をしばって、俯伏(うつぶ)していた。

——おそかった！

なぜもっと強く、生きる希望を失うな、と云い置かなかったか、と——はげしい悔いが、狂四郎の胸中に疼(うず)いた。

よろめきつつ入って来た内記が、この光景に、「おおっ！」と驚愕の叫びをあげて、がく

んと膝をつき、いざり乍ら、妻子のそばへ寄るのを、狂四郎は、見まもる勇気はなかった。
「は、はやまったことを！　ゆき！　妙！　……お、おまえたちと……会えないでも……ただ、生きて——生きていてさえくれれば……」
かきくどく内記の一語一語が、矢となって、狂四郎の心臓を刺した。
やがて——。
内記が、ふりかえって、狂四郎を仰いだ。
「おひきとり下さい」
その表情も、声音も、覚悟をきめた者のしずかな色を湛えていた。
狂四郎は、一礼して、居間を出た。
——母娘が、おれに会いさえしなければ、こんなことにはならなかったのだ！
殺したのは、ほかでもなく、この眠狂四郎であった、といえるではないか！
いおう様のない暗澹とした空洞が、心の中に、ぱっくりひらいていた。
外へ出ると、また、雨であった。
濡れるにまかせて、狂四郎は、当所のない足をふみ出していた。

地獄の夜

一

朧ろ月夜であった。
もう五つをまわっていたろうか。眠狂四郎は、東山のふところ深い山道を、しずかな足どりで歩いていた。山科の古寺で、槍傷の療治をしている鼠小僧をたずねて行ってみたのだが、入れちがいであった。次郎吉は、今朝がた、はんたいに、京へ、自分を追って出て行ったあとだったのである。
清閑寺から清水寺へ抜ける道で、松の木がくろぐろと枝を組みかわして、月影をまだらに染めわけた地上に、狂四郎の雪駄のひびきがあるほかは、しんとして、物音はさらに絶えている。
——このあたりを、歌の中山というのか。
狂四郎は、この寂寞とした世界にふさわしいひとつの伝説を思い出していた。
むかし——清閑寺に、真燕僧都という人が住んでいた。ある夕ぐれ、門前に佇んで、行き交う人を眺めていたが、ふと、髪かたちめでたい若い女が、一人行き過ぎるのをみとめて、

にわかに心をうごかされたが、ものを云いかけるべき便りがないので、「清水への道は、いずれでござろうか？」と問いかけてみた。すると、女人は、ちらりと、僧都へすずやかな目をくれて、

見るにだに迷う心の儚なくて誠の道をいかで知るべき

と、云いすてて、春がすみの中に姿を消し去った、という。

歌の中山という地名は、すなわち、この伝説によって起っている。

「待て――」

不意に、松の幹の陰から、ぱっと躍り出て行手をふさいだ人影に、狂四郎は苦笑した。

化人でも結構だから、若い女であって欲しいところであった。あいにく、男で……しかも、月明りにもはっきりとわかるむさくるしい浪人者であった。

目を光らせ、肩を張り、刀の鍔へ指をかけて鯉口を切っている。

狂四郎は、ダラリと両手をたらしたまま、立ちどまって、無言だった。

「合力頼もう！」

浪人者は、あびせて来た。

狂四郎の方は、

――これで武士なのか。

と、あきれていた。抜き打たんずの構えが、まるでなっていないのだ。この腕で、白刃をふりまわしたら、おのれの足でも怪我するのが関の山であろう。

そのくせ、浪人者は威丈高に云ったことである。

「武士は相見互い。しかも、この淋しい夜道に出会ったが不運とあきらめてもらうのだ。町人どもを恐喝するのは、拙者の好まぬところだ」

――顫えているな。

必死の気勢が狂四郎の目に、かえって、この男の善良な人柄を読みとらせた。

狂四郎が、嘲弄するかわりに、真面目に問うてみる気になったのは、そのためであった。

「お手前は、わたしから奪った金を、何に使われるのだ？」

浪人者は、ちょっと黙っていたが、云い難いことを正直にぶちまける堅い気色になって、

「国に飢えた家族が待って居る。手ぶらでは戻って行けぬ」

「お国は、どちらだ？」

「摂津武庫郷だ」

「この京へは、仕官の道でもさがしに来られたのか？」

「そうではない。拙者は、頼山陽先生に傾倒して、上洛したのだ」

「ふむ。つまり、お手前は、山陽に会って、聞くと見るとは大ちがい、その人格の低等下劣に愛想をつかして……それが、きっかけで、自身も、こうして合力するまでに堕落された、というわけですな」

痛いところを、ずばりと刺されたに相違ないことは、浪人者が、かえす言葉を持たないので、あきらかであった。しばしの無言の対峙ののち、狂四郎は、穏やかに、

「家族が待って居る、と云われたが――」
「妻と伜だ」
「心を改めて、帰宅しようとお考えなのだな。この合力を、さいごとし不逞の所業を断つ、と決意されて居る」
「さ、さよう」
「と、まあ、こちらは解釈させて頂くことにする」
狂四郎は、懐中から、財布をとり出すと、さし出した。
浪人者は、受取って、その重さが、ちょっと信じられない様子をしめした。十両はあったのである。
嚇したつもりが、いつの間にか逆に威圧されて、もう殆どあきらめていた矢先に、あっさりと渡されたのが、この大金である。おどろくのが当然であった。
浪人者が、何か云おうとした時、狂四郎はもうすたすたと歩き出していた。
十間あまり遠ざかって、ふりかえってみると、浪人者は、まだ、そこに、ひょろりと立って、こちらを見送っていた。
「御尊名をおきかせ下さい。拙者は、布施和作と申す――」
と、呼んだが、狂四郎は、こたえようともしなかった。
狂四郎が、この浪人者に金をくれたのは、朱子学者松尾内記とその妻子の無慚な末路が脳裡に甦ったからであった。

二

陽が傾き、一望の平野に幾色かの光の彩りが映えた頃、布施和作は、武庫川の堤を急いでいた。堤には、幾本かの桜が、七分ばかりに咲いていたし、のびやかな牛の声が、菜の花畑を渡ってきこえていた。海が視野の果てにかすんでいる。三年ぶりに眺めるなつかしい故郷のすがたであった。

万葉集にある、

たまはやす武庫のわたりに天つたう日の暮れ行けば家をしぞ思う

そんな沁々とした心境であった。

水の涸れた、ひろびろとした砂磧に、数人の子供たちが遊んでいるのを見て、わが子の吾一は交っていないか、とのびあがった顔には、善良な父親の微笑があった。

三年前、妻が哭いて止めるのをふりきって、京へ出た自分の、憑かれたような姿を、まざまざと甦らせて、背筋にうそ寒いものが流れた。――莫迦だった、おれは。心からそう思わずにはいられなかった。

布施和作は、頼山陽の日本外史を読んで、異常な感銘を受け、生涯の師と仰ごうと決意し、師が辿った道を自分もまた踏もうとしたのであった。

伝えきいた山陽の行動は、常人の考えおよぶ埒を越えていた。芸州広島藩の儒官頼春水の長男に生れた山陽は、十三歳で一詩を記して、昌平黌の教官柴野栗山をして嘆賞せしめ、十

八歳で、「楠公論」を草して、平山子龍をして涕泣せしめている。十九歳で、藩の学問所の教官御園道英の女淳子を娶ったが、婚礼の夜、何処かへ姿をくらまして、三更まで帰らず、大酔して門を入るやそのまま、花嫁を見すてて、高いびきでねむってしまった、という。妻帯してからの放埒は凄じく、わが家にいるよりも、新町の堺屋という遊女屋ですごすことの方が多く、父母の説諭もきき流し、妻が怒って夜中実家へ泊りに行っても、平然としていたのである。のみならず、心労を尽した妻が病床に臥しても、さらにかえり見ず、某夜、飄然として脱藩してしまったのであった。

その逃走の模様も、常識をはずれていた。山陽は、西条の宿のあたりで出会った乞食と、衣服を交換して、襤褸の姿となって、福山へ抜けていた。追手たちが、姫路あたりで、乞食の山陽を道行く人に尋ねると、「そういえば、先日、乞食体の者が軍談講釈をして、一銭二銭の路銀を乞うていたが、弁舌の爽やかさ、学識の豊かさ、ただの乞食ではなかった」ときかされた、という。江戸でとらえられた山陽は、轎夫説を休して肩猶重し、慷慨載せ以て還る、という傲然たるていで広島へ引かれ、ただちに、邸内に仕構えられた座敷牢に入れられたが、それを逆に利して、それからの十年間、文壇に飛躍する研精修練を積んだのである。「日本外史」の稿は、この歳月に、大半を書き積まれた。

この履歴は、儒学の途を進む布施和作にとって、この上もない魅力あるものに思われたのであった。

——よし、おれも、妻子をすてて出廬するぞ！

そうしなければ、おのれの志の大をなすことは出来難い、と肚をきめて、京へのぼり、鴨川のほとりの三本木にある「水西荘」に、山陽を訪うたのであったが……。
性峻峭にして、尋常の人を包容する能わず、とはきいていた。しかし、実際に、目で見る山陽の行状のことごとくが、和作を、失望のどん底につき落すものでないものはなかった。
おそるべき吝嗇漢であった。能書の名も世に知られていたために、その依頼は夥しかったが、潤筆料の交渉は商人よりも狡猾で、取立てがきびしかった。屏風、全紙、小切、扇面、それぞれ値段をきめていたが、相手が豪家とみれば、あさましく、ふっかけた。そして、その金がたまると、大阪の商人に預けて、確実な利殖を計っていたのである。
和作は学者というものは、一擲千金、豪放磊落、口に阿堵物を云うを愧じ、居貧平然として、子孫の計をなさず――そこが凡夫とのちがいと信じ、山陽にもそれを期待していたのである。まるで逆だったではないか。加之、良妻賢母のほまれ高い妻の梨影子を、癇癖を爆発させて、三日明けずに殴打するさまは、正視に堪えなかった。下等な職人の酒乱の振舞いとかわるところはなかった。愛人江馬細香と相対しているおりの山陽が、風雅の墨客らしい態度をみせているのを、和作は、ひそかに覗いて、そのあまりの豹変ぶりを、ついに唾棄したのであった。
和作は、憑きものが落ちたように、われにかえった時、自分と同様、日本外史に煽られて上洛し、師の正体を知って絶望して、市井に崩れた武士が、幾人か在るのに気づいた。そして、その連中の中に入って行った和作は、処士横議の取締りに神経過敏になった公儀の詮索

に追いたてられる不穏浪士らしいにおいを身にしみつけていったのである。

――悪夢だった。そう思うのだ！

故郷のふところの中にかえって、遽に、和作は、妻と子が、どんなに自分にとって大切な存在であったかを胸に噛みしめていたのである。

やがて――、わが家の壁が、暮れのこって、しろじろと浮きあがっているのを見出すや、和作の心臓は、きりきりと痛んだ。

門をくぐって、荒れはてた庭を眺めた時、まぶたが、じんと熱くなった。

ひっそりとした屋内は、妻の名を呼ぶ声に、しばらくなんの反応もおこさなかった。

もう一度、大声で、

「ますえ！　ますえは、いないのか！」

と叫ぶと、奥の納戸のあたりから、ひくい咳がもれて来た。老人のものであった。

妻と子としかいない家の筈であった。

和作は、上って、ずかずかと、納戸に入った。

灯を入れて、針仕事をしているのは、紀伊和佐山の妻の実家に三十年もいる下婢であった。

「おお、これは、旦那様。……近頃、とんと耳が遠くなりまして、おゆるし下さいませ」

あわてて、たちあがろうとした。

「ますえは、いないか？」

「え？」

下婢は、きょとんとして、

「奥さまは、旦那様と御一緒に、京でおくらしではなかったのでございますか？」

「なに?!」

愕然となって、和作は、そこへ坐った。

「ますえは、京へ行ったというのか？　いつだ？」

「昨年の暮でございます」

西陣の織屋の番頭という男が、四国からの戻り途とかで、この村に寄って、残りものをさばいた際、ますえが、ふと、期待もせずに良人の姓名を云って、耳にしたことはないかと訊ねてみたところ、ちょいちょいお会いするし、一度はお住居までうかがったこともある、という。祇園の茶屋で、偶然にもその消息をよく知っているという返辞だった。客を招待する祇園の茶屋で、偶然にもその消息をよく知っているという返辞だった。

狂喜したますえが、手紙をたのまれてもらいたいとたのむと、番頭は、いっそのこと、思いきって会いにお行きになっては、とすすめたのであった。

「莫迦なっ！」

和作は、不安と憤怒で、烈しく動悸がうった。その男の名前などどきく必要はなかった。

「誑されて居って！　ますえのおろか者めっ！」

「で、でも……旦那様、京から、奥さまのお手紙が参って居りまして――」

「みせろ！」

受取るのももどかしく、開いてみると、良人にめぐり会えて一緒にくらしていること、良

人の勉学の都合で早急に帰郷出来ぬこと、毎月送金するから子供をしばらく世話して欲しいこと、良人は旅へよく出掛け、自分もついて行くことが多いので、便りをくれるなら、左記宛にして欲しい、そして是非坊やの便りを待っている、と達筆にしたためてあった。

その住所を一瞥した瞬間、和作の全身から、血が引いた。

東石垣　紅葉屋

すなわち、先斗町を加茂川に沿うて下ったところにある茶屋であった。和作のような貧書生などの到底上ることをゆるされぬ遊所であった。「武野燭談」に、石垣茶屋は、河原を見下し崖造りにしたる、四壁金襴緞子にて張り、床をば畳を止して天鵞絨を以てつつみ、天井をば水晶の合天井にして水を湛えて金魚を放ち、障子はびいどろを以て四方は見えて、内は見えぬように構え、珍膳美味を尽し、美婦これを配膳する程に、貴賤共に金次第の遊興放埒なり……と記されてある。

――妻は、売られた！

和作の、手紙を凝視する眸子は晦んだ。それなり、ぶっ倒れて、この衝撃をのがれるために、いっそ意識を失ってしまいたかった。

――どうする？　どうすればいい？

五十両……いや、百両を下らぬ身代金が要るのだ。ということは、もう永久に、妻は、自分のもとに帰って来ないことを意味しているではないか。

このおり――。裏土間に、ばたばたと小さな足音がして、

「ばあや！　おなかがすいた」
と、元気な声がした。七歳になった吾一の声であった。それは、和作の臓腑をえぐる無心な可愛いひびきだった。

三

五日後、和作は、吾一を背負って、手拭いで顔をつつんで、宮川町を抜けて、団栗橋をとぼとぼと渡っていた。右に折れると、東石垣である。午まえだというのに、もうさんざめく絃歌が、川面を渡って来ている。和作は、唇を嚙みしめた。
もとより、紅葉屋の前まで行く勇気はない。ただ、なんとなく、ここまで足を向けて来たのだ。
――金が欲しい！
武庫郷から、そのことだけを思いつめて、京へ舞い戻って来たのである。
「布施ではないか」
すれちがいかけた浪人風の武士が声を掛けた。振りかえると、つい一月前までの仲間の津久田という男であった。腕が立つし、度胸もあり、悪事をかなり重ねていて、あまり公然と白昼往来出来ない身であったが、べつに顔を包んでもいなかった。
「ひどく滅入った様子だが、どうしたのだ？　その子は？」
「伜です」

「いたのか、貴公に――。坊主、腹が空いたような顔をして居るぞ。小父さんが、うまいものを食わせてやろう」

そう云って笑った津久田の顔が、いまの和作には、大層頼もしいものに映ったのであった。

それから一刻あまりのち――。

宮川町の路地奥にある下等なじごく屋の二階で、和作は、津久田のほか三人の仲間たちとさかずきを交していた。吾一は、次の間で、旅の疲れで、ねむっていた。

妙におし黙った、重苦しい空気が澱む座になっていた。

津久田が、突然、「一世一代の押込みをやろうではないか」と云い出し、他の者たちは、堕ちるところまで堕ちたおのれを瞶める暗い面持になったのである。

「いやなのか、お前さん方――」

津久田が、刺すような口調で、沈黙を破った。

「どうせ国には戻れぬ身だ。といって、この京にいても、ゆすり、かたりで、露命をつなぐよりほかはないわれわれだ。それよりも、いっそ、大きく荒仕事をやって、江戸へ飛ぶ――それ以外にのこされた途があるか」

「捕えられれば、獄門だが――」

「そのかわり、成功すれば、千両箱だ。……成功の自信はあるぞ。東姉小路の橘屋に押込むのだ」

そう云われて、皆は、息を呑んだ。

橋屋は、大阪堂島の米市と京都七条の米市を牛耳っている巨商であった。米問屋といっても、実際に正米の売買はせず、帳合で空米を左右するのである。百斛に金一両の差金を出し、一石六分の高下を見る。もし百石買った者が、石価の内銀六分下落すれば、差金流といって、これを失う。したがって、橋屋など少数の米問屋が、相場によって得る金は、莫大なものであった。当時、日本第一の商道を、堂島米市としたのである。

東姉小路にある橋屋別邸は、京都七条の米市の実際上の支配者であった。頼山陽は、この橋屋にたのんで、米相場をやっていたのである。

和作も、山陽の家に寄宿していた時、橋屋へ、使いに行ったことがある。書院の床に、米相場を詠んだ山陽の詩「市声忙覚窮陰日。米価低知列国秋」という頸聯がかかっていたのをおぼえている。津久田は、その橋屋を襲おうというのだ。

「どうだ、どうせやるなら、京阪随一の分限者をやっつけようではないか。万一召捕られても、名が挙がるぞ。……おれは、他の問屋はいざ知らず、橋屋の邸内だけは、炭小屋の在処までしらべあげているのだ。手に唾して、千両箱を取るべし——」

津久田が、そう云った時、まずい顔の私窩子たちがどやどやと入って来た。

「前祝いじゃ。こら、女ども、陽気に三味線をひけい。いま、江戸で流行の毬歌をきかせてやるぞ」

津久田は、立ち上ると、手拍子とって、うたいはじめた。

一つとや、ひとつに捕られて肝つぶし、いっしょに並んで数珠つなぎ

二つとや、ふた親たちは嘆きつつ、百度参りやごまを焚く
三つとや、南の番所へ駕籠で行く、晩には牢屋の提灯で
四つとや、夜ひる内では相談し、ご慈悲ねがいや名主さま
五つとや、いくらも芸者のある中で、わたしらばかりが恥をかく
六つとや、無性やたらにころんだ罰じゃ、ひやめし草履でばったばた

……………………

和作は、じっと、畳の一点を瞶めて、考えていたが、一瞬、——そうだ、よし！
と、ひとつの決意をした。

「えっ？　津久田様たちが、手前どもへ押入られると申されますのか？」
この京の別邸をあずかる橘屋の大番頭は、啞然として目を瞠ったことであった。
和作は、膝の袴を両手につかみしめて、必死の形相だった。かたわらで、吾一が、城のような大きな家を、もの珍しげに見まわしていた。
「明夜丑の下刻——まちがいなく！」
「貴方様が、津久田様たちを裏切るわけをおきかせ頂きましょう」
大番頭は、驚愕を抑えると、疑惑の目つきになった。
「脅しではない。……嘘であればこれに越したことはないが、欺されたと思って、警戒の者を増されることです。津久田は、腕が立つ。必ず、明晩は、屈強の士を集められて……」

「それよりも、貴方様の御本心をおうかがい申しましょう」
和作は、促されて、首を垂れると、しばらくためらっていたが、思いきって、妻が女衒に誑かされて、東石垣の紅葉屋に売られていることを語ってから、
「おねがいでござる！　何卒、拙者に、妻の身受金をお貸し与え下さるまいか！」
と、両手を、畳について、平伏した。
　大番頭は、冷淡な表情になり、
「津久田様らの悪だくみをお報せ下さいましたのは有難うございますが、いくらなんでもその様な大それたことを、まさか、おやりなさろうとは――」
「い、いや！　津久田は、やろうと企てたことは必ずやりとげずにはすまさない人間です。拙者は、よく知って居る！　……こう申しても、信用されないなら、拙者、この伜を人質に置いてまいる。拙者の言葉がいつわりであったら、この伜を一生ただ働きさせて下さってもよい！」
　大番頭は、吾一をじろっと見た。父親に瓜ふたつであった。
　和作は、それから猶、誠意の披瀝に必死になった。大番頭は、ようやく、首をたてに振った。
「よろしゅうございます。このお子をお預りいたしましょう。津久田様たちを首尾よく捕えたなら、まちがいなく百両お渡し申上げます」
「かたじけない。お礼の申上げ様もござらぬ」

和作は、ふたたび、卑屈に、平伏した。

四

次の日の夜、更けて、本能寺裏手の長い土塀に沿った淋しい往還を、津久田を先頭に五人の武士が、黙々として歩いて行った。和作は、しんがりであった。

亭々たる公孫樹が、頭上を掩うて、月光をさえぎる木下闇であった。

――斬り合いになったら、遁走するか、それとも、わざと捕ってしまうか？

わが身の保全について心をとられている和作は、向うから来た者が、すれちがうのにも気がつかなかった。

すれちがった者から、不意に、

「布施和作殿」

と呼ばれて、和作は、ぎょっと、われにかえった。闇を透してみたが、顔の輪郭と、浪人者体であるのが、おぼろに見てとれただけであった。

「お忘れになるとは、失礼だな。まだ十日も経ってはおらぬ」

歯切れのいい声音に、和作は、あっとなった。歌の中山で、十両めぐんでくれて、名も告げずに去った浪人者ではないか。

「お手前は、たしか、国へ――飢えた妻子のところへ帰ると云われたな、嘘であったのか」

ぞっとするような冷たい口調をあびせられて、和作の四肢は凍った。

——ちがうのだ！　わけがあるのだ！

胸の中で、その絶叫があったが、舌は、膠付けになったようにこわばってしまった。たとえ口がきけても、この場合、咄嗟に、事情の説明が出来得る筈もなかった。

「なんだ！」

ずかずかと、津久田がひきかえして来て、

「何者だ？」

と、険しく、和作に訊ねた。

すると、対手は、ひくい笑い声をもらしてから、

「その御仁には、殺気があるようだ。そんな連れと、夜更けにこういう場所を歩いて居られるところをみると……どうやら、こちらは、無駄な合力をしたことになるらしい」

「なんの寝言だ、貴様——」

津久田が、わずかに、左肩を引くや、対手は、たちまち、それを居合の構えと見破って、

「田宮流の末輩か。辻斬で、四、五人は斬ったろう」

と、きめつけた。居合は、抜打ちの勝負で、出口を肝要とする。勝は、鞘の内にある。対手に、抜くぞとさとられては、もはや負である。負とわかって、抜き打たねばならぬところに、居合しか知らぬ者の悲惨な宿命があった。

「ええいっ！」

寂寞の夜気を搏って、津久田の一刀が、真向から、眠狂四郎の頭上へ躍った。

次の刹那、津久田と狂四郎は、その位置を入れかわっていた。

「こやつ！」

「くそっ！」

和作を除く浪人者たちが、一斉に、抜刀して、切先を揃えた時、津久田のからだが、ゆらりとゆれて、公孫樹の太い幹へよろけかかり、ずるずると根かたへ崩れた。

目にもとまらぬ迅業で、無想正宗に、津久田の胴の生血をぞんぶんに吸わせた狂四郎は、地摺りにとって、

「どうする、おい、一番強いのが斬られたのだぜ。かなわぬとさとったら、あとは、手よりも足をつかうのが得策だと思わぬか」

と、あざけっていた。

三人を逃げ散らせておいて、狂四郎は、ゆっくりと、和作にむかって、二歩あまり進んだ。

「う、うっ！」

唸り声とともに、和作は、刀を抜いた。

狂四郎は、葉もれの月光を顔の半面へ受けつつ、白い歯をみせた。

「男らしく往生したいのなら、かかって来い。それとも、まだ生きのびたいのなら、その刀で、髷を落せ、どっちにする。かかって来るか。恩を仇でかえすには恰好の場所だ。尤も、こっちは、信長のように怨まれるおぼえはないから、討たれてやる義理はないのだ」

和作は、そうあびせかけられて、絶望の目晦みを感じた。

津久田が斬られ、三人の仲間は逃げた。橘屋押込みは水泡に帰してしまった。百両手に入れるのぞみは消え去ったのだ。

――こやつに出会したために、おのれっ、畜生っ！

満身を、憎悪と絶望のかたまりにして、

「やあっ！」

と、手負い猪のように盲進した。

狂四郎は、その儚い一撃を躱すと、袈裟がけに、片手斬りの一閃をあびせた。

二度と地べたから起き上らぬものへ一瞥もくれず、刀を鞘に納めて、狂四郎が、歩き出そうとすると、和作が、両手をのばして虚空を掴むようにし乍ら、

「ま、ま、まって、くれ……」

と、かすれた声をあげた。

振りかえった狂四郎は、ちょっと、鋭く見おろしていたが、つかつかと寄って、跼みかかると、着物を皺寄せて傷口をふさいでやってから、抱き起した。

「遺言があるなら、きいてやるぞ」

「た、たのむ！」

五

夜明け――。

針でつついても、ぴーっと亀裂の入りそうな澄みきった静かな空気の中を、狂四郎は、三条から四条へむかって、河原を歩いていた。その背中には、幼い少年が頬をおしつけて、ねむっていた。

布施和作の遺言をきき、おのれの軽率を深く悔いつつ、その足で橘屋へ行き、吾一をとりかえして来たのであった。

懐中が、ずしりと重いのは、二百両の小判があるためだった。

無頼を働くつもりはなく、吾一の身柄だけをひきとるべく行ったのであったが、押込みに備えてかりあつめられていた屈強者たちが十余人、いきなり問答無用と、どっと一時に打ってかかったのに腹が立ったし、また吾一が、大黒柱にくくりつけられているのを見て、急に、気が変ったのである。

土間にあった朸をひろいとって、またたく間に、屈強者たちを一人のこらずたたき伏せてから、大番頭を膝下に拉いで、二百両出せ、とおどしつけたのであった。

——おれという人間は、地獄変相から抜け出して来たように行くさきざきで業を曝しているんだな。

墨汁でも呑んだようなどす黒い血が四肢をめぐっている自己嫌悪に駆られ乍ら、狂四郎は、川岸につらなった桜が、このほんの束の間の森閑とした世界で、いまこそ、人間どもに煩わされずに、いきいきと美しく咲きほこっている景色へ、うつろな遠いまなざしを投げた。

背中の子供の母親がいる紅葉屋は、もうすぐ、そこであった。

阿弥陀(あみだ)ヶ峰(みね)

一

「あすも、日和(ひより)だな」
なんとなく、そう呟(つぶや)いて、眠狂四郎は、静かに暮れて行こうとしている春の空を見あげていた。
いちにち、しっとりとした薄絹の光沢をおびて晴れわたっていた空が、真綿をちぎって抛(ほう)ったような雲の縁だけを微(かす)かに赤くのこして、灰色に変ろうとしていた。
八坂の塔をむこうに望む五条坂（古(いにしえ)の六条坊門の末）の、とあるすすけた家の二階に、狂四郎は、出窓へ腰を下していたのである。五条坂といっても、べつに坂路(さかみち)ではなく、行き着いたところから鳥辺山への登りになっている故(ゆえ)に、この名があった。
階下は、陶磁器を売る店であった。構えこそ薄穢(うすぎたな)いが、主人は、清水焼の名工であった。狂四郎とは、ふるい知己だったのである。昨日、ふらりと立寄って、すすめられるままに、この二階へ泊っているのであった。
ここの通りは、鳥辺山の花見と、清水詣(もう)でで、終日人の波がきれめなく流れていた。殊(こと)に、

今日は、涅槃会と来て、大変な雑沓であった。

孤独なこの男の常で、陽気な賑わいを、自分と関りない世界として眺め下す――この場所が、気に入っていた。

通りの人影がまばらになり、清水寺の石甃から飛び立った鳩の群が、塒につく前のならわしで、羽音高く、夕空に大きく弧を描きはじめたこの時刻になると、空虚であった狂四郎の心中に、暗い業念の雫がしたたって、じんわりとしみわたるようであった。

「旦那――」

下から呼ばれて、鳥影を追っていた視線を移すと、地唄師匠お春の白い顔があった。

「さがしましたよ、旦那――」

二階へ駆け上って来たお春は、うらむように、きらっと黒い瞳を光らせた。この前、別れ際に、何処へ、と訊ねられて、ただ、知りあいの焼物師のところへ行くと告げただけで、住所も教えないでいたのである。

狂四郎は、うすい微笑を浮べて、

「誰かに尾けられていたようだな。お前が、朝からわたしをさがしまわっていたとすると、尾けた方もお前につきあったというわけか。ご苦労な話だ」

狂四郎は、お春を路上に見出すと同時に、その背後を何気ないふりで行き過ぎる一人の町人が、ちらっとこっちへあげた目つきが、あきらかに剣道で鍛えたものであったのを直感したのであった。

「旦那、あたしを疑わないで下さいまし。あたしは、知らないことなんです。あたしは、ただ、所司代屋敷へ呼ばれて、お前は眠狂四郎の隠れ家を知っているに相違ないから、この手紙を渡して来いって、命じられただけなんです」

狂四郎は、お春が懐中から抜き出した封書を受取り乍ら、

「留守居役は、お前を脅したのか？」

とききき、べつだんそうでもなかったという返辞に頷いて、封を切った。

文面は、簡潔であった。

『魚は水にあかず、魚にあらざれば其心をいかでか知らん。鳥は林をねがう、鳥にあらざれば其心を知らず。兵法者は白刃下に身を曝すを欲す、兵法者にあらざれば其心を窺うべからず。汝、真の兵法者ならば、万死の決闘場へ来れ。蟷螂、蟬をうかがえば、野鳥、蟷螂を窺うの危機は八方にあると覚悟せよ。如何に。

親不知』

眠狂四郎殿

そして、付記して、

日時　当月十五日酉下刻
場所　阿弥陀ヶ峰豊国廟址

とあった。

狂四郎は、紙を巻き納め乍ら、

「栄華の夢の址へ葬ってやる、というわけか」

と、呟いた。

平然として眉目(びもく)になんの変化もみせぬ狂四郎を、お春は、不安そうに瞶(みつ)めていたが、

「旦那、何か、悪いことが起るのですか？」

と、にじり寄った。

「なんでもない。……どこか旨(うま)いものをくわせる料亭へ案内してくれぬか。木曾殿(きそどの)は客をじらして飯を食い、だ」

狂四郎は、立ち上って、床から無想正宗(まさむね)を把(と)っていた。

階下へ降りると、主人に、

「あとで次郎吉という男がたずねて来るかも知れませんが、その時はこの手紙を読んでやって下さい」

と云いのこして、外へ出た。

やがて、つれ立って、五条大橋を渡り乍ら、狂四郎は、ひくくはやり唄を口ずさんでいた。

　忍び駒(ごま)にてつい合の手と
　しらぬ調子のかん違い
　糸の切れ目のばち当り
　じれったいでは
　じれったいではないかいな

渋い、冴(さ)えた佳(い)い声に、耳をあずけ乍ら、お春は、なんとなく泪(なみだ)ぐみたいようなやるせな

い気分であった。

二

阿弥陀ヶ峰――。

東山の一峰で、平地を抜くこと約四百尺。この頂上に、嘗て、豊臣秀吉をまつった豪壮華麗な神廟があったのである。

慶長三年八月十八日、秀吉は、六十二歳で薨じたが、その遺言によって、姑く喪が秘された。征韓のため出師中だったからである。近臣は、遺骸を、阿弥陀ヶ峰に密葬した。翌年二月末に発表して、墳塋の兆域をきめ、秀頼は天下の力を尽し、諸侯がその役を扶けて、祠廟を墳上に築き、嶺の西下（今の太閤坦）に本殿、回廊、拝殿、三門、中門、神饌所、神楽舎、馬舎等すべて、日本中に比肩をゆるさぬ大規模なものを完成し、元勲近臣はみなその傍に坊舎を築いて、華を供し、灯を献じた、という。ところが、鎮座十七年を経て、元和元年五月、大阪城陥落して、秀頼が自尽するにおよんで、家康は、二条城に帰るや、秀忠に相談して、俄に、その祠廟をうち毀し、参詣道を塞ぎ、祭祀の礼を絶ってしまったのである。

爾来二百余年間――宏大荘厳な社殿楼門坊舎および石灯は、風雨と盗賊のために、ことごとく倒破してしまって、すでにこの当時には、荒廃の惨状すらとどめてはいなかった。（ちなみに、現在の豊国廟は、明治三十一年三月に修築された）

狂四郎は、この廃址へむかって、指定された酉の下刻がまわった頃、新日吉神社の脇を抜

けて、雑草離々たる小径を、しずかな足どりで辿って行った。

鬱蒼としげった松の間に朧月の光を吸って、夜目にも白く、つややかに咲いた山桜が、ひとひら、ふたひら、狂四郎の孤影へ、花びらを舞い散らせた。

伏兵もあれば謀計もめぐらした万死の決闘場と覚悟してやって来い、と残酷な予告を受け乍らも、狂四郎は、冷静であった。冷静な自己がふしぎでもあり、満足でもあった。

――どうやら、おれの死に場所がえらばれたようだ。

そんな予感もしないではなかったが、他人事のように脳裡を掠めたにすぎない。

東麓から、あるいは瓦坂から、もしくは西の醍醐街道から――径なき山林をくぐって、廟址を奇襲してやろうか、とも考えたが、それをすてて、堂々と、往昔の参詣道を、雑草に埋れた石階礎石をさぐり踏んで進んだのも、おのれの水のようにすずやかな心境へ、ほんのすこしでも卑劣な翳を落したくなかったからである。

ものの一町も登ったろうか――。

急に、幾分の低地となった広い空地へ出た。築地の跡が見える。ここに、一の華表でも建っていたかとおぼしい。

ここから、さらに一町を経て正殿の址に至る、と狂四郎は、あらかじめしらべておいた。

その一町は、月影も地に落ちぬ密林である。諸大名の植えた風致樹が、それだけが生きながらえて、蔚然として半天を掩うているのであった。

狂四郎は、空地の端に立って、洞門にも似た参詣道を、じっと凝視した。

そこからは、まさに一歩一歩が死地である。樹枝一本の陰も敵と思いなさねばならぬ。狂四郎の闘魂をよびさますかのように、突然、その洞門から、ひゅっと吹き出た夜風が、まっこうから襲って来て、いま辿って来た径へ翔け過ぎて行った。一時に、ゆれなびいた樹々が、またひそとしずまる瞬間、狂四郎は、はじめて、凄絶の危機に直面している自分を感じた。殺気をあびて、全神経をひきしめるのとはおのずからちがった五体の微妙な躍動が起ったのである。

殺気をあびて、敵の強さをはかるのには、馴れている。しかし、ただ、月下にくろぐろと聳えた密林を睨んだだけで、卒然として起ったこの名状すべからざる予感は、はじめてのものだった。

——よし！　来い！

いったん、一毛の頭髪から足指の爪にいたるまで、猛然たる闘志を満たした狂四郎は、しかし、そのままふみ出さずに、奔騰する血汐を胸中にあつめ、漲る力を鎮めて、呼吸を深い静かなものにしてから、ゆっくりと、進んで行った。

密林の入口で、

——この歩調で行くか、走るか？

と、一瞬、まよった。

が、すぐ、ひとり苦笑して、常のあゆみをもって、敵中に入った。前衛の備えにおそれて、なんの覚悟ぞや、とおのれをあざけったのである。

暗い。闇に目のきく狂四郎の視力をもってしても、喬木の輪郭さえも容易に見わけ得なかった。

びゅん！

頭上に鳴る弦音へ、狂四郎の腰間から滑り出た無想正宗が、鋭く刃風を合わせた。

矢は、闇の中で、ふたつに折れて、地べたへ落ちた。

それから、およそ二十歩の間、狂四郎を襲ったのは、夜風だけであった。

狂四郎は、依然たる悠揚の歩度で、幽冥の死界を進んだ。

次に――。

「やあっ！」

巨樹も裂けよと、凄じい気合を発して、狂四郎の生命をおびやかしたのは、飛電の一槍であった。

瞬間、狂四郎は、音もなく跳びつつ、槍のけら首を、下から刎ねとばした闇中の一閃を、そのまま、樹間のその敵へ、揩りあげていた。

「ぐっ――」

人間の呻きとも思われぬ奇音が、断続しつつ、地へ落ちた。顔を、顎から額へかけて、まっ二つに割られたのである。

それからまた、さらに二十歩あまり、狂四郎は、その不敵の歩行をつづけた。

行手に、仄かな月明が差した。荒涼の廟址に近づいたのである。

その地点で、狂四郎は、樹上に潜む第三の敵の気配をさとった。

――おれの腕を試している！

その不審を脳裡に、ちらと掠めさせるのと、銃声が、その樹上に轟くのと同時だった。

狂四郎のからだは、鞠のように、葎をころがった。

すると、密林の出口に、月明を截りぬいて、黒影が、ふたつ、浮きあがった。

距離は、五間余あった。

ともに刀を、すらりと抜きはなつと、ゆっくりと、狂四郎に近寄った。

狂四郎は、闇に大きく双眸を瞠いて、その跫音をきいていた。

二個の黒影は、一間半の間隔を置いて、同じく八相に構えて、つまさき摺りに、じりっじりっと、迫った。

その二刀の切先が、充分に狂四郎の首へとどく間合に来た瞬間であった。

仰臥の狂四郎は、その姿勢で、葎に埋れている礎石を、両の踵で蹴って、二黒影の中間へ、ツツツツ……と背をすべらせたのであった。あたかも、背泳者が、足で水際を蹴って、飛び出すように――。

「おっ！」

「しゃっ！」

二黒影が、喚くのも同時なら、刀を振り下すのも同時だった。

が、その時は、すでにおそく――両者の胴は、地上の狂四郎の視野の中央に、隙だらけな

ものとして曝されていたのである。
狂四郎の五体が、しなやかな弾力をこめて、撥ねあがった時、その手には、二刀が握られていた。
同じく胴を断たれた二黒影は、同じく唸りをあげて、俯っ伏した。
狂四郎は、大小二刀を、扇型に開いて、すすっと、密林の出口へ走った。
すでにそこは、十数個の黒影によってふさがれていた。
正面の敵が、渋味のある落着きはらった声音で、
「眠狂四郎、よくぞ挑戦に応じた。けなげだぞ！」
と、云った。
「ふん――。一斑を見て全豹を卜す。お手前がたは、いずれも柳生流をつかうな。ということは公儀直参――御庭番の面々と見たぞ！」
狂四郎は、心憎い余裕をみせて、つと、巨松の幹へ背を合わせた。
狂四郎は、正面の敵の、こちらの二刀に対する構えを見て、柳生流だな、と見破ったのである。柳生流には、二刀に対する秘伝として二具足・打物のふたつの術がある。正面の敵の構えは、そのいずれかを使わんとするものだったのである。
そして、整然たる連繋をたもったその陣形は、これまでに出会したことのないおそるべき強敵の集団であることを、狂四郎に教えていた。
いまこそ、狂四郎は、その円月殺法を含む一刀流絶妙の秘術のことごとくを、渾身にふる

わなければならなかった。

狂四郎は、師より、妙剣、絶妙剣、真剣、金翅鳥王剣(こんじちょうおうけん)、独妙剣の五点の極意を授けられて、その中から、円月殺法を生み出したのである。

いわば、狂四郎は、柳生流の熟達者たちにとって、一度は刃(やいば)を合わせてみたい闘志をそそる対手(あいて)であった。

狂四郎が、乱陣につかう風揚(ふうよう)・乱曲(よれ)・分身(ほっ)の神技は、すでに公儀御庭番のあいだにゆきわたっている。

この神技をはばんで、うち仆(たお)し得るならば、柳生流にとって、たしかに、あらたなる秘術の発明があろうというものである。

何者の命令を帯びたのかは知らず、柳生流の錚々(そうそう)と看做(みな)し得る直参が、これだけ頭数を揃(そろ)えて、狂四郎一人を討とうとするには、たしかに、かかる目的もあったに相違ない。

「とおっ！」

正面の敵が——はたして、打物の秘伝を使って、狂四郎の太刀へ、猛然と仕懸けるとみせて、小刀をうち落さん攻撃に出た。

——と、狂四郎の左手が、ぱっと躍り、小刀は、うち落される間髪の差の迅(はや)さで、白蛇(はくじゃ)のように、敵の胸もとへ、ぐさと食い入っていた。

おのれの迅業を一瞥(いちべつ)する遑(いとま)もなく、狂四郎は、右端の敵にむかって、飛びかかっていた。

「ううっ！」

夜目に黒く、血飛沫を散らせてのけぞる者を、そこに残して、狂四郎の速影は、翻転して、三番目のいけにえの背後へ跳び、向い立とうとする刹那を、

「えいっ！」

と、咽喉から肋骨まで、ずーんと斬り下げていた。

「虎乱を忘れるなっ！」

誰かが叫んだ。

こたえて、数個の黒影が、柳生流独特の虎乱片手斬りをうちはなつべく、狂四郎を軸として、大きく円を描いて駆け回りはじめた。そして、他の者が、その走者を擁護して、圏外に、一定の間隔をとって、上段に構えた。

前後左右、いずこへむかっても、必殺の片手斬りが襲って来るのを知った狂四郎は、しかし、それをおそれるのではなく、この強敵たちへ、わが神技のいくつかを見せてやるぞと——闘志の炸裂に、わが身を載せたのであった。

ぱっと、大地を蹴った狂四郎は、高く空中を飛んで、敵の頭上を越えて、元の位置へ——すなわち、密林の出口へ降り立った。

のちに思えば、その心の驕りが、はじめて、惨たる敗北をおのれに与えたのである。

「来いっ！」

狂四郎が、円月殺法による一颯一死の地摺り下段にかまえるや——。

意外、敵陣は、さっと、後へしりぞいたではないか。

と――、墳塋の址をそこにだけとどめる高い石壁のむこうで（それは、狂四郎の右方二間の場所であったが）ぱあっと火が燃えたと思うや、それが大きく宙を舞って、不意に、壁上へ出現した。そして、狂四郎にむかって、その光を放射したのであった。

龕灯であった。しかも、ただの焔ではなく、火薬がはじけて鮮烈な閃光を散らすしろものだった。

一瞬目晦んだ狂四郎は、この光を避けるための攻撃に、奮然と、うって出ようとした。

その隙をねらって、左方から、たたっと駆け出た黒影が、細長い筒を口にあてると、

「ふうっ！」

と、頬一杯に膨った息を、吹いた。

「――呀っ！」

狂四郎は、顔を仰のけて、半間余、跳びすさった。

――針だっ！

まさしく、二寸余はあろう長針が、水流をはしる若鮎のように、ぴゅぴゅぴゅぴゅぴゅっ……と、つらなって、狂四郎の目蓋に、小鼻に、頬に、唇に、耳朶に、つき刺さったのである。

「卑怯っ！」

思わず、いまだ曾て口にしたことのない悲痛の呻きをほとばしらせて、狂四郎は、次の針の殺到を警戒して、さらに一間あまり、跳びのいた。

それが、不覚というべきであった。

突如――。

頭上から、音もなく降って来たのは、投網(とあみ)だったのである。

三

狂四郎は、中有(ちゅうう)の闇の中を、ただひとり、辿っていた。

――この世と地獄とのあいだにある闇穴道(あんけつどう)だな。

そう思った。地獄にむかって歩いているようである。

――おれは、とうとう死んだのだな。あの公儀隠密どもに敗れたのだな。

そう独語をもらしていた。無念さはなく、何か沁々(しみじみ)とした寂寥感(せきりょうかん)があった。

すると突然、後頭に、があん、と強烈な一撃が落ちた。

他愛(たわい)もなく崩れたからだは、そのまま、果しなく深い潭(ふち)へ、墜(お)ちて行き、……ふっと、意識が、甦(よみがえ)った。

うすく目蓋をひらいた狂四郎の脳裡に、まず働いたのは、

――生きていたのか、おれは……。

それだった。

後頭に、にぶい疼痛(とうつう)があった。投網をかぶって、ころがった時、鉄棒らしい兇器(きょうき)で擲(なぐ)りつけられ、それっきり昏絶(こんぜつ)したのである。

それにしても、奇怪なのは、両手両足を、棕櫚縄(しゅろなわ)で、ぎりぎりにしばられ乍らも、寝かさ

れているのは、なんと——ふんわりと身の沈む柔かい厚い夜具の中であったことである。博多の紫絣黒独鈷に緋縮緬の、豪華な褥であった。

狂四郎は、不審の眸子を、ずうっとあたりに移動させた。

部屋は、広く、くすんで、気品があった。狩野派の山水図を貼った二間の床に、雪柳が、古唐津の壺から、かたちおもしろく咲き出ている。脇の違棚には、鍍金金具が打たれ、松喰鶴蒔絵の唐櫃をのせている。高麗縁の畳は、青々として美しい。柱の下には、大奉書折の上にのせた小香炉から、若草（練香）の香煙が、ひとすじ、まっすぐに立ちのぼっている。

障子に映えた陽翳で、いま、午だと、狂四郎は、知った。

——おれをどうしようというのだ？

狂四郎には、見当もつかなかった。跳ね起きようとすれば、出来ないでもなかったが、縄を解くのは至難と考えられ、狂四郎はじっと動かなかった。

それから、約小半刻経った頃合——。

次の間に、裾を引く絹ずれの音がして、襖が開かれた。

目もさめるようなけんらんたる辻模様の打掛を、ふわっとひるがえして入って来たのは、将軍家斉の女高姫であった。

——そうか！　やっぱり、この驕姫が、おれに復讐するためだったのか！

あるいは、高姫の使嗾によって、隠密団が動いたのではないか、とは想像したことであった。殺さずに、捕えて来たのは、そのためだったのだ。

それにしても、この扱いは、いかなるこんたんか？　それを、これから、しめしてもらえるわけであった。

枕元に立った高姫は、微笑をつくって、

「狂四郎――寝心地は如何じゃ？」

「なぶりものにされる趣向としては上出来だ、と申上げておきましょう」

「相変らず、小憎い口のきき様じゃ。わたしは、あれ以来、もう一度、そなたにめぐり会いとうて、じれて居りましたぞえ」

「手前に惚れたと仰せられる――」

狂四郎は、ずばりと云ってのけた。

すると、高姫は、平然として、

「そうじゃ、惚れました。わたしが会うた男のうちで、そなた程たのもしい男は居りませぬ。……尋常一様の手段では、招き寄せられぬと思うていたところ、さいわい、この京の不穏の浪士どもを取締まるために、江戸より、選りすぐった庭番たちが上洛して居るのをきいて、そなた渡りに舟と使ってみました。……敗れた以上は、いさぎよく観念する男ではないかえ、そなたは――」

「ご随意に――」

冷やかに、狂四郎は、こたえた。

「如何様にされてもかまわぬと申すのじゃな？」

「手前が反抗する時は、逆にこんどは貴女様(あなた)が身動き出来なくなる時だとお考えおき下さい」
「よもや、そなた程の手練者(てだれもの)でも、その縄は解けまい」
「人間がしばったものを、人間である手前が解けぬ筈(はず)はございますまい」
「ほほほほ……それも理屈じゃ。がそれまでは、そなたはわたしの意のままじゃぞえ」
「念にはおよびませぬ。ご随意に、と申上げて居る」
高姫は、さらにたかく笑い声をたてると、まず、打掛をうしろへすてた。緞子(どんす)の丸帯をくるりくるりと解く。薄紅梅大紋綸子(りんず)の留口小袖を、するっと肩からすべりおとす。さらに、白羽二重の下着を脱ぐ。
あとは、燃えたつような緋縮緬の襦袢(じゅばん)いちまいであった。あらわになった肢体の曲線は、肉盈(み)ちて、なやましい豊かさであった。
なんのためらいもなく高姫は、その妖艶(ようえん)の姿を、夜具の中へするすると入れると、片身をしんなりと、狂四郎のからだへもたせかけた。
柔肌(やわはだ)のあたたかさと重みと、脂粉の香と黒髪の匂いと、そして、朱唇(しゅしん)から吐く甘い息が、狂四郎の木石ならぬからだのすみずみまで、染(し)みひろがった。
狂四郎は、敢(あ)えて、目蓋をふさがなかった。
相手の目を——一片の愛情をも持たずに、欲情のみを燃やしている目を、じっと凝視することによって、おのれを抑えようとしたのである。

とは知らず、高姫は、片手を胴へまわし、脚を脚にからめて、豊腰を一捻して、稍々のしかかる姿勢になると、鼻梁と鼻梁が殆どふれんばかりに、顔を近よせて、さも、わが妖媚の瞳孔に、この男の魂魄を吸いあげて、癡のごとく酔わせてやるぞ、といわぬばかりにまたたきもせずに瞶めたのであった。

狂四郎の木彫のような表情は、しかし微塵もかわらなかった。

ふいに――。

高姫は、眦を切った双眸に、するどい苛立ちの光を散らせると、狂四郎の口へ、朱唇を、ひたとおしつけた。

それから……二個の肉体は膠着したまま、数秒をかぞえたろう。

廊下に、

「姫さま――」

と、呼ぶ声が、ようやくにして高姫の顔を、狂四郎の顔から離させた。

「なんじゃ?」

「所司代様、江戸表より御帰洛に相成り、ただいま、書院にてお目通りをお待ちなされて居ります る」

高姫は、ふんと、小鼻をふくらませると、おもむろに起きあがった。

目蓋をとじた狂四郎の面上に、さらに、なんの変化も生じていないのをみとめた高姫は、片眉をぴくっとひきつって、ひくく、

「強情者め！」
と、ののしりすてた。
高姫が、衣服をつけて、出て行くや、狂四郎は、細目をひらいて、鋭い視線を、天井の一角へ、送った。
気配ともいえぬ気配がそこにあるのを、さとったのである。

四

狂四郎が、撓んだ木立が、刎ねあがるように、ぱっと半身を起した時——。
廊下を跫音消して走って来た者が、一呼吸して、障子をひらいた。
綱代であった。琵琶湖上の空中を翔けて、狂四郎から、砧手花瓶を奪った侍女である。
異様に緊張した面持で、すばやく、狂四郎に迫るや、
「貴方を逃がします！」
と、ささやいた。
狂四郎は、その眼眸に光るものが、烈しい嫉妬であるのを読みとった。
「なんの理由によって？」
「わたくしも、一緒につれて行って下さい！」
必死の悃願の色が、高姫に対する嫉妬の色にとってかわるのを眺めて、狂四郎は、自嘲の笑いを口辺に刻んだ。

「おれは、自分が、これ程の色男とは知らなかった」
綱代が、いそいで、縄を解こうとすると、鋭く、
「止せ！」
と、ふりはらった。
「眠狂四郎は、女のお慈悲などは受けぬ。惚れるのは勝手だが、恩きせついでに身柄まで添えられては、こっちが迷惑だ」
綱代の顔が蒼白になった。
凄じい睨みあいが終った刹那、狂四郎の頰が、高く鳴った。
飛鳥のように身をひるがえして、綱代が去ってから、ほんのしばらくして、狂四郎は、天井を仰いで、
「おい、次郎吉――」
と、呼びかけた。
「降りて来い」
こたえて、板一枚剝いで、柱をつたって、降り立った鼠小僧は、にやっと破顔してから、匕首を抜いて、たちまち、狂四郎の身を自由にした。
「旦那、女に横っ面をなぐられたのは、はじめてじゃござんせんか」
狂四郎は、苦笑し乍ら、
「よく、ここだとかぎあてたな？」

「五条坂で、果し状を読んでもらって、宙をとんで、阿弥陀ヶ峰へ行ったら、ちょうど、旦那を駕籠（かご）の中へおし込むところでござんしたよ……。おっと、ちょっと待っておくんなさい」

鼠小僧は、敏捷（びんしょう）な身ごなしで、次の間へ忍び入ったが、すぐに戻って来た。その手には、無想正宗が提げられていた。

「こいつがなけりゃ、旦那は、何処（どこ）へも罷（まか）り通られませんや」

狂四郎は、それを腰に落すと、

「では堂々と、表玄関から出て行くか——」

「それがようがす。あっしも、たったいっぺんでいいから、忍び込んだ屋敷から、大手をふって出て行ってみてえと思って居りやした」

天下無宿の二人連れは、不敵にも、廊下へ出て、悠々（ゆうゆう）と歩き出したのであった。

金髪船

一

お春は、長火鉢に凭りかかり、膝を崩して、紋縮緬の緋色をなまめかしくこぼし乍ら、爪弾きで、古い上方唄を、小声でうたっていた。三下りである。

風という、男になびく柳髪、とけぬ思いの、もつれさえ、しんき辛苦の投島田、いつ元結のねをからみ、丈ながかれと誓いしも、鬢のほつれの、ばらばらばらと、涙に浮くや花の露、花のえにしのかたがたに、せめては、なんと黄楊の櫛、さす月影の夜半の空……

ことばも調子も、おっとりと品よく、縁側に、ごろりと仰臥している眠狂四郎の耳にひびいていた。

すでに江戸では廃れてしまった古い唄を、狂四郎は、所望したのである。

頭上に、つりさげられた籠の中で、鶯が、この唄にあわせて、間を置いて啼くのも、この春の宵の静かなひとときに、美しさを添える興趣であった。

この京は、已に過去の地である。過去の地には、やはり、過去の唄がふさわしかった。狂

四郎は、京に、古きをもとめて来たのである。そして、京は、そのすべてに、むかしのままの美しさがあった。

道を行く婦女の被ぎ姿も床しい品振りであった。髪も、島田と笄をふつうとしていたし、衣袂風装も、くすんだ男のたたずまいを擾す色彩はなかった。書肆に入って浮世草子を手に把ってみれば、元禄時代の様式体裁、文章挿画そのままの再板であった。それよりも、水の清らかさ、古刹の神厳さ――。

狂四郎は、衂られた剣気を洗う地を、ここにもとめて、それは、決して裏切られるものではなかった。左様、つきまとう陰惨の業によって、この京でもまた、幾度か、無想正宗に人命を断たせはしたが、しかし、それも過ぎてしまえば――あるいは、老松一山を閉ざす南禅寺に幽邃の禅味をもとめ、あるいは、東山銀閣寺に泉石の趣きを賞し、あるいはまた絹笠山麓等持院に足利将軍累代の遺影を偲び――暗澹とした虚無を、無心の境に置く場所は、いたるところに在ったのである。

――しかし、この美しい古都も、血で血を洗う無慚な闘争を、果てしなく、くり返しつつできあがっていったのだが……。

そんな想いに、ふっと、とらわれるおのれの気弱さも、この静謐の雰囲気の中から生れたのであろうか、と――狂四郎は、三味線とお春と鶯の一如の音をききつつ、微動もせずにいるのだった。

ふっと――お春が、その音を絶やした。

お春の視線を、狂四郎は、額に感じた。

「もっと、ひいてくれ」

「いや！　……江戸にのこした女のひとのことを想い出しておいでだから――」

お春が、微笑し乍ら云ったおり――。

格子が開いて、男の声がした。

「こちらに……眠狂四郎様と仰言るお方は、おいでになりましょうか？」

お春は、ちょっと警戒の目色になったが狂四郎が平然と仰臥したなりなので、

「いつの間にか、暗くなってしまって――」

と呟き乍ら、立って行った。

障子を開いて、

「どなた？」

と、お春が、首をのぞけるのと、格子の外に立っていた若い男が一歩入ろうとするのと、不意におもてに高い馬蹄のひびきが起るのが、同時だった。次の瞬間――お春は、男の背後を掠め去る騎馬の影を、ちらと一瞥して、何故ともなく、イヤな悪寒をおぼえて、肩をすくめた。

と――突如、

「うっ！」

男が、呻いて、格子にすがった。そして、そのまま、ずるずると、土間へよろけ込んで、

お春の悲鳴をきくやいなや、縁側から、狂四郎が、風のように走り出て来て、おもてにとび出した。
騎馬の影は、すでに、十間の先にあった。それにむかって、狂四郎の右手が躍り、夕闇を縫って、小柄が翔けた。
しかし、振り向きざま、軒の洩れ灯に鮮かな白光を一閃させて、小柄を打ち落した手練ぶりは、狂四郎の舌を巻かせるに充分であった。
それよりも、狂四郎の眼眸を、異様な興味で光らせたのは、払ったその武器についてであった。刀ではなかった。
びゅっと刃風を唸らせる刹那、その抜身はしなやかに撓んで弧を描いたのである。
「旦那！　短剣が――」
お春の絶叫で、土間にひきかえした狂四郎は、俯伏した男の背中に突き刺さっている兇器がまた、珍しい品であることを認めた。
――長崎の見世物小屋で見た唐人の軽業用に類似しているな。
と、思いつつ、狂四郎は、男を抱き起した。
「えいっ！」
と、背活を入れて、
「おい、わたしが眠狂四郎だ。……用件をきこう――」
と、耳もとで叫んだ。

男は、焦点を喪（うしな）った瞳孔（どうこう）を、狂四郎の顔に合わせつつ、絶えんとする生命力を、口をきく努力に集めようとした。

「……た、たか……」

「なに？　たか？」

「たか……ひめ……ひめに……く、くる……くる……を……」

「高姫だな。よし！　高姫にどうした？」

狂四郎は声のない唇（くちびる）のうごきを、鋭く凝視していたが、

「うむ！　くるすだな——十字架を、高姫に？　……そうか、わかった、高姫に呉（く）れた十字架を——何？　とりかえすのだな？　とりかえして、どうするのだ？　何？　るし？　るしや？　るしやとはなんだ？　おい？　るしやとは？」

狂四郎は、そこまでききとって、眉宇（びう）をひそめ、息絶えたからだを、土間に横たえた。

——海の男のようだな。

冴（さ）えた眸子（ひとみ）をその死顔へ落した狂四郎は、ふと、その想像が働き、いそいで、腹を巻いた晒（さらし）の中をさぐった。

はたして——。

真白に磨（みが）かれた鮫皮（さめがわ）の財布の中からあらわれたのは、次の書状であった。

江戸深川備前屋船、千弐百石積督郷丸

楫取（かじとり）　藤之助

右者公儀租米及び小物成（山林・藪沢・湖海・河川・三草〈藍・紅花・麻〉四木〈桑・漆・楮・茶〉及びその他）の船載漕運の業に就かしめ、特に御廻米中、浅草倉庫御廩米扱いを命じ、勘定吟味役直轄下に置かる。

勘定奉行　押印

——成程、こいつは、どうやら謎が読めそうだ。

狂四郎は、にやりとした。

幕府は、知行のない直参に対して、廩米をもってその家禄を給していた。俗にいう蔵米取である。それが行われるのが浅草倉庫であった。ここの直轄は、蔵奉行が当り、そして、その支配は、勘定奉行である。したがって、この廩米を運搬する船は、各地の浦役人の取調べなどはねつける権力を持っていた。すなわち、船底に、何を積んでいようと、勝手だったのである。

狂四郎は、久しぶりに、宿敵備前屋の名まえを見出したのである。

督郷丸が、抜荷を積んでいることは、もはや疑いを容れぬところだった。その密輸船の楫取であるこの男が、公儀庭番に知己を持っていて、何かの機会に、眠狂四郎の素姓やら、使う妖剣の凄じさやら、そして、将軍家斉の女高姫との間にまき起した争闘などを、きき知ったとしても、あながち、不思議はないのである。

「旦那！　い、いまの怪しい男は、また、やって来るでしょうか？」

お春が、不安そうに訊くと、眠狂四郎は、こともなげに、

「なに、こちらから出向くのだ。おれという男は、ものの一月ものんびりとは暮せないように、生れついて居るらしい。寝ころんで居れば、むこう様で、早く食いついて来い、と餌をなげてくれる」

二

湯殿――。

四隅に据えられた燭台が、湯気の中に、ぼうっと滲ませた灯を、ゆらゆらとゆらめかせるたびに、およそ五坪もあろう広い板敷から板壁へかけて這った陰影が、大きく動いた。それは、浴槽に沈んだ女のおまたがえしの黒髪の影法師であった。

凝った湯殿であった。当時、大名屋敷の湯殿は、浴槽の下を焚いて湯を沸すのではなく、湯と水を、大きな玄蕃（桶）で運んで、加減を整えるのであった。だから、どんなに造りを凝ることも可能なわけであった。欅板の浴槽は、板敷の上へ据えつけてあったのである。

こんどは――灯がゆらいだのではなく、黒髪自身が動いて、湯音とともに、その裸身があらわれた。

ほんのりと湯気に溶けた赤い明りの中に、水滴をしたたらせる白い柔肌は、玉を展べたという形容そのままの豊妍さを誇っていた。くるりと、こちらを向いた。その顔は、高姫のものであった。

ざざっと湯をこぼし乍ら、ゆっくりと膝をあげて、槽縁をまたぎ越した高姫は、湯酔いの軽いあくびをもらしてから、ものうげな所作に、一種の妖気をただよわせつつ、ながながと、板敷へ横臥して、肱杖へ上気した頬をのせた。

そのすがたは、浮世絵師に、玉を偸み香を窃ませて、ひそかに入魂の筆をふるわせてみたい画題であった。

なめらかな肌膚は、練絹で掩うた凝脂のようにつややかな光沢をおびて、芬郁として芝蘭の香気でもただよわせているようであった。ふくよかな素腕、肩につづいて、胸にならべた桃顆ふたつから、くびれた胴、腰へかけて、ほのかな紅をふくんで豊かに描く曲線は、宛然春雪に掩われた丘陵をおもわせる。この妖しく美しいわが肉体を、いとおしむように、高姫が、のびのびと大きく拡げた太股をそっと愛撫しようとした時――。

突然、玻璃戸が、すうっと開かれた。

高姫は、すこしの狼狽もみせず、五指を下腹から胸へむかってすべらせ乍ら、

「綱代か――」

と、問うた。こたえはなかった。

「誰じゃ?」

やおら、視線を、戸口へ移したとたん、高姫は、撥かれたようにはね起きた。

うっそりと、そこに佇んでいるのは、黒衣痩身の浪人姿だったのである。

「狂四郎!」

その呻きへ、冷やかにおっかぶせて、
「手前が、痴漢でないことは、貴女様の方が先刻御承知の筈です。無断でここへ入りこませていただいたわけは、ほかにあります」
そう云って、狂四郎は、左手に握った品をさし出した。真珠をつないだ数珠に付けられているのは金の十字架であった。
「これを頂戴いたしたく参上いたしました。湯浴のほかには、常時身につけておいでだろうという推測が、この非礼になったとお思い下さい」
「狂四郎！　そなたは、鼠賊になり下ったのか！」
「貴女様が切支丹に改宗されたと宣言なさる勇気がおありなら、手前も、盗っ人の汚名に甘んじてもよろしいが、あいにく、手前をえらんだ依頼者の口上は、貴女様からとりかえしてくれ、ということでした。どうやら、貴女様は、もの珍しさに身につけておいでなさるだけのことだと考え、これは、ひとまず、もとの持主におかえしいただこうと存じたまでです」
「もとの持主とは、何者じゃ？」
「それが、手前にも、まだわかって居りませぬ」
高姫は、ゆっくりと立ちあがると、せせら笑って、
「そなたは、海を渡って、えうろっぱへでも行こうと云やるのか？　その十字架の数珠は、船ではるばるはこばれて来た品じゃぞえ」
「左様であろうと手前も考えます。が、その持主もまた、はるばるこの国へやって来たとい

う想像も、あながち、突飛だとは申されますまい。……貴女様に、これを献上した者は、督郷丸の船長と存じますが、如何に？」

将軍の殊寵を得ている高姫に、備前屋が、輩下の督郷丸船頭に命じて、珍奇の品を賂するぐらいのことは、狂四郎には、容易に想像がついたのである。

急に――高姫の顔が、妖しい微妙な媚を刷き、そしてその媚を、白い裸身ぜんたいの息づかいにしめした。

「そんなもの――そなたが欲しければ、取るがよい」

ゆらりと一歩進むや、両腕をさしのべて、狂四郎の肩をとらえた。

仰向けて近寄せる顔には、もう恍惚とした陶酔の表情がつくられていた。翠羽の眉を心もちひそめ、まぶたを半ばとざすかわりに、朱唇をひらいて、皓歯をこぼし乍ら、この一瞬の官能の疼きを、熱い息にして吐いてみせた。

その息が、狂四郎の口にふれたとたん――。

高姫の、面相が、一変した。

媚はかき消え、眉宇に苦痛の色が走り、口腔の奥に、にぶい唸りを発した。狂四郎の拳にあて落されたのである。

ぐらりと崩れかかった全裸体を受けとめた狂四郎は、冷たい苦笑を泛べて、板敷へ、そっと仰臥させた。

――風邪をひいても、おれの責任ではなさそうだ。

それでも、親切に、高麗縁の八畳敷から、豪奢な衣裳をかかえて来て、その上へふわりとかけてやり、玻璃戸をきっちり閉めておいて、悠々と立去って行った。

三

その夜更けて、騎馬二騎が、夜目にも白く砂塵を蹴たてて、伏見街道を疾駆して行った。

夜がしらじらと明けた頃は、淀堤の千両松を経て、橋本へさしかかっていた。枚方、守口を過ぎて、大阪に入った時は、陽がさしそめていた。

二騎が行き着いたのは、安治川口の八幡屋新田の、海を望む人家の聚落の中であった。狂四郎と鼠小僧次郎吉だった。

船頭の家へ入って、夜を待ち、月の昇る時刻、万年橋下に着けさせておいた小舟に乗り込み、次郎吉が漕ぎ、狂四郎が指図した。

広い掘割を縫って、末広橋をくぐって、左へ——。

天保山は、この年出来たばかりであった。先年、新見正路が大阪町奉行となって、この縁岸が屡々水害を受けるのを見て、人民たちを懇諭して、安治川浚渫の土砂を南岸に積んで、百余間の防波堤を出したのである。岸頭は、丘陵状に盛りあげられ、頂上に、高灯籠が建てられ、船舶入港の標識となったので、目標山と呼ばれていた。

風は凪ぎ、波静かな宵であった。

「旦那、どれです？」

石崖(いしがけ)に沿うて漕ぎ乍ら、次郎吉が訊(たず)ねた。この長い石崖の内側が、碇泊(ていはく)場になっているのであった。幾艘(そう)かが、くろぐろと、うずくまっている。

「あの一番大きなやつだ」

目標山にちかい、入江の石崖がきれたあたりに、どっしりと横たわっている舫船(もやいぶね)を、狂四郎は、指さした。昼間、しらべておいたのである。次郎吉は、小舟を、その船の腹へすり寄せると、

「旦那、お一人で、大丈夫でござんすか？」

一緒に昇りたそうな口ぶりだった。

「仆(たお)すのに厄介(やっかい)な敵は、どうやら、一人だけらしい。船頭以下は、ものの数ではない。いざとなれば、無限に広い逃場所が、足の下にある」

不敵な言葉を吐いてから、狂四郎は、手真似(てまね)で、投げあげろと命じた。

次郎吉は、先に鉤(かぎ)の手のついた細引を、ひゅうっと宙に躍らせた。忍び込みの修練を積んだ腕に狂いはなかった。

狂四郎は、細引をぐいとひっぱって、ぴいんと張ってみてから、

「こんどは、土産はないぜ、次郎吉」

「御冗談を——。生命(いのち)を大切になさいまし」

次郎吉は、狂四郎が舷腹(げんぷく)に足をかけて、するすると、身軽く昇って行くのを見送り、細引がなげおとされるや、

「鼠小僧がお株を取られたってえかたちだ」
と、呟いて、艪を摑んだ。この時、
「誰だ？」
と、鋭い声が降って来た。船櫓の上の見張りが叫んだのである。
「けっ、くそっ！」
と、次郎吉は、舌うちして、屹っと見あげた。
刹那——船櫓のてすりから、ぐらっとよろけ出た黒影が、さかしまに落下するのが見えた。
狂四郎に、小柄を飛ばされたのである。
次郎吉は、舷から、海へ、どーんと抛り出される死体を眺めて、
「ふん。雉子も啼かずば撃たれまいに、か——なんまいだ」
と、呟きすてて、艪をあやつりはじめた。
船の男たちが、橋舟にすし詰めになって、酒気と放歌を海面にまき散らし乍ら、町から戻って来たのは、それから一刻も過ぎていたろうか。狂四郎は、船が留守になっていることもしらべておいたのである。
督郷丸は、夜明けがた吹きはじめた丑寅の風に、帆をあげた。

四

ギイ、ギイ……ギギギ……ギイ、ギイ……ギギ……

かんまんに、一定の韻律（リズム）を織って軋（きし）る船音のほかは、胴の間でひらかれている博奕場（ばくちば）からの壺（つぼ）振りの掛声が、時たま、つたわって来るだけの、ひっそりとした船内であった。

眠狂四郎は、賄（まかない）室にすっと忍び入り、水甕（みずがめ）から柄杓（ひしゃく）でひとすくいして、咽喉（のど）をうるおすと、板壁とみせかけた仕切戸を、つと開いた。

奥は、広い板の間であった。蓬窓（あかりまど）が黒い布で掩われていて、暗いが、狂四郎の目には、そこに積まれた荷が、悉（ことごと）く、外国製品であると映った。

まさしく――近寄って見れば、梱包（こんぽう）された品々には、それぞれ、鉄砲、ぎやまん器具、時計、阿片（あへん）、砂糖、鼈甲（べっこう）、織物、等々と記してあった。そして、とある包みに、「厦門（アモイ）」という烙印（らくいん）があるのを発見して、

――そうか。

と、ひとり合点した。

厦門は、広東（カントン）香山県の南海に突出した一大商港である。明（みん）の嘉靖（かせい）年中（わが天文（てんもん）頃）、ポルトガル人が来て、明朝に請うて、この地を得て、ここに城邑（じょうゆう）を建てて、交易の大利を営んで以来、東洋一の繁盛殷富（いんぷ）を誇っている。イギリス、フランス、イスパニア、ポルトガル、オランダ、天竺（てんじく）、アメリカが、この港に、宏大（こうだい）な商館をかまえているのであった。日本の勇気のある商人が、大がかりな抜荷買いをやるとすれば、厦門に船を走らせるのが一番の捷径（はやみち）だったのである。

と――。

狂四郎の眸子が、急に、鋭い光を加えて、片隅の葛籠(つづら)へ注がれた。微(かす)かな気配が、その葛籠の中にあるのを、直感したのだ。

ゆっくりと、それへむかって、迫ろうとすると——。

賄室に跫音(あしおと)がして、次の瞬間、狂四郎の姿は、とある大きな荷の陰へ沈んでいた。

仕切戸を開いて、のそっと入って来たのは、羅紗(らしゃ)の長衫(ちょうさん)をまとった唐人であった。丸い帽子のうしろから、三組に編んだ長髪を背へ垂らしている。

蓬窓の掩いをはらって、西に傾いた赤い陽の箭(や)をさっとあびた顔には、無慚(むざん)な切傷の痕(あと)が幾すじも刻まれていた。窪(くぼ)んだ眼窩(がんか)からはなたれる光は、異様なまでに冷たかった。

狂四郎は、唐人が、その葛籠の蓋(ふた)へ手をかけるのを偸(ぬす)み見て、

——やっぱり、あの中だったな。

と、自分の直感の正しさを知った。

唐人が、蓋をひらいて、小声で、何か云いかけて、長衫のかくしからぬき出したパンをさし出したが、中にひそむ者が動くには、稍々(やや)間があった。

煌(きら)とかがやく金色が、まず、狂四郎の息を詰めさせた。それは、ゆたかに波うった金髪だったのである。

ついで——浮きあがったその容貌(かんばせ)は、狂四郎に、幻影かとわが目を疑わせる神秘な、清浄な、繊細な、——えもいえぬけだかさを、憂愁の色につつんでいた。

われにもあらず、狂四郎は、脈搏(みゃくはく)の迅(はや)く高く鳴るのをおぼえた。

双眸には、湖水の底の幽幻な青い色が湛えられていた。細く通った鼻梁には、観世音の崇高な誇りがあった。唇には、芙蓉の花の優美さがあった。そして、それらをつつむ輪郭は、典雅の香をただよわせ、黒天鵞絨の長衣が、その肌の蠟色を、きわだたせた。

――これが、この世のものか！

心に叫んだ狂四郎は、ふと、幼き日に、母からそっと見せられた一枚の聖画の記憶を甦らせた。

それは、頭上に円光をいただき、幼いきりすとを抱いた、白衣をまとえる聖母まりあ像だった。あの清浄な慈母の容貌が、ここに再現している！

だが――狂四郎の魂を、恍として眩惑させたのは、ほんの数秒であった。

唐人が、何か早口に告げるや、金髪の美女は、ふいに、烈しい憎悪の色をみなぎらせて、何か鋭い語気で切りかえしたのである。そのなまなましい表情が、狂四郎を、はっとわれにかえした。

――おどろくな、狂四郎。どんなに美しかろうが、べつにとらえ様のない天女ではない。泣きも笑いもする生きものだ。

そう、わが胸に云いきかせた。

その時、恰度、唐人の矢庭な行動が、狂四郎に、狂四郎本来の立場を確認させた。

いきなり、女を抱きすくめて、口へ口を合わせようとする唐人のうしろから、曾てこうした場所にいくたびも使った狂四郎の、歯切のいい冴えた口調が飛んだ。

「おい、あいにくだが、ここに一人、邪魔者がいるぜ」

愕っとなって、ふりかえった唐人の形相は悪鬼に近いものだった。

「きさま！　ねむりきょしろう！」

「妙な訛語呂で呼ばれると、寒気がするぜ。……しかし、藤之助という水主を殺った手際は、見事だったとほめてやる。おちつけ！　ここは狭いし、美人もおいでだ。第一、お前さんは無腰ではないか。勝負は、上で、堂々とやろう」

狂四郎が、そう云いはなった声を、たまたま、賄室へ酒を取りに来た水主がききつけて、戸を開いて、あっとなり、あわをくらって胴の間へすっ飛んだ。

狂四郎は、冷然たる態度を変えず、袂から、金の十字架をとり出すと、異国の美女へさし出した。

「おお！」

美女は、歓喜を全身にしめして、それを受取って、膝まずくや、神に感謝の祈りを捧げた。

はっと気づいて、不審げに、狂四郎を仰いだのは、それからあとのことだった。

狂四郎は、隙あらば身を翻して武器を摑み把りに走り出ようとねらう唐人へ、みじんも油断のない目をくばりつつ、

「藤之助は――あそこへ昇った。わかるか。藤之助ははらいいそだ」

と、蓬窓に映る夕焼空をゆびさした。

その意味を読んだ美女の口から、悲痛な叫びがしぼり出た。

——この女の味方は、藤之助ただ一人だったのだな。

藤之助が、この美女に魂を奪われていたことは、疑う余地もないのである。あるいは、この美女もまた、藤之助に心をゆるしていたのではなかろうか。

しかし、そのことをたしかめるのはもはや無駄（むだ）であったし、そのひまもなかった。船頭以下全員が、どっと馳（は）せつけて来たのである。

「さわぐな！　おれを眠狂四郎とおぼえておけ！」

機先を制した一喝（いっかつ）が、一同を、森（しん）としずまりかえらせた。備前屋の輩下である彼らの頭上へ、眠狂四郎の名は、雷鳴となって落ちたのである。

五

その直後——。

夕雲の一端を裂いて、茜色（あかねいろ）の光の帯が、幾条（すじ）か、斜めに垂れる督郷丸船上において、異様の真剣試合が行われた。

唐人が、凄切（せいせつ）の形相を、潮風になぶらせて、右半身の構えで、右手に摑んで突き出したのは、両刃細身の洋剣であった。けだし、この男は、厦門あたりで、白人からフェンシングを学んだものであったろう。

もとより、狂四郎としてははじめて接する剣法であった。それは、イタリー流の積極攻勢を旨（むね）とする、擬勢（ファント）・突手（アタック）・切返し（リポスト）の電光の如（ごと）き波状繰返しであった。

狂四郎は、突かれるままに、ゆるやかにすべるがごとく、左へ左へとまわった。

槍(やり)のたたかいに水月という極意がある。移すとも月も思わず、映るとも水も思わず、広沢の池――それであった。向うから突き出すのに対して直ちに応じないで、索(もと)めずして成るべく、則(のり)を越えない分身自在の守勢が水月であった。

狂四郎は、それを用いた。

くり出される洋剣の鋭鋒(えいほう)は、あなどりがたいものがあった。

ただ、狂四郎は、たたかいを開始してから、数秒を経ずして、その剣法が、積極攻勢を旨としつつも、防禦(ぼうぎょ)に完璧(かんぺき)の型を備えているのを見破ったのである。

狂四郎は、顔と咽喉と胸と腹めがけて襲いかかる閃々たる白刃の飛沫(しぶき)をあびて、砕けてはまた円をとりもどす月影のように、かろやかに、しなやかに、躱(かわ)してはまた静止相を留(とど)めているうちに――。

一瞬、水底へ沈むがごとく片膝をついた。

唐人の一閃は、狂四郎の頭上すれすれに掠(かす)めて、むなしく、その背後の空間を突いた。満身の鋭気を、そのひと突きに罩(こ)めた唐人の姿勢は狂四郎が下からまっすぐにさしのべた無想正宗を避ける余地もなかった。唐人は、われとわが力で、おのれの鳩尾(みぞおち)へ、敵の切先をぶっつりと刺し通して、けだものじみた唸りを夕空へ撒(ま)いたのであった。

決闘が終っても、船頭以下十余名の水主は、粛(しゅく)として声もなかった。完全に、きもをひしがれていたのである。

狂四郎が、拭(ぬぐ)った刀身を鞘(さや)に納めるのを待って、舳先(へさき)に居竦(いすく)んでいた異国の美女るしやが、ぱっと、長衣の裾(すそ)をひるがえして走り寄ると、ひしとすがりついて、何か声高に叫んだ。

その神秘な青い瞳(ひとみ)に湛えられている光が同じ血族にめぐり会うた親しみを罩めているのを読みとった狂四郎は、総身に異常な感動の戦慄(せんりつ)が走るのをおぼえた。

次の刹那、狂四郎は、おそるべき残忍性をふるいたたせて、船頭へむかって叫んでいた。

「おいっ！　小舟へ帆を張って、海上へおろせ！　そうしてこの女を乗せろ！」

やがて、哭(な)き叫ぶ異国の美女一人を乗せた小舟は、追風を帆にいっぱいはらんで、一斑(いっぱん)の島影もない渺瀰(びょうび)たる黄昏(たそがれ)の海原の果てへむかって、矢のように疾走して行った。

狂四郎は、船櫓の上に、幽鬼のごとく立って、みるみる小さくなりゆく小舟を、じっと見送った。ぱっくりと瞠(みひら)かれたその双眸は、世にも陰惨凄愴(せいそう)の光芒(こうぼう)を放って、またたきもしなかったのである。

皇后悪夢像

一

「やあ、お行列だ！」

少年が、小手をかざして、叫んだ。

樹枝のあわいから、彼方（かなた）の街道を、供回りの行粧美々しい大名道中が、豆人形のつらなりのように、動くともなく通って行くのが見えた。在府年限満ちて国許（くにもと）へ帰城するのである。

暮春――。

ここは、摂津武庫（むこ）郡甲山（かぶとやま）の中腹である。

神呪寺（しんじゅじ）という観音堂の境内のはずれの、崩れかかった築地（ついじ）の上に、少年は立っていた。眼下には、青々とのびた麦と黄金の菜の花がちらばり、街道のむこうには、武庫の海がかすんでいる。

「小父（おじ）さん――ねむっているの？」

少年は、ふりかえって、草の上に仰臥（ぎょうが）して、目蓋（まぶた）をとじている黒の着流しの浪人者へ声をかけた。

「いや……花の香を愉しんでいるのだ」

つい二間あまりはなれたところに、丈高い木蓮の樹が、この風もない静かな真昼の明るさにふさわしい、温雅で豊麗な純白の花びらをひらいて、ほのかに匂っているのである。

「先生、起きて、お行列を見てごらんなさい。きれいです」

すすめる少年の大きな澄んだ眸子には、この浪人者と、こうしているよろこびの色があふれていた。

尾張鳴海神社の曲賽造りの神官五味義寛の子庄作であった。西宮の夷神社の宮司が、亡母の実兄にあたって居り、孤児となった庄作はそこにひきとられていたのである。今朝、眠狂四郎が、ふらりと、庄作の様子を見にやって来て、つれ出して、この甲山へのぼったのである。

庄作は、行き過ぎる大名行列へむかって、声いっぱいに、「おーい！」と呼びかけてから、なんとなく、にこっとして、狂四郎のそばへ戻った。

「先生。甲山って、ここに、甲でも埋めてあったのですか？」

「ああ、そういういいつたえだな。……むかし神功皇后が、新羅の国へ遠征して、凱旋された時、三万八千人の兵隊の甲冑や弓箭や剣や衣服や、新羅の国から奪って来た金銀宝珠を、この山のどこかに埋められたのだ」

「へえ。それで、その宝ものは、どうなったのですか？」

「わからぬな。誰も掘り出した者はいない。神功皇后は、千人の人夫をつかって、この山の

どこかに匿されたのだが、そのあとで、千人を皆殺しにしてしまったのだから、皇后が亡くなられてしまうと、匿し場所は永久にわからなくなってしまった」
「ふうん――。もったいないなあ。神功皇后って、意地悪ですね」
そう云いすてて、庄作は、立ちあがって、ひょっとするとそのあたりに、宝が匿してあるのではないかという表情をつくって、境内をあるきまわりはじめた。
狂四郎は、やおら、身を起した。築地の崩れ目から遠く、海を望むその眼眸が、ふっと、曇った。
自分が、無慈悲にも、小舟へ乗せて大海原の果てへむけて流した異国の美女るしい、、やの俤が、甦ったのである。
あの残虐の行為を敢えてしなければならなかったおのれの気持を悔いるのではなかった。
その時以来、脳裡につきまとって離れぬるしい、、やの眼眸が――同じ血族にめぐり会うた親しさを罩めた青い瞳が、狂四郎に、名状しがたい苦痛をおぼえさせるのであった。
「やあ――これが、神功皇后だな」
突然、庄作が、むこうで大声をあげた。
本堂の脇に建てられた、まだ木の色も新しい小さな祠を、覗き込んでいるのであった。
「意地悪な皇后様だから、こんな顔をしているんだな」
その言葉を、ふとききとがめた狂四郎は、ゆっくりと近づいて行った。
祠の中を覗いて、等身大の木彫の立像を、じっと眺めているうちに、狂四郎は、次第に険

しい眼光になった。

一瞥したかぎりでは、具をつけ、鐔物の太刀をはき、強弩をもち、髪を男同様に美豆良に結った神功皇后が、女人である証拠を、玉蘰、瓔珞、肩巾裙帯とともに、如来か菩薩のように、ふっくらとした相好にみせて佇んでいたのである。

あるいは、庄作の独語をきいていなかったならば、狂四郎は、ちょっと覗いたとしても、

――仏像のような皇后だな。

と、思うにとどめたかも知れなかった。

凝視をつづけるうちに、狂四郎は、異常な感銘に、四肢がこわばるのをおぼえたのである。

仏像というものは、仏独特の相好として、三十二相八十種好というものを具備している。これを具備するものは家に在っては転輪聖王となり、出家しては無上正覚を開いて仏となる、といわれ、仏像師は、その表現に精魂をうちこんだのである。

成程、この皇后像は、眉目、手、足のかたちは、仏の相好に似ている。しかし、まるっきり別の表情なのである。むしろ奇怪とさえ云い得る激しいものが、眦に、唇の端に、指先にしめされて、妖しい気配をただよわせているのだ。

「庄作、お前にも、この神功皇后が意地悪に見えるのだな？」

「見えます。なんだか、見ているといやになる」

少年の純粋な瞳は、この像がもつ強烈な圧迫感を吸いとったのである。

二

その夜、夷神社の社務所の一室で、狂四郎は、庄作の伯父の宮司に、甲山神呪寺境内に、最近祀られた神功皇后像について知るところはないか、と訊ねた。あいにく、宮司は、祀られたことさえきいていなかった。大酒家で、世間のことには、とんと疎かったのである。

狂四郎は、しばらく考えていてから、

「それでは、こんなことをおききしても、貴方は耳にされなかったかも知れませんが、近頃この地で、もしや、若い美女が殺された事件はありませんでしたか？」

「そりゃァ、ある！　大ありです！」

多分、横にかぶりをふるだろうと思っていたのに、宮司は、反対に、ひどく真剣な顔つきで、大きく頷いてみせたものだった。

「一人だけか、三人までも――しかも、大阪から兵庫へかけて、選りすぐった飛びきりの美人が、無慚や、ばたばたと非業の最期をとげましたのじゃ。それればかりか、どうやら殺された原因が、当社の恵比須まつりにあるとしたら、いくらわしが大酒くらいの暢気者でも、少々あわをくらうのは、道理ではござらぬか――」

宮司は、話しはじめた。

夷神が福徳の神とされて以来、この神社は、商売繁昌の守り本尊として、遠地からも参詣人を集めている。西宮の清酒醸造は、きわめて精良の名誉を揚げていたので、その酒造家連

が、恵比須大明神を派手に祀ろうとしたのは当然である。で――近来、正月の十日恵比須は、江戸の初卯(はつう)と大阪のそれにまさるといわれる程の賑(にぎわ)いだった。

――十日えびすの売ものは、はせ袋に、鳥觜(ちょうし)、銭(ぜに)がます、小判にかね箱、立烏帽子(たてえぼし)、ゆで桝(ます)、さい槌(づち)、たばね熨斗(のし)、お笹(ささ)をかついで千鳥足。

それにくわえるに、西宮の恵比須まつりには、もうひとつ、「神子(みこ)えらび」という景物があった。灘(なだ)の新酒を、恵比須大明神に捧(ささ)げる清浄無垢(むく)の処女を、この近郷から選出する行事であった。すなわち、今日のミス・コンクールである。これが、非常な人気を呼び、神子に選ばれたくて、大阪から西宮へ住居を移して来る娘もいたくらいであった。

今年、祭もあと三日で終るという日、「神子えらび」に三人の娘が残った。この三人のうちから、一人だけ、夷神子にえらばれるのであった。

酒問屋大国屋（西宮市中）お　幸
酒問屋福原屋（今　　津）おのぶ
料亭「一福」（西宮市中）お　糸

で、この三人娘のうち――。

第一の犠牲者は、お幸であった。

事件の起る前日、よろこびにごったがえす大国屋に、小さないさかいが起った。

内儀のお志賀が、主人宗兵衛に、そっと、

「旦(だん)さん、やっぱし、お幸は、佐吉と相惚(あいぼ)れやさかい……」

と、ささやきかけた。

お幸が、もし神子に選ばれたら、うちの息子の嫁に、と大阪随一の回船問屋天満屋から申込まれていたのである。天満屋は、千石以上の菱垣回船と樽船を十艘も持っていて、灘の酒をはじめ、大阪二十四組の商家の諸品の半ばを、江戸へ運搬していたのである。また、一方では、金貸もやっていて、大国屋も多額の借りがあった。

天満屋から、息子の嫁に、とのぞまれて、有頂天にならぬ家はなかった。文字通り、渡りに舟であった。ところが、母親のお志賀は、お幸が、手代の佐吉と心を許しあっている様子を、かねてからうすうす感づいていたのである。

「阿呆！　なに云うてけつかる。お前が、気儘八百に育てて、芝居ばかり見せとるから、お幸のやつ、お染気どりになり居って、丁稚に迷うんじゃ。いまどき、歌祭文など流行らんわい」

「しかしなあ、旦さん……お幸の昨日今日の様子を見とると——」

「うるさい！　親の云い条をきけんような娘を、お前は、なんで生みよった！」

怒鳴りつけておいて、宗兵衛は、店へ出て、結界の中へ坐った。

宗兵衛も、思いあたるふしがあった。神子候補になった時は、あんなにはしゃいでいたお幸が、三人残ったときかされた頃から、妙に固い表情になって、居間にとじこもるようになったのである。娘心というもので、神子になれるかなれないかの瀬戸際になると、ひどう緊張するものだ、ぐらいに考えていた宗兵衛であった。そうではなかったのである。三人残っ

たおり、恰度、天満屋からの申込みがあったのである。

「おい、佐吉――」

宗兵衛は、広土間で、小僧たちを指図して、新酒樽につける青葉竹竿を揃えさせている佐吉を、呼んだ。

結界の前へかしこまった佐吉へ、宗兵衛は、唐突に、

「お前、京都へ行って来てくれ」

と、云って、掛売帳をなげ渡した。

佐吉は俯向いて、ちょっと返辞をしなかった。主人のこんたんが読めたからである。京都で得意先を回れば、すくなくて七日は費さねばならぬ。そのあいだに、お幸は、「神子えらび」に出て、もし選ばれたならば、否応なしに、天満屋の結納品を受けることになろう。

佐吉は、ここ数日、お幸と顔を合わせるたびに、その潤んだ眸子が、

「わたしをつれて逃げておくれ」

と、哀願しているのに対して、はらわたがひきちぎられる思いで、そ知らぬ顔をしなければならなかったのである。

佐吉は、二十七になっていた。十歳の時から、この家に奉公して、息子同様の扱いを受けて来た。三十になったら暖簾を分けてやると約束されていた。いつからとなく、お幸と心が通じ合うようになったが、しかし、それは、はじめから苦悩のつきまとうた恋であった。佐吉は、主家を裏切る気持は、すこしもなかったのである。

だが――抜打ちの冷酷さで、主人から、お前は姿を消せ、と云われて、流石に、佐吉は、むかっとなった。事訳によってはあきらめもする覚悟でいたのだ。

「なに、ぼやぼやしとる、はよ支度せんかい」

「旦那はん！」

「なんや？」

「すんまへんが……我儘申してかんにんしておくれやす。この使いは、誰かほかの者に代えてもらえまへんやろか？」

「なにっ！　お前、行きとうない云うのか？」

「へえ。どうも、朝から頭がひどう痛みまして――」

「うそぬかせ！　朝からシャンシャン働いとったやないか。……おい、佐吉、お前は、二十年もわが子同様に目をかけてやったわしに、煮湯のませようちゅう肚やな？」

「とんでもない！　旦那はん、私はただ、旦那はんのお気持が恨めしいのですねん――」

「なんやと！」

かっとなった宗兵衛の右手が、結界の上を躍って、佐吉の頬を鳴らした。

佐吉は、俯向いて、微動もしなかった。その姿が、宗兵衛の目には、世にも憎々しいものに映った。

「出て行けっ！　わしはまだ、飼犬に手を噛まれる程耄碌はしとらんわい！」

その叫びをききつけて、お志賀が、奥から走り出て来て、けんめいになだめたが、宗兵衛

は、騎虎の勢いで、あとへひかなかった。

やむなく、お志賀は、佐吉に、旦那の立腹がとけるまで、二、三日、近所の旅籠にいてほしい、と因果をふくめた。

佐吉が、荷をまとめて、しおしおと出て行ったあと、お志賀が、お幸の居間に入ってみると、すでに知ってしまった蒼白な面持で、じいっと、畳の一点を瞶めていた、という。

気やすめにすぎぬなぐさめ言葉をかけてみたが、返辞はもとよりなかった。

その夜、万一のことがあってはと、お志賀は、お幸と枕をならべて寝たのであったが、明けがた、とろとろと睡ったすきに、隣りの床は、蛻の殻となっていたのである。

大国屋は、たちまち上を下への大騒ぎになった。当然、第一に嫌疑のかかったのは、佐吉である。手代たちのなかには、ゆうべ更けて店の前をうろうろしていた怪しい影があったが、あれが佐吉にちがいない、などとまことしやかな顔つきで云い出す者もあった。

代官所から、出役指揮によって、目明しが、八方へ散り、尼崎から西宮へかけての旅籠という旅籠をしらみつぶしに当って、その日の午まえに、鍋屋町の旅籠の二階にかくれている佐吉を捕えた。しかし、佐吉は、一人でじっとしていただけで、お幸のことはすこしも知らぬと云いはった。

だが、彼にとって不利であったのは、旅籠の亭主が、この客は夕食後出かけて子の下刻すぎに戻って来たと証言したことであった。目明しの厳しい吟味に、佐吉は、ついに、お幸恋しさに、大国屋の周囲をうろついた、と白状した。しかし、お幸の出奔については、神仏に

誓って知らぬことだ、と主張してみたが、もはやとりあげられなかった。

お幸の屍体が発見されたのは、その日の黄昏どきであった。夷神社から南に数町、松の疎林を抜けた浜辺の砂に埋められていたのを、遊んでいた子供たちが、ちらりとこぼれ出ている緋縮緬の長襦袢の裾を見つけて、ひっぱってみたところ、まっ白な片足がぬっとあらわれ、きゃっと魂消る悲鳴をあげたのであった。

お幸は、左乳の下を、鋭利な刃物でひと刺しされていた。

佐吉は、お幸と心中しそこねて、ひとり旅籠へ逃げ戻ったものと解釈された。

三

その次の夜のことであった。

寒月が耿々として冴えた四更――。

甲山中腹神呪寺の、雪でも降り敷いたように白い境内を、ひとつの異形の影が、そろそろと歩いていた。

白衣をつけ、頭上に蠟燭を立て、焔をゆらめかせていた。女である。手に握っているのは、松葉であった。

凍てついた地べたを、ひたひたと跣で踏みしめ乍ら、口のうちで、ぶつぶつととなえているのは、呪文であった。

「たまとたか、よみちわれ行く、おほちたら。まちたらたら金ちりちり……かたしはや、え

かくせにくりに、ためるさけ、てえひあしえひ、われしひにけり……」
境内の北端に立てた（たぶん、この女が持参したのであろう）卒塔婆（そとば）をまわって、本堂にひきかえして行く。
内陣には、宝灯が、ひとつ、赤い灯（ひ）を、ぼうっと闇（やみ）に滲（にじ）ませていた。
女は、階段をのぼると、円柱に寄った。その円柱には、小さな藁（わら）人形が、釘（くぎ）でうちつけられてあった。
女は、すこし声を高くして、
「南無……金剛忿怒尊（ふんぬそん）、赤身大力明王、穢跡（えしやく）忿怒明王……ねがわくば、物怪（もののけ）を現じ、凶光をはなち、福原屋おのぶの生命（いのち）をちぢめさせたまえ……」
と、祈りつつ、手にした松葉の一本を、藁人形へ、ぷすりと突きたてた。
そしてまた、階段を降りて、卒塔婆へむかって歩み出す――。
この一心不乱の呪詛（じゆそ）祈願を、それから小半刻（こはんとき）もつづけたろうか。女が、本堂へのぼろうとすると、不意に、
「おりんさん――」
と、声がかかった。
女の受けた衝撃の大きさは、全身の痙攣（けいれん）で頭上の蠟燭の焰をはげしくゆさぶったのであきらかであった。
のそっと、円柱の陰からあらわれたのは、総髪、たっつけ袴（ばかま）の男であった。目蓋が垂れ、

青ぶくれた平べったい顔で、ひどい兎唇だった。

「まあ！　平賀先生……」

「ふふふ……わしは、あんたが来る前から、この柱のむこう側で、結跏趺坐（けっかふざ）していたのさ」

「…………」

おりんは、咄嗟（とっさ）の驚愕（きょうがく）と狼狽（ろうばい）で、ただ白い息をせわしく吐くだけだった。

「大国屋のお幸は、片づけた。こんどは、福原屋のおのぶを片づけようというわけかな、おりんさん――」

「ち、ちがいます！　あ、あたしは、お幸は、こ、ころしませんよ！」

「同じことだろう。お幸が死んだことは、お前さんにとって、こんなうれしいことはないんだからね。これで、おのぶを呪（のろ）い殺してしまえば、あとにのこるのは、料亭一福のお糸――つまり、お前さんの娘一人だけなんだから――」

「あ、あたしは……」

喘（あえ）いだおりんは、次の瞬間、狂気のごとく男にすがりついた。

「おねがいです！　見のがして下さい！　な、なんでもききます！　どんなことでもします！　おねがいです！　先生、どうか、見のがして――」

まだたっぷりと色香の匂う艶肌（つやはだ）をもった大年増（おおどしま）の必死の面貌（めんぼう）を、冷やかに見据（みす）えていた男は、

「ふふふ……呪いの神さまに祈願するには、もっと面白いやりかたがあるぜ」

と云いはなつや、おりんをかかえて、内陣に入った。

宝灯の光を撥ね散らして、氷のような板敷の上で行われた、野獣の組みうちにも似た男女の営みは、まさしく呪詛祈願にふさわしい光景といえた。

やがて――。

のろのろと身を起したおりんは、はだけた前を合わせて、黙って立ちあがり、出て行きかけたが、ふと気づいて、干いた声音で、

「先生、あんたは、また、どうして、今時分、いたんです？」

と、訊ねた。

「おれか。……おれも願いごとがあったのさ――」

男は、もっそりとこたえたことだった。平賀唯心というこの男は、麓に住む独身の浪人者であった。寺子屋をひらいていたが、変り者で通っていた。

四

「おりんと平賀唯心との一埒は、おりんが捕った時、自暴自棄で白状したことでござったが、おりんも同情すべき点はあったのでござる。おりんが、今津の福原屋のおのぶを、呪い殺そうとしたのは、自分の娘を神子にしたい母親の虚栄の一心に相違はなかったとは申せ、ひとつには、復讐の執念にとり憑かれていたのでもござったな。と申すのは、おりんの家も、もと

は、今津で、福原屋と覇を競う酒問屋でしてな、それが、七年前、亭主の頓死とともに、得意先を、福原屋に悉く奪いとられてしまって、店を閉じるはめにいたり、この西宮に移って料亭を開いた、という因縁がござった。たまたま福原屋の娘と、自分の娘が同時に、神子えらびに残ったとなると、おりんが、狂気のごとく丑の刻参りをやったのも、道理でござったろう。それはともかくも、奇っ怪であったのは、おりんの一念が金剛忿怒尊に通じたか、次の夜、福原屋が、突如、怪火を出して、あわれや、娘のおのぶが焼け死んだことでござった。しかも、おのぶ一人だけが自分の居間で黒焦げになっていたと申す。ほかの者たちは、寝衣いちまい乍らも、充分に逃げ出す余裕はあったにも拘らず、なぜに、おのぶ一人だけが、居間から一歩も出ずにいたか——そのことが、なんとも不審に堪えなかった次第でござったのじゃ。……神子えらびの候補者が二人までも非業の最期をとげたことは、西宮中を、蜂の巣をつついた如く、手のつけようのない騒擾の渦にまき込んだことは申すまでもござるまい。……お幸を殺したのは手代佐吉と確認されて居るが、おのぶを殺した下手人については、お役人も、ちょっと途方にくれた態でござった。が、これは、目明しの一人が、偶然、福原屋の焼跡から、釘をうち込まれた藁人形の半焼けを見つけたことで、たちまち、——成程そうだったか、とお役人を頷かせることと相成った。……お幸が不慮の死をとげた。のこるは二人だ。おのぶも死ねば否応なしに、お糸が神子にえらばれる。福原屋には深い怨みがある。とばかり、一福の女将おりんが、お幸の死を奇貨おくべしとして、おのぶを呪い殺そうと企て、そして、成功した。とお役人が推理したのは、当然と申すものでござった。で——ただ

ちに、おりんは捕えられ、手酷い拷問を受けて、呪詛の件を白状いたした。しかし、火つけは露知らぬことだと哭き叫んだそうだが、いたずらに、お役人の嘲罵をあびたにとどまったのは、これは、やむを得ぬ仕儀でござったろう。おかげで、神子えらびはお流れになったのみか、かかる行事を催す故に乱心者もあらわれるというお咎めを受けて、此後禁止と布令されたのは、とんだとばっちりでござった。……火つけの罪は、火刑と定まっていることは申すまでもないが、あわれなのは、お糸でござった。母親が修羅の妄執を燃やしたばっかりに、まきぞえをくらって、罪もない身が、火あぶりにされたのでござる。……母とともに、白衣をきせられ、裸馬にのせられ、紙幟、捨札、抜身槍を持った非人にとりまかれて、市中引回しをされた時の、すでに生きた色もなく項垂れた顔は、いたましや、まだこの目の底にのこって居りますわい。いや、それよりも、方二十間にめぐらした竹矢来の中で、十字の柱にくくりつけられて、腰まで積みあげられた薪に松明の火が移され、濛とあがった黒煙の下から、真紅の火焔が、ぱあっと迸った刹那の白い姿は、蝟集の者どもの目に、永劫にのこるむごたらしい見ものでござった。……おりんの方は、引回しの馬上から、狂乱のていで、下手人はわたしではない、と絶叫しつづけて、かえってそれは、見物衆の蔑視を買うて、いよいよ、紅蓮の舌になめられる段になってもまだ、神も仏もないかと喚くざまは、あさましいものとしか眺められなかったのでござる。……吹きあがり、渦巻きかえり、煽られ靡く黒煙と火焔の中で、凄じく身悶えしつつ、おりんは、断末魔の悲鳴をあげる一瞬前まで、自分は無実の罪じゃと、声をふりしぼりつづけ申したな。……あまりのむごたらしさに、もはやこれ以上

見るに堪え難くなって、身をまわそうとしかけた手前は、ふと、脇で、食い入るように、眼光をぎらぎらと怪しく輝かせている浪人者に気づきましたのじゃ。それは、おりんを神呪寺の内陣で犯した平賀唯心でござったわ。身の毛もよだつ地獄の光景を凝視し乍ら、なんと、平賀の面相には、莞爾(かんじ)として、さも愉(たの)しげな色が刷(は)かれていたではござらぬか。瞬間、手前は、背筋に、なんともいえぬ悪寒がつたうのをおぼえて、大急ぎで、人渦をかきわけて、逃がれ出たことでござった……」

五

今日も、いい日和(ひより)である。木蓮も昨日と同じく匂っている。眠狂四郎は、神功皇后像の祠(ほこら)の前の供物石に、腰を下していた。

腕を組み、例のごとく冷たい無表情を、春光になぶらせて、微動もしないのである。そして、今の時間でものの十分もすごしたろうか。

境内の端に、のっそりとあらわれたのは、青ぶくれの、兎唇の顔をもった浪人者であった。腐りかけた魚の目玉のように濁った双眸を、じっとこちらへあてたが、しずかな足どりで近づいて来た。

「拙者が、平賀唯心だが、なんの御用だ！」

嗄(しゃが)れ声で、訊ねた。狂四郎は、庄作に手紙を持たせて、この男を、ここへ呼んだのである。

狂四郎は、それにこたえず、

「この神功皇后像は、お手前が刻まれたのだな？」

「左様――」

「見事な出来映えだとおほめ申上げておこう」

「それだけの御用件か？」

「うかがいたいことがある。この像の面には、おそろしい苦悶の気色がただようて居る。見れば見る程、惻々として迫る、業苦にさいなまれるものの悲痛をはなって居る。いまにも呻きをたてんばかりだ。……お手前は、何故に、皇后の面を刻むに、このいたましい相をもってなされた？」

訊かれて、唯心は、にやりとした。

「意外にも早く、拙者の鑿さきに罩めた力が評価されて、よろこびこの上はない。……拙者は、五年前、神功皇后が、地獄の業火に焼かれて、もだえのたうつ姿を、三夜つづけて夢に見た。皇后は、この甲山に、財宝を匿すにあたって、その使った人夫千人を悉く斬戮した。その苦報を受けたのだ。拙者は、その時、その苦悶を、彫像に写し出そうと決意したのだ」

「そうして、ついに、それをなしとげられた」

「いかにも！」

「お手前のなすべきことは終った。お手前は、この像の前で、いさぎよく、屠腹されることを、おすすめする。それが、わたしの用向きです」

「何を云うか！　拙者は、このさき長くこの像の守をする所存だぞ。屠腹などと、たわけた

「――」

「おそい！」

「なに！」

狂四郎は、黙って、すっと立ち上った。刹那――。

抜く手も見せず腰から噴かせた無想正宗を、祠の中へ、一閃させた。

像は、まっ二つになって、倒れた。

「き、きさまっ！」

ぱっと跳び退くや、唯心は、鞘をはらって、ぴたっと青眼に構えた。憤怒をほとばしらせた青ぶくれの顔を、狂四郎は、けがらわしいものに見やりつつ、

「おい、平賀唯心！　おれは、おぬしが、神子えらびに残った二人の娘を殺し、もう一人の娘とその母親を火あぶりにして、その苦悶のさまをぬすみとった罪を責めて居るのではないぜ。その悪逆を犯してまでも、この像を刻まなければならなかったについては、おぬし一身の運命の上に、どんな悲惨な懊悩があったか――その理由如何によっては、おれは、黙って、ひきさがる積りだった。……神功皇后が地獄でのたうつ夢を見たと。嗤わせるな！　まことしやかな嘘八百の伝説に性根をうばわれて、疫病のように夢にうなされた――たったそれだけの理由で、こんなおもちゃを作ったときいては、我慢がならぬのだ。あの世へ行って、まこと神功皇后が業火に焼かれているかどうか、性根を据えてたしかめて来い！」

太刀は、一合と交わらなかった。

白い土を鮮血に染めて俯伏した平賀唯心が、そのわずかなもがきをも止めた時、狂四郎の姿は、もう数間さきにあった。

白刃湯

一

「さっても、その日の南屏山を見渡せば、あら面白の春景色、いろが吉野の山桜、梢にまとう八重がすみ――にはこれあらで、折しも秋の末つかた、甲子吉辰午の刻、赤土を築いた祭壇に、立った旌旗は二十と八宿。東方七面の青旗は蒼竜の形を布き、北方七面の早旗は玄武の勢いをなし、西方七面の白旗は白虎の威を振い、南方七面の紅旗は朱雀の状をなし――おそれ多くもかしこくも、天地人の勢威をはって、粛々然。今しも、その祭壇の壇上へ、しんずしんずと、登り来たれるいちにんは、まっ白しろの道服に、髪をさばいて、素跣の、足どりいとも軽やかな、湯上り姿のあだ姿――と思いきや、おどろくべし身の丈八尺、冠玉の面、これぞ誰あろう、南陽の人、臥竜ヶ岡の高士諸葛亮、字は孔明、絶代の奇才、智謀神仙を抜く古今の軍師――」

張扇で、ぴしりぴしりぴしりと読み台をたたいて、三国志・赤壁の戦いのくだりを読んでいるのは、江戸初下りの立川談亭であった。

ここは、大阪天満の社の境内――。

おりから、ひとりぶらりとあらわれた眠狂四郎が、ふと、檐を接した豆腐田楽の茶屋にはさまれたこの小さな小屋に、立川談亭と染めた幟が立っているのを見出して、入って来た。

客は、せいぜい三、四十人が、ばらばらと散らばっているだけであったので、狂四郎の姿は、すぐ談亭の目にとまった。

にやっとした談亭は、一段と声をはりあげて、

「これはこれ、天に祈って、江上に、東南の風を吹かしめ、梟雄曹操が率いる雲霞の如き水軍をば、一兵あまさず焼き殺してくれようずとの神機妙算にほかならず。味方の呉軍総大将周瑜都督におかせられては、孔明はたして風を呼ぶや否やと、天を仰いで、さてもはや、風さそう音とおもえど若しやまた、おもわせぶりにしのばるるこころの内のしんの闇、月は冴ゆれどままならぬ、あだ憎らしい村雲の、男心と秋の空――きのう北風きょう南風、あすは浮名の辰巳風」

「よう舌がまわりよるわ。何云うてんのか、さっぱりわからへん」

「塀越しの甘柿で、なっとらんわい」

そんな文句を耳にして、談亭は、

――贅六なんぞに、江戸っ子の粋な酒落がわかってたまるか。

と、心で罵り乍ら、

「……一夜明ければ、新玉の、春ひきつれて亀と鶴、君も栄えて御万歳、門に松竹注連飾り、そよと吹く風、東風の風――たてならべたる旗あしが、西の方へと吹きなびく、これを眺め

た周瑜都督、目やにこすって膝つねり、やあ奇っ怪なり不思議なり、天地造化を奪うの法、鬼神不測の術を使う孔明こそは、そも、人か魔か、生かしておいては呉国の禍根、すこしも早く、おおそうじゃ——ひらり馬上にうちまたがり、一百余人を引具なし、めざすは南屏山上七星壇、進めや進め、いざ進め——」

狂四郎は、北側の柱に凭りかかっていたが、誰かの視線が、ぴりっと神経にふれるのを感じて、頭をまわした。

二間のむこうに、膝を崩して坐っている芸妓らしい女が、じっと、こちらを瞶めていた。そこだけ、ぱっと花が咲いたようにあでやかな風情であった。

黄柄茶の碁盤格子を織った鼠色のお召縮緬が、透けるような肌の白さと大まかな顔の造りをすっきりと浮きあがらせていた。膝からこぼれた長襦袢の青み張りした浜縮緬には、どうやら名高い絵師の筆になるらしい墨絵がのぞいている。

ふっと——女の目もと口もとに、媚を含んだ微笑がうかべられた。

狂四郎は、眸子をそらした。

「……有無を云わせず諸葛亮めをひっ捉え、目玉をくり抜き、鼻を削ぎ、手足を捥いで達磨にし、天満の小屋でひと儲けと、ひと息一気に駆けのぼれば、孔明すでに消えうせて、はためきわたる六十四流——。おのれやおのれ、草の根わけても、息の根とめて、他日の憂を免れんと、馬首をかえして、はったと睨める江上に、ふわりと浮んだ小舟一斑、へさきにすっくと立ったるは、あれぞ、無双の軍師諸葛亮、頭に綸巾を戴き、身に鶴氅を披き、飄然とし

てその姿、げに神仙に似たりけり。かえせ戻せとよばわる声に、孔明軍師かんらからからとうち笑い、なんじ周瑜よ、東風(こち)吹かば思い起せようめえ作戦——用意の火船に火をはなち、曹操百万の水軍めがけて突入せしむべし、火は風威にしたがい、風は火勢を助け、三江の水面は真紅となりて、呉軍の大勝利疑いなかるべし、神仏も照覧あれ、孔明正大とはこのことじゃ、と云いすてて、みるみる江上はあるか失(う)せにけり……」

談亭が、台へ両手をついて、頭を下げるや、狂四郎は、のっそり立ちあがって、外へ出ようとした。

　すると、談亭が、ひょいと頭を擡(もた)げて、

「やあ、やあ、やあの虎(とら)やあやあ、そこにあるは眠狂四郎殿とおぼえたり、立川談亭見参見参——」

　と、どなった。

　狂四郎は、苦笑して踵(きびす)をまわしたとたん、ちらっと視野の片隅(かたすみ)に映った件(くだん)の芸妓の表情が、異常にかたくこわばっているのをみとめた。

　——おれを狙(ねら)う一人か、この女。

　大阪の芸妓などに一人も知りあいを持たぬ狂四郎であったが、こちらでは一向に知らないのに、むこうで勝手に知っていてくれることには馴(な)れているのである。そ知らぬふりで、舞台に近づいて行くと、

「いざまず、楽屋へ——」

談亭が、この偶然のめぐり会いに、喜色満面で招じた。
「いや、今日はすこし急ぐ――」
「それが一年ぶりの御挨拶――殺生な！　無情な！　あっしが、大阪へ来たのは、美保代様から、先生の行方を――せめて噂なりとも耳にして来て欲しいって、いじらしい御依頼があったからですぜ。それを――先生は、美保代様の御様子をきこうともなさらねえ」
「きかないでも、おぬしの方が云うだろう」
「云いまさあ。云わずにおくもんか。美保代様は、この夏はたぶん越せない御重態――と申上げたらどうなさいます？」
「おぬしの顔に、美保代は元気になって、おれが帰って行っても困らぬように、町女房の修業に精を出している、と書いてあるぞ」
「勝手にしやあがれ、だ。そこまで見破られちゃあ、どうでも、首に綱をひっかけて江戸へひきずって行かざあなるめえ」
「明日、またたずねて来る」
狂四郎がはなれて行きかけると、
「先生！　薄情者！」
談亭は、張扇で、自分の額をぴしゃっと叩いた。
狂四郎は、ふりかえって、にやりとすると、
「美保代は、待つことには馴れている女だ。待っていてくれる女を、遠くで想うのが、この

眠狂四郎の柄に合っている。そう思わぬか、談亭――」
と、云いすてた。
「南無や八幡！　因果やな――女という生きものは、待たせない男には惚れないで、待たせる薄情者に恋いこがれる。先生っ！　待たせるにも限度がありますぜ、限度が――。後れ居て恋は苦しも、朝狩の君が弓にもならましものを、ってんだ」

二

やがて――。
狂四郎が、飄然と入って行ったのは、曾根崎新地であった。諸大名の蔵屋敷と堂島米市を控えるこの北の新地の繁昌はいまや、新町の廓を圧すといわれ、掛行灯の灯が宵闇にあかあかと滲んでまたたくこの時刻、往還は、嫖客で織るようであった。
狂四郎の姿を吸い込んだのは、間口十間以上もある料理茶屋千鳥屋であった。
「お越しやす」
式台へ両手をついた女中へ、
「平野屋へ、元天満組与力、中斎大塩平八郎の代理人眠狂四郎と申す者がまかり越したとつたえてくれ」
と告げた。
待つ程もなく、でっぷり肥えた五十年配の商人が、紋服、羽織、袴に威儀を正して、あら

われた。
狂四郎がそこに立っているにも拘らず、ずうっと玄関を見渡して、怪訝そうに、
「見えんやないか」
と、女中を咎めた。
「このお方だす」
女中に指されて、平野屋は、呆気にとられた。いやしくも、大塩平八郎の代理ともあろう武士が、着流しなのである。足袋もはいてはいない。
「貴方様が――」
「通る」
狂四郎は、眉毛一本動かさずに、式台に上っていた。
今朝、久しぶりに、狂四郎は、天満橋筋長柄町の大塩邸をおとずれたのであった。
平八郎は、江戸でめぐり会った時もらした通り致仕して、与力を養子格之助に譲り、講説著述の儒者生活に入っていた。
狂四郎は、会うやたちまち、平八郎から慷慨激越をあびせられるであろうと覚悟していたのであった。ところが、意外にも、平八郎は、洗心洞主人と号するにふさわしい温雅な面容で、大層寡黙になっていたのである。
その態度が、しかし、狂四郎には、かえって、不気味に感じられた。
平八郎は、四方山話のすえ、ふと気がついたように、

「そうだ。おぬし、恰度よいところへ来た。今宵、曾根崎新地で、馳走にあずかってもらいたい。わしを招いたのは蔵元が三人だ。平野屋、鴻池屋、天王寺屋、いずれも大物だぞ――」

と、笑い乍ら、云ったのであった。

「手前には、料理の味など一向にわかりませんが――」

「いや、おぬしにくらべたら、わしの門弟どもは、甘いか辛いかさえもわからぬ奴らばかりだ。おぬしのような、無頼のひねくれ者が、わしの代理として適任だ。たのむ」

「土産物をもらって来いと申されるのですな」

昨秋、備前屋輩下の手から奪いとって土産に渡してやった公金五千両を、平八郎が、帰阪するや、悉く、貧民に撒いた、という噂は、狂四郎の耳にも入っていた。

「出来ればな。……が、無理をしないでもらいたい。料理を味わって来るだけでもよいぞ」

つまり、巨商どもの人柄を判断してもらうだけでも結構だ、と平八郎は、笑ってみせたのである。

――この仁は、いずれ、大阪の暴利をむさぼる奸商連をひと薙ぎに仆す肚なのだな。

狂四郎は、そう読んで、

「やれるかやれぬか、手土産をねだってみましょう」

と云って、出て来たのである。

当時――。

天下の富は、江戸の札差と大阪の蔵元に流れ込んでいると云って、過言ではなかったのである。

大名の過半は、すでに窮乏の極に達していた。借金を背負わない大名は、殆ど無きにひとしい状況であった。大名の領地には、表高と内高があった。表高は幕府から何万石として与えられた所領で、内高は、その所領の実際の高であった。もちろん、内高が高い領土もあることはあった。しかし、内高が、年とともに殖えるものではなく、新田開発等による増収も、生活の向上に追いつかないのが、封建の世の宿命であった。

大名の財政の不足を補うための手段は、倹約、紙幣発行、そして借金であった。前二者は一時的なものであり、弥縫の策は常に借金に帰した。まず家臣の俸禄の何分の一かを借り、次に領内の百姓町人から借り、その用金が限度に来て、諸侯は、あらそって、大阪商人から借りることとなったのである。山崎闇斎の「盍徹問答」は元禄の著述であるが、すでにその書に、大名の財政窮迫状況が記されてある。まして、天保を迎えた当時の困窮は、想像を絶している。大名の売物が出たというのは事実であった。

未来永劫、元金はおろか利息すらも払えぬ借金を重ねた大名は、ついには、来年いや数年先の領米を、商人に入札せしめる空米切手を発行せざるを得なくなったのである。そして、儲けるのは、切手（手形）の売買をする米仲買と敷銀を取る蔵元ばかりであった。

米をつくっている百姓は飢え、租米を取る大名は借金に苦しみ、そして、食べる米を買う一般町人は甚だ貧しかったのである。

この秋（とき）――豪富を処分して、その金銀を奪って、窮民に分配する非常手段を、幕吏の中で企図する士があらわれたとしても、あやしむにはあたらない。大塩平八郎が、その人だったのである。

三

およそ、いおうようのないしらじらしい、奇妙な招宴であった。
あれ程かたく約束したにも拘らず、大塩平八郎は平然としてそれを反古（ほご）にしたのみか、得体の知れぬ薄気味わるい浪人者を寄越したのである。
平野屋、鴻池屋、天王寺屋は、顔見合わせるまでもなく、すこしも早くきりあげようときめた。大塩平八郎が来ない限り、まったく無意味な宴席であった。彼らにとって、大阪で怕（こわ）いのは大塩平八郎だけであった。彼らは、平八郎が、四十歳の若さで致仕したことに、深い邪推を抱いていた。すなわち、平八郎が、われわれ巨商たちの不正をひそかに調べあげて、その罪状書を作成するために、一旦（いったん）与力を退いて、そのことに専念し、やがて、江戸出仕をして幕閣の有力者の周旋によって、一網打尽を計画しているのではなかろうか、と――。
大阪三郷の両替屋全部を押え、御用融通方と称して公金をあずかり、蔵元となって米の販売を一手にとりしきり、掛屋となってその米の売上代金を占め――いわば、諸侯の生殺与奪の権を握るわずか十指に足らぬ巨商たちを、たとえ一人でも倒し得たならば、公儀および諸侯として、その利得は、はかり知れないものがある。いや、倒さないまでも、その罪状によ

って、莫大な御用金を課すことが出来るのである。
そういう憂目に絶対に遭わないとは、巨商たちも否定しきる自信はなかった。公儀および諸侯の窮迫に比して、自分たちの儲けがあまりに凄じいからであった。
ころばぬさきの杖である。大塩平八郎を懐柔しておくことを考えたのは、彼らとして尤もな仕儀であった。
が――流石は、大塩平八郎も曲者であった。
代理としてあらわれた得体の知れぬ浪人者は、席に就いても、一言も口をきかずに、注がれるままに、さかずきをかさね乍ら、大町人三人の顔をつぎつぎに凝視しつづけることを、瞬時も、中止しないのであった。しかもその眼光の鋭さは、尋常一様ではなかったのである。その視線が、隣に移されるや、ほっと蘇生の思いをする、といっても誇張ではなかった。三人のうちで、一番剛愎な天王寺屋が、その眼眸をなにくそと睨みかえす無謀をしたが、たちまち、くらくらと目眩んで、俯向いてしまい、もう居たたまれないくらい気分がわるくなった。
席にはべる十余人の芸妓たちも、このあまりに異常な雰囲気に、竦んでしまって、声をたてる者さえなくなった。声をたてようとする者は、片はしから、狂四郎に、はったと睨みつけられて、怯えあがらせられたのだ。
とうとう、たまりかねて、平野屋が、
「眠様。失礼でございますが、こういうお席は、あまりお好みにならぬとお見受けいたしま

するが……」
「いや、わたしは、大好きだ。大好きだからこそ、代理として参上した」
「では、なにか……お遊びあそばすのに、これという御趣向でも、ございますならば、おうかがいいたしとう存じまするが――」
「左様だな。わたしの方で余興をやってごらんに入れてもいい」
「ほう――それは、是非、ひとつ――」
「但し、対手がいる」
「かしこまりました。この女どもから、好きなのをおえらび下さいまし」
「あいにくだが、わたしの必要とする対手は、剣客だ。それも滅法強いのが――」
「…………」
一同は、息をのんだ。
「わたしは、剣をふりまわす術しか――ほかになんの取柄もない男だ……せっかくの招宴に、余興に一試合ごらんに入れたい。対手は何者であろうと選り好みはせぬ。滅法強い御仁をご存じないか？」
すると――。
「ございます！」
きっぱりとこたえたのは、末座に坐っていた一人の芸妓であった。
それは、天満の境内の小屋にいた女であった。目もとにも口もとにも、明るい色を刷いて

いる。
狂四郎は、目が合うと、はじめて、微笑した。この女が、ついさっき、座に加わったのを、狂四郎は、すでに知っていたのである。
「つれて来てもらおう」
「かしこまりました」

四

半刻のち、小吟というその芸妓がともなって来たのは、総髪、熨斗目に丹後縞の袴をつけた、どこといって特長のない、学者とも神官とも受けとれる男であった。年もまだ三十を越えたばかりで、眸子も口もとも柔和であった。剣客とはおよそ遠い印象であった。
「笈川良範様でございます」
小吟にひき合わされて、威儀正しく狂四郎に一礼した笈川良範は、ひと言も口をきかなかった。
「手前の余興のお相手をして下さる?」
狂四郎が笑いを含んで念を押すと、黙って、頷いただけであった。
「武器は、木刀でよろしいですか?」
それにも無言で承知してみせた。
すぐに、木刀二振りが、三方にのせて運ばれて来た。

狂四郎は、先に、良範に、木刀を把らせてから、商人たちにむかって、
「余興には引出物はつきものだが、おぬしたち、いくら包む？」
と、訊ねた。
「御所望は？」と、平野屋。
「一人二千両しめて六千両でどうだ？」
「よろしゅうございます」
「負けた方は、手ぶらで退散ということになる」
これは、良範に云って、狂四郎は、中庭へ降りて行った。
書院庭で、あきらかに京都大徳寺の塔頭孤篷庵のそれに模して石組植栽の風雅を誇っていた。
狂四郎は矮鶏檜葉の玉造りの脇に立ち、良範は、大きな自然石を背にして立った。間合をとるには、狭い空間であった。
「いざ――」
「…………」
木刀を構えた刹那、狂四郎は、
――これは！
と、思った。
良範の柔和な表情と物腰が、まったく変化を見せなかったのである。剣を把って向い合う

や、如何なる人物も、忽然として姿を烈しいものに一変するのがあたりまえである。
ところが、奇怪なことに、良範のからだは、いささかの剣気もみせずに、水のように静かなのである。青眼の構えも、隙こそないが、気魄はさらに罩められてはいない。さりとて、こちらの出かたで、どうでも動いてみせるぞといった予測を許さぬ妖しい雰囲気を湛えているのでもなかった。
いわば、樹か石のように、ただ、素直に、すらりと彳んでいるだけであった。
伊庭是水軒光明が編んだ心形刀流に、風心刀という極意がある。いかなる構えか、どのような迅業か——直伝の人以外は知るところがない。後年、心形刀流の直系たる常静子という人すら、これについては、風心の勝は、人の知る可からざるものにして、勝ち得て後すなわち人知る、古今和歌集の一歌——吹く風の色の千種に見えつるは秋の木葉の散ればなりけり、をもって知るべし、と記している。
——そうか、もしかすれば、風心刀がこれだな。
狂四郎は、おのれに頷いた。当らずと雖も、遠からずであろう。
良範は、構えとともに生命をすてた、と云えば誤謬であろう。しかしその姿は、あきらかに、生命をすてたものにほかならなかった。打ち込む意志は、まったくないのである。さきに常静子の言葉に、勝は敵を打つを勝と思わず、敵に打たれざるを勝と思うべし——とあるが、それであった。
狂四郎は、しかし、その闘魂なき敵に対して、ゆるやかに円月殺法の弧線を描きはじめた。

幾秒かののち、切先は、ついに、上段をまわって、天の一角を指した。
刀身がさらにまわるか、一撃に出るか――一瞬の停止が来た。
意外、狂四郎は、そのいずれをもえらばず、不意に、だらんと木刀を地へ下げると、ふて腐れたように、くるりとからだをまわした。
止(よ)した！
そうみせたのである。
とたん――狂四郎の背中にむかって、良範の双眸(そうぼう)が、かっと眦(まなじり)を裂いて、磨(と)ぎすました剃刀(かみそり)のように煌(きらめ)いた。
とみた次の刹那、狂四郎のからだが、疾風を起して翻転するや、
「えい！」
なんの防禦(ぼうぎょ)もゆるさぬ火箭(ひや)の鋭さを刀身にほとばしらせて、猛然と襲撃していた。
かーん！
冴えた音がひびいて、良範の手からはなれた木刀は、高く中空へ舞いあがった。
その時、良範は、芝生を蹴(け)って、後跳びに自然石のむこうに退っていた。
狂四郎は、にやりとすると、すたすたと、座敷へ戻って来て、大町人たちへ、
「六千両は、今宵のうちに、大塩邸へ届けて頂こう。手前は、別室で、一人で飲ませてもらうことにする。――ご免」

五

凝った造りの四畳半で、狂四郎は、盃を口にはこんでいた。卓をへだてて、酌をしているのは小吟であった。勝手に入り込んで来たのである。

「先生――」

「………」

「先生は、女はおきらいなんですか？」

切長の美しい眸子に湛えた媚を、狂四郎は冷やかに受け流して、

「お前は江戸から来たのか？」

「あい。だから、談亭師匠の講釈がなつかしくって、ふらふらとききに入っていたんです」

「あの時、なぜ、おれに笑いかけた？」

「ひと目惚れ――と申上げても、信じては頂けないでしょうね」

「おれの名をきいたら、お前の顔色が変ったぞ」

「怕かったんです。先生はお強いんですもの――」

「ということにきいておこうか」

「ほんとなんです。あたしは、柳橋で、姐さんたちから、眠狂四郎というおさむらいは、一日いっぺんは、刀に人の血を吸わせないと、気がすまないおそろしい剣客だ、ときいて居りました」

「それで、おれの腕を試してやろうと、あの笈川良範という剣客をつれて来た――」
「あの人は、誰も知らないけど、そりゃ、すごい達人なんです。啞で聾で、剣術だけに生命をかけている人です」
「聾啞者か。そうか――」
「先生は、やっぱり、お強かった」
「まともに打ち込んでいたら、おれの頭蓋は砕かれていたろう」
云いすてて、狂四郎は、のそりと立ち上った。
「はばかりですか、先生？」
「汗をかいた。風呂に入って来る」
浴室も、広く、凝った造りで、柘榴口の山水花鳥も一流画家の筆になった見事なものであった。江戸とちがい、柘榴口を入っても、踏み段はなく、板敷が二坪あまりとってあり、浴槽は低く大きかった。
板壁へだてて、女湯になっているらしく、三、四人の忍びやかな話声と湯音がきこえて来た。
狂四郎は、槽縁へ両腕をのせて、ひくく小唄を口ずさんだ。

鳥が啼く
東男の花のふり
ぐちな女子の心から

桜ざめとは
気にかかる

隣の女たちが、上って、ほんのしばらく経った頃であった。

狂四郎は、ふっと、口をつぐんで、鋭く、柘榴口のむこうへ、全神経をはなった。

何者かがいる！　しかも、殺気をみなぎらせて——。

——やっぱり、女め、おれを狙っていたな。

その疑惑があって、わざと、風呂に入って、小吟の出様をはかったのである。眠狂四郎と知って、小屋で、媚をなげてきたのに相違なかった。こちらがそ知らぬふりでいると、たちまち、狙う者の険しい表情になった、と読めていたのである。

狂四郎は、この前、将軍息女を浴室に襲ったことを思い出し乍ら、苦笑しつつ、対手の侵入を待ちうけた。

だが、その苦笑は、一瞬にして、戦慄の色に変らなければならなかった。

すっと柘榴口をぐって、湯気の中に浮き出たのは、小吟でなく、笈川良範だったのである。

すでに、白刃を抜きはなって右手に提げている。

——おれの最期が来た！

脳裡を走ったのは、その絶望感だった。脳天から足さきまで、氷のように冷たいものがつらぬいた。

良範は、試合の時とは全く別人の如く、凄愴たる殺意をあふらせた形相であった。

憎悪をこめて刺しつける眼光を、たじろがず受けとめて浴槽の中に立つ狂四郎の心に、絶望感の次に働いたのは、

——ざまあみろ、狂四郎！

という自嘲であった。

剣を持って生きた男が、素裸素手で、防ぐすべもなく、惨めになぶり殺されるのだ。

対手が、普通の腕前の人間ならば、刀を奪いとる技もないではない。尋常に立合って、必ず勝つとはいえぬ強敵なのだ。

卑怯と叫んでも、耳にとどかぬし、また、それは狂四郎の口から発するわけにはいかなかった。先程の試合で、狂四郎は、相手をだましたのである。風心刀を制するためには、そうせざるを得なかったとはいえ、だましたことにはかわりはない。

——あがくだけ醜態だぞ！

敵の目は、残忍にそう教えてくれている。そして、その双手は、白刃を徐々に、挙げていった。

すると、この時、どうしたのか、急に、狂四郎の口もとが、ふっと明るくほころびたのである。

敵の白刃が挙がるにつれて、狂四郎のからだは、すこしずつ、湯の中へ沈んだ。

良範が、完全に大上段にふりかぶった時、狂四郎は、顎まで湯の中に沈んでいた。

びゅっ！

声なき気合もろとも、湯気を截って、一颯の白光が狂四郎の頭上へ落ちた。

その間一髪――ぱっと飛沫が噴騰して、浴槽の中からも、一閃の白光が躍って、良範の胴を薙いでいた。

「……ぐおっ！」

名状すべからざる奇怪な音を咽喉に鳴らして、良範のからだは、どさっと濡れた板敷に仆れた。

夥しい血汐を交ぜた湯の中に、すっくと立った狂四郎の右手には、意外、無想正宗があったのである。左手を揚げると、それには、鞘が握られていた。

それから、一刻あまりすぎて――。

狂四郎は、立川談亭に会うべく、天満の社への道をひろっていた。うしろについているのは小吟であった。

狂四郎の危機をすくったのは小吟であった。湯槽は、女湯とつづきになって居り、板仕切りの下から、小吟が、そうっと無想正宗をさし出してくれたのである。

「小吟――。お前は、公儀隠密のくせに笈川良範を、浴室まで導き乍ら、最後のどたん場で、なぜ裏切って、おれを救った？」

狂四郎は、そう訊ねたかった。しかし、その返答も、およそは、見当がついている狂四郎

であった。

——女心というやつは、所詮(しょせん)、おれにはわからぬ。

行手の空の下方に架(かか)った三日月へ目を送り乍ら、狂四郎の胸中には、その呟(つぶや)きがあった。

贋金（にせがね）六千両

一

「ごめん下さいまし」

天満天神前に並んだうす穢（ぎたな）い旅籠屋（はたごや）のひとつへ、縞（しま）木綿に小倉帯を締めた小商人（こあきんど）風の男が入って来た。

檐（のき）に掲げた屋号入りの掛行灯（かけあんどん）に、明りが入った頃（ころ）あいであった。

「おいでやす」

「こちらさまに、眠狂四郎と仰有（おっしゃ）るおさむらいがお泊りでございましょうか？」

「いやはります」

「次郎吉と申しますが、お目にかかりたいとおつたえ下さいまし」

女中が階段をのぼって行くのを見送ってから、鼠小僧次郎吉は、手拭（てぬぐ）いで、股引（ももひき）と紺足袋をはたいた。かなり遠方からやって来たとみえて、夜目にも白く、道中の埃（ほこり）が舞い立った。

狂四郎は、五十畳もあろう広間の片隅（かたすみ）に、仰臥（ぎょうが）していた。ここは、いわば最下級の旅人たち——六十六部、虚無僧（こむそう）、猿曳（さるひ）き、鳥追い、乞食（こじき）芝居の役者、野師（やし）、小博奕（こばくち）打ち、水呑（みずのみ）百姓

などが、雑魚寝（ざこね）するところであった。
次郎吉は、一歩入ってみて、
——臭え。
と、しかめ面（つら）をした。
まだ宵（よい）が早く、客の姿は、ほんの二つ三つしかない閑散さであったが、むうっとこもった空気には、長い年月の間に泊って行った夥（おびただ）しい貧者の体臭が溶け込んでいたのである。
「——旦那（だんな）」
次郎吉は、狂四郎のそばに坐って、
「ようく我慢出来ますねえ。まったく、変っていなさる」
と、云った。
狂四郎は、薄目をひらいて、
「こんな住心地のいいところはないぞ、次郎吉。一人のこらずお人好（よ）しで、正直で、話が面白いから、退屈はせぬ。おれという無頼な男を仲間入りさせてくれる浮世の余計者か落伍者（らくごしゃ）ばかりだ」
「ではござんしょうが……臭えものはやっぱり臭え」
ここで、次郎吉は、声をひそめて、
「ありやしたぜ、旦那」
目を光らせて、人差指をさし出すと、

「これだけでさあ――」と、云った。

狂四郎は、ほんのわずかに、眉宇をひそめただけで無言だった。

「どうなさいやす？」

次郎吉は、顎をなで乍ら、返辞を促した。

しかし、狂四郎は、視線を汚染だらけの天井へ移して、なお暫く口をひらかなかった。そのことには、殆ど興味がない無表情であった。

「ひとつ、世間をあっといわせる趣向を考えておくんなさいまし。……あっしゃ、どうせ、もう、娑婆にいるのはあと二年か三年か、と見越しておりやすからね、ここらあたりで、ぱあっと景気よく花火をあげておいて、そいつを、獄門台で目をつむる時に、想い出してみてえんでさあ」

狂四郎は、それに返辞をするかわりに、

「露のうき身のおきどころ、誰に問わまし旅の道、是も憂き世のならいかや……」

と、ひくく、謡曲・柏崎のひと節を口ずさんだ。それから、むっくり起きあがると、物倦げな眼眸を窓外へ送って、暮れのこった一朶の雲へあてると、

「金は山に棄て、玉は淵に投ぐべし――か。次郎吉、まァゆっくりと考えようではないか」

「へい――」

女中が、入って来て、狂四郎に、封書をさし出したのは、このおりであった。

それは、大塩平八郎の手紙であった。

開いて、数行と読まぬうちに、狂四郎の青白いおもてが、急にひきしまった。
昨夜、自分の配下同心五名が平野屋、鴻池屋、天王寺屋をまわって、二千両ずつ受けとっての帰途、面をつつんだ曲者一団の襲撃に遭うて、全額奪い去られ、同心のうち四名は即死し、一名は負傷した。下手人に心当りはないか。至急来駕ありたい。という文面であった。
六千両は、狂四郎が、大町人三人からせしめた金であった。
黙思ののち、狂四郎は、
「もう間にあうまい」
と、なげ出すように云った。
が、そう云ったとたんに、はっとひとつの直感が脳裡にひらめいて、にやりとすると、
「おい、次郎吉――」
「へい」
「これは――」
と、人差指を出して、
「もう大阪に運んであるのだな？」
「左様でさあ。荷厄介でござんしたが、わがものと思えば軽し傘の雪――でげすかな」
「役立てるぞ。ただし、お前の希望する派手な趣向ではないが――」
「なあに、旦那のおやりになることだ。思い通りになさいまし」

二

その夜——三更をまわって、真田山と桃谷の間にある札ノ辻に面した凝った家へ、狂四郎は、忍び入った。

平野屋の妾宅で、平野屋が今夜泊ったことを、鼠小僧につきとめさせたのである。

深夜の庭は、花の匂いをしっとりと含んだ静かな闇につつまれていた。

狂四郎は、母屋をずうっと見わたして、二階の左端の雨戸の隙間に、灯があるのを知るや、庭の木戸を押して、入った。これは、とおどろくに足りる、金にあかした美保の松原の縮景が、そこにあった。

音もなく、芝生を踏んで、松の木立を抜けて、近づいて行く。

小柄で雨戸をはずす。廊下にふみ込むと、階段がどこにあるかは、すでに外から構えを見てさとっていたことだった。灯は、階段の下まで降りて来ていた。

対手をのがさぬ立場を占めると、この男には、盗賊の真似は必要なかった。悠々と足音をたてて、二階にのぼると、廊下にもその音をひびかせて、灯かげの映えた障子にむかって進んだ。

「だれ？」

女の声がした。

狂四郎は、こたえるかわりに、障子をさっとあけた。

朱塗りの絹行灯に、照らし出された部屋は、金と粋にあかしてつくられてあった。派手な花模様の夜具は、歌麿、春信らの浮世絵を散らした金屏風のむこうに敷かれていた。狂四郎の巨大な影法師が、その屏風を匍匐して、枕もとへ、ぬっとあらわれるや、一枚絵からぬけ出したような女が、「ひっ！」と叫んで、はね起きた。白い胸と脛をはだけたなまめかしい寝みだれ姿は、ねっとりとした春の夜にふさわしい眺めだった。

——千金があると、こんなに佳い女が飼えるのか。

狂四郎は、江戸の女の持合わせぬふっくらとした餅肌の、その肌理にふさわしい人形のように白痴めく美しさをもった目鼻立ちを、暗い眸子に映して、しばし憮然として佇んでいた。

平野屋が、むっくりと起き上ったのは、それから二、三分あとだった。目をさましても、別に仰天してはね起きないところに、大阪屈指の大町人らしい貫禄があった。黙って、妾の乱れた前身をひいて、膝小僧をかくしてやるだけの余裕もあった。

そのあいだに、狂四郎の方は、端坐していた。

「夜分、不粋の真似をして相済まぬ」

「貴方様らしい——と申上げると、失礼にあたりまするが、玄関からお出で下さいましても、お会いいたさなかったわけではございませぬ」

「おれにくれた金を、また横取りするようなずるい商人を信用するわけにはいかなかったのでな」

「ああ、そのことでございますか——」

平野屋は、平然として微笑した。

「あれは、手前どものしわざではございませぬ」

きっぱりと否定して、狂四郎の鋭い眼光を、聊かも臆せず、見かえした。

「いい度胸だが、平野屋！　おれは嘘つきを斬ることには馴れて居るし、逡巡いもせぬぞ」

「これは、眠狂四郎様のお言葉ともおぼえませぬ。貴方様は、大阪の蔵元商人が、そんなケチな了簡だとお考えでございましたか。たかが、一人頭二千両ぐらい、役者にくれてやっても、それまででございます。ましてや、差上げる相手が、大塩平八郎様ではございませぬか。あの夜は、要らぬと申されても、それくらいのお土産物はさしあげる積りでございました」

「そうか――。こりゃァ、おれの黒星だったな」

釈然として、狂四郎は、苦笑した。

――こいつらの持っている金力は、桁がちがうのだ。こっちは、千両に目晦むみみっちい根性だから、こういうドジをふむことになる。

狂四郎は、まざまざと、天下の実権が、幕府の手から、この大町人の手に移ったのを思い知らされたうそ寒さを感じた。

当時、幕府は、経済安定政策として、絶えず米価の調節をするために、富商豪家に命じて、一時に巨額の米を買占めさせていた。すなわち、御買米であった。そうして、大町人たちを儲けさせておいて、こんどは、諸侯救助窮民賑恤のために、多額の府財をもって仁政を施すから、その儲けをさし出せ、と彼らに命じた。すなわち、御用金であった。この御買米と御

用金は、大阪、堺、西宮、兵庫の大町人によって悉く賄われたのである。すでに、これまで、文化七年及び十年の両度で、七十余万両がさし出されている。そして、この年は、六十万両の御用金下命があったが、大町人たちは、ビクともしていないのである。

もし、大塩平八郎によって、彼らの違法行為が発かれるとすれば、御用金は、罰金としてその二倍、あるいは三倍にはねあがるに相違なかったろうが、それでも、屋台骨がゆるむ家は一軒もあるまい。ただ、それを未然に防ぐために、一人二千両ぐらいで済むならば、これはまことに安いものであった。

まさしく——文字通り桁がちがうのだ。

「平野屋、おぬしたちのしわざでないことはわかったが、おぬしたちは、あの金が横取りされることをあらかじめ知っていた、とおれはみるが、どうだ？」

「知らなかったとは申しませぬ」

平野屋の落着きは、心憎いばかりであった。

「きこう」

「そりゃァ、眠様、手前の口からは申上げられませぬ」

「何故だ？」

「商人と申す者は、利得によって生きて居ります。手前が、貴方様に、金を奪った人々の正体を白状したことが、あとで知れますと、手前の損になるのは知れて居ります。また、あの六千両は、手前どもと貴方様のお取引でございました。いったん、お受取りになった以上、

その行方がどうなろうと、手前どもの知ったことではございますまい。貴方様が、そばにつき添って居られなかったのが手落ち、と申上げるのも余計なさしで口と申すものでございましょう。貴方様ご自身のお力で取りかえしてごらんなさいまし、と申上げるよりほかはございませぬ。手前どもは、この上の損は真平ご免を蒙りります。これが商法と申すものなので——」

「よし、わかった」

平野屋たちのしわざではなかった、と判然としただけで、忍び入ったのは無駄ではなかったのである。

狂四郎が立ちあがった時、平野屋は、じっと仰ぎ見て、

「眠様、貴方様のようなお方が、この大阪の町奉行所に、三、四人おいででございましたら、手前どもは、こんなに儲けさせて頂くわけには参りませんでしたな。……失礼乍ら、貴方様のご立派な態度に惚れました。……別に、手前個人として、千両さしあげようではございませんか」

瞬間——狂四郎の面上に、凄じい殺気がみなぎった。

「見そこなうな！　平野屋！」

一喝されて、平野屋は、はじめて、総毛立つ戦慄に襲われて、顔から血の色を引かせた。

「眠狂四郎は、無頼を働いても、乞食には堕ちぬぞ！」

「お、おゆるし下さいまし」

平野屋は、平伏した。

狂四郎が、廊下へ出て、ゆっくりと歩き出した時、平野屋の大声が追って来た。

「眠様——。金を奪った連中は、貴方様とは、お顔馴染(なじみ)らしい——と、それだけ申上げておきまする」

——成程、そうか。そうではないか、とも思ってはいたのだ。

三

三頭の荷駄をしたがえて、狂四郎が、天満橋筋長柄町を東へ入った所謂(いわゆる)四軒屋敷の一たる大塩邸をおとずれたのは、翌朝であった。

邸前、庭、塾、読礼堂（講堂）など、葬儀でごったがえしている最中であった。殺された同心四名は、いずれも、大塩邸に住み込んでいる塾生だったのである。

狂四郎は、白張無紋の高張提灯(たかはりぢょうちん)のかかげられた玄関から、人足たちに重い荷をかつがせて、どんどん奥へ通った。

恰度(ちょうど)、読礼堂では、納棺の式が終ったところであった。

狂四郎は、戸口に立つと、わざと大声で、

「眠狂四郎、ただ今、故人となられた方々に、泉下でよろこんで頂ける供物を持参いたしました。皆様がた、ごらんねがいとう存ずる」

と、云った。

一斉の注視の中を、狂四郎は、人足たちに六個の千両箱を、霊前へはこばせた。
迎僧とならんで坐っていた大塩平八郎は、期待をもって、狂四郎の挙動を見まもった。
狂四郎は、四つの棺へ黙禱したのち、堂内に満ちた百余の塾生たちに、向き直った。
狂四郎のすぐ前には、頭を白布で巻いた若侍が、蒼褪めた面持で坐っていた。生きのこった一人須藤辰馬という同心であった。
「先ず——前途有為の同志四名を喪われた皆様がたに、手前、衷心よりお詫び申上げます。実は、この方々は、曲者の群に襲われた時、反撃の必要は聊かもありませんでした。手前が、そのことを連絡申上げなかったことが、このたびの悲惨事を招いたと思うと、痛恨に堪えませぬ。と申すのは、この方々が、平野屋、鴻池屋、天王寺屋から受けとられた千両箱には、贋金が詰めてありました」
これをきいて、堂内に、驚愕の波がひろがった。生きのこった須藤辰馬は、烈しい憤りの色さえ、その面上に泛べた。
狂四郎は、水のように冷やかな表情で、ざわめきのしずまるのを待って、
「手前は、生来要心ぶかい人間でありまして、万が一の不測の災難に遭う懸念なしとせず、と考え——と申せば、いかにもおのれの明察を誇示するがごとくでありますが、すでに一部の方々のお耳に入っているとは存じますが、手前は、当夜、試合対手の笈川良範なる剣客に、湯殿で襲撃され、これを斬り伏せて居ります。その時、手前が、あるいは良範の朋輩が、賞金を、途中で奪わんと企てるかも知れず、と想像したとしても、これはあながち臆心とは申

せますまい。ひとつには、笈川良範なる人物が、何処の何者であるか、深い疑念があった故でもありました。で——手前は、ひそかに平野屋にたのんで、公(おおやけ)に運び出す千両箱には贋金を詰めてもらった次第でした。……手前が、急用あったが為(ため)に、大塩先生にこの旨(むね)をお報(しら)せいたしておかなかったのは、重々の手落ち、深く慚愧(ざんき)つかまつります。ただいま、持参いたしましたるこの六個の箱に、まちがいなく、六千両ありますれば、御霊(みたま)を、多少おなぐさめ出来るかと存ずる次第であります」

云い終ると、狂四郎は、膝をまわして、千両箱のひとつに手をかけるや、蓋(ふた)をとって、燦(さん)たる黄金の響きを、堂内へ撒(ま)いてみせたのであった。

すべての人々は、その輝きに目をうばわれた。ただ、大塩平八郎だけは、狂四郎の顔を、終始凝視していた。

その目を感じて、ちらとふりかえった狂四郎が、口辺に、薄ら笑みを刻むや、平八郎も、あるかないかの微笑を目もとに刷(は)いてみせた。ただ、平八郎は、これが狂四郎が打つひと芝居であることは読めたが、どこからその六千両を持って来たのか見当もつかなかった。

それは、鼠小僧次郎吉が、伊勢桑名の沼波五左衛門の菩提寺(ぼだいじ)の境内の一隅(ひとすみ)から掘り出して来た一万両の内であった。

例の青磁の砧手(きぬたで)花瓶を毀(こわ)し、塗りこめた遺産の匿(かく)し場所の絵図を発見して、次郎吉が趨(はし)ったのである。

四

宵空へ蹄音をひびかせて、一騎、伏見街道を、京へむかって、飛ぶように駆けて行く——。

宇治川を渡って、たちまちに、墨染を過ぎて、喬木や竹藪が街道をはさんで、鬱葱と天を掩うた地点に出た、深草野で、古来、鶉の名所であった。鶉は荒れた野に啼くものである。中古荒廃した鶉の里の面影は、そのままにのこり、夜風の音も急に蕭々たるおもむきをおびたようである。

鳥羽街道、竹田街道へ通ずる三叉の岐れ道になったとある辻に出ると、騎馬の男は、たづなを引いて、ひらりと地上に降り立った。

すると、すぐ、木立の陰から、ひょっこり、ひとつの黒影が出て来た。

「旦那——」

鼠小僧の声だった。

「ご苦労——」

狂四郎は、馬を街道の外へ曳いて行って、草を与えた。

次郎吉は、はっくしょいとくさめして、

「あっしゃ、まァ我慢づよい方なんだが、こんな滅法界淋しいところに日ねもす夜っぴて蹲んでいるのは、どうもあまり有難くござんせんねえ」

「むかしの公卿は、月を眺めたり、鶉の声をきくために、お前と同じように、辛抱づよくこ

こに立っていたのだぜ。夕されば野辺の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里——などと一句ものするためにな。鶉は秋だが、鶯ぐらい啼いたろう」
「冗談じゃありませんや。あっしゃ、昨夜から、目を皿にして、馬をとばして来る野郎を見はっていたんですぜ」
「通ったろう？」
「へい、つい、一刻前でさ」
一昼夜、監視をつづけていた甲斐はあったのである。
「では、おっつけ戻って来るだろう。おれが代るから、お前は、そこいらで休んでいろ」
「あっしの役目は、まだござんすか？」
「ある筈だ」
「こんどは、少々生命が危くてもいいから、威勢のいいのがようござんすねえ」
そんなことを云い乍ら、次郎吉は、夜霧の中へ身を横たえるために、ごそごそと灌木のむこうに遠ざかった。
狂四郎は、ふところ手で路上に立って、それなり、彫像のように動かなかった。
月が出るらしく、山の彼方が、明るくなった。
やがて、輪郭のおぼろな虧け月が、山の尾根を離れて、狂四郎の影法師を、長く地面に這わせた頃あい——。
竹田街道の方角から、遠く、蹄の音がひびいて来た。

月明に、埃の煙りを巻きあげて、その騎馬が、辻を駆け過ぎようとした瞬間、いったん、木陰に身をひそめていた狂四郎が、ぱっと躍り出て、両手をひろげた。

覆面をした乗手は、あっとなって、たづなをひきしめて、馬を棹立ちさせた。

あわてて、馬首を回そうとしかけたが、もう、その時は、狂四郎の片手に、轡を摑まれていたのである。

「降りろ、須藤辰馬！」

凜とした一声を掛けられて、乗手は、呻きとともに、抜きざま、斬りつけた。

狂四郎は、わずかに、肩をねじっただけで、刃風を流すと同時に、須藤辰馬の足くびを摑んで、容赦ない力で、鞍からひきずり落した。

礑と地ひびきたてて転倒したやつを、素早く、組み伏せた狂四郎は、面の覆いをむしりとった。

頭を巻いた白布が、しろじろと浮きあがった。

「おい、裏切り者！　貴様、公儀庭番から、いくらの目腐れ金を貰った？　朋輩四人を殺しても悔いないだけの額かどうか、ききたいものだ。千両箱のひとつでも貰ったか？」

あびせかけつつ、狂四郎は、辰馬の刀の下緒で、後手にしばりあげた。

次郎吉が、出て来て、

「こん畜生っ！　てめえのおかげで、とんだお公卿の風流をやらかしたぞ。しびれをきらした、なんてえものじゃねえや」

と、怒鳴りつけると、いきなり、頬桁をなぐりつけた。

「次郎吉、あまり苛めるな。こっちの筋書通りに動いてくれた人間だ。京の何処へ行って、どんな打合わせをして来たか――あらいざらい泥を吐いてやろう、という顔つきをしていなさる。なあ、そうではないか、須藤。それが、せめてもの、殺した朋輩たちに対する罪ほろぼしというものだ」

五

京から大阪へ、舟で行くには、三条小橋、木屋町から高瀬川の引舟に乗り、伏見の船場へ行き、そこで三十石の乗合船で淀川を下って、八軒屋へ着く。これは殆ど夜行で、夜の五つ刻に高瀬川を出て、大阪へ上陸するのは暁天であった。

その引舟さえも、木屋町の石垣からのこらず出はらって、酒楼の絃歌もようやくと絶えた深夜、一艘の仕立て舟が、二条の方から下って来た。

橋袂の石垣に着くと、舳先に立っていた一人の武士が、ひらりと岸に上って、

「待って居れ」

と船頭に命じた。

武士の姿がいなくなったとたんに、音もなく、黒影ひとつ、すうっと、石垣へ降りて来て、艫に蹲んで、煙管を啣えている船頭にとびかかると、簡単に当て落した。

つづいて、もうひとつの影が走り寄って来るや、ぐったりとなった船頭の衣類を手早く剝

いで、身につけた。

船頭と同じように、豆しぼりで頰かむりし乍ら、

「いったんくわえ込んだ金を、また吐き出させる——成程、うめえ手だ」

と、呟いたのは、鼠小僧であった。

「では、たのむ。この舟に乗るのは、せいぜい二人だろう。見破られないよう要心しろ——」

狂四郎は、云いのこして、しずかな足どりで、石段をのぼって行った。

次郎吉の方は、船頭に猿ぐつわをかませて、石垣の陰へひきずり込んでおいて、何食わぬていで、艫に蹲むと、煙草をふかしはじめた。

覆面の一団が、千両箱を六個かついで、舟へ来たのは、それから程なくであった。

一人だけがのこるのをぬすみ見て、にせ船頭は、にやりとしたことだった。

ひきかえした六名の者には、堤に馬が待っていた。

騎馬の群は、一騎ずつ一定の間隔を取って駆け出した。

流れるように——という形容がふさわしい、見事な疾走であった。

部落、青野、川堤、森……みるみるうちに後方へ置き去って、先刻、狂四郎が須藤辰馬をとり押えた辻も、あっという間に駆け過ぎた。

遠く——淀の天守閣が、月空を截りぬいて、くろぐろと聳えているのを望む地点まで来た時であった。

この騎馬のつらなりよりも、さらに迅い勢いで、後方から馬をとばして来た一騎があった。

殿りの者が、振りかえった時、もう数間に迫っていて、鞍へ身を伏せて、「御免――」ともことわらずに、その馬脚の素晴しさをそのまま誇って、一直線に、追い越したのであった。
「なんだ？」
「何者？」
六騎の咎めの視線に迎送されて、その一騎は、またたく間に、飛矢宛然に、先頭へ出ていた。
「おっ！　彼奴！」
一人が愕然として叫んだ時には、すでに、五間のさきにあった。
そして、頃よしと見て、巧みに御して馬首を向きかえたのであった。
「公儀隠密親不知組と見うけた。眠狂四郎、先般の、阿弥陀ヶ峰の返礼をいたす！」
颯爽として、呼ばわるや、軽やかに地上へ降り立った。
六騎も、一斉に馬をすてた。
狂四郎は、無造作な立姿で、敵がたちまちつくる円陣の中点に置かれるにまかせつつ、
「あの世への土産話に申上げておこうか――。お手前がたは、他人の秘密をあばいたり、物を横取りしたりするわざはお得意のようだが、自分たちが謀られていると看破する知恵は浅いらしいな。……須藤辰馬が、泡をくって駆けつけて、あの六千両は贋金であったと報告するや、お手前がたは、ろくろく真贋を調べもせずに御苦労千万にも、またはこび出して、平野屋たちにつきつけて、本物と、とりかえさせようと気負い立った。いったい、お手前がた

は、平野屋たちから、六千両を貰ったつもりで、いるのか！　よしんば、贋金であっても、平野屋たちを責める口上が、お手前がたにあろう道理がない。お手前がたが奪ったのは、この眠狂四郎からなのだぞ。憤るなら、わたしにだまされたと憤るがよい。ところが、あいにく、わたしは、たとえ敵と雖も、だますことは、性分に合わぬ。ただしお手前がたが、須藤辰馬を使う卑劣をもってしたから、こちらも、彼をつかって報いたのだ。お手前がたが先程、舟に積んだ六千両は、贋金では断じてない！　――せくな！　まだ話は、終っては居らぬ」

　六本の白刃にかこまれて、まだ、無想正宗は鞘の内にあった。

「お手前がたを勝手に平野屋たちのところへ趨らせておいて、こっちは、六千両を頂戴して、赤い舌を出す――お手前がたを真似れば、そのやり口があった。あいにく、わたしには、阿弥陀ヶ峰の借りをかえす用事がある。あの時は待たれる番であったが、今は、待つ番だ。心組みがちがうぜ……。そうだな。こういうぐあいに、お手前がたは、おれに退路を与えずに、とりまいてしまって居る。これが、そもそも孫子の軍略に反するのだ。囲師は必ず闕く、窮寇は迫る勿れ、だ。おれに、必死の力を出せ、とすすめてくれていることになるのだ」

　一颯――。

　斬り込んで来た正面の敵へ、抜く手も見せぬ閃光をあびせておいて、

「親不知組とはよくつけた。こちらも、心おきなく斬らせて頂ける！」

　眠狂四郎の水ぎわ立った腕の冴えが、おぼろ月の下で、のこりの五つの、生命にむかって、発揮されようとするのであった。

その頃――。

鼠小僧次郎吉は、のんびりと、唄い乍ら、淀川をこぎ下っていた。

淀の川瀬の景色をここに、引いてのぼる、やれ、三十石船、清き流れを、汲む水車、めぐるまごとは、皆みな目ざめ、さした盃、おさえてすけりゃ、酔うて伏見へくだまき綱よ、こうしたところが、千両松……

乗っている筈の武士の姿は、消えていた。

次郎吉が、隙をねらって、川の中へすてて来たのである。

女心抒情

一

　夜靄が川面と岸辺を、ひと刷毛ぼかした淀川を、大阪の八軒屋を出た三十石の乗合船が、ゆっくりと、土手から綱で引かれて、のぼっていた。

　眠狂四郎は種々な乗客で混雑した胴の間を避けて、艫に積んだ菰包みの陰へ、ひとり腰を下して、放念していた。

　膝の前には先刻、「くらわんか、くらわんか……」と高声で呼びつつ、漕ぎ寄せて来た枚方船が、むりに売りつけていったごんぼう汁と茶碗酒があった。どちらも、手をつけていなかった。

　八軒屋を出た時から、狂四郎は、ふところ手で、菰包みに凭りかかった姿勢をかえてはいなかった。

　目は、移りゆく沿岸の景色へ投げていたが、心は、暗い虚脱感で掩われていた。

　狂四郎は、大塩平八郎邸にとどまっていることが、目に見えない羈絆となりそうなので、黙って、ふらりと去って来たのである。

どうにもならないこの魂の曠しさは、もはや無道な刺激以外には、癒やすすべはなさそうであった。そして、その刺激を受けてさえも、神経の働きの充足が魂の中に、何か生きているあかしをとらえさせたごとくに錯覚を起させるにすぎないのであったろう。

乗船してから、狂四郎が、ふっと、心を別の意識へ移したのは、朧月の下を、杜鵑が、鋭く啼いて翔け過ぎた時だけであった。

　いずかたに啼きてゆくらん杜鵑
　　淀の渡りのまだ夜ふかきに

そんな古い歌が、なんとなく脳裡を掠めて、狂四郎は読み人のすごした時世に、かすかな羨望をおぼえたものだったが、それもわずか数秒の間にすぎなかった。

と――。

その空虚な気持と関りなく、狂四郎の習練を積んだ神経は、菰包みのむこうへ蹲んだ二人の人間の気配が、怪しいものであるのを、さとっていた。といって、こちらとは無関係であった。相手がたは、ここに人がいるのを気がつかない様子であった。

「……旦那、よろしゅうございますか、京へ仕官の口をもとめておいでになったと仰言いますが……失礼乍ら、あんまり甘いお考えなので、つい、てまえも、いらぬお節介を焼きたくなったんでございますよ。京には、いったい、どれくらい、その日のくらしに困った浪人さんがいると思いなさる？　二千人は下らないのでございますぜ」

「…………」

「てまえがよう存じあげている浪人さんのうちに、東軍新当流の印可をお持ちで、お若い時、立派にお父上の仇をお討ちになったお方がいらっしゃるんだが、それでさえ、仕官の口は、ひとつもおありなさらない。……ねえ、旦那、ここんところを、ひとつ、ようく、お考えになって、てまえの話を、お慍りにならずに、きいて頂きたいんで――」

おしころした声音を、狂四郎は、小ずるいこんたんをひそめたもののときいた。

「べつに、慍りはせぬ」

こたえる声音は、弱々しかった。

「じゃ申上げましょう。……つまり、旦那は、このまま、ご夫婦で京へお上りになって、今日の米にもお困りになるか、それとも、ここで、目をつむって、奥さまといったんお別れになって、百両をふところになさるか――どちらかでございます。……くどく申上げますぜ、百両でございますよ！」

「あの女に、それだけのねうちがあると申すのか？」

「正直なところ、ございません。ただね、奥さまは、いずれはご立派な大家のお生れでございましょうし、貴方様も、ついさきごろまでは、そのご身分であらせられた――つまり、徳川のはじめからのお家柄、お血筋は、これは、どんなにおちぶれなすっても、あらそわれませぬ。指一本動かすのにも、ちゃんとあらわれるものでございます。二代や三代のおさむらいでは、おちぶれたがさいご、もとの野草にかえってしまいますがね。……いま、金蔵の天井まで千両箱を積んでいる大町人たちが、いちばん、欲しいのは、奥さまがお持ちの気品で

ございます。ふるいつきたいような美人は、祇園へ行けば、掃いてすてる程居ります。京では美人は、いくらでも、金で自由にできまする。しかし、奥さまがお持ちの気品は、これはどっこい小判じゃ買えませぬ。……だから、奥さまさえ、その気におなりになりさえすりゃ、大町人のふところから吐き出させるのは——なんの、こんなにやさしい金儲けは、ほかにありゃしません」

「………」

対手の沈黙は、長くつづいた。

「旦那、船が伏見へ着くまで、とっくりとお考えなさいまし。旦那が、どうしても、いやだと仰言るのなら、あっしも、強いておすすめはいたしませぬ。ただ、肚をおきめ下さるのなら、今夜のうちにも、百両、ずしりと、その手へおのせいたしましょう」

談合おわって、二人が胴の間へひきかえして行く気配をきき乍ら、狂四郎は、かすかに、口もとを歪めた。

——ふん、気品か。三百年の泰平で培った気品……そいつに、百両の値がついた。結構な話だ。売るがいい。

二

船が、伏見の京橋際の船場へ着いたのは、すでに三更に近い夜中であった。

しかし、ここばかりは、この三十石船はじめ、都通いの高瀬舟や宇治川を下る柴舟などが、

数多く動いていたし、川辺に並んでいる旅籠や茶屋が、あかあかと灯火を水に映して、人影の出入もあわただしかった。伏見人形の土産店もまだ、開いて、客を呼んでいた。

伏見稲荷への夜詣りの者、高瀬舟へ乗り換える者、ここで一泊する者――すべての客が、ぞろぞろと上るのを待ちかまえていて、客引きが、大声をあげ乍らむらがって行った。

しかし、ふらりと石段へ立った狂四郎にだけは、一人も近づいて来なかったのは、浪人者が、いかに京洛では敬遠されているかをしめすものであったろう。

高札場をまわって、橋を渡りかけた時、手すりに倚りかかっていた一人の女が、ゆっくりと首をまわした。

狂四郎に視線を合わせると、船の灯を下から受けた女の白い顔が、ふっとほころびた。惣嫁（夜鷹）にしては、顔立ちにも身なりにも小粋な仇っぽさがあった。それでいて、どことなく淋しげな翳を姿ぜんたいに刷いている。

「旦那、――何処へ行くあてもなさそうなご様子ね」

「うむ。お前のところへ行こうか？」

「おいでなさい。でも、あまり美味しい地酒じゃありませんよ」

「口はおごっては居らぬ」

二人は、ゆっくりと肩をならべ、橋板を鳴らして行った。

女が、狂四郎を案内したのは、とある辻の角にある店であった。白馬の形を染め抜いた紺暖簾をかけてあるところをみれば、居酒屋には相違なかったろうが、中に入ってみると、な

んとなく様子がちがっていた。牀几(しょうぎ)に、客の姿はなく、片隅(かたすみ)には、垂駕籠(たれかご)が二梃(ちょう)据(す)えてあり、板壁には、草鞋(わらじ)、脚絆(きゃはん)、合羽(かっぱ)、菅笠(すげがさ)など、旅道具一揃(ひとそろ)い、さげてあった。台の上で、燭台蠟燭(しょくだいろうそく)が、ゆらゆらと炎をゆらめかし乍ら、ジジジ……と鳴っているのが不審に感じられる程、人の気配はさらになかったのである。

しかし狂四郎は、べつだん訝(いぶか)しげな顔つきにもならず、牀几に就いた。

女は、すっと奥に入って行ったが、待たせるでもなく、酒と肴(さかな)を持って来た。

狂四郎は、注(つ)がれた盃(さかずき)を、黙って口に運んだ。

女は——女もまた、無言で、頬杖(ほおづえ)つき乍ら、狂四郎が飲むにまかせて、酌(しゃく)をつづけた。

やがて、女が、

「何を考えておいでです？」

と、訊(たず)ねた。

「何も考えては居らぬ」

「旦那は、いつ頃(ごろ)から、こういうお人におなりになったんです？」

狂四郎は、女をじろりと見やった。

じっと据えている女の眸子(ひとみ)には、崩れた者に似合わしからぬ深い澄んだ色があった。

「はじめて人を斬(き)った時からだ」

それをきいても、女の表情はかわらなかった。

「斬ってもいい悪いやつらだったんですか？」

「忘れた」

狂四郎は、ぼそっとこたえて、女に盃を与えた。

女は、微笑をうかべた唇(くちびる)へ、盃をかたむけた。眸子は、ずうっと、狂四郎の彫りの深い横顔へ据えたままだった。

そしてまたしばし沈黙があってから、

「旦那は、女に惚(ほ)れたことがおあり？」

と、女が問うた。

狂四郎は、こたえるかわりに、

「お前は、どうだ？」

「あたし？　……あたしはあります」

「その男を、まだ忘れないでいるのか？」

「ばからしい」

「すてられたのだな？」

「子供まで生まされてね」

狂四郎が視線を向けると、女は顔を伏せて、こぼれた酒で、台の上へ文字を書いた。

修太郎

そう書いた。

「生きているのか、その子供は？」

「……死にました」
それから、女は、急に声音をかえて、
「旦那は、さしあたって、何もすることがないんでしょう？」
「ない」
「じゃあ……」
ちょっと、口ごもっていたが、
「用心棒はおいやですか？」
「この家のか？」
「ええ――」
「どんな悪事を働いて居るのだ？」
「あたしのような煮ても焼いても食えない女をつくる商売なんです」
この時――。
暖簾をはねて、一人の男が、ひょいと入って来た。ずぶかたぎのお店者態（たなものてい）であったが、目つきが険しかった。
女に、ちょっと頷（うなず）いてみせておいて、表をふりかえり、
「旦那、どうぞお入り下さいまし」
と、腰を屈（かが）めた。その声は、狂四郎に、ききおぼえのあるものだった。
――成程、三百年の泰平で培ったお家柄の気品を百両で買う店は、ここだったのか。

狂四郎は、かすかな苦笑をうかべた。
女衒にみちびかれて入って来たのは、いかにもかんたんに誑かされそうなおっとりした面立ちの旅装束の武士だった。
当然、狂四郎には、背後にしたがった、その妻の容貌の方に興味があった。
良人の面立ちにつり合った、ふっくらとした下ぶくれの享保座雛に似た若女房であった。その勝山髷の上に、瑶珞のついた天冠でものせればふさわしいような、おのれの意志というものを持たず、孔子が曰う、意無く、心無く、固無く、我無く、そして三従の道を、聊かも疑うことなく、躾の中に溶け込ませたしとやかさが、左様、気品といえばいえたろう。
「どうぞ、こちらへ――」
女衒に促されて、夫婦が、狂四郎たちの前を通りすぎようとしたおり、傍の女は、何気なしの冷たい表情を擡げた。
とたん――武士の横顔にあてた彼女の目の色が、一変した。
武士の方は、気づかずに、そのまま妻をつれて二階へ上って行った。
異様に顔をこわばらせて、浴びた衝撃をけんめいに怺えていた女は、狂四郎の鋭い視線を感じるや、ふらふらっと立ちあがって、おもてへ出て行ってしまった。狂四郎は、しかし、それをひきとめようともせず、しずかに、酒を飲みつづけた。

三

女衒が、跫音もなく階段を降りて来たのは、それから程なくであった。
土間に、狂四郎一人のこっているのを、ちょっと怪訝そうに眺めたが、すぐ、そばへ寄って来ると、小声で、
「旦那、おえんから、話をききなすったか？」と、訊ねた。
「話？」
狂四郎は、わざと空とぼけてみせた。
「おえんが、旦那をここへおつれしたについての相談でさ」
「ああ、用心棒の口か——」
「一日二両の手当をはずみますぜ」
「まあ、辞退しよう」
「二両じゃ不足だと仰言る！　冗談じゃありませんぜ。大阪の両替屋が、江戸下しの為替をもった金飛脚のつき添いにやとって、東海道を往復させて、五両と出さねえんだ」
「いや、安いと云っているのではない。おれは、二両という大金を貰うだけの腕前も度胸もない」
狂四郎は、外から、五十年配の浪人者がのっそりと入って来たのを、見て見ぬふりし乍ら、そう云った。

「そうは見えませんぜ。おえんという女がこれはと目をつけたおさむらいは、まず二人や三人、人を斬ったおぼえのある御仁ばかりなんだ。おえんは、そういうカンにかけては、絶対に狂ったことはありませんぜ」
「ところが、おれに関するかぎりは、とんだめがねちがいだった。人を斬ったおぼえもないし、斬られるような悪事を犯したこともない」
女衒は、いまいましげに、舌うちした。
「おえんは、仕事のうちわけをきかせましたかい?」
「きかなかったことにしよう」
狂四郎は、ふらりと立ちあがると、台へ小銭を置いて、女衒の険しい眼眸に送られつつ、おもてへ出て行った。
すると、階段下の上り框へ腰を下していた浪人者が、
「徳兵衛」と、呼んだ。
「あいつは、できるぞ」
「え?」
女衒は、きらっと目を光らせた。
「野郎、なぜ、かくしゃがったんだろう?」
「べつに、奉行所の回し者とも見えなかったが——」
「貝塚さん、おめえさん、あいつを片づけて来てくれませんか。要心するに越したことはね

え」

「うむ。――そうするか。尤も、へたをすりゃ、わしの方が斬られそうだな」

浪人者は、のっそり腰を上げると、出て行った。

狂四郎は、川沿いを、文字通り足の向くにまかせて、ゆっくりと歩いていた。

いつの間にか、川面からは舟影が散り、旅籠屋の大半は、大戸をおろしていた。掛行灯の光が、路面に、赤く落ちているので、遠見はきいたが、人の影は稀になっていて、跫音が高くひびく静寂の世界にかえっていた。

空気は妙になまあたたかで、いつの間にか季節が移っているのが感じられた。

――帰るか、江戸へ。

ぼんやり、そのことを思い乍ら、とある辻を曲ろうとした。

そこはすでに、旅籠屋の並びを過ぎていて、往来は、闇になっていた。

狂四郎の右側は、屋根妻を整然とつらねた酒屋の土蔵であり、路傍には、大樽がずらりと置きならべてあった。

四、五歩あるいて、狂四郎の本能が、突如の殺気をあびて、おそろしい迅さで、四肢の神経をそれに備えさせた。

べつに、姿勢も足幅も歩速も変化させたわけではなかった。並の人間とは全く異った感覚が、脳裡の働きを待つまでもなく、自然に具わったものとなっているのであった。

——来るな！

とさとって、心が油断なく身体に警告を発するのではなく、対手の殺気が電光のように間髪に応ずる力を、狂四郎に与えることになるのだ。これは、狂四郎自身、説明のしようのない全身的な閃きといえる。おのれの勘を誇っているわけではない。自分自身でも信じ難い、磨ぎすまされた本能の処置なのであった。そして、これは、常に的確であった。

ゆっくりと……さらに、三歩あまり進んでから、狂四郎は、

——どうした？

と、姿なき伏兵に、声なく問うた。

白刃が、躍って来なかったのである。

その不審が起った瞬間、狂四郎は、総身が、じーんとなる——一種の当惑に似たものを感じた。

——危なかったな！

おのれに呟いたのは、さらに、それから二間あまり遠ざかってからであった。

これまで、狂四郎は、幾度びも、殺意をこめた人間から待伏せられている。このことには、平気な男であった。

ただ、たった今のような、一刹那の備えが過ぎたと思うや、不意に、虎口をのがれた意識が、ひえびえと湧いた経験は、はじめてであった。

——強かったのだ！

肚にこたえる鋭く冴えた殺気を、対手はあびせてみせてくれたのである。

——なぜ、斬って来なかった？

斬られて恨むこちらではないのだ。

狂四郎は、身をひるがえして、樽の陰にひそむ人間へむかって、猛然と挑みかかりたい衝動にかられた。

しかし、その足どりは、依然として、向いた方角へ進められていた。

ひきかえすことは、尋常の勝負となることを意味した。こちらは、べつに、剣理の妙を悟るのを悲願とする兵法者ではないのだ。

一瞬は、すでに過ぎたのである。すなわち、この眠狂四郎は、また、生きのびたのである。

それだけの話であった。

四

おえんは、船場から、ずうっとはなれたとある岸辺に、うずくまっていた。

傍に、常夜灯があり、足下の蘆の葉を、無数の蛍がとまっているように、青白く、きらきらと光らせていた。

それへ目を落して、おえんは、狛犬のようにくろぐろと動かないでいる——。

居酒屋をとび出した時は、烈しい混乱で、心中は滅裂になっていたが、それが一応鎮まったいまは、深い疲労感がのこっていた。

脳裡は、空白であり乍らも、石を詰めたように重かった。

──あいつが、地獄宿へ舞い込んで来た！

もう幾度もつぶやいた言葉を、おえんは、また、胸のうちでくりかえした。

用心棒に傭おうと目をつけてつれ込んだ浪人者に、曾て喋ったことのない自分の過去を、ついロをすべらした矢先、神の辛辣な悪戯であったろうか、自分に子供を生ませて、敝履のように棄てた当の本人──成瀬門之進が、ひょっこりその妻をつれて入って来たのである。

成瀬門之進が改易を蒙って江戸を立退いたという噂は、風の便りできいていたが、まさか、再びめぐり会おうとは、夢にも考えてはいなかった。

おえんにとって憎い昔の男が、零落して、ついに妻のからだを売るべく、地獄宿へやって来たことは、いわば、これは因果の車輪がまわって来たというべきであったろう。いまこそ、門之進に、三悪趣の苦痛を、思いきりなめさせてやる立場を占めていたのだ。犬の糞で敵を打つ──その残忍を、おえんは、平然とやれる冷たさを身につけている筈であった。

にも拘らず、おえんは、門之進を見出した瞬間に、名状しがたい衝撃で、復讐の炎を燃やすかわりに、自分が背負うた宿命にうちのめされてしまったのだ。相手をあざけるよりも、まず、地獄宿の女になっている自分に嫌悪と屈辱をおぼえたのだ。そして、ふらふらと、ぬけ出て来たのであった。

──あたしは、まだ、あの男のことが忘れられないでいたのだろうか？

空白の頭の中で、そっと自分に問うてみる。

——そんな筈はないんだ。憎んで、憎んで、憎みぬいたやつだもの……。

あの男がいなければ、おえんは、いま頃は、江戸の名のある暖簾をもつ呉服問屋の御新造になっていられたのだ。

その問屋の若主人との婚約がととのってから、おえんは、千二百石の交代寄合旗本である成瀬家へ、見習奉公に上ったのであった。七年前のことである。屋敷奉公は、当時における、町人娘の高等教育であった。

おえんは、奉公に上ってから一月と経たないうちに、若殿門之進の一夜の暴力に遭った。

おえんは、しかし、許嫁をあきらめると同時に、門之進を愛した。一生を側妾としてあまんじる覚悟をきめたのであった。だが、それは、おえん自身の儚い希望にすぎなかった。

門之進が正室を迎えるにあたって、狡猾な用人の計画にはめられて、おえんは追放された。

その時、おえんは、身籠っていた。

もとより実家へは帰れる身ではなく、大阪の伯母をたよって行き、そこで男子を生み、伯母に預けて、新町の廓茶屋の女中となった。女衒徳兵衛に出会い、律儀な小商人と信じ込まされたのが、転落のきっかけだった。

……陰惨な世界にひきずり込まれて、すでに五年すぎている。

「畜生っ！」

おえんは、不意に、われとわが心をけしかけるように口走った。

「殺してやろうか！」

瞬間――全身に、瘧のような悪寒が来た。すると、その修羅の渦巻く胸の底から、にわかに、いいようのないイヤな塊が、咽喉もとめがけて、ぐぐっとこみあげて来て、おえんは、思わず、腰をうかせて、ぱっと吐いた。
夥しい血汐が、常夜灯の台石へ撒き散らされた。
灯笠へ片手をかけて、そのまま崩れ込んでしまいたい、けだるいからだをささえて、ほっと深い溜息をもらした折――。
「おい――」
と、背後から声がかかった。
狂四郎であった。辻を過ぎて、ひとまわりすると、ここへ出たのである。
文楽人形のように、ゆっくりと首をまわしたおえんに、
「お前の知っている旅籠へ案内してくれぬか――」
と、云った。おえんは、黙って頷くと、歩き出した。
それから小半刻のち――。
こぢんまりした古びた旅籠の二階の一室で、狂四郎とおえんは、ひとつ床の中に在った。
おえんは、狂四郎が、床に入るまで、片隅にうずくまって、じっとしていたのだが、
「あたしも、泊めてもらおうかしら――」
と、独語して、狂四郎の返辞も待たずに、いかにもけだるそうな動作で、帯を解き、ふわりと着物を脱ぎすてると、赤い長襦袢姿を、狂四郎のわきへ横たえたのであった。それから、

しばらく、狂四郎の胸へ、顔を押しつけるようにして、動かなかった。

狂四郎は、女が血を喀いたのを見ていたし、そのからだが熱で喘いでいるのを知り乍ら、拒みもせず、何も云わなかった。

おえんは、自分のほうから、それをもとめた。

いくばくか過ぎて、狂四郎が、身をどけるとおえんは、床の中で、乱れをなおしてから、のろのろと起きあがった。

狂四郎は、おえんが着物をつけはじめるのを眺めても、猶なんの言葉もかけようとはしなかった。

身じまいをおえてから、おえんは、むこう向きに坐ったなりで、抑揚のない声音で、

「おねがいがあるんです」と、云った。

「あたし、旦那に、用心棒になって欲しいってたのみましたね」

「女衒に、ことわっておいた」

「こんどは、その反対のおねがいなんです。さっき白馬へ、さむらい夫婦がつれ込まれましたね。……実はあのさむらいは――」

「お前に、子を生ませた薄情者だった、というわけか」

「そうなんです。七年ぶりでめぐり会いました。……どうか、たすけてやって下さいな」

「…………」

「女衒の徳兵衛が、あのさむらいに百両渡しておいて、伏見を出ていくところを用心棒に、

斬らせて、奪いかえす手筈なのです」
「用心棒は、貝塚三十郎といって、東軍新当流の使い手です。滅法強い浪人者です。若い頃、父親の仇を討つために、死にもの狂いの修業をしたんだそうですから——。でも、旦那なら、貝塚さんを仆せると思います」
「…………」
「あたしは、旦那を知っています。眠狂四郎という凄腕の剣客だということを——」
「…………」
「あたしは、旦那から、むかしの男をまだ忘れずにいるのかときかれて、ばからしい、とこたえましたねえ。……忘れたつもりでいました。……ところが——忘れてはいなかったんです。やっといまになってそれがわかりました」
それから、長い沈黙があった。
おえんは、そっと立ちあがった。
「……まぬけなおねがいをしてすみませんでした」
おえんは、一度も、狂四郎を見かえることなく、影のように去って行った。狂四郎は、目蓋をとじたままだった。
翌朝、狂四郎は、顔を洗いに降りて、番頭と女中が、川に土左衛門が浮いた、と話しているのをきいて、ふっと不吉な予感がして、いそいで旅籠を出た。

河岸に横たえられた死骸の、菰の端から、のぞいた着物の柄を一瞥して、やはり、予感があたったのを、狂四郎は知った。おえんであった。

五

どんよりした曇り空の下に、渺々たる小倉の入江に沿うて、大和街道の五十町の堤が走っている。

眠狂四郎は、その堤を、ゆっくりと辿り乍ら、小唄を口ずさんでいた。

千早ふる
かみも乱れてかんざしの
かゆい所を書く文の
水櫛に咲く
かきつばた

風で送るその唄声が、かなたの斜面に腰を下していた人間を、のっそりと立ちあがらせた。貝塚三十郎であった。両者は、二間をへだてて、向い立った。

さきに口をきったのは、狂四郎の方であった。

「お気の毒だが、成瀬門之進夫婦は、百両ただ儲けして、西国街道を行った、と思って頂こう」

三十郎は、血脈の走った濁り目を、じっと狂四郎にあてて、

「おぬしの細工か？」
「女衒(ぜげん)の徳兵衛を斬りすてたから、お手前もどうやらこの世でする仕事はなくなったようだ。……昨夜、お手前は、わたしを斬るべきだったのだ。貝塚さん、なぜ、わたしを斬らなかった」
「卑怯(ひきょう)を慙(は)じたからだ」
狂四郎は、それをきくと、いっそ明るく笑ってみせた。
「そりゃア、相手を見ての作法というものだった。わたしには、そんな斟酌(しんしゃく)は全く不要だった。……お手前は、遠慮されたおかげで、今日はここでご自身の生命を落す側に立たされて居る」
「ふふふ……どちらが、先に地獄へ行くかのう」
三十郎も、平然として笑った。
はるか後方から、堤を歩いて来る旅の者が、ふたつの影と白刃の対峙(たいじ)を見出して、はっと息をのんだなり、ずいぶん長い間、そこへ足を釘(くぎ)づけされていたが、やがて、同時に、影と影がひとつに合ったとみた次の刹那、片方が、ひどく緩慢に、斜面へ落ちるのを、みとめた。
しかし、生き残った影が、こちらへ足を運び乍ら、小唄を口ずさむのをきいて、旅の者は、たった今の出来事は、自分の目の錯覚だったような気がしたことだった。

海賊村

一

五月のなかばの日に、竹酔日（ちくすいにち）というのがある。この日、竹を植えれば、よく繁（しげ）るという。

そんな日、眠狂四郎の孤影は、備前和気郡の方上浦（かたかみうら）という浅水海湾を臨むとある峠の上に見出（みいだ）された。

いくつもの入江の奥にかくれた湾で、瀬戸内常航道の西南に遠隔して、磯（いそ）伝いの潮待船も入泊することは稀（まれ）な、忘れられたところであった。東一里余に、池田光政（みつまさ）が建設した閑谷（しずたに）聖堂がある。

峠の上は、赭土（あかつち）の空地になって居り、陽（ひ）は汗ばむ程の煌（きらめ）きを狂四郎にあびせかけていたが、潮香を含んだ風はすずしかった。

はるかな足下には、白い汀（みぎわ）が、ひと筆に引かれたように美しい弧線を描いており、藍色（あいいろ）の海面は、幾重もの濃淡を区切りつつ、沖へひろがっていた。

狂四郎の双眸（そうぼう）は、その沖に、ぽっかり浮いた灰色にけむる一斑（いっぱん）の島影へ投じられたなり、まばたきもせずにいた。

その孤島こそ、二十歳の日の狂四郎が、その剣の天稟を、無名の老剣客の下で、円月殺法を編んで完成した場所であった。

師が、もし、今日なお矍鑠としているならば、すでに、齢は八十を越えている筈であった。狂四郎は、依然として、師が、彼処に棲んでいると信じて疑わなかった。そして、足の向くにまかせて、此処までやって来たのだが……。

じっと、むかしかわらぬ島影をのぞみ乍ら、狂四郎は、しかし、端舟をやとって彼処へ渡る気持は、さらになかった。

この世に、狂四郎の心胆を寒からしめるものがあるとすれば、それは、唯ひとつ、師の目であった。八十年間ひたすらに、心形一致の「法形」に一念をこめて生きぬいた者の烱々たる眼光を、たじろがずに受けとめる勇気は、いまの狂四郎にはなかった。

剣の道は、流派の如何を問わず、必ず「それ兵形は水に法る」という意味の教義を立てる。心形一致の水の妙形をもって「流」の極意とするところに、何々流「法形」が成る。この法形の神秘を悟った兵法者の眼光は、仏語的にいえば、所観の理に能観の知を対照会通して、微塵のくもりがない。すなわち、鏡のように全く澄みきって、対手の心を写しとる。

狂四郎のような、ただ、戦闘の瞬間に於てのみ、全身全霊をあますところなく働かせるべき力を具え乍らも、孔子が曰う「それ心は水の如し。水なる哉」という理知の妙諦の覚得には程遠い無縁の無頼者は、もはや、師の世界とは次元を異にしている。

ただ、心の片隅にあるのは、春秋高き師へのはるかなあこがれだけであった。

狂四郎は、ごろりと赭土の上へ仰臥してまぶたをとじた。
曾て、師が、無想正宗の鞘をはらって自作の歌を朗々と詠じつつ、ひとさし舞った枯淡の姿が、ありありと思い浮んだ。その歌を狂四郎は小声でうたった。

かりごもの、乱れにみだれ
朝夕に、いくさだちして
城をとり、いのちを奪い
人ごころ、あらびゆきては
君をすら、傾くる世に
おみのこの、秘めたるものを
召しうばう、事しげければ
ともすれば、その罪ならで
身をさえに、失うことを
聞くからに、思いわずらい
もののふの、魂ともたのむ
そのたから、たからの太刀を

…………

ふっと、狂四郎は、口をつぐんだ。
ううう っ……ううう っ……うう！

異様な唸(うな)り声が、すぐ間近で発しられたからである。

視線だけ、そちらへ移した狂四郎は、――はて？　と眉宇(びう)をひそめた。

小牛ほどの犬が、四肢(しし)をふまえて、襲撃の闘志をみなぎらせているのだったが、山犬でもなければ、土佐犬でもなく、はじめて接する獰猛(どうもう)そのものの怪異な容貌(ようぼう)肢体をそなえていたのである。

――日本の産ではないな！

狂四郎は、そう直感した。

――こんな僻地(へきち)に、どうして外国犬がいるのか？

その不審をおぼえつつ、ゆっくりと、身を起そうとしかけたとたん、ひと吼(ほ)え凄(すさま)じく、ぐわんと躍り込んで来た。

ひらっ――と躱(かわ)しざま、狂四郎の右手は、本能の迅業(はやわざ)で、腰から無想正宗を噴かせていた。

犬は、顔をまっ二つに割られて、もんどりうって、醜く地べたへのびると、夥(おびただ)しい血汐(ちしお)を土に吸わせた。狂四郎は、暗然として刀身を懐紙でぬぐった。

たったいま、師が作った名刀讃歌(さんか)を口ずさんだ――その直後に、あろうことか、その刃(やいば)に、畜生の血を塗ったのである。

自嘲(じちょう)の唇(くちびる)を歪(ゆが)めて、ひと足あゆみ出そうとして、狂四郎は、数間のむこうに立った人間を見出した。若い女であった。小麦色の顔の中で、目が大きく光っていた。

女もまた、犬と同様、狂四郎の眉宇をひそめさせた。その衣裳(いしょう)が変っていたのである。

生絹(すずし)で頭をしぼり、脛(はぎ)ののぞく短い小袖(こそで)に、細い紐(ひも)状の帯を、男のように下に結んだすがたは、戦国時代のいでたちを彷彿(ほうふつ)とさせたが、その小袖の花模様は、あきらかに、唐の通風(織)であった。大阪あたりでは、悉皆屋(しっかいや)が、こっそりと、もったいぶって、富有の町人に見せる密輸入の布であった。それを、無造作にふだん着にしている。

「やいっ！　なんで、うちの海丸を殺しゃがった？」

男のように荒々しい言葉が、その朱(あか)い唇からとび出した。

「嚙(か)みつこうとしたからだ。お前がけしかけたのではないのか？」

「畜生っ！　海丸は、怪しい奴(やつ)にしか嚙みつかないんだぞ！」

「見かたによるだろう。おれから見れば、お前の方が怪しい」

狂四郎が、笑うと、娘は、なにか訛(なま)りの強い方言を口走ると、懐中から、ぱっと手裏剣を抜きとって、ふりかぶった。

「殺してやる！」

「仕損じたらどうする？」

「ばかぬかせ！　心の臓をひと刺しにしてやる――」

「その構えなら習練を積んでいそうだが、猿も木から落ちることはあるぞ」

「落ちるもんか！」

「万が一の話だ。……もし、仕損じたら、どうだ、お前の操(みさお)を、おれにくれるか」

「…………」

娘の目は、ますます妖しく光った。

「こちらも、たったひとつしかない生命を、すてるかも知れないのだ。これぐらいの賭はあたりまえだろう。ことわっておくが、おれは、その手裏剣が飛んで来ても、べつに逃げはせぬ」

微笑を消さぬ狂四郎の青白い顔を、じっと睨んでいた娘は、

「ようし！　あたしがやりそこなったら、どうにでもしろ！」と、云った。

二

娘の顔が明るい陽ざしの中で、ふと血を引いて、青ざめたかとみえた。

狂四郎は、無造作に、両手をダラリとたらして、全身を空けたまま、飛刀に備える気色はさらにない。

手裏剣をつかんだ娘の右手が、徐々に、うしろへ引かれたと思うや、一瞬、

「えいっ！」

冴えた気合とともに、ひらっと袖を舞いひるがえした。同時に、娘は、その双眸を、ひしとざしていた。

娘は、聞いた。森閑とした山気を截る手裏剣の唸りと、ぱんと弾く金属音と、それから、ひくい鍔鳴りと——。

娘が、まぶたをひらいた時、狂四郎は、依然として、元のままの位置に立っていた。その

足もとに、切先をどこかへ斬りとばされた手裏剣が、ころんと落ちていた。娘は、みるみる困惑の表情をうかべた。

狂四郎は、にやりとして、

「お前は、わたしの生命を奪うまいと、脚をねらったようだが、それは、余計な手心というものだったな」

と、云った。

娘は反抗的に、片方の肩をゆすりあげたが、黙って目を伏せると、くるりと踵をまわした。

この峠は、切通しのように、ふたつの峰の斜面がゆるやかにすべり落ちた底辺にあたっていた。

娘は、岬の方の峰へむかって、すたすたとのぼって行って、松林の中へ姿を消した。

狂四郎は、べつに後を追う気持もなく、峠を下って行こうと、二、三歩あるきかけた。

すると、

「おーい」と、娘の声が呼んだ。

「なに、ぐずぐずしているのさ」

苦笑した狂四郎は、多少の興味をそそられて、その斜面へ足をむけた。

そこは、柔かい青草が敷かれた平地になっていた。

娘は、帯を解き、つつましく胸で両手を組んで、仰臥していた。まぶたをとじ、かすかに唇をひらいた。

狂四郎の跫音が、そばで停っても、すでに、覚悟をきめた静けさを寝顔に湛えて、微動もしなかった。のびのびと発達した肢体は、着物を剝いでみるまでもなく、男の欲情をあおる瑞々しい弾力に富んだ濃艶を盛っていた。

しかし、狂四郎に、その衝動を抑えさせたのは、娘の寝顔の意外なほどのあどけなさであった。

「もうよい。起きろ」

狂四郎が、干いた声音を落すと、娘は、ぱっちりと目をあけて、じっと仰いだ。

「起きて、帯をしめろ」

云いのこして降りかかると、

「いやだ！」

と、切りつけるように叫んだ。

ふりかえった狂四郎へ、猫のようによく光る眸子をあてて、

「あんたは、あたしに約束させたじゃないか。あたしは、やりそこなったんだ。だから……だから、あたしは、約束をまもるんだ」

「わかった。……おれの方で、気が変ったのだ」

「いやだっ！」

娘は、もう一度叫んで、ぱっとはね起きた。とたんに、前がはだけて、赤い腰のものが足もとへすべり落ち、均斉のとれた豊かな、張りきった裸形が、陽光に曝された。それは、思

わず、狂四郎の息をのませるに足りる野性の魅力に満ちた肉体であった。
生れ落ちるとから幾重もの柔かな絹やちりめんや綸子に包まれていたからだが、幾本もの紐を解いて、つぎつぎと脱ぎすててゆき、ついに、春風に払われる李花のように、羞恥に息づかう白い肌をのぞかせるいわゆる燕痩趙柳のなまめかしい風情には、すでに、狂四郎は、幾度びとなく接している。そして、それは、その繊腰を苛む残忍性を、狂四郎によび覚ましたものだった。
が――いま、眼前に在る裸身は、羞恥をかなぐりすてて堂々と、原始の性の営みを挑む逞しさをあふらせているのだ。これは、狂四郎にとって、はじめてといっていい眩しい刺激であった。こちらも遽に、若々しい野性の力が、沸きたって来るような気がした。
狂四郎は、のそっと一歩ふみ出した。
もしこの時、娘が頸にかけた光るものが、ひっかかっていた襟裏からはずれて、つるりと、胸の隆起のあいだの凹みへすべり落ちなかったならば、狂四郎の行動は、そのまま継続されたに相違なかった。
きらっと煌く金色に目を射られたとたん、狂四郎の昂った欲念は、たちまちにして冷えた。
それは、真珠の数珠に付けられた金の十字架であった。

三

それから小半刻のち、狂四郎が、おようというその娘について下って行ったのは、方上浦

の岬ひとつをへだてる小湾のほとりであった。なんの風趣もないひくい山脈が、内海に沿うてうねうねと尾根を長く曳いたこの僻地の形状は、ひとつひとつの小湾に、ひとにぎりずつの盆地を添えている。

碁盤目のような畠が、山腹まで這いあがり、藁葺の民家が、点々とちらばった風景は、狂四郎が越えて来たいくつかの湾内と変らなかった。

変っているのは、その中央に、数千坪もあろう宏大な屋敷が、白壁の土蔵を五棟あまりも擁して、どっしりとわだかまっていることであった。

おようが、その屋敷を指さして、自分の家だ、と教えるや、狂四郎は、かすかに意味ありげな微笑をうかべたものだった。麓に降り立った時、狂四郎は、

「こんな入江に、大きな船がはいるのか？」と、訊ねた。

狂四郎は、峠の上で、おようから、その頸にかけた金の十字架は、昨日帰って来た船の船頭から貰った、とききき出していたのである。

「この地方では、うちの湾だけが深いのじゃ。千石船だって、平気で入れるよ。……ほら、あの岬と裸島のあいだの狭い水道だって、海底は測り知れんくらい深いよ。船は、こっちの岬をまわった入江に錨をおろしているよ」

おようは、得意げに説明してみせた。

狂四郎は、その屋敷に入り、客間に通されるや、ここの主人が海賊の頭領であることを確信した。猛犬とおようの衣裳と、そして金の十字架を見て、その予感を、ほぼあやまりのな

いものとしていた狂四郎であった。
幾時代か前の禅刹の制に倣った書院造りの部屋に、飾られた調度は、これはまた悉くが外国製なのであった。壁掛、絨毯、卓子、洋灯——どれも、曾て狂四郎が長崎で眺めたものよりはるかに珍しい品であった。
あらわれたのは、七十を越えているとおぼしい老人で、大きな目のかがやきと赤く焼けた皮膚の艶やかさが、平凡な生涯をすごした人間ではないことをしめした。
「眠狂四郎殿と仰せられる——」
そう云って、微笑を含んで、じっと見据えてから、
「孫娘からきき申したが、……よほど腕が立たれるとみえますの。あれの手裏剣を、たたき落し得る御仁があろうとは、これは、奇跡にちかい業の持主と申すべきでござるでの」
「失礼だが——御素姓をおうかがいしたい」
狂四郎が、しずかに訊いた時、おようが、ぎやまんの瓶に血色の飲みものを盛って、はこんで来た。葡萄でつくった酒だという。
「倭寇のなれの果てでござるよ」
老人は、淡々とした口調でこたえた。
「では、現在でも、倭寇としてお働きか？」
「左様——。ごらんの品はみんな、ぶん捕ったしろものばかり……はははは」
倭寇！

元の世祖が日本を征せんとした弘安文永の両役後、逆に、こちらの商人が、大陸に渡って、通商貿易を試みるとみせかけて、豹変して略奪の賊と化したのに端を発してこの徒党は、鎌倉時代を経て南北朝に入るや、元の衰微に乗じて、益々侵略を恣にし、明の代に至って、その勢いは、もはや軍勢をもってしても防ぐ能わざる程猖獗をきわめたという。室町時代のこの徒党は、四国伊予の河野一族ならびに肥前の大村、五島等の大名小名の率いる軍隊であったというから、すでにただの海賊ではなかったわけである。

花形衫に短袴の軽装で、一剣を背負い、八幡大菩薩の旗をひるがえした和船を駆って、風にしたがって神出鬼没、胡蝶陣を張って、大陸沿岸及び南方諸島を侵す剽悍無比ぶりに、ついに、高麗はこれがために亡び、元明二代を通じて、国家の大患、と称するに至らしめたのである。明が南倭北虜と称して、日夜防御に苦しみ、加之財政の不足を来して、滅亡へ拍車を加えたのは、疑うべくもない事実であった。

明朝は、倭寇を防ぐために、厖大な海防線を備えなければならなかったのである。例えば、福建をまもるために、海辺の民戸のうち三分の一を海防軍に編入し、兵一万五千人をもって、十六城を築いたという。当時、上海は、漁師の家が十数戸散在する寒村にすぎなかったが、倭寇が黄浦江付近から上陸して来るので、これを防ぐために城郭を築いたおかげで、隆盛になった、と伝えられている。

しかし、それは、数百年前の昔語りであって、倭寇が今日実在していようとは、狂四郎も、こうして目の前にしない限り、到底信じられなかったろう。

「わしの祖先は、平戸の倭寇の総帥でござった」

老人は、狂四郎に葡萄酒をすすめ乍ら、先祖須賀重成について、語りはじめた。

南北朝の乱を経て、当時の日本は極度に銭貨の不足を来し、足利氏は、大陸との交易によって、銅銭を得べく、朝貢使を遣っていた。

須賀重成は、その幾回めかの朝貢使となって、北京へ行き、多量の永楽銭を得ての帰途、奸悪な明商人の詐謀にひっかかって、一文のこらず失ったのであった。

朝貢使は、往きの道中と北京滞在に日月を多く費すために、復りの日数が日常にすくなくなるのを常とした。また、人夫に乏しいため、北京から、一時に、数百万文の銭を担って帰ることが容易でない。そこで、商品をさばいて、銭が入り次第に、分割して、南京、浙江付近の商人で、北京に出て来て取引している者に託送することがあった。そして、朝貢使は、南京もしくは浙江に戻って来た時、その商人から、銭を受取ることになる。ところが、須賀重成が銭を預けた商人は、最もずるい類いで、朝鮮へ急用で行ったと称して、姿をかくして、ついに返そうとはしなかったのである。憤怒した重成一統は、その商人の家へ、斬り込んだ。すると、かねて商人から贈賄を受けていた明朝の捕吏が、待っていたとばかり、朝貢使の宿舎をとりかこんだのであった。こうして、兇悪の名は、日本側になすりつけられてしまい、身ひとつで、日本へ逃げ帰った重成は、明人に対する復讐の誓いをたてて、平戸にたてこもる倭寇の群に身を投じ、そのめざましい活躍によって、たちまちにして頭目にのしあがったのであった。

天文二十二年、須賀重成が、三千余の部下を率いて大陸を襲ったのが、倭寇史上最大の規模であったろう。

重成は、方百二十歩の巨船を作り、連艦数十をつらねて、平戸を発し、まず昌国衛を破り、大倉を犯し、上海を抜き、揚子江をさかのぼり、江陰をかすめ、乍浦(さほ)を攻め、金山衛を襲い——疾風枯葉を巻く勢いで、南京をめざした。重成を詐謀にかけた商人は、南京にいたのである。

嘉興(かこう)において、明の総督兵部尚書(ひょうぶしょうしょ)張継の本軍と正面衝突するや、戦闘激烈をきわめ、明兵の戦死千九百人をかぞえ、倭寇方もまた七百余名を喪(うしな)った、という。

当然、このあたりで、退却が提議されたが、重成は、断じてきき入れなかった。

決死隊を募り、参加した百余名を率いた重成は、杭州(こうしゅう)よりまっしぐらに西上して、蕪湖(ぶこ)に達し、ついに南京城を犯したのであった。城門を突破して、目的の商人の店を襲って焼きはらい、市街を荒れ狂うこと二昼夜、悠々と引揚げたのであった。彼らが去って後も南京の十二門は、悉くこれを閉ざして、久しく開かなかったという。

「……豊臣の世になって、平戸を追われて、この地にかくれ住み申(もう)したが、それ——同悪相求むること市賈(しこ)の如(ごと)し、というわけで、徒党をむすぶ力が失せぬままに、今日まで、こうして、掠(かす)めとりをつづけて居る次第でござるて——」

老人は、見知らぬ浪人者に一片の警戒心をも抱かぬ穏やかな気色で、語ってきかせた。

老人の息子——即(すなわ)ちおようの父親は、先年呂宋(ルソン)を剽掠(ひょうりゃく)した際、鉄砲で撃たれて不帰の人と

なり、現在は、鄭九郎という三十になったばかりの若者が、五百石船を指揮しているという。

四

その夜、屋敷の広間では、半年ぶりで帰って来た倭寇たちの、酒宴がひらかれた。

潮香のむんむんする逞しい男たちが、その赤銅色の顔面、裸身に、幾度びか死地をくぐりぬけて来た証拠の傷痕を誇って、ずらりと居ならんだ光景は、まことに壮観であった。

そして、酔いがまわって、酌をする村の若い女たちとくりひろげる荒々しい騒擾は、およそ凄じい限りだった。いきなり摑み寄せて口を吸う者、膝へかかえあげて、いたるところをべろべろと舐めまわす者、裾をめくりあげて臀部をむき出させると、ぴしゃぴしゃ叩き乍ら、げらげら笑う者、組みあってごろごろところげまわる者——。

にも拘らず、狂四郎の眸子には、その光景が、すこしも淫猥なものに映らなかった。半年間抑えていた欲情を一挙に爆発させた生きものの歓喜の表出ぶりは、いっそ爽快で、生鮮で、壮烈であった。

むしろ、憮然としてこれを眺めている狂四郎自身、おのれの孤独の陰湿な翳に忸怩たるものをおぼえた。そして、かたわらの老人が、にこやかに、思いのままにあばれる輩下たちを見まもる大らかさを狂四郎は、うらやましいものとせずにはいられなかった。

やがて——。

「こらっ……どいつも、こいつも、下れっ！　ひとさし舞うぞっ！」

と、喚(わめ)いて、青竜刀(せいりゅうとう)をひらめかして、中央にとび出したのは、若き船長(ふなおさ)の鄭九郎であった。六尺ゆたかの偉丈夫で、右眼がつぶれ、頬(ほお)から唇へかけて物凄(ものすご)い刀痕(とうこん)が走っていた。

えいそろ、えいそろ
八幡船(はちまんぶね)に帆をあげて
大和男児の刀の舞いは
法螺貝(ほらがい)鳴らして胡蝶陣
きいたか見たか、その武者ぶりを、
東風(こち)が吹いたら朝鮮攻めよ
東南(たつみ)の風なら台湾、呂宋(ルソン)
東京(トンキン)、広南(カウチ)、占城(チャンパ)に柬埔寨(カンボジア)
六昆(ルゴル)をこえて暹羅(シャム)まで、
えいそろ、えいそろ
おう、おう、おー！

乱暴きわまる剣舞を踊り終えるや、鄭九郎は、蹣跚(まんさん)たる足どりで、正面上座へすすみ寄って、どたりと大あぐらをかいた。
「お館(やかた)っ！」
「なんだの？」
「おようを、おれの嫁にくれい！」

「そうさの――」
「たのむ！　おれは、おようが好きだ！　心底から惚れとるぞ」
「わしに異存はないぞ」
「おーっ！」
歓喜の唸りをほとばしらせて、鄭九郎が、ぱしんと両の掌を打ちあわせたとたん、
「あたしは、いやだよ！」
おようのかん高い声が弾きかえした。
「なんだと！」
かっとひき剝いた鄭九郎の炬眼へ、おようは、冷やかなまなざしを嚙ませて、
「あたしは、このさむらいに、手裏剣打ちで負けたんだ。その時、負けたら、あたしのからだをくれてやると約束したんだ。だからあたしは、このさむらいのものなんだ」
と、云いはなった。
「くそっ……埒もねえ――！　おい、さむれえっ！　この鄭九郎をだし抜いて、よくも、きいた風な真似をさらしゃがったな。……こんどは、おれと勝負だっ！　さあ立てっ！」
血相凄じくつめよる鄭九郎に対して、狂四郎の無表情は、木彫のようになんの変化もしめさなかった。
老人の一喝があびせられなかったならば、その場において、血煙りが立ったに相違なかった。

狂四郎の姿が、いつの間にか座から消えているのに鄭九郎が気がついたのは、再び広間が騒擾の渦と化してから小半刻のちであった。

五

狂四郎は、星あかりの磯をつたって、南の岬をまわり、くびれ込んだ入江に碇泊した海賊船へ、乗り込んでいたのである。

森とひそまった胴の間に降りた狂四郎は、燭台に灯を入れてから、

「るしや！」

と、一声呼んで、その反応を察知すべく神経を冴えさせた。

次いで、躊躇なく、船尾側の板壁へ近づくや、積まれた菰包みをはねのけて、その陰に錠前を発見するや、苦もなくはずした。

隠し板戸をひきあけたとたん、狂四郎は、悚然として眼光を凍らせた。

そして、そこに——薄べりの上に、横たわった者が、いま呼んだ名の持主であることを確認するには、しばらくの時間を費さなければならなかった。

というのは——。

この二カ月間、狂四郎の脳裡に、消えやらずにいた俤を、その者はどこにもとどめていなかったのである。

あの日——狂四郎が、冷酷無慚にも、小舟に乗せて、渺瀰たる青海原の果てへむけておし

流した異国の女は、神秘な、清浄な、繊細な、形容のとどかぬけだかさを湛えた美貌であった。

いま眼前にする女は、羽毛を毟られた鶏肌のように干涸びた皮膚をもつ醜悪きわまる面相を、頸につないでいた。これ以上は痩せ衰えようがないくらい、老婆宛然の皮膚は、骨にじかに貼りついていた。わずかに、その金髪が、狂四郎の記憶のままであったが、かえってその華やかな色は、顔つきを老いさらばえた妖怪じみたものにみせることにしか役立っていなかった。

愀然として立ちつくす狂四郎を、るしやは、しかし、みじんの怨恨も含まぬ玻璃玉のような瞳孔で、じっと仰ぎ見たなり、微動もしなかった。

海原に漂う異国の女を、海賊船がひろいあげて、追放者の自分に邂逅せしめた――この奇怪な因果をつきつけられた狂四郎は、今更に、おのれが負うた罪業の深さに暗澹となった。

と――。

るしやが、ひどく緩慢な動作で身を起した。

すると、狂四郎は――いかなる兇暴な殺気をあびても寸毫もたじろがぬ筈のこの男が――思わず、びくっとなって、一歩しりぞいた。

鄭九郎が、胴の間へ駆け降りて来たのは、このおりであった。広間から消えた狂四郎の姿をもとめて、外へとび出した鄭九郎は、庭にいた下婢から、岬の方へ行ったようだ、ときいて、まっしぐらに趨って来たのである。

「おい、浪人！　誰に断って船に乗り込みやがった！」
怒号をあびて、じろりとふりかえった狂四郎は、その右手に短筒が摑みしめられているのを見た。
「てめえは、生かしておくと、目ざわりの野郎だ！　念仏となえろい！」
——そうだな。生きているのも、もう面倒になったな。
ふっと、その独語が、胸を流れすぎた。
——撃つがいい！
昼間、峠で、おようの手裏剣へ、向い立ったと同様、全身を空けてみせた。そして、その静止の姿は、あの時とちがって、処刑の座に据えられた者の一種の虚脱感を滲ませた。
銃声が、とどろいた。
だが——。
狂四郎は、仆れなかった。
弾丸を受けたのは、突如、撥かれたように立ちあがって、狂四郎の前面へ身を投げたるしい、やの胸板であった。
がくっと崩れかかるるしやをささえた狂四郎は、薄べりの上へ、そっと横たえてやり乍ら、伴天連が、自らの手で自らの生命を断つ罪を禁じられていることを思い泛べていた。この哀れな女は、一日も早く天国へ昇ることをねがっていたのだ。その機会のめぐって来ることを祈っていたのだ。

狂四郎は、およう から、その操の代りに貰っておいた金の十字架を、るしやの朱に染った胸へのせておいて、やおら鄭九郎に正対すると、冷然として云ったことだった。

「やむを得ぬ仕儀だが、念仏をとなえるのは、おぬしの方だった。あきらめてもらおう——」

暴風雨

一

正月が過ぎ、藪入(やぶい)りも終り、世間の往来も漸(ようや)く一変して、座敷の奥まで畳の上を伸びた陽(ひ)ざしが、日一日と暖かさを加えた頃(ころ)、突然、その間近に来た春をさえぎって、江戸が、一夜のうちに銀世界となった。

そして、その翌日は、からっと晴れわたって、肌(はだ)が汗ばむ程の陽気だった。

押上村の古寺龍勝寺の離れでは——。

壁につるした古びた黒羽二重の着物へ、陰膳(かげぜん)を供え終った美保代が、床の間に飾る花を截(き)りに、縁側を降りた。

降りつもった白雪に、からげた裾(すそ)からこぼす緋色(ひいろ)を映えさせて、置石をひろって、二の字二の字を捺(お)し乍(なが)らあゆむ艶冶(えんや)な若女房姿は、まさに一幅の画裏(がり)のものだった。

境内の西端の太子堂わきに、梅が咲いているのを、美保代は、昨日見ていたのである。

ものの十歩も足をはこんだろうか——。

ふと、あげた目に、こちらへ入って来る一人の男の姿が、映った。

渋手拭いを道心被りにして、いまの時世には廃った草色の革半天を羽織っていた。
男は、距離をせばめると、美保代の美しさに、一瞬、茫然と見惚れる様子を正直にしめした。
それから、はっとわれにかえって、あわてて、手拭いをはずして、腰をかがめた。まだ二十歳前後の若者だった。
「美保代様――と仰せられますお方でございましょうか？」
見るからに逞しい、陽焼けた、木訥そうな容貌を、美保代が不審げに見まもりつつ、頷いてみせると、
「わしは、海から参りました者でございます」
「海から――と申しますと？」
「へい。眠狂四郎様をお乗せいたして居りました船の水主でございます。政吉と申します」
これをきくや、美保代の透けるような白いおもてに、さっと朱がのぼった。
水主は、澄んだ黒い瞳の輝きを、あてられて眩しそうに、顔を伏せた。
「主人は……江戸へ、帰って参りましたのか？」
息をはずませたその問いに、しかし、男はこたえずに、
「お預りものをお届けに参じたのでございます」
と、籠り声で云った。
やがて、男が、離れに招じあげられて、胴巻からとり出したのは、油紙に包んだ封書であ

った。

おもてに『美保代殿』うらに『狂四郎』と、達筆に記されたそれを手にした美保代は、あらためて、心の奥から沸きたつ歓喜で、全身が、おかしい程顫(ふる)えた。

だが、ひらいてみると——。

それは尺牘(てがみ)文に非(あら)ずして、心懐を詠じた一詩であった。

狂夫明月下
沈酔不成歓
猛気依何散
剣鳴孤影寒

美保代は、じっと、恋慕する人の作った絶句へ、目を落して微動もしなかった。

ややあって、彼女は、かすかに脣(くちびる)をうごかして、それを誦(しょう)した。

「狂夫明月の下……沈酔歓を成さず……猛気何に依って散ぜん……剣鳴って孤影寒し……」

それから、またしばし、沈黙が、部屋を占めた。

男は、なぜか、糾問(きゅうもん)の座にでも据(す)えられたように、鞠躬如(きっきゅうじょ)として、首を垂れていた。

「あの……主人は、お前さまの船で、江戸へ帰ろうとしたのではありませぬか?」

美保代が訊(き)くと、男は、かすかな狼狽(ろうばい)をしめして、

「い、いえ——そ、そうではございません。……実は、わしたちの船は、つ、つまり、そのう——海賊だったのでございます」

「えっ？」
「眠様がお乗りになったにつきましては、わけがございまして……まず、そのことから、お話し申上げなければなりませぬが――」
男は、訥々とした口調で、語りはじめた。
備前の瀬戸内海の小湾に、倭寇（わこう）の末裔（まつえい）が部落をつくり、いまだ、五百石船を乗りまわして、南方へおし渡って、略奪を働いていること。眠狂四郎が、偶然、その海辺をおとずれて、老いたる頭領の孫娘およようをはさむ対立で若い船長（ふなおさ）の鄭九郎と果しあいになり、これをうち倒したこと。老頭領は、この決闘をみとめて、狂四郎をすこしも咎（とが）めずに、そのまま逗留（とうりゅう）をゆるしたこと。そして新たに、船長には、佐治兵衛という、五十すぎの老練な隻脚（せっきゃく）の水主が選ばれて、昨夏吉日をえらんで、南方の海をめざして出帆したこと。
ところが――。

二

海賊船「神通丸」は、表面は、松平伊予守（いよのかみ）の家中扶持米（ふちまい）を、江戸屋敷へ廻（まわ）すとみせかけて、その航路を、播磨（はりま）から紀州までとって、紀州沖で、急に、船首をめぐらすのを常としていた。
播磨灘（なだ）にさしかかった時であった。突然、眠狂四郎が、湧（わ）き出たごとく、船上へ、姿をあらわしたのは――。
呆気（あっけ）にとられる水主たちをしり目にかけて、船櫓（ふなやぐら）へあゆみ寄ると、上に立つ船頭佐治兵衛

に、無表情な顔を仰向けて、

「すまぬが、おれをつれて行ってくれ」

と、たのんだのである。

佐治兵衛は、ぎろっと睨みつけていたが、

「旦那、わしらは、おめえさんに対しては、あんまりいい気持をもっちゃいねえんだぜ」

と、あびせかけた。

剽悍無比の若い指揮者鄭九郎を殺されて、その仲間たちが、黙って狂四郎を見すてておく筈はなかったのだ。老頭領の鶴の一声で、皆は、しぶしぶ、狂四郎を襲うのをあきらめたのである。

しかし、意外にも、無断で船に乗り込んでいたとわかれば、話はちがって来る。皆が、いったん抑えた憎悪を、あらたに燃えあがらせるのは、当然のことだった。まさに、飛んで火に入る夏の虫であった。まるで、さあ鄭九郎の仇を討ってくれといわぬばかりの出現ではないか。

咄嗟に、佐治兵衛は、水主の中から必ず狂四郎を狙う者があらわれるに相違ない、と思いめぐらしたのであった。

狂四郎は、自分をとりかこむように寄って来た水主たちの、殺気にも似た険しい気配を感じ乍らも、平然として、佐治兵衛にこたえたものだった。

「鄭九郎の無念を霽したいと思っている者がいたら、遠慮なく、おれの油断を見すまして、

とびかかってくれてよい。おれの方では、その攻撃を避けはするが、決して、斬りすてはせぬ。……どうだろう、それを条件として、おれをつれて行ってくれぬか。いざとなった時、おれは、すこしは役に立つ男だと思うが——」

佐治兵衛は、これをきくや、

「どうだ、みんな——。こいつは、一番、旦那の度胸を買おうじゃねえか！」

と、叫んだ。

海の男たちの気性は、こういう場合、きわめて、小気味のいい淡泊さをしめした。

「よーし！　おらあが、いっちょう、旦那の首を頂戴するか！」

「旦那、こっちがやりそこなっても、斬って来ねえというのは、面白くねえ。ばっさりやってもらった方が、恨みっこなしにさばさばするぜ」

「そうだそうだ。やりそこなっても、首が胴につながっているときまっているんじゃや、どだい、やり甲斐がねえ。旦那、あんまり、おれたちをなめなさんな」

生と死が紙一重であるきわどい世界を生きぬこうとする者たちでなければ、到底理解出来ない親昵感が、たちまちにして、狂四郎と水主たちの間にかようた。

で——狂四郎は、奇妙な居候となって、南方の見知らぬ国へとともなわれることになったのである。

ところが、このたびの出帆は、時節が悪く、順風が思うにまかせなかった。

船が、進路を変えた日の午——巳の下刻、丑寅の烈風が、雨を交えて、凄じい唸りをあげ

て吹きつけて来た。

もとより、暴風雨には馴れている連中であった。ただちに、帆をおろし、楫をたてて、吹き流されるにまかせて楫場にも表の間にも艫の間にも、陽気な歌声や笑い声があがっていた。

しかし、それも、ほんの束の間だった。

この暴風雨は、彼らの経験の裏をかくおそろしい魔力をはらんでいたのである。未の刻をまわった頃、丑寅の風が、突如、戌亥に変ったのである。

その巨大な逆浪をくらって、船体は、異常な悲鳴をあげて、後へ後へと、もどり出した。

「水が入ったぞっ！」

はざまの間(炊事場)から、絶叫がつらぬき、四、五人が、なだれをうって、そこへ走った。

用意の大きな水鉄砲を仕掛けて、横木を二人で踏んで、船の小口の樋から、えっさえっさと水を送り出したが、だんだんと逆浪をくらうやいなや、その努力は一瞬にして、文字通り水泡に帰し、再び、最初からくりかえさなければならなかった。

佐治兵衛は、狂四郎とともに、艫の間にいて、べつに指図もせずに、莨をのんでいたが、いくどめかの物すごい悲鳴を船体があげた時、のっそり立って、

「このぶんじゃ、荷打ち(積荷を海に遺棄する)だけでは、間にあうまいて——」

と、呟いて、出て行った。

「こらあ、やい——帆柱を切るぞっ！」

烈風の中の佐治兵衛の喚き声をきき乍ら、狂四郎は、

――おれの行くところには、必ず異変が起るのはわかっていたが……これは、どうやらおれの力ではどうにもならぬ。

と自分に云いきかせて、苦笑した。

狂四郎は、はじめて、おのれの剣が全く何の役にもたたぬ危機のただ中に置かれたのを知らされたのである。

海賊たちは、一人のこらず、死にもの狂いで、自然の猛威と闘っている。しかし、狂四郎は、余計者として、ただ、こうして坐っているよりほかに、なす術もないのだ。

この時、はざまの間から、飯炊の政吉が、よろめき乍ら入って来て、狂四郎の眼前へ、緊張した顔を寄せると、

「旦那――。お、おようさんが……」

と、ささやいた。この若者だけは、村にいた時から、狂四郎に対して、畏敬の念を抱いていた。

狂四郎は眉宇をひそめた。

「おようが、乗っているのか？」

「へい――」

「お前だけが、知っていたのだな？」

「旦那が、みんなの前へ、あらわれなすった日に、わしの方は、胴の間で、おようさんが隠し間から出て来たのを見て、びっくりして……しかし、黙っていてくれとたのまれたので

——」

るしやがとじこめられていた場所に、おようは、こっそり忍び入っていたのである。

狂四郎は、ちょっと考えていてから、

「いま、皆に知らせるのはまずいだろう。お前さえ、うまくやれば、当分は、かくすことができる筈だ」

「旦那、おようさんは、旦那に会いたいと云っとります」

三

このおり。

「駄目だっ！　阿呆っ！　そっちから、斧を入れるんだ！　もっと、右だ、右だ！　縦に倒れたら、舳がぶち毀れるわい！」

と、佐治兵衛の怒鳴り声がきこえて来た。帆柱を倒す工夫をしているのである。

帆柱を切るのは、非常にむつかしい。両方から、斧をうちこんで、四分通りも削ぐと、倒れるが、倒そうと思う方向へ傾けるには、斧の使いかたを充分心得ていなければならぬ。即ち、倒そうと思う風下の面はすこし下を、風上の面はすこし上のほうを切る。そして、どーっと傾く側の舷には、布団などのやわらをかい置いて、柱が、ふれると当ってはねかえる仕掛けをつくる。さて、まさに倒れんとする刹那を、ぱっとはんとうを切りはなつ。はんとうとは、柱から引きしぼっている綱のことである。この綱を切ることが一瞬おくれると、いま

佐治兵衛が怒鳴ったように、帆柱は、縦に倒れて、ひどい損害を船に与えることになる。

狂四郎は、ふらり立ちあがった。

「政吉、あいにく、おれにも役目ができたらしい。おようには、おれの方では用はないと伝えておいてくれ」

云いのこして、狂四郎は、風と雨と波の荒れ狂う船上へ、とび出した。

一瞬、ぐおっと躍りかかった波浪をかぶって、ずぶぬれになった狂四郎は、この巨大なものに反抗する力を猛然と四肢(しし)にみなぎらせると、疾風に乗って、帆柱のそばへ駆けた。

そこでは、屈強の水主が二人、斧をふりかぶっては、風によろめき、ひと打ちしては浪に足をとられて、ぶっ倒れていた。

「おいっ！　おれにやらせろ！」

狂四郎が叫ぶと、はんとうにすがっている佐治兵衛が、

「なにをぬかすかっ！　この太い柱を切るのは、二刻(とき)もかかろうわい！」

と、怒鳴りかえした。

「いや――おれが、一人でたたき切ってみせる！」

「呆(ぼ)けたれっ！」

「やらせろっ！」

狂四郎は、腰の無想正宗(まさむね)を抜きはなった。この剣が、無用のものと思っていた矢先である。見事役立ててやろうという意気込みで、狂四郎の心身は、虚無の業念(ごうねん)を払いすてて、いきい

きとしていた。
「野郎っ、舳をぶち毀しゃがったら、生かしちゃおかねえぞ！」
「見ておれ！」
咆哮する怒濤をあび、蓬髪と濡れ着物を強風にひきちぎれるばかりになびかせ乍ら、双脚を根生えたようにふまえるや、白刃をふりかぶった。
「えいっ！」
総身の鋭気を、その一颯にこめて、風雨の空間に白光を閃かした。
ギギッ……ギギ……。
三尺あまりの高さを、下から斜めに両断された帆柱が、はんとうを、ひきしぼる不気味な軋りをたてて、傾いた。
その間髪をはずさず、狂四郎は、はんとうの中程を、ぶっつりと切りはなった。
帆柱は、舷の上で大きく踊ってから、逆浪の中へ消え去った。
「で、でかした！」
佐治兵衛が、気違いのように、歓喜のさまを全身にあふらせた。
この時、むこうで、
「楫が折れたぞ！」
という悲痛な絶叫が、あがった。
こうした船の楫は、六尺まわりの薩摩樫で、ふつうに使用すれば十五年あまりはもつ頑

丈なものであったから、代えの用意はなかった。
「くそっ！　気ちがい風めが――」
佐治兵衛も、流石に戌亥に変ったと思うや、またすぐさま、丑寅に転ずる狂風に、完全に、匙を投げたかたちだった。
この程度の大時化には、勿論いくたびも遭った経験はある。しかし、こうまでに目まぐるしく方位を移す狂風に対するには、あまりにも船の構造はやわであったし、防御の準備にも知恵にも乏しかったのである。
夜に入って、雨は歇んだが、風は愈々狂おしく吹きつのった。
神通丸は、その名とは反対に、楫を折られ、帆柱を切り棄てて、息たえだえのていで、小山のような大浪にきりもみにもまれ乍ら、いずこへか漂うままに、運を天にまかしてしまった。
全員は、どうとも勝手にしやがれ、とすてばち気味に、表の間と胴の間に胡坐をかいて、むっつりとおし黙ってしまった。
こうした恐怖のどん底へつき落された時、普通の船頭水主たちならば、髪を払って、伊勢大神宮へ心願をこめて、紙鬮を取って神託にすがったり、髪を切って竜神にささげたり、車座になって一心不乱に念仏を唱えたりするに相違なかった。
流石は、出帆にあたって生還を期さぬ海賊たちだけあって、そんな他力本願の振舞いは、すこしもみせなかった。磁石と天文にくわしかったので、風がおさまれば、その位置をさと

る自信もあった。

一人だけ船櫓の上に残っていた佐治兵衛が、戻って来て、

「苧綱（かがす）で碇（いかり）を四百尋（ひろ）ばかりおろしてみたが、底にとどかんわい」

と云っても、誰も、なんともこたえようとはしなかった。

そのうち——。

「どうじゃ、ひとつ、地獄占いでもやるか——」

と、一人が云い出した。

「よかろうて——。じゃが、こんどは、どいつが一番はじめに死ぬか、という占いでは無うて、最後に生き残るのは誰か、ちゅうやつをやってくれようか——」

「よっしゃ」

狂四郎は、とり出された賭札（かけふだ）を、珍しいものに眺（なが）めた。それは、西洋加留多（かるた）だったのである。

「何人居るかい？」

札を持った男が、頭数をかぞえはじめると、狂四郎は、

「おれは除（の）けてくれ」

と、云った。

「なんでじゃ？」

しかし、狂四郎は、べつに理由を説明しようとはしなかった。

「ええわい。旦那は、わしらとは別の人間じゃ」
佐治兵衛が冷やかに云いすてた。
札が、くばられた。
「あけてみせろい！」
掛声とともに、三十余名は、一斉に自分の前の札をめくった。
「おっ！　こりゃ、どうじゃ、政吉めが当ったぞい！」
飯炊の政吉がめくった札には、二本の角をはやした黒衣の魔ものがはね踊っている絵が描かれていた。すなわち、ジョーカーであった。
当惑顔の政吉を、皆は、さんざん、からかった。
狂四郎は、海賊たちの中で、一番若く、純情で素朴なこの飯炊が、もしかすれば本当に一人だけ生き残るかも知れぬ、と、ふっと予感がしたことだった。

四

夜が明けても、風はやまなかった。
戌亥の方角にあたって、はるかに、うす雲のようにおぼろに島影が浮いていたが、それも午すぎになると、全く没しさり、蓬々として吹きまくる烈風の中に、見わたすかぎり渺々たる八重潮の海原が、天と合しているばかりとなった。
凪になったのは、それから二日後であった。すると、猛烈な暑気が襲って来た。殆ど船上

に立っていることさえ困難なばかりのぎらぎら灼りつける陽光に敢えてさからった者が、二、三人、急に疲労の色を濃くして、船底にのびてしまった。

おようが、発見されたのは、その日の暮れがたであった。

おようは、麹室のような高度の熱気に蒸れた隠し間にひそんでいたため、別人のように、ぐったりとなっていた。

二人の男にかつがれてはこび出されて、どさっと抛り出されると、そのまま、襤褸きれのように俯伏して動かなかった。

胴の間に、重苦しい沈黙がこめた。やがて、佐治兵衛が、

「おようさん、おめえ、なんのために、船に乗った？」

と、訊ねた。

おようは、猶しばらく、動かなかったが、急に肩を喘がせると、顔を擡げた。

潤んだ眸子が、ずうっと男たちを見まわし、狂四郎の顔をとらえるや、ぴたりと停まった。

食い入るようなまなざしは、おんなのいのちを、雲母のように、妖しく白く光らせた。そのひたむきな気色が、佐治兵衛の詰問に対する明らかなこたえだった。

佐治兵衛は、腕を組んで、暗然とおようの横顔を眄んでいたが、

「おようさん。おめえも、倭寇の頭領の娘だ。船の掟を知っとる筈だ。……覚悟はいいな！」

おようは、狂四郎を瞶めたまま、こくりとうなずいた。

佐治兵衛は、狂四郎をふりかえって、云った。

「旦那、むこうの座敷で、おようさんに、情をかけてやんなせえ」
すすめられて、狂四郎は、怪訝の面持で、
「どういうのだ？」
「この船は、女を乗せねえ掟だ。おようさんは、それを百も承知で、旦那恋しさに、ふらふらと忍び込んだんだ。つまり、旦那が忍び込むのを、あとを尾けて来て、そのまま、自分も、降りなかったんだ。……おかげで、船は、竜神の怒りをくらって、このざまだ。がまあ、やってしまったことはしかたがねえ。せめて、一度だけ——おようさんが、旦那の情を受けるのを、わしらは、目と耳をふさいで、知らん顔をしてやろうわい。……旦那、わしからたのむ、抱いておやんなせえ」
「そのあとで、この娘をどうする？」
「端舟へ乗せて、流す」
佐治兵衛は、ずばりと云ってのけた。
瞬間、狂四郎の脳裡を、るしやを流した時の光景が掠めすぎた。
「おぬしらまでが、迷信をかつぐのか！」
狂四郎は、吐き出した。
「船の掟だ！」
「迷信から出た掟だろう」
「旦那！ わしは、この船の長だぜ。掟をまもるのが役目だ。居候などに、しゃらくせえ理

屈はこねさせねえ！」

その啖呵とともに、座には、さっと殺気がみなぎった。

狂四郎は、しかし、冷然たる態度をみじんも崩さなかった。

ややあって、狂四郎の口から出たのは、

「やむを得ぬ、おれも一緒に流してもらおうか。おように情をかけるのは、端舟の中でやることにする。その方が、誰に遠慮も要らぬからな――」

その不敵な言葉だった。

五

「……しかし、その必要はございませんでした。眠様が、そう仰言った時、急に、おようさんが、気をうしなって、がっくりとなったのでございました。眠様は、抱き起して、容態をしらべておいでになりましたが、長い時間ではないから、船で死なせてやってくれ、と佐治兵衛におたのみになりました。

その言葉通り、おようさんが高い熱にうなされつづけて、息をひきとったのは、次の日の夜中でございました。

ところで――そのおようさんの生命を奪ったものこそ、おそろしい疫病だったのでございます。

たちまち……ばたばたとうち臥して、一日のうちに、三人五人と死に絶えてゆくありさま

は、この世の地獄でございました。

いったん病み臥すと、遽(にわか)に、死ぬことがおそろしくなって、泣く、喚く、つかみあう……一人がはじめる、と、たちまち、皆にひろがって、胴の間も艫の間も、まるで狂人の巣になってしまいました。その発作がすぎると、ぐったりとなって、ひと言も口をきかなくなり……ふしぎに、そうなると、呻(うめ)きをたてる者もいなくなりました。そして、いつか、つぎつぎと、この世を去って行って居りました。

この者も死んでしまったのか、と仰向かせてみると、まるでわしを鬼畜でもあるかのように、白眼(しろめ)をひきつらせて睨みつける形相に、思わず、ぞうっと総毛立ったものでございました。

眠様は、ずうっと、おようさんのひそんでいた隠し間においででございました。

まことに、ふしぎなことでございました。

眠様とわしだけは、疫病にかからなかったのでございます。わしは、水を汲(く)み、薪(まき)をこしらえ、魚を釣(つ)り、粥(かゆ)をつくり、病人を看(み)とってやりましたし、眠様は、平気で、亡骸(なきがら)を舷までかつぎあげて水葬する仕事を一人でお引受けなされたにも拘(かかわ)らず、とうとう、一度も、熱にとりつかれず、腫(は)れあがりもせずにすんだのでございます。

眠様とわしをのこして、全部の人間が海の藻屑(もくず)と消えはてましたのは、大時化(おおしけ)をくらってから、ちょうど十五日目でございました。自分で自分のからだを、海へ投げた者も三人ばかり居りました。佐治兵衛の最期(さいご)は、やっぱり、かしららしく立派でございました。もうたす

からぬとさとると、わしに、からだを起させて、胡坐をかいたままの姿勢で、しずかに息絶えたのでございました。

二人きりになると、昼も夜も、甲板にすわりこんで、空と海を眺めてくらす日がつづきました。

さいわい、米も塩も大豆もたっぷり蓄えがあるばかりか、酒樽も積み込んだ時のままに、のこって居りましたので、眠様に、鰹を釣りあげて、月見の宴としゃれて頂くことも、できたわけでございます。

左様――満月が、雲ひとつない空にかかって、海原を銀の砂をまいたように美しく煌かせる夜でございました。

紬の垣根へ凭りかかって、黙って、茶碗酒を飲んで居られた眠様が、急に、刀を把って、ふらっとお立ちあがりになりました。

ひくく、詩を吟じておいでになったと思うと、突然、ぱっと身を躍らされたのでございます。

わしの目にはとまりませんでしたが、刀を抜いて、夜空を断たれたのでございました。

はっとなったわしの目の前に、どさっと、落ちたのは、一羽の白鳥でございました。

眠様は、刀を鞘にお納めになると、

『政吉、陸地が、明日は見えるな』

と、仰言いました。

白鳥が、陸地の近いのを教えてくれたのでございます。
その通りでございました。
次の日の朝——まっ赤に焼けた日輪がゆっくりと昇って来る頃、わしは、気ちがいのようになって陸地が見えた、と喚いて居りました。
ところが——。
風に送られ、潮に乗って、愈々(いよいよ)地方(じかた)がはっきりと見えるところまで流れ寄った時でございました。
不意に、眠様は、
『端舟をおろして、乗れ』
と、お命じになりました。
わしが、合点して、そういたし、お待ちして居りますと、眠様は、舷から見下されたなり、一向にお降りなさる気色がみえませぬ。
『どうなされましたぞ』
と、叫びますと、眠様は、ふっと微笑を泛(うか)べられて、
『政吉、占いによれば、最後に一人だけ助かるのは、お前だったぞ』
と、仰言ったではございませんか。
『御冗談を申されずに、さ、早う——』
と、手まねきましたが、眠様は、かぶりをおふりになって、

『おれは、一人ぼっちで、この船に乗っていることが気に入って居る。お前は、さきに行け』

と、いっそ晴れ晴れとしたお顔で、左様、ぼうんと投げ落されたのが、このお書きものだったのでございます。そして、こちら様のところとお名まえを仰言って、届けておいてくれ、と——そのお言葉をさいごに、わしの目のとどかぬ位置へ、身をお移しになってしまったのでございました……」

その夜、美保代は、「狂四郎月下吟」を胸に抱いて、声もなく泣きあかした。

「海の亡霊」から「槍と驕姫」までは『眠狂四郎無頼控㈡』として昭和三十二年一月、「京の雨」から「暴風雨」までは『同㈢』として昭和三十二年四月、新潮社から刊行された。

表記について

新潮文庫の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めました。

一、旧仮名づかいで書かれた口語文の作品は、新仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、旧字体で書かれているものは、原則として新字体に改める。
四、難読と思われる語には振仮名をつける。

なお本作品中、今日の観点からみると差別的ととられかねない表現が散見しますが、作品自体のもつ文学性ならびに芸術性、また著者がすでに故人であるという事情に鑑(かんが)み、原文どおりとしました。

（新潮文庫編集部）

眠狂四郎無頼控（二）

新潮文庫　し－5－7

昭和三十五年九月十五日 発行
平成五年五月十五日 四十八刷改版
平成七年一月十日 五十刷

著者　柴田錬三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 営業部(〇三)三二六六―五一一一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇
振替 東京四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社三秀舎　製本・加藤製本株式会社

ISBN4-10-115007-9 C0193